藏三號甲

死線を越えて 上巻

賀川豊彦著

改造社版

INSTITUTE OF BUDDHIST STUDIES LIBRARY

小説

死線を越えて

賀川豊彦

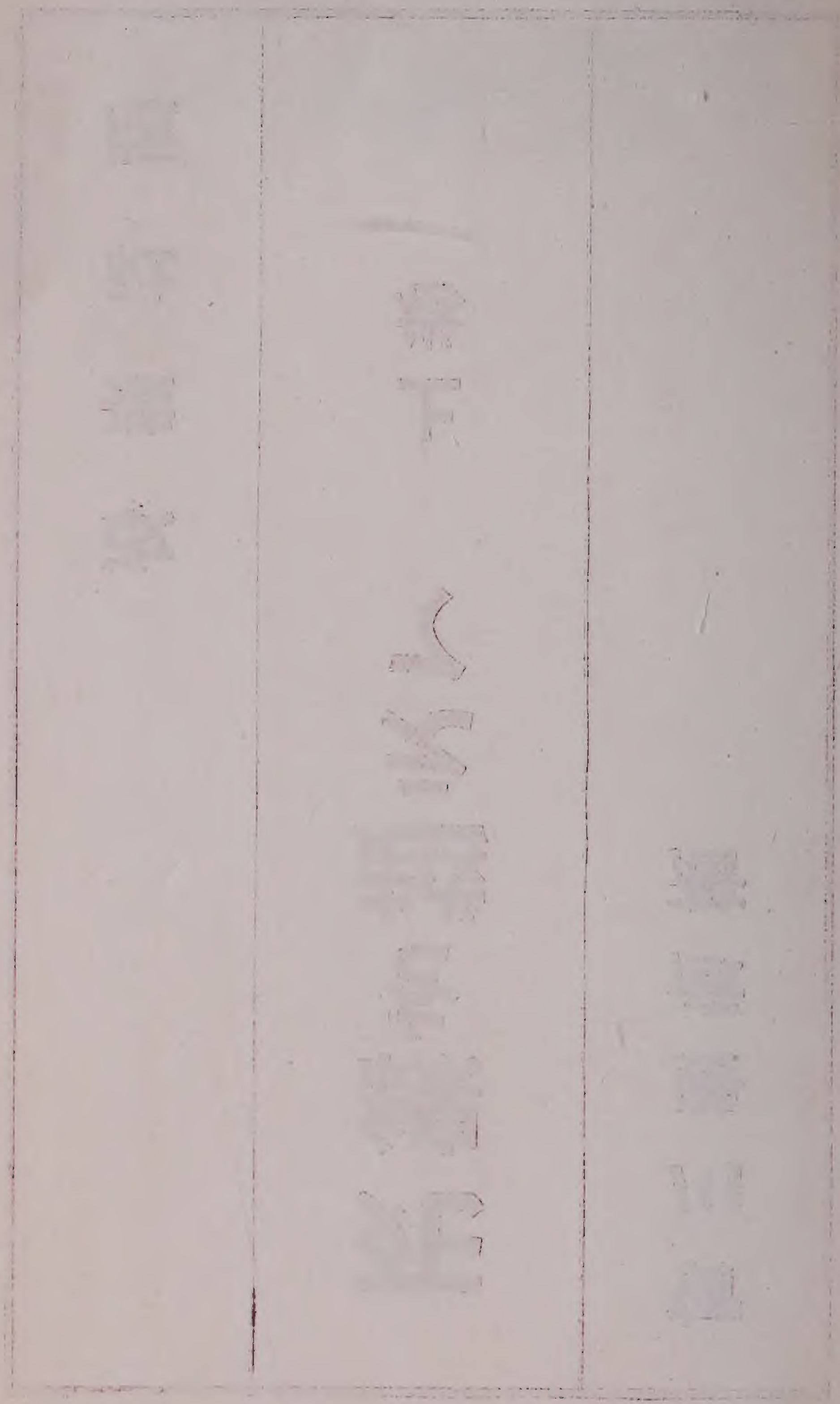
一

東京芝白金の近郊に谷峡が三つ寄つた所がある。そこは、あちらもこちらも滴る許りの綠翠で飾られて居るので唯谷間の濕つぽい去年の稻の稈がまだ覆されて居ない田圃だけに綠がない。

大崎の方に寄つた谷の奥には大きな雲の上に出る様な大杉が幾十本となしに生えて居る。そこは池田侯爵の屋敷であるが白金の岡にはお寺が一軒二軒、中の岡には屋敷も無ければ寺もない。細い栗、楢、櫟が三十本と生えて居る。

五月の初めであつた。ある日本晴れの日に此のまん中の岡の森陰に、草を敷いて横になつて、本を讀んで居た者があつた。

見ると、背は普通より高い、痩形で、黒縞紗のチヤンとした正服を着て居る。



『僕か僕は目黒の不動さんの方へ行つて居たんだ。君、此春色駘然たる時に古臭い本なんか讀むな、僕は君が恁那處でぐず〳〵して居るのを知つて居たら、目黒の方へ連れて行つて遣るんだつたの。新見また今日も煩悶か？』

『馬鹿！』

『何だその本は？　哲學か？　よせ、よせ』と彼は歩を運んで新見の傍に腰を降して、彼が小笹の上に拾てた洋書を取り上げた。

『何だ之りや？　Upaniashed　と發音するのか？　ウム。The sacred books of the East　つて何だ一體？』

『これか、之れは紀元前千三百年から千百年の間に出來ただらうと云ふ印度の經典だよ、君、知らぬか？　リグ、バタつて。昨日、上村の佛教史の講演に一寸と話して居たじや無いか。』

『ウムあれがどうした？』

『あれから、之が進化したのだよ。』

『あれから、之が進化したのだよ。』

『面白い物讀んで居るな。僕など學科の準備にあくせくして居る許りで、外の本を讀む暇なぞ無いが、内容は恁那者だ一體』と今迄本の體裁許り見て居たが三十頁もあらうと思ふ序文ア。君は感心だな。

慥かMGを組合せた金ボタンをつけ、顔色は非常に青く、鼻は高いが、頬骨が少し出てゐる。目はどちらかと云ふと、大きくて鋭い。然し氣高い輪廓の持主で有つた。

此男はいつも此處に來る男だが、近頃は此處へ來て本を開いても別に讀まうともして居らぬ。たゞ眼を閉ぢて默想をして居る。然し之もあまり長くは續かぬ。すぐ眠つて終つて居る。が夢が醒めるとまた急いで本をかき開いて讀む。三四行の處を繰返し繰返し讀んで居て、此度は急いで畔道を傳つて白金の方に飛んで歸る。

今日も彼は例の如く此處へ遣つて來て、例の如くやつて居た。

その時彼のねて居る頭の上の細道からだ、、、だら、、降りに降りて來る一人の壯前後の青年があつた。小薩張りとした絣の衣服に眞岡木綿の黒の兵古帶をしめ、鳥打帽を蒙つてステッキをついて居た。

彼は脊は高く無いが骨格の逞しい眉の濃い髯の多い、赤い顏した男だつた。

不圖洋服を着た男が横になつて本を讀んで居るのを見たから、急に立ち止つて聲を掛けた。

『新見なんしてるか？よせ、よせ！』

『ア、鈴木か、何處へ行つて居たんだ？』と本を讀んで居た男は叫んだ。

『君、そうだけれども物質不滅だつて勢力保存だつて進化論だつて皆假定だらう。はあまり知らんさ。然しそれは自己の演繹で決して歸納では無いのだらう。僕は論理學で一寸と其様な事を讀んだ事があるが……』

『然し、ヘツケルを——君は讀んだ事があるかね？　一元論さ。物質精神一體兩側面說さ——我等は無限に進化しつゝある者即ち神になつて居るのだ！』議論はいつしか全く眞面目になつた。

『君それじや死ねば人間はどうなる？』

『死ねば分子さ。何も不思議な事は無いじや無いか。』

『滑稽だな——神様がまた分子から復習するのか？　君それじや進化が退化になつて居るだらう！』

『道德も藝術も夢だな。』

『君は解らんから困る！』

『兎に角、もう四時だ、三十分すれば。飯が食へるよ。そろ〳〵歸つて行かう。大分今日は理窟を並べたね』と鈴木は時計を見乍ら云つた。

『それじや歸らうか？』と立ち上つた。洋服について居た塵を拂つて、細い畔道を鈴木を先に立てゝ新見は歸つて行く。二人は岡に沿うて廻り水車場の邊を上り、森の垣根に沿ふて步んだ。

をめくつて大きな文字で印刷してある本文から讀み始めた。

『凡ては梵なりか？　世界は梵の中に始まり終り又呼吸するものなるを默想すべしか、アハハ……汎神論か？　然し、面白い事を云ふね』

鈴木は本を閉ぢながら、

『新見君然し、君は、此本の云ふ所を眞面目に信ずるかね。　恁那昔噺の様な汎神論でも讀んで、そんな事を云ひ給へ。印度哲學の一冊も讀まない癖に生意氣な事を云ふ。まだ超越しない中は駄目だよ。大に超越して解脫した者が初めて汎神論とか何とかかんとかと云ひ得るんだ。』鈴木は新見の一年下だ。

『それでも君常識から考へても因果律と物質は同一ぢやあるまいし、凡ての物を統一する者が切れ切れになるなら、統一も何も出來ぬじや無いか？』新見は一本突き込まれた。

『スピノザでも研究して居る者が誰が馬鹿らしい創造論などを信ずるものか。然し君は熱心なクリスチヤン、而も傳道の準備に學院に來たのだから、敢てスピノザ氣取るのじや無いが君の信仰を迫害せんさ。勝手に神様を創造し給へ。然し物質不滅や勢力保存や進化論を信じて居る二十世紀文明が馬鹿らしい天地創造論などを信ぜられるものか』と眞面目に論ずる。

『そら相だ。君は高輪中學に居たのか？　面白い處に居たのだね。駄目か。佛教學校に這入つて僕の疑問を取り去つて貰ふと思つたが全くだね。駄目だね。僕は宗教學校に這入つて僕の疑問を增して來たさ、彼等の內幕を悟つたから。』

『さうかね？』

『僕は鎌倉の建長寺へ參禪した事もあるが、馬鹿らしいよ。禪と云ふのも。此頃大分禪が流行して居る樣だが君、佛教と云ふのは眞に禪の樣な者だね。輪廓許り殘して色彩を消さうと云ふのさ。だから鎌倉何十の寺院之れ皆貸屋さ。君來光寺の本尊が寶物に出たと云ふことを此間の新聞で見ただらう。あれは運慶の名作でね。彫刻家の喜ぶものだがね。……佛教は道德だとか人格だとか云ふものは全く否定して居るのさ。そして言葉で愚婦愚夫を欺いて居るのだ。駄目だね。反つて苦が信ずるものじや無いな。』

『全くだね本願寺の失態なども、馬鹿氣て居る位ね墮落してゐるからね。君それでは怎うして明治學院の樣な處に這入る樣になつたんだ？』

『僕の父がね僕に强いて法律を研究せよと勸めて一高に居たのさ。然し三年の一學期と云ふ時にね。僕の父も姉も肺で死んだんだよ——醫者が肺だと云ふじや無いか。茅ケ崎で一年

鈴木が問ふた。

『君佛教は今日の科學的信仰と同じ事を云ふじやないか。それに君は何故明治學院などに這入つて來た？　佛教大學にでも入學すれば善いに。』

『僕はそれだから哲學の方面から云へば佛教を取るが、併し佛教は駄目だよ！　僕は十七八位の時から哲學じみた事がすきで隨分苦悶して歩いたがね。……十五の時に國の中學の三年が終んで直ぐ東京へ遣つて來て、あつち、こつちの中學を漂泊したさ。その間は教科書などは少しも手につけずに詩や哲學や雜誌を朝から晩まで讀んでね、隨分それは苦悶した者だよ。僕は高輪の佛教中學が卒業したのだよ。君は誰からか聞いたかいりや無いか。』

『いや、聞かが無かつたが。——それじや君は小さい時から哲學が好きだつたのだね。』

『哲學が好きになつたのか？』

『なに、一つは母と十歳の時に別れて、繼母に養育せられたのと、僕が國を出ると云ふ動機が、姉の死と云ふのにあつたのだからね。自然僕の心が哲學に向いたと見えるね。さうだらう、君のクリスチヤンになつた動機を聞いた事があるが、君だつて三陸の海嘯に父母兄弟を失はずに居て人生を疑うことが無ければ信仰とか神とか云ふものを問題にしなかつたらう？』

『やられたさ。然し君、凡そ精神界の事は肉の表象を取らなければ人間と云ふものには感應が無いだらう。基督教だつて、アメリカと英國のコンモンウエルスを造ら無くて、支那帝國の様な者を造つて許り居れば何の價値も無いじや無いか。そうじや無いか？　キリスト教と云ふ者が今日の社會主義思想を産んだが、サン、シモンやフエリエルは使徒時代の様な世界を實現さそうとしたのだよ。全くだよ、キリスト教が社會主義的思想の表象を取ら無ければ……。帝國主義に、あなたの學校で教育なさりませ。然しそれはキリスト教じや御座いませぬよつて。』

『君がそう云ふと、幹事は何う云つた？』

『そしたらね。兎に角文部省の方から社會主義を學生間に宣傳する者があれば嚴重に取締れと云つて大勢の前では爲て呉れるなつて。』

『……。』

『……。僕はキリスト教と國家とは決して一致する者じや無いと思つて居るが、僕は社會主義を全く贊成は出來ぬが、今日の日本の信者が國家とキリスト教とが相衝突せぬと云つて辯護しやうといつて居るのが可笑くつて堪らぬのだ。彼等は皆キリスト信者が……

と八丈ケ島で一年遊んでね。今度はもう法律などをやる勇氣は無いじや無いか。非常に宗教的に傾いてね。佛教の方も飽いて居たから。明治學院の高等學部で一二年遊ばうと思つてね、去年の九月、明治學院へ來たのだ。』

『君は實際、基督教と云ふのは、も少し愛に滿ちて居る者だと思つて居たがなア』と新見は答へた。

『然し僕も明治學院へ來て特別にそう感じたね。然し新見君、田舍のクリスチヤンは東京の信者と同樣だと思つたら間違つて居るよ。眞のクリスチヤンは田舍の隅の無花果の樹の下で神の國の夢を見て居るナタナエルだよ。』

『實際僕だつて痛切にそれを感じて居るのさ。戰爭の時に……會など開く今の信者だからね。』

『使徒時代の夢は何處にか消え、肉を十字架の上に割いたその熱烈と輝きも何處にか消えたね。』

『實際だね。僕もその爲めには祈つて居るさ。』

『然し遂に經濟問題さ。ね鈴木君、君、此出僕と平野の討論を聞いたかね。文學會の時に!?』

『君は幹事に叱られた相じや無いか?』

つたと云ふ黒の羅紗が赤くなつて居る帽子を蒙つて居る。此男が大食クラブの會頭で、一日三度の食事時に、食堂の戸がまだ開かぬ時は、鍵穴から食卓の準備を覗く男である。或生徒が田村を歌つた事がある。

『朝起きと、自習時間のしかめ面、食堂さして恵比壽顔かな』

非上と云ふ男は『肉の人』と云ふ名が付いて居るので、戀愛研究が專門だと云ふ愉快な男である。

縮れ毛に眼鏡をかけて居るが、高等科になつて、髪を長くして眞中から別けたから、髪の癖をつける爲だと云つて寝る時も自習する時も帽子を取つた事の無い男である。

松田と云ふ男は『賣ト』と云ふ名が付いて居る男だが、脊の低い大黒さんの様な顔をした男である。

三田と云ふ男は脊の細高い朝から晩まで、犬が人間の糞を踏んで辷つたとか、誰れそれの、鼻の穴の廣さが何寸あるとか云つて笑つて許り居る男である。

づいた。そして新見と鈴木は立ち止つて居たが、四人は何か頻りと笑ひ乍ら、足並揃へて二人に近呼び止められて新見と鈴木は不思議に思つて見て居たが、四人はまた新見の顔を見ては笑ひ、滑稽な腹を抱えたり、仰向いたり、伏向いたりして、聲を出來るだけ大きくして笑ふ。

眞似をする。新見は狐か狸にばかされた様な氣味になつて、

……追ひ出される事が恐ろしいのだね。』

『馬鹿だよ。世界的のクリスチヤンが何にも井上哲次郎や加藤弘之の様な曲學阿世の徒を恐れて國家とキリスト教の衝突を辯解しなくても、國家とキリスト教とは衝突する。衝突するがOOOOOOOにあると云ひ切れば善いのだに。』

『……』

『……』

『……

のだな。昨夜は。』と三田は笑つた。

六人は歩んで行つた。新兒は辯護を始める。

『昨夜は夕食が甘く無かつたから、遲く出て行つて芋を買つて食つたのですよ。』

『どうか知ら？』

と、松田は云ふ。

鈴木は『君達はいつも盛んだね。』と云つたが、

『そら我々は君達より二倍も三倍も食つてエネルギーをそれだけ多く製造して居るが、』と和した。

村は樂を代表して答へた。外の三人は『贊成。』

新兒は唯默つて歩んで居る。大食倶樂部の連中の樣に快活にして見ようと試みたが、上にある樣に思つて喜劇を演じて見ようとは思へ無かつた。頭には四五日前に、リテラリー・ダイヂエストで讀んだ、喜劇は現代に於て悲劇に代るであらうと云ふ論文を思ひ出して、グロスマンは少なくても彼の胸の中を知らぬとも考へもして居た。

男全家の新築して居る借屋のあたりに差しかつた時、石を積んだ車を曳いて居る馬が、頸から牧草桶を吊つて口を桶の中に入れて食つて居る。

『ウフ……。何だ人を莫迦にして居るじや無いか。』と云つて見たが、開いた。横から田村が、

『オホ……。新兒君。云つてあげましやうか』と松田は新兒の肩を押して、初めて口を

『アハハ。ハツ……。ねえ。君がワイフは一生持たぬと云つて悲觀して、出席せずに寢て居たと云ふ事ですよ。』

『それに君が、綺麗に髪を眞中から別けて帽子も冠ずに、昨日は一日學校にも事ですよ。哲學者近頃何か感じた事があるといふのですよ。』と松田が附け加へた。

『何だつまらんウフウフ……。』と新兒は

井上は松田の語尾を次いで、

『そのおでんを食つて居た顏は矢張り悲觀して居たそうな。』

三田は鈴木に向つて、

『君は哲學者の隣室でせう。昨夜は驕つて貰ひましたか？』

『いや』と鈴木は輕く答へたが、

『僕は新兒君がPを買つて居るのを見付けたのだが。それじや……芋を獨りで帝國主義した

せなくちやいかぬぞ。松田君。』と云ひ出した。

『ウム、賛成。』『哲學者の會頭賛成！』と會頭の田村は云ふ。

『賛成僕も』と三田が應じる。それに松田は猶加へて、

『ハイカヲに髪を別けておでんの立食ひして、芋を獨りで皆食ふ會頭賛成！』

『新見會頭萬歳』と三唱したが、夕食を報じる鐘が寄宿舎の方に鳴つて居た。

ひをした。

新見は食後、入浴して室へ這入らうと思ひ乍ら、少しの間ハリス館の入口の下駄箱の横に立つて何を見るともなしに見て居た。

サムダム、ホームのB室には瓦斯が點いて居る。瓦斯がついて居る。幼年黨の會合であらう。山川總理の宅にも玄關に

之を見た新見は、――

「田村君、此馬は随分君には敗けぬよ。君は箸を持つて食はなくちやならぬが、此馬を見給へ。斯うして、君も怠惰にして食ひませんかア。」と遣つて見た。

一同はドツと笑つたが、田村は至極真面目な顔をして、

「君、新見君、僕は社會主義の事は餘り知ら無いが、社會主義と云ふものも大食主義と云ふのも同じ意味じや無いのですか？」口を尖らして論じ始めた。

三田は「卓論。卓論。」と叫ぶ。田村は猶も續けて、

「……要するに、パンを多く與へよと云ふのですね。そうでしょう。我等も賄がパンを多く與へよと叫ぶのですよ。なア三田君、……」

「……」と三田は應じた。

「實際……」

新見は唯笑つたが、何だか皆が騒ぐのを避けたい様に思つて居た。松田は、

「おい、明治學院大食倶樂部萬歳を三唱しようじや無いか」と三人の顔を見て動議を出した。が、

鈴木はニコ〳〵しながら、

「然し君、その動議はまだ早いよ。明治學院社會黨と大食クラブの名を變へるのなら新見君を會頭に

来た片手に君の所へ寄らうと思つてね――』

『それじや、まア僕の室へ行う』と新見は塚本と梯子段を上つて行つた。四段上つてステーヂに來ると、新見は一寸と塚本を顧て、

『駄目？』と尋ねたが、

『アレ？アレはもう駄目だ。高等商業の生徒がもう疾に就職して居る相だ。そして全く金儲にはならないつて。』新見は此答に少なからず失望した、然し別に顔色にも現さず塚本を自分の室に作ひ入れた。

梯子段を上つて左に入口がある。入口の正面が鈴木の室で、その西隣りが新見の室である。鈴木は又食後散歩に出て行つて、未だ歸つて來ぬか、瓦斯がついて居ない。

新見は自分の室に這入つて瓦斯に火を付けた。瓦斯の光は室の隅から隅まで輝らして氣色がよい。

室は六疊敷である。壁は眞白い褐色にセピアを混ぜた色を塗つた腰板が打ちつけてある。之は昔教室であつた記念物である。窓は西と北に二つ開いて居る。南は障子で隣室と境をしてある。

テーブルが西北の隅に置いてあつて、本箱の大きな者が、入口の正面にある。机の上は美しく照されて、ブ

『まア、かけ給へ』と塚本に云つて瓦斯管を出來るだけ長く延ばした。

サムダム、ホールと山川總理の宅の間にはサムダム館の尖つた塔の先が見える。尖つた先には十字架が付いて居る。が、黄昏時の木蔭に包まれて、ほんのりと薄く見えるあたりは忍ばれる。

年々植え込む卒業生のクラス、ツリーは掛りに繋いで、もう何本あるか數へられぬ様になつた。瓦斯が益々光つて運動場に人影が絶えた。

神學部には何の光もない。小杉に包れたインブリーさんの西洋館からは小さい光が洩れる。ヘボン館の裏から單調なピアノの音が聞える。ヘボン館の入口から今出て來た者がある。新兒の立つて居る方へ來る。瓦斯の光が各室から輝いて居る。

りになつた時、

『塚本君』と、こちらから聲をかけた。

然し塚本は寂しく足を運んで答も何もしない。入口の臺に昇つて。初めて。

『ア、新兒君、僕は失敬した。昨日、來やうと思つて居たのだが、一日忙しくてね。今日、舍監室へ

『先きね、ヘボン館で大勢で喋して居たよ。君が昨日悲観して學校を休んだと云ふ話からね。原因は高田が四五日前に君が女の人からラブ、レターを貰つて讀んで居る所を見付けて皆に喋つたからだつて？昨日の朝、君はワイフを一生持たぬと云つて室に閉ぢ籠つた相だね。ほんとうかね？』

『嘘だよ。五日前に妹から手紙を貰つたのさ。それを高田が云ひ觸らして終つたのだよ。』

『然し妹の手紙なら見せても差いぢやないかと高田が云つても、君は見せ無かつたつて？』

『そら少し秘密が書いてあつたから見せられなかつたのさ。彼の連中は、騒げば差いのだから、所學者が女から手紙を貰つたと云つて大騒をするじや無いか。明治學院へ這入つて妹からラバーだと騒ぐのも當然だね』と新見は語つた。

新見は塚本が椅子に掛け無いので、自分が掛けて尋ねた。

『塚本君、例の事件は怎うなつた？』

塚本は顔を一寸と向けて新見の顔を見たが、また右の手で羽織の紐を弄りながら、

『僕は實際困つた。今舍監室へ頼みに行つて來たのだが、駄目じやつた。僕はもう學校を退くことに決心した』と云つて俯いた。

ツク、ゲーテの『哲學の書籍である。』と金文字がよく讀める。教科書らしいのを取つた。赤色の一番厚いのはフリントの研究も見えてゐた。一番隅の、柿色の表紙のはウパニヤセツドの聖書もあつた。』

ま横に捨てゝあるはカントを大分研究してゐるらしい。』理性批判』も見えたがミ塚本は入口に立つて居たが、

『ア、何難う』と答へて本箱の上に掲つて居る、レーニンの歴史哲學、青色の薄い本が新兒君之はいつ見ても善いね。僕は之が非常に好きだよ。』

『君もこれが好きかね。此哀れつぽい自然に、女性の心の中に浸み入る様に思つてね、好きだよ。』

『君、可笑い事をユふが、君は近頃女の人から手紙を貰つた相だね。そして悲觀して居るつて?』と訊ふ。

『誰れに聞いたの、そんなことを?』

『舎監は正當さ。』
『なに、生意氣だよ。貯は慈善事業じや無いからね。』
『然し實に、貯は困るよ、わからず屋で。』
『でも、舎監はクリスチヤンじや無いか、君の事情は知つて居るし、君が困れば立て替へて置いても僕の様に遅れては困るよ、わからず屋で

「遅く？　そう決心したの？　全く同情するよ。然しそうなれば仕方が無いさ。て怎うする積りだ？　もう二年辛抱して高等學部を卒業すれば善いがね。左すればまた外國語の素養も出來るし、非常に都合は善いのだがね。然し君、此度休學院を出るとだつてもあの調子では明治學院は、君の恩人だよ。」

「實に、いや僕はこれ迄二年間の恩を忘れぬね。また忘れられぬよ。然し此上、恩は受けたく無い。今迄でも寄宿舍の賄に、そら豆のは實るのだけれど、何だか、菓子を見せて金を絞り上げる氣がしてねゝ。何度も『いや、そらそうぢや無いよ。菓子を賣る事を止めよう、止めようと思つたのだがね。』

「合點は怎うだつた。」

「合點は、君は昨日迄に一ケ月分三ケ月の食費が滯つて居るので、よう整理の付け樣がないから。ホラ君が賣ら無くとも皆が外へ食ひに行くから、それじや、一先つ寄宿舍を出て貰うとだふじやないかね。僕も惡いと思つたから、別に左ういふのたら仕方が無い。賄も決して慈善的に遣つて居る位出來ると約束したが、それが出來ないとだつてにエクスキユースも無いので『ハイ』と答へて出て來たのさ。」

『然し合點の、だひつ振が變だね。』

『君、それでは矢張り學校に出席する？』
『僕ね、新見君、舍監もあア云ふから暫時寄宿舍を出て英語の出教授をやつて少し學資を作らうと思ふが怎うだらう？』
『然し、また學校へ歸れることが出來るかしらん。』
『まア出來るか、出來ぬかやつてみるさ。』
『然し世界は全く我々の思つて居る樣に都合よく行か無いからな。』
『君、世界に出て行くには信仰と云ふ者がいるよ、僕なども信仰を得るために、塚本は俛いて默つて居る。瓦斯の下品な光が彼のチツクで別けた縮れ毛の上を照らす。
『然し、君、僕には神とかキリストとか云ふのは全く解らぬ。』と新見は云つて見たが、塚本は窓に俛つて瓦斯の光を凝視しながら、
『然し、君、僕には神とかキリストとか云ふのは全く解らぬ。』と少し微笑んで云つた。
『そう云つてクリスチヤンじや無いが、何に云つても四千年の歷史の樣に思ふよ。』と新見は云つて終つたものじや無いよ。僕だつてクリスチヤンじや無いが、何に云つても四千年の歷史を貫いて流れ出た宗教の憧れに、眞理が少しも無いと云ふ事は出來ぬよ。僕には未だ十字架の眞理は充分解らぬがキリストの人格は實に偉大じや無いかねっ』

恥しさうな眼付きをして紙幣を取る事を拒んだ。

『然し君、君は僕の心情を能く知つて居るだらう。僕こそ貰ふのが僕の意志だとばかり思つて居るだらう。』と新見は眞面目になつて云つた。それで塚本も、

『そら君の意志は知つて居るさ。――然し、』と語尾を濁らした。で、新見は、

『塚本君。それじやね。僕も實は之れを妹から貰つたのだ。今日小切手を紙幣にして來た許りなのだよ。僕も、そら君に何か繪畫の口を探して貰う位だから黙かで無いとこつても本が買へぬとこつても、然し、いくらか貰つた物だから君も取ればそれで善いじや無いか。』と云ふ事は無いよ。何に君、貰つた物だから、塚本は一寸と隣の室を見て誰れも居らぬと思つたから、

『それじや、少しの間だけ借して貰ふ。』

『貸すも、貸さんも無いよ。』

『ありがとう。――』と塚本は答へたが、少しの間默つて居た。

新見も暫時沈默して居たが、

さて兄様　私は日に日に泣く事ばかりで、こんな事ならいつそ死んでしまひたいと思ふ位で御座ります。田舎のお母様には朝から晩まで使ひ立てられて、何につけ、かにつけ、お気に何んでそんなに出来が悪いのだとおこられてばつかり、ごぜんもろく〳〵食はしてくれず、下女よりひどく使はれ、つらう〳〵て堪らず。四十日程まへにお父様の所へ逃げて来たのです。然しお父様は少しも私をかあいがつてくださらず、お父様の今度の妾宅のお梅がそれはそれは私をひどいめにあはして、こゝへ来ても日に日に泣いて居ります。兄様何卒妾を助けてくださいまし。妾は唯兄さんばかりたよりにして居ります。それにお父様は兄さんを非常に御立腹なしていらつしやいます。此月からもう學資金は送らぬとおしやつて。兄様此金五圓を少しにても學資のたしにしてくだされば様何かよいお考へでもおありなさるなら至急お知らせ被下度候。私はつらうて〳〵て涙がこぼれて筆けませぬ。まだ〳〵色々申上たい事もあれどもたいつか申上可く候。

二伸　猶御身體を大切になし被下され度候。

『こら偉大とハふ位の事は僕も知つて居るがネ、僕には解らぬ。信者でも信者で無くても、日に日にするこヽは同じじや無いかね。事によつたら、本信者の方が信者より品行方正な事が多いよ。』と強く塚本は反對して見た。

『君はいつもそう云つて居るが假りに社會へ出て見給へそれで遣つて行けるか。信仰なくつて、……』

『……』と此時新見は。妹の手紙と故郷のことを思ふて居た。

然し、人生は悲劇だね』と新見は續けて云つたが、塚本は唯憐い笑を洩らして。

『君は、いつも悲劇とか喜劇とかに云つて居るね。僕には人生は悲劇でも喜劇でも無いよ。全く何が何やら解らぬ無いつとハつた。新見は唯、机に向つて頬杖ついて沈默して終つた。

『ハヽヽヽヽ』と塚本がそう云へば自分の頭にもそうハふ響がするからである。

暫し過つて、塚本は去つた。新見は引き出しから妹の手紙を取り出してまた讀んで見た。手紙は書翰文と言文一致と混ぜて書いてあつて、誠に讀み難い。

一筆申上候。

兄上樣には御機嫌よろしく候や。久しく御無沙汰申候私儀も無事暮し居り候間御安心被下度候。

これを聞いて居た新見はハッと驚いて涙を拭き乍ら、大きな聲をして隣室の男を呼んだ。

『ハア、何ですか？』と少し驚いたらしい。

『新見君は居ますか？』聞いて猶驚いた田中は、

『君、そんなこと、どうでも、いゝでしょう。』

『それぢや君。僕はまだ聞へ無いのですか？』

『たゞ、なに、なんでも無いのですよ。』と田中は、

『春日君。君塚本は急用を云ひました？』

『新見君。普通部の五年の組日を御存知でしょう。』

『知つて居りますよ。怎うしました？』

『組田君が此間塚本君を擲つた相ですよ。』

『あの……云はない方がいゝかね。』

『云つて呉れ給へなぞ？』

『云つて呉れ給へと新見は云ふ。田中は、

『田中君。』

返事一到る早くくだされ度候。

『ほんに、矢子の哀れな運命に同情
運命と自分の運命を悲した涙も合まれて居た。
新見は頭を抱へて机の上にうつ向いて、もの
隣りの室に足音がする。艫て塚本の聲がして
『これにや君、五人囲み来て居たのだが、外に
ましたから。』と云つて居る。
『ハ、有難う。』と丁寧に答へる。
『失敬』と塚本は云ひ捨てゝ、障子も閉めずに
『ア、また』と遣つた跡の男が云ふ、そして
『田中君、塚本は怎うもいかんね、矢張り』と
『ほんとに、いかんね、自分は生徒に菓子賣つ
て、他人の室へ来ては尻もふかずに……』と丁寧な答をした男が云つて居る。

然し授業料を免除して貰ふ爲めには放課後一時間なり二時間勞働しなくちやならぬでしよう。その上に勉強して運動しなくちやならぬと云へば、社會は殘酷ですねえ、快樂の一半も塚本君には與へ無いのですね。人間は快樂なしに生きて行く必要があるかしら？』と新見は云つてみた。

塚本は實際意志は堅固でない、屢々新見に菓子の資本を借りに來て返さ無かつた。然し新見は之を罪として責め無かつた。それで今も同一の論法で論じて居る。

先きから障子を隔てゝ問答して居たが顏を見ぬと何だか、もの足らぬので、

『さう云へば、さうですけれども』と田中は開の障子を開いて新見の室へ這入つて來た。春日も後に追いて來る。田中は年の頃二十三四。大きな脊の男で顏付の魁偉な、然し何處かに少し足らぬ所がある樣に見える。彼は塚本と同級生で新見の一級下である。彼も苦學して居るのである。春日は十七八の美しい詩年、高等科の一年である。田中と春日とは大の仲善しで、自習から、散歩、運動、旅行、教會と二人の一緒に居らぬ事は無い。それに妙な性質が二人に共通してゐる。卽ち。非常な胃險家で自然を熱愛するのが共通點である。眞夜中でも春日が天文學の本を持つて田中がランプを見せて運動場の眞中に星座を研究して居る二人を見ることは度々である。

『君はそんなに聞きたいのですか？　君も物好きだね』と苦笑ひしてゐる。

『僕は物好きとは、僕は親密にして居るからね。塚本君とふのじや無いのですが、塚本君は悪いのですよ。』

『き、き、きみ、塚本君が悪いのですよ。栗子貰つて食つてゐる傍に、刀に幾回と外で買ひ食ひする

のでしよう。そして食費を拂はないのですよ。之を梧田が聞いたのでしよう。梧田君すぐ怒つてね。世話を加へる必要あるとふので一昨昨日の晩神學部の裏で塚本君を擲つたのださうですの方へは懸賞が多くて拂へぬと云つて、口實許り造つて居るのです。實は吾輩や菓子を食つて居る

のですよ。』

新兒は、聞いて置く必要が全く驚いた。然しまた不憫な塚本が擲られたかと可哀相にと思ひながら。……

……

『然し梧田君は矢張り悪い』と云つた。

『何故ですか』と今度は田中が聲をかける。

『君、そうでしよう、塚本の收入は月に僅か八圓で、授業料を免して貰つて一毛も殘らぬでしやう。

が一圓殘りは

眼に涙を泛べ乍ら激した句調で新見は論じた。

『それなら君から、そうして試てはどうですか？』

『僕は少くとも、そうして居ると云ふ自信はあります。』

『然し君、キリストは何と云つた？……キリストは君等の裏には居らぬ。教會は指キリストの敵だ。』と云つて新見は二人の視線を避けて袖で涙を拭て居た。田中と春日は新見が低那に感情の高い男だとは知ら無かつた。それで今更ながら驚いて、

『僕は哲學者と云ふ者は低那に感情の強い者だとは知らなかつた。新見君の様にそんなに感情を強くしては議論が出來ぬ』と田中は云つて、春日を誘つて自分の室へ歸つた。二人は何かぶつ〳〵話して居たが直に瓦斯を消して何處かへ出て行つた。

新見は唯泣いた。

クリステヤンの道徳の程度の低い事から教會の事、此月限りに自分も哲學生の仲間に這入らねばならぬこと、可哀相な塚本の運命、愚鈍な妹のことなどを思つて泣かざるを得なかつた。そして、妹も已も何故此様な悲哀な境遇に立たねばならぬかと思つて欷歔した。

彼等二人は、塚本に對する新兒の辯解を聞うと思つて連立つて新兒の机の横に立つて居る。田中は春日の右の肩に手を掛けて、机の上を見降した。田中は靜に口を開いて、

「君の說は非常に極端だから駄目ですよ。僕は塚本君が制裁を受けるのは當然だと思ふ。塚本君は他人の金で勉强して居る樣なものでせう。それに快樂を求めるなど云ふのは一體間違つて居るのですよ。學校が苦學をさしてやないのですから。その上快樂まで求めたいのなら、學校を退いたり、醜な感情の强い新兒は田中の忠告、醜な論鋒に泣きたくなつて來た。

「田中君、僕は君の樣な品行の正しいクリスチヤンが、そんた消極的な道德論を聞きたくはありませんよ。君等クリスチヤンから、そんな消極的な道德に滿足して居るのなら、もう東京中の大きな教會堂を捨てゝ芝の增上寺へでも行つて說教を聞き給へ。今度塚本君は退舍されて、從つて休學しなくちやならぬ樣になつたのも、全く君等クリスチヤンの無情からだよ。舍監に同情なく、君に同情なく塚本君は遂に休學し無くちやならぬ樣になつたのさ。キリスト教は唯教理ばかりかね。眞に、口にアーメンを唱へるならば、進んで衣服を賣り書籍を質つても塚本君を救ふべきじや無いですか。記憶て居り給へ——君達クリスチヤンは既に塚本と云ふ一人の男を地下に葬つたのだよ。」

腰を降して寝た。名古屋へは朝の七時頃着いたが、岐阜あたりで悪い夢を見た。

彼は自分の今取つて居る行動を暗黒面の方から観て居ひ上つた。何の爲めに、そして何處へと云ふ事が喉に詰つて、たが答へは無かつた。唯、妹を慰めることゝ、父に自分の意見を述べて見たいと云ふ事が、『故郷！』と云ふ響きは決して新兒の耳にはよく聞えぬ。悲哀で陰鬱な事許りが連ねる様に思ふ。が、

想される。そしてきたくいやに彼には響く。

神戸は彼の出産地である。彼が二十二年前に産れた處である。十歳になるまで彼は此處に育つた。十歳の時母が死んで阿波の板野郡の本妻の處へ姉と二人で引き取られるまで、その山と海に教育せられた。引き取られた時、妹と二人の弟に別れて、姉と甲板の上に立つた事が今でも連想される。まだ母に死に別れたあの暗い陰氣な家が直に連想される。兵庫の棧橋を行き詰めて山本氷室と誇いた大きな廣告が出てゐる倉庫がある。その東隣りが我家島上町三十二番地である。通を西へ行けば、寺は小さいが有名な島寺へは半町東へ行くと少しづゝ曲つて商業銀行の前へ出る。家並は低くて穢い、土は灰色を帶びて何となしに蒸せ熱い。自分の家の軒には點燈が懸つて、正面には消えかゝつた新兒と云ふ字を讀む事が出來る。家は格子付の家で入口には日本郵船會社荷客取扱所と云ふ看板が掛つてをる。向へは山本の茅屋——此近邊の大金持で氷室も持つて居る。東隣りが藥店。藥店の隣りは角で、散

遂に新見は決心した、……もう自分も明治學院を退學して平凡ー
以つて現實生活に身を投じたければならぬ、繼母も父も可愛がつて呉れぬ獨りの
想生活を田舍で實現するに勝るものは無いと。彼はその夜直に故郷に出發しやう
事をも心配したかすぐ本を賣らうと覺悟した。
と決心した。旅裝の

ろ、時刻は八時をとバケツを取つて井戸側に降りて行つた、大熊君はまだ北の窓に、高く懸つて居
に持つて猥雜を過ぎまい。新見は「汚き十字架の杯！」と瓶を手
面を洗つて居る時鈴木がヘボン館の方から來たので、故鄕へ歸る意志を述べて、
に聞に合ふ樣に吉本屋を呼んで來て呉れと依頼した。
晩の十時三十五分、神戸行の列車に品川から乘つた二人の學生があつた。五六名の友に送られて
しく西に立つたそれは新見榮一であつた。

容車は滿員で新見は神奈川まで立ちすぐみであつた。神奈川から床の上に毛布を敷

益々未来を暗く思つた。

神戸ステーションに降りた時鼓動が變調で、脈の中には水が流れて居るかと思ふた。そして唯だ來に對する恐怖が全身を震はせた。一刻も早く解決したいとあせつて車の上で靜かに切れぬ樣になつた。で、車を一旦降りて我家へ走つたが、それもあまり氣狂ひじみて居ると思つたので車夫の足許りを眺めて手を揉つて居た。

島上町二番地へ降ろして貰つたが、新兒の看板も無ければ瓦斯燈も無い。天羽と云ふ標札が懸つて居る。隣の藥屋で聞くと鍛冶屋町　先月お引越になりましたと云ふ。商業銀行の前へ出て左へ曲ると鍛冶屋町、教へられた通り大黑湯の横向ふに新兒の點燈がついて居る。時はもう午後の六時、夕闇の黃ない空氣が市街に充ち滿ちて居た。何となしに淋しい。何故二十幾年來住み慣れた島上町を離れたかと思ふと猶淋しい。

然し外觀に前の家よりは立派だ。入口は硝子戸が入つて、鐵格子に硝子障子、白のレースの窓掛も氣がきいて居る。

内へ這入つて驚いて終つた。顏見えのある男は一人も居らぬ。新兒は二年前の冬、一寸小笠原島へ行く前に神戸まで歸つた事がある。その時はまだ父は代議士の職に居つたし、議會開會中の事でもあ

髪屋。床屋と藥屋の間に小さい地藏さんが祭つてある。床屋はなつて居る。床屋の向ふが金物屋——金物屋の娘さんは死なれた姉様のお友達。金物屋の裏隣は車屋。車屋の前に泉がある。泉の横を南へ潤に降りる道がある。此道に向つて新炭商の井筒がある。泉の横を南へ潤に降りる道がある。此道に向つて新炭商の井筒がある。隣が白谷——新兒の幼ない時のお友達の家、茅屋の東隣りで丁度新兒の格子の前が藤井の裏となつて居る。藤井の隣りが小栗、之は正米の相場師であつた。その隣りが天羽の裏、天羽の裏に例の井戸がある。新兒は夏の夕べ車夫が大勢で此井戸の水を浴びて居るのを思ひ出す。小栗の今の家は元、長谷川と云ふ金滿家の住んで居た家で、株式に失敗して大阪の方へ引つ越した。その家の息子と新兒とが學校友達で而もよく喧嘩した事も思ひ出す。

思ひ出すも悲しい、或秋の夕方長谷川の息子と自分が喧嘩した事があつた。對手が店の戸の貫抜きを持ち出して來たので、こちらも貫抜きを持ち出して、今にも擲り合ひを初めやうとした居た時、番頭の熊吉に呼びに來られて無念に思ひ乍ら宅に歸つたが、その時長く病んで居たお母様は早や死んで居られた。熊吉がお母様に會つて來いと云つたから二階へ昇つて行つてお母様の顏を見たが息も早や絶えて、唯青白く光つた顏だけを拜したことである。之を思つて新兒はいつも慄とするのである。大阪も過ぎて神戸に近いたとき、新兒は之を回想して

丁寧に接待する。

新見は上つてみる氣になり、何となしに嬉しくもあり、それを受取つて導かるゝまゝ二階へ上つた。

梯子段を上つて直ぐ十疊もあらうと思ふ室があるが、び入れたのでその向ふは六疊ばかりの室だ。此二室とも天井が低くてしまつてあつて物置きの様な感じがする。襖を開いた奥の方の八疊へ這入ると、四十恰好の女が竹の臺ランプに火を點けて居る。禮をして急いで降りて行つた男が、室は明るくなつて居た。

『どうぞお敷きなして』と云つて自分は入口の方へ導いて呉れた男は隅から皮蒲團を取りだして、畏まつて坐る。それで榮一も畏まつて坐つたが、

『どうぞ、どうぞ』と男は皮蒲團を勸めて、

『初めてお目にかゝります、私は村井三吉と云ふもので御座ります。何分に宜敷お願ひ申します。』と頭を疊に摺り付けて禮をした。榮一は戸籍面に於ては此家の戸主であるが、いから、威張ると云ふ氣もし無

つたから店には居らず無かつたが、二十年来の支配人島盛平が居たから何とはなしに思つた。その時は我家に歸つた様な心持もした。然し今夜と云ふ今夜は、誰も見覺えの無いのに驚いて終つた。

番頭が三人、指圖帳に忙しくペンを動かして居る。金庫の前に坐つて居るのが支配人であらう。三十五六かと思れとも三十七八までと思ふ男で、髪を如何にも商人らしく丁寧に分けて顏の少し皺のある男である。『御免なさい』と新見が云つた時に、此男は入口の方を見てつた眉と眉の間に立て皺のある男である。『御免なさい』と新見が云つた時に、此男は入口の方を見てペン軸を置いた。外の二人も顏を上げたが一人はまだ年の若い男で、も一人は脊の高い、目の細い。眉の太い、色艶の善い男である。

新見は續けて怎うかと思つたが、

『新見さんは御内で御座りますか？』と問ふて見た。すると支配人らしい人が、

『そうで御座ります。あなた様はどなた？』と問ひ返す。

『私は榮一で御座ります。』と答へると、

『榮一様でいらつしやいますか』と立ち上つて、

『さあどうぞお上り。お上り。店は取り散らして御座りますから。まアお二階へ……』と非常に

ない事の無い軸物と、一緒に父が若い時に金澤の盛の寶場に、祖父から出張を命ぜられた旅行先で、放蕩した時に買つたとかいふ黒檀の小机も、急先に置いてある大きな立派な黒檀の机も、皆此家に居たことを忘れない。

ある屏風も新居水竹先生から贈られたのだと語つて居ると何となしに懐しい様な気もする。然し徳島に帰つて父と対面すれば怎那感じがするであらうと思ふと胸がどきくする。

品々に付いて歴史を考へて居ると何となしに懐しい様な気もする。然し徳島に帰つて父と対面すれば怎那感じがするであらうと思ふと胸がどきくする。

村井は元の座に立ち直り、

『その後の御容態は如何がでいらしやいますか？』と問ふ。問はれて恐縮しる事も無く非常に衰弱で御座りました。』

『有難う御座ります、此病氣は全く全快すると云ふ事は出來ますまいが、唯今の處では先づ御座りますが、いや、一日も風邪で寢

『そら御結構で御座りました。』

『ハイ、有難う……穂積や森はもう居には居りませんか？』

と、二年前の番頭と丁稚の事を思ひ出しながら話された。

「私に御座います、何分宜敷御願申上ます」

「御名前は？」と村井は不思議そうに尋ねた。

「東京一番の乞食でございます、少しお恵み下さいまし」

「乞食？　乞食が何の用だ？」

「実は御願の筋がございまして……」

「何？　御願の筋？　乞食が？　何だ？」

「ここでは申上兼ますから、どうぞ御座敷へ」

「ふむ、来い」

村井は先に立って、玄関の横手にある客間へ通った。

「さあ、ここで聞こう、何だ？」

「はい、実は……」

乞食は、ここまで言って、ちょっと躊躇した。

「何だ？　言え

十二時のが一時になる相です。』と答へて居た。

側に居た妻君は『まだ七時ですからお風呂にでもお召になつてグツと一寝りなさいやす、波があつたら寝られまへんさかい。今日は汽車でお疲れでおまつしやろ……』と云ふて居た。

食後妻君に勧められた通り横向ひの大黒湯へ浴らうと思つて店に降りて行つた。すると、若い男も山田と名乗つて禮をする、色艶の好い男も細川と名乗つて禮をした。妻君が奥から大きな西洋手拭と洋銀の石鹸入れを持つてきてくれた。その時、穂積と森六彌が歸つて来た。そして驚いた様に、

『坊々。徳島へ。いつ東京から?』と尋ねて居た。六彌は奥へ這入つたが穂積は、

『お風呂? 私も御供喫たら後から行きまつさ。』と云つて臺所の方へ雨戸を開いて這入つた。

『今日はどえらい波やつた。』と奥に利積の勇しい聲がして居る。

榮一は大黒湯へ行つた。

湯で計らずも二十年來新見家に勤めて居た吉田由太郎に會つた。榮一は今でも由太郎が新見に居る

『ハイ、居ります、まだ沖に居るので御座りませう。今夜は波が少し高いのでラうので御座ります。』

『船は何丸で御座ります？』

『土佐丸で、ズット沖に懸つて居りますからランチで無いと廻れ無いので御座りまする中に小供二人、小さい方が菓子盆を持つて大きい方が煙草盆を持つて後からお母様も追いて来た。小供は二人とも額の廣い、どちらかと云へば凸助の方である、お父様の様に眼が奥まつて、可愛らしい子では無い。お母様は先つき火を付けて居た女で縮れ毛の、髪の少ない、口の廣い人である、相應に挨拶をすませて三人とも下に降りて行つた。

村井は頻りに今夜一晩泊つて行けと勸めたが、榮一は何を云つて善いか解することの出來ぬ或思ひに胸に、妻君と子供は西洋料理の皿を運んで來た。榮一は急いで居るからすぐ歸へると主張して、その

フオークを取つて見たが決して自分の宅で食つて居る様な氣もしなかつた。

夜の何時に徳島行の汽船が出帆するかと聞くと、食事中村井は立つて電話をかけて聞いて呉れた。

そして『今夜は少し波があるので大阪から來るのが皆少しづゝ遅れまして、十時のが十二時になつて、

事の様に思つて居た。然し山太郎は何となしに惟き足らぬ挨拶振りをして、

『お父様が市長になつてから、まるで店は、わやわや。犬羽には差押へを食ふし、はず電話は抵當に入れろしさ……』と汚をこすり乍ら大場の中も關はず喋べる。然し湯が非常に込んで居るから耳を傾けて聞く人も無い。

『坊坊。お前さんもお父様の様になつたら困るぞい。お金を拵へて遊女に入れて終ふたんじやけんどな、大將、山太郎のお前さんも最早已もな旦那に何遍も云ふ事なんぞ相手にせんツて、已は四月許り月給を貰はずじやそして大將と約束して解を貰つて貰ふてな今では猶り遣つて居るわい。お父様はそれに吸はれて居るじや。今度大きな家を徳島本町に建てゴふのに現をぬかして居るわい。お父様はそれに惚

大きな魚を付けて已には勿論りしか見れへん、ね。だぶつ〳〵ばつて居るのやで。』

『ちつと、やつて遣るのが善いぞ、』

三人は笑つた。浴場は夕方の爲めに随分込む。

『吉住町は毎晩新川へ行く相じや無いか。あまり行くと極悪かくぞ。』

それで庭へ抛り付けて遣つたのさ。すると今日は

『馬鹿ぱへ、そんなに金があるか。』

『細川に連れられて行くそうじやないか。』

『冗談じや無いぜえ、行くなら独り行くのさ。』

『元気じや無いと左の方によつてすツゝで別けて居る。

知い顔を一寸と黒積は二十三四の面長の小黒い、鼻の高い眉の濃いた尺四寸もあらうと云ふ細長い男である。是は黒積が湯槽から出ると山太郎と栄一は浴室から出て行つた。山太郎は手拭を

『坊や最た居るね、あの島上町の臺所でお料様に抱かれてお暫者様に念入に買つたことよ。』

『微に暖えて居るでか、濱で山太郎が坊やの、もう少しで死に上つたのを助けてやつたんじやがなア。』

あのは結構ですれど、僕も随分お老婆さんにお世話になつたれゝ。』

『そうじや栄一様はお幾つから阿波の田舎の継母様に随分お老婆様をお流かしたな。然し早いものじやな。従則さんが今年中学校へ這入つて居るが、あの下の子がお母様が死んだ年の正月一日の朝生れたのじやが……年は這入つて、淳敬さんが来年は十四だらう。』

『そうなるかな。そうすると淳敬さんは今年十二で、十三で?』

『満十三で数への十四だらう。』

『ア、間違つて居つた、数への十三だらう。』

『然しそれでもお父様は義敬さんを中学校へ入れそうな者じやが、』

此時穂積が這入つて来た。

『ヤア、由さん久し振りやな。近頃は何処へ行くが、此三四日前は新宮まで行つて居つた。どうだ豊吉此頃居は?』

『何処となしに村井の塲がうるそうて仕方が無いわの。昨日も村井に矢張り、おかんな、随分荷は出る事は出るが

『どんなに評判が悪いい』と聞くと、

『津田の川口が埋つて居るのに、浚渫船を修繕にやつてあるとか、何とかかんとか云つて、日に日に汽船が徳島へ這入るのが延びて、去年の八月から今に小松島へ着いて居るでせう。新聞が攻撃するのせんのつてそら話になりませんね。それに一昨日は富田橋が今度架け變へになるのでせう。あれに市長が賄賂を取つたとか云つて新聞に攻撃して居りましたぜ。』と遠慮會釋もなく云ふ。新見は益々身が縮る様に思ふた。

『火夫はどうです面白いですか』と尋ねると、

『面白い、面白く無いつて、母親を養はなくちやなりませんからな。月九圓でも取らな遊んで居れませんからな。』

『女郎買はどうだね？』と笑つて尋ねると、

『私は行きませんが事務員やボーイは大阪へ上ると直ぐ松島へ飛び込んで行きますわ。そらお話になら位です。此船の中でも借金で頸の廻らぬボーイが幾人もありまつせ』と云つて居る。そして説明して『そら海の上に働いて居るのですからな……』と加へた。

その火夫が機關室へ降りて行つたので、彼は唯獨り甲板に殘つて曙の海の景色を見て居た。

『そうだね。』

『あの時分の事を思ふと大きくなつたなア……お母様に眞によく似て來るな、坊ヽは。』と山太郎は小首かたげて榮一を見る。

榮一は髪を別けようと、鏡の前に立つたが、

『綺麗な髪じやなア。』と山太郎は賞めて居る。

ひと寢入りしたと思ふと、秋積が起して哭れたからひと寢入りした。

風呂から歸つて東京のお友達に手紙を書いて一寸と、兵庫の棧橋へ行つた。

三等の切符を買つて秋積を急かしたが、新見は平氣で第二共同丸に乘つた。

その晩の航海は非常に荒く三等に殆と醉はぬ者は無かつた。然し新見は醉はなかつた。德島本町の洗濯屋だといふ男と知り合ひになつた。聞けば父の新築の邸宅と隣り合だ相だつて甲板に出ると井關の木屋に居た小僧が火夫になつて居る事を發見した。こちらも忘れ無かつたが向ふも忘れて居ら無かつた。

『新見さん評判が惡う御座りまつせ、お父様は。ちつとお父様にしつかりやらないかねと云はな、いきまへんぜ』とその男が嬉つた顏の眉と眉の間に立皺をよせて云ふ。

留學すれば愉快は、愉快だがと思ふと父が憎い。妹が何故本妻にも父にもお梅とか云ふ女にも可愛がられぬかと思ふと泣きたくなる。泣くまいと思ふても泣けて來る。今更人生は海に浮ぶ舟だと古い諺を思出したくもないが、人生は逆巻く怒濤の様な者であると考へる。蹴立てゝ平凡な水平線を破つても雲はまだ遠く天はまだ遠い。その中に風が靜まつて、また平凡な水平線に滿足せねばならぬのだ。しかも十字架を背負つて故郷に歸るが夢が醒めて殘るものは許屍許りでは無いかと思ふと、唯泣きたい。屍！　屍にもなれぬ。唯灰であると思ふと腹が立つ。然し灰も殘らず、細い雨に、たゞかれて何處かの溝に漂つて行くのだと思ふと咽ぶ。

然し今となつては雲と漂ひ雨とおちるより仕方が無いと覺悟する。が、大きな雷が鳴つて大粒の雨でも降れば善いにと考へる。否、今急に颶風でも起つて船諸共、海の底に沈めば、平和に僕は沈んで行くにと新兒は微笑んだ。

雨がぽつ〳〵降つて來て、雲は海上に近く飛んだ。新兒は俯垂れて涙を拭うた。

五

『ア兄樣が——』と玄關を出かけて這入つた洋服を着た小供がある。榮一を見て急いで奥へ飛んで這

風が強いので大きな雲が西南から東北へと飛んで居る。そして一つの波に大きな汽船が浮いて居るかと思はれる程揺れる。東の方に、水平線を一寸離れて一直線に薄い赤色が雲の下を彩つて居るが、何ゝ待つても赤味が増さぬ。今にも雨が降り相で海は灰色の淡い色彩で充されて居る。心細く淋しい太陽も照らず雨も降らず、唯波の音と檣やブリツデに衝る風の響が如何にも物凄い。

少し疲労して居るので風が莫迦に冷い。然し下に降りると酔ふであらうと思つたから縋けて甲板の頭先きへ行つて低い聲で聞き覚えの讃美歌を繰返してみた。が、矢張り徳島に歸つて怎うするかと云ふ事が絶ぜられたり父に會つて何と云はうかと思ふた方が善かつたかも知れぬと思ふが、思ふと東京にも居りたくないと考へられる。でも不自由た囚舎に這入つて何をするかと考へると、凡てのことがつまらない様に見える。假に社會改良とか云ふ題で一日か二日か揭載せられて、その後はまた世人に忘れられて終うのだと思へばつまらぬ。

然し哲學と宗教は研究しても果て切りの無いものだ、と云ふ者は無情なものだと思ふと社會と云ふ新聞の一隅に模範事業と思つて泣観したくなる。また自分は二十二になつて何の社會に貢献する處が無いと思ふと功名心が胸に湧いて反つてまた悲しくなる。父がどん〳〵學資を送つて呉れて宗教哲學を專攻して獨逸へでも

に一寸と見た事のある女だ』と思ひ出した。兎に角お梅の歓迎は嬉しかつた。

『有難うお父様は居らしやいますか』と問ひ乍ら上る。

『は、居らしやいますよ。今二階で神様を拜んで……』と女は答へる。

榮一は女の云ふまゝに『お次ぎの間』から奥へ通つた。

『ア、兄さん、まるで、いよいよですなオホホ』

『今着物を出しますよ』と云つて奥の箪笥の引出しを開けて居る。益則は默つて榮一の洋服を脫ぐのを見て居たが。

『まア學校へ行つて來ます。兄様それじや、また』と云つて出て行つた。

榮一はお梅に、

『益則は大きくなりましたね』と云ふた。

『ほんとに大きくなりましたでしよう』と答へ乍ら紬の袷と縮緬の帶を出して來た。衣服を着ながら

『お父様はまだ降りて來られないのですか？』と問ふと、

入つた。

榮一は今小松島から車に乘つて歸つて來た處である。蒸汽船は六時に小松島に着いた。

榮一は父の厳の想像以上に立派なものには驚かざるを得なかつた。見た所、横に十五間高さ二間半もあらうと思ふ。黒色の土塀がピカ〳〵光つて居る。腰板の六尺もあらうと思ふものは杉の焼板、上は白鼠瓦に定紋を抜いてある。その前へもつていつて丈四尺許りの樟の六角柱の垣。門はひとしほ綺麗に木の縁高な光の柔和な村名を用ゐ、敬行は青石の一枚。門から玄關まで二間半もあらうと思ふが、實に大きな石である。

車から降りて玄關に進んで格子戸を開いた時、

『そう……オホホ……』と女の可愛い笑ひ聲がする。小供の足音が之れに先き立つた。

『兄様お歸り』と十の白い眉尻の上つた頬の細い弟の益が禮をした。

『御機嫌……』と答へて車夫に金を拂つて靴を脱いだ。

障子に隠れて女も『お歸り』と禮をした。女は通りから見られるのが恥しいのであらう。

『さ兄様奥へ。長くお目に懸りませんでしたね。』と云ひ乍ら女は奥へ通らうとする。

榮一は『此女なら四五年前父と水戸と云ふ旅館で一緒に宿つた時

はしなかつた。

『昨夜は荒うございましたでしょう。』と問ふ。

『はア』と答へると、

『あなた鏡？』

『間、萬事和式で窓の方に大きくて綺麗な鏡臺があるから立派な者がかゝつて居る。榮一の濡れた洋服もかゝつて居る。』

『どうぞお使ひなして』と云つてまたチツクを出して見て『お使ひなら……これはお父様の……』

お梅の輕々しい態度に、面白くない榮一は『お父様の』と云ふ句を聞いてドキツとした。

榮一は髮を分けて居たが『私は一寸失禮します、お膳のこしらへをしますから』とお梅はまた緣を

『盥所の方へ急いだ。

髮を梳き終つて榮一は化粧の間から出て來たが、

『もうおすみなさいましたか？』と尋ねる。

『そらお父様の長い事毎朝一時間位ね拝んで居られまつさ。あなたお面をお洗ひやす煤黒くなつて居ますよお水を取りましよう……およし若旦那に御水を取つて上げて頂戴』と云つて洋服を持つて縁を傳つて化粧の間の方へ便所の前を通つて去つた。

『はい』と答へて、見付きの善い十八九の女が倉の前を通つて縁先の流しにある金盥を取つて井戸端に立つ——。釣瓶の鎖の音が聞える。

栄一は十幾年に絹の衣服を着て見た。心持の悪いものでない。お梅は縁を小足に走つて来て、栄一に大きな西洋手拭と麝香楊子を渡した。そしてまた、

『はいこれ石鹸』とニツケルの石鹸箱を渡した。栄一は楊子を使つて面を洗つて居た。女は後に立つて、

『あなたの髪の黒いこと、ほんとに黒いわ、女にしたら善い髪の毛ですな……チツク付けはりますか？　チツクなら化粧の間に御座りますよ。』と云ふ。

『いやチツクなど付けません、下品ですからね。』

『こうですかチツクを付けぬのがハイカラですか？』と真面目腐つて尋ねるので栄一も少々閉口して、

『アメリカの上品な人はチツクは使はないさうです』とまア答へて置いた。それで女もその上問ふと

『笑はどう致しました?。』

『三日前に田舎の方へお歸りになりました。』と答へて居る。その時、二階から父の降りて來る足音がした。

お梅は『御免。お父様が……』と座を立つて、二階の上り口の襖を開いて、

『兄さんがお歸りで御座ります。』と上を見上げてゐつて居る。父は返事もせずに降りて來る。

『お父様……』とゐつたが、父は、

『オ、榮一か?……』とゐつたまゝ仲の間へ通つて終ふ。榮一は何だか物足らぬ氣がして俛いて指をもじ〳〵して居たが、

榮一は頸垂れて『まア、こつちへお出で。』と仲の間から聲がする。お梅は押入れを開いて膳立てして居る。

榮一は座を立つて臺所と奥の間の『仲の間』の入口に俛いて坐つた。

父は長火鉢の前に絹を纏つて角帶をしめて居る。吞は低い方で、顏は小黑い。眼格な顏で口許は無い。

『那さん、もう御膳が出來ますが……。』

『父は默つて居るそして長火鉢の横の小さい黑檀の棚か

『はア』と答へて『お父様はまだですか知ら』と『もうおすみになつた様です、お聲が聞え無くなつたから……急しくてまだお辭儀を忘れて居りましたね。』と臺所の方に來ると。臺所に坐つた。それで榮一も坐つた。

『暫く。』其後は御無沙汰許りも。つい〳〵御無沙汰許り……こんなにお父様に御世話になつて居ります……』と口上を述べる。榮一も變に思つたが。

『どうも暫く、御盛んでいらつしやいますか、どうぞ宜敷。』と改めて禮をした。

『學校はお濟みになつたので御座りますか?』

『いゝえ濟んだと云ふのじや無いのですが――』

『まアよく、御歸りなさいました。四年前で御座りましたかね。水屋で一寸とお目に懸つたのは。』と

お梅は臆面も無く云ふ。

『はア。』神經の過敏な榮一は妙に感じた。

『お父様も長くお會ひにならぬから近い中に會ひたいと仰つて居らつしやいました。』

『そうでしたか』と榮一は一寸と笑顏を見せて答へたが。挨拶と云ふ者は仕樣でどうでも云へる者だと考へた。榮一は急に笑子の事を思ひ出して、

お梅は入口に手をついて、『お二人共お茶漬をおあがりなして』と云つて居る。

『まア、それでは、茶漬けでも食つて……』と已は役所から歸つて來てから悠然と話をしよう』と父は立ち上つた。

お梅は『そちらへ持つて參りましようか』と問ふたが、『臺所で結構』とこう云つて居る。榮一は父の悠然して默つて俛いて居るのに腹が立つて氣がいらだつて仕方がない。

『榮一昨夜は少し風があつたので、よく轉つたぐらうなア』と父は少し諧謔に出る。お梅が呼ぶから臺所の自分の席に着いたが、後に續く言葉が無い。

『はア、』と答へたが、『何等であつた？』

『三等で――』

『そら、おえらかつたでしような』とお梅が云ふ。

『榮一、お前の學校は一體ありや怎うだ、ふ學校じやや？』

『基督教主義の學校で御座ります。』

『それじやお前も耶蘇になつたのかい。』

ら茶呑み茶碗を取つて居た。榮一は、
『お父様。御機嫌はおよろしう御座りますかと?』禮をしたが、父は茶碗と湯を急陶に入れながら輕く。
『久し振りじやな。』と云つて居る。そして續けて、
『お前顏が青いじやないか、また病氣が惡いかい。』と加へて居る。
『有難う御座ります。然し別に惡りは御座りませぬ。』
『それ、學校はどうした。……もう卒業したのかい。』
『いゝえ。』
『どうしたの、それじや此頃は休みかい?』
『いゝえ。』
『それじやどうしたの。』
『一寸と感じた事がありまして。』
『それじや退校でもせられたのかい?』
『いや。』

「旦那様は其方の座に居ります。」

「さうさい。」

「奥さんは此方の座に居ります。」

「早う。」

「おお、早う。」

「旦那様は、まだ其方の座に居ります。」

「お早うございます。」

「お早うございます。」

「お早うございます

『いゝえ』

『それじや、なぜあんな學校へ這入つたの、これの云ふ事を聞かずに……校したのかい？』

『はい退校する積りで歸つて來たので御座りますが、……明治學院は主義が贊成で御座りますから今迄で居りましたが。』

『主義つて、キリスト教かい？』

『博愛主義です。』

『それじやお前は社會主義にも贊成して居るだらう。』

父に問ひ詰められて、阿波の名物の燒味噌にも味が無い。

『ほツ、……』と答へたが、

父は聞かぬ振りをして、

『お給仕』と茶碗を膳の上に置く。お梅は『おヨツさん、一寸と上つてお給仕をして居た下女を呼んだ。

辨當であらう。小さい瀬戸物の辨當入れに、飯をつめて、下女は上つて來たが、飯櫃の横に坐つて恭しく禮をする。

『はい。』と答へて、庭には縁側の

『旦那、今朝は少し御飯が遅ふ御座りますからお話は後にして、御飲をお済しなさらないと遅刻なさいますよ。』

榮一は父が何だか芝居をして居る様に思はれてならぬ。頑固な父をよく芝居で見るが現實のものじや無いと思つて居た。が、現實——而も我父が頑固阿爺の標本だと思へば可笑しくて堪らぬ。

『少し學問が出來たかと思ふと父を嘲罵して笑ふ。』と父がこぶのを冷りとした。父はかう云つて默つて立つて奥へ這入つた。

『おい洋服を出して、』とぶつて居る。お梅が、

『旦那御膳は召上らないので御座りますか？』と問ふたが答が無い。で。

『お父様は此頃なんでも怒る様になつて居られますから、どうぞ御許しなしてよ。』とお梅は榮一に謝して居る。

『いゝえ、怒つたり致しますものか。』と榮一はぶつたが顔は上げぬ。涙が眼に集つて居る。奥から、

『何を喋つて居る、早く出さぬかい。』と云ふ。

『へい』とお梅は慌てゝ化粧の間へ走つた。

『どうぞ澤山お上りなして。』と先きから、呆氣に取られて見て居た下女は新見の箸を置くのを見て盆を

「此も去ぬ前が已のふ事を聞かずに耶蘇教の學校に這入るとふから、初めから學資を送るまいと思つたのにやはれども、少し此頃は金の融通もきかぬ様になつたから此月迄送つて居つたが、もなつて見れば、耶蘇に改宗して家を出て終うのならば、幾何骨折つても駄目じやと思つたからな。それで此月も送らなかつたのじやが……然し榮一、歸つて來て何らする積りじや。内には耶蘇や社會主義の男はいらぬがそれかとふて遊んで居つて貰ふわけにも行かぬし、已のふ事を聞かぬ子は宅の子にや無いが……』としめりしめり、父は低い聲で榮一の顏をしめる。お梅は默つて聞いて居たが、熱い胸の下を冷水が流れる様に覺へて思はず知らず、

「ウン、……」と輕く笑つた。笑ふや否や、

「榮一！」眞面目ふよはいんだ。君も父に向つて』と眼を怒せて父が叫んだ。お梅は、

「旦那、およしなさい、旦那、今歸つた許りの人に、そんなにふのは失禮でせんか。』と氣の毒さうな顏をして行る。

「生意氣な、東京で少し勉強さして遣つたら生意氣な事許り考へて、親を少も親と思へぬ様になつて。』

『今迄幾百圓幾千圓と入れさして、二十二も三にもなつて何の役にも立たぬと云ふことを稽古して來た様な者じやなア。一體榮一それでは、今から何をする積りじや。今の處どんなことか。……フム、生意氣なそれが高等學校に居た癖に生か、耶蘇と云ふのは親不孝を教るのだなア』。

それじや耶蘇教では

『今迄幾百圓幾千圓と入れさして、二十二も三にもなつて何の役にも立たぬと云ふことを稽古して來た様な者じやなア。一體榮一それでは、今から何をする積りじや。今の處どんなことか。……フム、生意氣なそれが高等學校に居た癖に生か、耶蘇と云ふのは親不孝を教るのだなア』。

差し出した。その聲が可愛い。然し榮一は『行難う』と云つたなり、窓口の隅の障子を開いて下女の室へ這入つて、身を倒して涙にくれた。雨は烈しく降る。

暫くして父が出掛けた後、お梅が、二階に床を述べたから昨夜の疲れを休めてはどうかと、親切に云つて呉れた。それで榮一は二階へ上つて寢た。

午後の四時頃まで少しも知らず無かつた。雀が三四匹喧しく鳴いたので眼が醒めた、一寸障子を開いて外を見ると雨は小降りになつて天はボウと明く、黄い光線が屋根瓦を照らしてゐる。乾いみを見ると寸と顔をだけてこちらを見る。柿の木がその横にある。窓を開いて若い女の人が本を讀んで居る。

『テ、美しい女！』と榮一は思つたが恥しかつたから障子を閉めて忙然何とはなしに考へて居た。父の聲が下にする。

『父が戻や歸つて來たのか』と思つて縮み上つた。

夕飯の時に榮一も席をまた連ねたが、父は晩酌の醉が大分まわつてくると。そろ〳〵榮一を攻撃し初める。お梅と益則は唯默つて聞いて居る。然し榮一は決して默つては聞いて居らぬ。醉つて居るからとつて無責任なことを云はさぬと覺悟して居る。

『旦那様、およしなさいませ。もしお怪我なしても悪いですから……』と申譯の仲裁をして居た。

榮一は決して反抗しない。父は玄關の障子を開いて。

『出て行け！』と、

榮一を蹴落した。そしてぴしやりと障子を閉ぢて泣いて居る。

障子の影で榮一は強く泣きながら苦しい笑を漏して居る。が、少しして何か心に浮んだのであらう急に中門から裏に廻つて化粧の間で洋服に着替へ、また玄關に來て哀れな靴を穿いて傘もさゝずに家を出た。

外は闇だ。

六

父の宅は出た。

榮一は何處へ行くであらう？　徳島本町を西に市役所の角を左に曲つて徳島橋を越へた。板野の田舍に歸るには少し回り道であるが、通町へ出て傘を買ひたかつたのである。警察署の電氣燈が鈍く光つて居る。西洋雜貨商の宮井は矢張り昔の宮井だ。何時かと時計を覗くと宮井の御主人は火鉢の前で

『……耶蘇教では……子を可愛がらぬ親、一人の女を愛せぬ夫は……』

『……』

『フム、お前は……お父様などはそれだから……』

『……』

『……』

らぬわ。よくまア過去の御恩を忘れてそんた事が云はれるな。お前はそれまで、わしが憎いか！』と

父も敗けぬ。すると栄一も、

『お父様もよくも何人も女を……』嘯々私のお母様が墓の中で泣いて居る事で御座りますぞ。』と

しようよ。それに新聞に攻撃せられても平気でよく市役所に出られますねっ。』と

『生意気な、何をぬかすっ。』と父は立ち上つて、栄一の

『云はして置けばよくもアそんな生意気な事が云へるなア。も一度云つてみい。』と

ながら云ふと、栄一は繰返して、

『則ちゃんを取つたなどと云はれて平気で市役所に出られますね。』と平気で云ふた。が、此言葉の云ひ終る

が終らぬかに父の掌は栄一の頬に強く落ちて、持つて居た箸と茶碗は膳のうへに

て父は栄一の頸筋を摑へて玄關へ引きづつて行つた。倒れた栄一は横に倒れた。倒れた栄一の

た。益則も下女も小僧の吉三郎も默つて見て居たが、お梅は立つて、

それに、もう一人思ひ出すのは『日曜日』といふ乞食である。之れも馬鹿でから懸けて、日曜日でなくても金曜日でも土曜日でも貰びに来た背の高い四十恰好の男乞食。

お千代に子を生ました鹽川は先年死んだと聞いたが彼を除いて此三人の乞食は、皆徳島市の名物家で、市長よりも、市民に可愛がられて居る。三人共若野心を離れて生活を楽しんで加氣な夢でもみて居るであらうなど考へ乍ら一丁目に来る。隆盛堂の本屋が潰れて借家札が貼られて居る。小西の薬屋も菓子屋も昔の通りである。市川の料理屋の四階が三階になつて居る。いつも賑やかな新町橋が淋しい。左の靴の底から水が浸入つて来た。

古川病院の電燈も光らない。瀧見橋から瀧の山を見ると光りがむつ八つ。監獄署はいつ見ても大きい。前川の橋を渡つて地鳴りの様に聞えるのは紡績會社。雨の夜でも機械が運轉して居るらしい。前に此處へ宮組扶を見に来た事を思ひ出す。靴の心地が益々悪い。下駄屋へ這入りかけたが止めた。

古川の渡しに来たのが八時。川幅参町に架つて居る長い橋を渡る。淋しい、何だか風に乗つて居る又父と口論した事を思ふと愉快になる。が、ふと夢の様だ。五抱もあらうと思ふ鯛の濱の一里松も過ぎて人力車に會つた。今迄誰れにも會はなか様だの然し田舎へ歸へると歓迎せられるに逆ひないと思ふと愉快になる。が、

居眠りして居る、少し頭が禿げた様にも思はれる。通町の一丁目は變つて居らぬ。唯井關の本屋が大道から出て來て大きな店を張つて居る。こゝにも阿爺さんが居睡つて居る。二丁目は少し變つた。仙石が郵便局を狼狽たのと日本基督教會が新しく立派に建築せられた事である。唖の傘屋に這入つて番傘を買つて道を急いだ。雨は小降りだ。二丁目の角の夷神社へ來ると乞食の文やんを思ひ出した。跛の正直な——五錢銀貨と五厘銅貨を見せると後の方を取る——乞食。

『ぼんやんなんぞつかい。奥様なんぞつかい！』と時間を定めて貰つて歩く乞食、快活で、いつも笑つて居る乞食、金持ちで百圓以上の貯金があると噂せられて居る五十許りの男、夷神社に寢泊りして堂守りの様にして居る文やんはまだ生きて居るか知ら？　文やんから連想するのは大道のお千代、高慢な豪ら想に貰つて歩く乞食の鹽川の子を産んだと噂せられた馬鹿のお千代、朝から晩まで左の日尻を下げて妙な笑ひをして誰を見ても、

『うち、いやー！　あの人、おかしいの！』と大きな聲で叫ぶお千代、時によると鼻許り黒く塗つて、顔全體に壁の様に白粉を塗つて袖の長い破れた着物を着て哀れな袋をさげて坊主頭を撫でながら貰つて歩くお千代。七八年の昔、ある朝勢見の金比羅に散歩して見るとお千代が繪馬堂の前を突ひ乍ら掃いて居た事のあるのを思ひ出す。

かしかつた鶴子様、もうお嫁入りをしたかしら。ぬが——と先から先を思ひ廻らしながら、榮一が高等一年生と二年生の間世話になつる、四年前の夏一寸と歸つて來た時には、まだ學校も立つて居たが今は跡形もなく唯石垣のみが殘つて居る。

學校は何處へ移つたのであらう？　この牛屋島の學校で神戸育ちの生意氣小僧が大に威張つた昔を思ふと恥しい。まだ入學試驗も受けずに卒業生と一緒に送別會を開いて三十五錢の會費で濟ま階で酒を飲んだ事があつた。三十人の卒業生と五人の先生が皆醉つ拂つた。……小使の事を思ふと身震がする。酒が好きな小使で、生白い顏に血走つた眼た小使も醉つ拂つた。隅で獨り杯を傾けて居付き、髮は前を一寸五分許り高くしてむしやくとその頃であつたらう。その子が二年生の夏休みに突然死んだ。そして其病名は『肋膜』と云ふ字が頭に付くものであつた。處がその女の子は榮一が洋傘で脇腹をついて肋骨の三枚目を折つたから死んだと云ふ噂が立ち榮一は全く關係も何もない事を聞かせられて吃驚した。そして二日二晩裏座敷の蚊帳の中で泣き明した事があつた。その結果貯蓄して居た五圓を香典として自身で持つて行つた。怎那噂を立てられる位自分は腕白であつたかと思ふと、今になつて此誤解を慥つて、小さい時から他人を可

つた。之れから未だ二里。疲れたと思ふが足は歩いて居る。牛飼の田臺（野原）を通り過ぎて中村へかかつたが、また此村を過ると長い野道。盗賊が出たらと思つたが、盗賊が出たで馬士まで走つて歸らう。殺されるなら消えるまでだなど、忙然としたことを考へながら、野原も過ぎて北村。北志多來のダラ〳〵（坂）を越えて自分の村の川向、俗に新田といふ處に這入つた。板野郡堀江村大字東馬詰村小字新田である。榮一の宅は古田だ。氏神のお諏訪さんの森の前を通る。お祭の時に自分が太皷を叩いて若衆が獅子を舞ふた事を思ひ出す。

それからそれへと連想して、古田の天神様の小供終には自分が一年隊長になつて、一晩あの鎭守の森の樹で大勢の小供と寢て騒いだ事など思ひ出す。牛屋島の橋を渡る。中學の一年の時、此の渡で哭く娼妓に惱されて此處まで二人を連れて逃げて來て、金が無くなつて心中をしたことがあつた。川の流れは靜で、細い雨の音しとやかである。水が川幅一ぱいに滿ちて居るのが氣色がよい。淸い溜が川の上を被ふて、二人の幽靈でも出ないかと思ふと妙な氣になる。こゝの川で三月の節句には小供連れで舟遊びをするために……『傘』の傳馬に乘つて諏訪や葭しめを辨當にして川に出たことも思ひ出す。繼母と姉のお雛樣のことを思ひ出す。近所の娘がそれを見に來たことも、それから田宮の鶴子樣の見にきたことも——目のぱつちりした美しい可愛い女の子だと思つたから、話するさへ耻

がある。新兒の本家の家屋敷は田宮があつた時からでも一番東馬詰で大きい八ケ村の大庄屋であつた。膽の太い男で二十四間に五間の大きな藍の寢床と、を建てた。東納屋と云ふのがその大きな方で西納屋と呼んで居るのがその小さい方だ。前納屋は二階付きで大きい高い建物だ。前納屋の東側に大きな門屋がある。

もう九時半、榮一は靜に此門屋の軒下に立つた。色々な感興が湧いて來る音がするかと思つて伺つてゐた。西納屋に馬が腰板を蹴つてコトン〳〵と云ふ叩くと母屋の戸が開いて、女の聲がする。

『誰れで？――』確かに外にもうひとりの若い女の聲がして二人で何かぶつぶつ囁いて居る。

『私――』と榮一は低い聲で答へたが、

『今頃誰れだらうな。』と笑の聲がして、また若い他の女の聲と混つて話して居るのが聞える。聽て、長い敞盖（納屋の方言）を二人で歩く音がするその足音が響いてカン〳〵と音がする。番頭が居らぬのか知らと思つて居る中に門の潜りは開かれた。また馬が嘶いて腰板を蹄でけてゐる。

『誰れかと思つたら兄樣ですか？　とうなしたの？』と笑が洩ねる。若い女が陰に隱れて居る。榮一

だ愈々自分の宅に近づいた。土手を降りて虎吉さんの宅がある。その隣が政吉さん、水門の横を通つて狆付のおかみさんが居た権助さんの横に出ると自分の宅の大きな門が見える。東の半さん、灯皆刻商であつたが今は何をして居る事か？昔はそれでも大きな家で、今と云へば近在に誰知らぬものゝ無い地持ちであつたのが、今は母屋許りになつて屋敷が畑になつて居る。子守り歌にも、

『田宮金持ち、山下は地もち、
裏の金内さんは娘もち。』

と、唱はれた位である、金内さんと云ふのは新見家のことで美人が多くあつたさうだ。齋藤の信さんの裏を廻つて懲いたのは田宮の家屋敷の影も無いことである、唯乾の隅の三抱もあらうと思ふ赤松が、闇の中に淋しく雨にたゝかれて居る。茶一は唯不思議に思つた。

『東馬詰に田宮がなけりや
後は川野のけしす原』

と、まで讃美せられた士族の田宮の屋敷が形も跡も無い。

榎の大きな木が生へて居た横の生垣を廻らした田宮家の墓所の裏から右に折れて、新見の門の前まで道

『ほんまに吃驚致しましたない。もしや強盗でも這入つて來たらと思つてない。』と話して居る。

『お母様は御機嫌ヤ！』と聞くと、

『少しリョマチスの氣がおありなさりますさうです。』

『いつから？』

『十日位前から……徳島へ使で私を呼びにこられましてない。それで私が歸つて來たのです。』

寢床の傲盞から母屋の傲盞に飛び移つて石段を五つ六つ昇つて三人は玄關にこは敷は大抵平地より二丈も三丈も高くする。之れは吉野川が氾濫するからである。）

玄關へ上つて榮一は『お母様は何處？』と尋ねたが、『裏座敷』と答へて居るから裏座敷の方へ行つた。

榮一が歸つて來たので繼母も立ち上つて坐つた。相當に時候の挨拶から榮一の今度歸つて來た理由なども聞いて田舍の話が出た。繼母は顎を左の手の母指と人指で弄りながら、折々鬢の亂れを右の手でなであげて語り出す。

は門の中へ這入りながら、

『一番頭は居ら無いの？』

『一番は今夜一寸と産があつて往んで居るし……二番はお四國へ行つてまだ歸つて來ず……恐ろしいからおよつさんと一緒に開けに來たのですわ。よう惣慶に降るのにお歸りなしたなあ、

と思ひましたら、早や歸つて來て居たのだね。』と云ふ。若い女は

『笑さんはまだ徳島に居ることだと思つて居たら、笑一は若い女に眼を付け乍ら、

『若旦那、初めてお目に懸ります。私は常吉の妹で御座ります。』と禮をする。

『常吉さんの妹さんの靜さん――』と紹介して居る。妹と靜を見較べると下女の方が遙か美しい。靜の持つて居る六角の小燈の光ではよく見えぬが、生へぎわの美しい、地藏眉毛で、一皮目ではあるが優しい目付をして、透き通る様な皮膚を持つて居るのを見ると田舍には珍しい美人である。笑の様な髪の赤い、色の小黒い、唯太いと云ふ許りの女には雪と炭との違ひがある。

笑一も相當に禮をしたが、あまり美しいから、よく顔をみるのも恥しかつた。二人はまた蒲團を母屋に傳つたが、笑と靜と二人で、

『誰れぞと思ふたな。』

然し鶴子様だけは四月に東京の叔父様とかゞ徳島の師範學校の先生になつていらつしやつて、その叔父様のお宅へ養はれて行らしやつたが、此年はもう女學校を御卒業なしたゞらう、市の宅と裏合になつた家ですわな。田宮の御親類の宅は？』と自分の側に居る笑に尋ねる。

笑子は『二階から乾の隅にお二階が見えますわ。』と答へて兄の顔を眤と見て居る。

『そして盆がすんで御隠居様はまさ様をお連れに矢張り東京の御親類にお出でなしたのだらう。まア然し變れば變るものですわ。つた當座は何だか、淋しう御座りましたぜ。然し早晩田宮と同じ日に發ふかも知れまへんでよ。どうもお父様には困りますわ。かはれ。』

榮一は笑の言葉から、今日の午後四時、二階から見た美しい女は鶴子様であつた事と想像する。すると鶴子様は却々く美人になつて居る。

榮一は父と喧嘩した事は無かつた。またあまり悲觀した様な事も云はなかつた。

『二番が四國參りに行きましたつて？』と無意味な事を聞く。

『エ、毎年村から一人づゝお四國へ出すのが今年は抽籤が宅に當つてない。一番は嫁が姙娠して居る

『世の中はほんとに薄情な者ですわ。……どんな身分のある人でも貧乏すればわつ田宮だつてお金のある間は田宮、田宮と云つて、もち上げる者が多かつたけれど、今になつたら可哀想なものですわ。』

母は顔の小さい、色の白い一皮瞼の眼の細い女である。囲行燈が暗く光る。

『おまはんが跡つた年の秋ない。あれが舊暦の十月の朔日か二日の日にない。朝から五六人の角袖が宅の前をあちらへ行つたりこちらへ行つたりするでないで、そうすると土手の方にも警部の様な人と巡査が二三人立つて居るんでよ。そのうちに田宮へ這入つたと思ふと誠さんが渡しから徳島の監獄署へ連れて行かれましたわ。妾も吃驚しましたわ。なんでも誠さんが村長をして居つたとかお鑑で損をしたとか、村役場の横の料理屋の女に入れあげて損をしたとかこ云ふが、なんでも役場の金を二千圓とか三千圓とか費ひ込んだんだそうですわ。そしてまだ裁判もすまぬ中に牢屋の中で首縊つて死んだんですわ——おいといやらしい事でないで——それ聞いて奥様も氣が振つて川へ這入つて死なれましたわ、まアそらお氣の毒やらおいとしいやらで妾も泣きましたわ。』

と云ふことを聞いて、屋敷は取り拂はれる。這入る處は無しない。御隠居と鶴子様とまさ様は正月から盆まで宅の裏座敷にお出でたさりましたわ、あしこの化粧の間が臺所で此處の二間をお室になして

繼母は榮一に『あの子は鈍で困りますわ。』と呟く。雨はまだ強く降つて居る。

七

『太陽は實によく光る！』

もう、午後一時半。昨夜の雨は、庭に僅かな滓り氣を殘して、何處かに隱れたと、表座敷の緣側に仰向きに寢て、太陽を見て居た、榮一が云ふた。

く光る』『太陽が出て、春は一度に甦つた。

榮一はあまり、まばゆいから左の拳に小さい穴を造らへて、それから太陽を見てゐる。

エーションが出來る。

『綺麗なラデエーション！　まるで虹だ！』と榮一は自分一人囁いて、色々と考へた。

『太陽の光線は美しい。これが九千三百萬哩やつて來たのか？　此の光線が空氣の外では全くの紫色だと云ふが……どんな美しい世界だらう。神秘だね、光は――』と考へて、まだ色々想像を廻らした。

が、昨日の陰氣な一日に堪へ兼ねた榮一は、今日は朝から『よ

から遣れないので、一番を遣る様になりました。今日で宅を出て一寸二十八日になりますわ。』と母は云つて居ゐ、榮一は閑田舎人が側の名を唱へて、物を貰ひながら遍路して居る様を想像する。

雨垂れの音の間に火の用心の聲が聞える。

『助かた張り火の用心な廻つて居るの？』

『エ、やはり、』と答へて居る。

『然しお母様の御病氣もたいした事が無いので幸ですね。』と榮一が云ふと、

『寸右の足が自由にきかぬと云ふ丈けじやからない。そう心配せいでも、すぐ癒ると思ふて居るのですわ。』と答へる。

火の用心が西納屋の方から裏座敷の方へ廻つて來た時に、裏座敷の話の聲を聞いて。

『お嬢様まだ帳場の戸が閉つて居りませんない。』と注意して居る。

『笑さん、それ、また帳場の戸が閉つて居らぬつて！』と繼母は笑に注意する。

『ア、忘れて居つた。先に誰ぞと思うて門を覗いて、まだ開けたなりで——』と立ち上る。

『早やう閉てゝお出でなはれ！』と母は命ずる。

笑子は緣を母屋に走つた。

価のないことは知つて居るが、何だか死より恐ろしい手が咽笛を押へて居るが恐ろしい。……生命と云へば此頃は全く食欲がない。その上、頭も重も、何だか絶いた。而も、……僕は田舎に帰つたから田舎は嫌だ。嫌になつた。僕の様な天才の住む処じやない。部に居ると淋しい様に思ふが、来て見ると詰も消える。

もいつてゐた。

僕一は、起きたつて、唯、忙然飛石の隅を見詰めてゐた。が急にまた氣が付いたと云ふ様な身振をして、庭に下りた。

「……と無意味なことを云つて、庭には、雨手で、雨を払いた。そして、すぐ、

「嘘。つまらぬ！」

神様は自殺したのだらう！

車前の隅に、もう、抱もおらうと云つた木がある。この木には、緑色の葉が一枚一枚光つてゐる。横に五、六の松が植えられて居る。見覚えのある木で、自分が湯殿の前に植えたものだ。その外、木犀と山梔が湯殿の横の衣裳倉の前にあつて、南天、馬酔木などが隅にある。おもり屈くも無い庭が、一ぱいと雪木で詰つて居る。

僕一は脚下駄を穿いて、おちこちと飛び石を傳つて、思ひに沈んだ。手織縞の女着に、弟の兵児帯。色は青く、眼は非常に鋭い。

……僕は何の爲めに散歩する？　生きてゐるから散歩する。何故生きて居る。生きてゐるからいやそうでもない。自殺したくないから生きてゐる。いや、死にたくないか、黒闇には行きたくないから生きてゐる。……實に……頭に繩をつけられて引ずられて居るから生きて居る。生命に價

『兄さん東京つて、何那處です？』

『なに、つまらぬ處さ。』

『それでも徳島よりは大きくつて、美しいでしよう。神戸よりも！』

『徳島つて——一月半も居りませんだわ。』

『一月半も居て行つたの？』

『なぜ徳島へ出て行つたんなことは云へませんわ。』

『何故つて、そんなことは云へませんわ。』

『兄様だからつても善いだらう。』

『あの繼母さんが——ヽヽへまへんわ。そこにごあるもの。大竈の下で麥藁を焚いたかだから云つて頂戴！　何卒』

灰がとまつて居る。

『笑さん云へないことがあるものですか、兄さんだからつて逃げて行つたんですわ。』

『繼母さんが、あまりお叱りなさるから徳島へ』

『何故』

『打つたり叩いたりなさるんですもの。』と袖を衝へて口籠る。

座敷の隅子を開いて笑子が顔出した。それで榮一は、
『笑さん、此の五葉の松は何時枯れたの？』と問ふた。
『兄さんあれ？』と視線を五葉の松に轉じて。
『はゝ』と同じく榮一も松を見る。
『あれは何ですわ、お母様か植ゑ替へなして枯れたんですわ。』
『僕が湯殿の前へ植ゑたのに？』不平らしく云ふ。
『なんでも五葉の松は屋敷の辰巳に植ゑゐと貧乏するとか仰つて今年の一月であつたか自分手におの植ゑ替へなしたんですわ。』
榮一は縁に腰を下して、
『常吉はまだ歸らぬのか知ら？　もう二時だね。』
『宅の晝飯はいつもこんなに遲いの？』
『そうでしょう。もう二時過ぎますわな。』
『いつも之れ位るのですわ。大抵なら一時半ですわ。ほゝだつて五度喫るのですから。』
『そうだね。』

『笑さん、お梅はあれ、歳は幾つ、若く造つて居るが。』

『あれで三十二ですと來年が厄年じやと云つて心配して居りますわ。妾のお母様が三十三の厄で死んだんでしようし——お母様が生きて居らしやれば善いのに。せめては、姉様でもなければ善いのに。お母様があれば惣那つらひ心配はせいで善いのじやが、之れでも學校へも少し上つて居つたらと思はぬ日は一日もありませんわ。』と怨む様に云ふ。

榮一は小さい時から此妹を可愛く思は無かつた、姉様の様に美人で無く學問も出來無かつたから。然し今になると何となしに可哀相でもあり、女の心で繼母との間柄をよく切り抜けて行くと思ふと豪いと賞めてやりたくなる。

『笑さん、然し失望する必要は無いよ。兄さんだつていつまでも愚圖々々して居らぬからねえ——お母様の事など思つて居たら際限りないから、もう心配するのを止めて下さいね。』

『それでも私死ぬ程辛いのですもの。毎晩々々寢屋へ這入つて泣かぬことはありません。お母様の寫眞を見ては泣き、お母様の寫眞を見ては泣き、お母様がたとへ今私と一緒にゐられ無くとも何處ぞに生きて居つて下さるならと思つてゐない——いつそ死んだらまた會へる事もあると思ふて仕方が無いのですわ……ほれに去年の春からない、血の道の氣があつて、氣がふさいで仕方が無いのでしよう。

『そう。繼母さんが無理だね。』

『私栽紙がへたり下手でようなな。それに出來んと云ふ理があるか、そんな不調法なのて下女を上にあげて縫はしますわと仰しやるのですからない。』笑は水仕で爛れた手を隠す。榮一は眼に涙を浮ばせた。

『どうして居たの?』

『徳島へ行つて居たんですわ、お梅の下で』

『下女の様にをしようと兄は顔を背けて泣いた。』

『お父様の處で?』

『あのお梅が私に非道くあたりましてない。……私、ほんとに徳島の事は何にも云ひたくありません』

『何故そんな處で愚圖々々して居たの?』

『はだつて行く所の處には下女は居ら無かつたのですど、私が行つて二日程して直ぐに往にましたわ、そしてまた來て笑さん、お父様さんは妾が歸る三日前に來たのですわ。お梅が六ケ敷いからまた往にましたわ。今度來て居ないこまで』

てない、賣つて呉れるんですわ。』鶏が大庭を通る。
『安いだらうね？』
『安かつても仕方がありませんわ、生命には變へられまへんもの』と袖で涙を拭いて居る。
『笑さんその外何かお母様の形見を賣つた？』母の形見と云ふと何となしに惜しい様に思つて保存し置きたい心地がしたから尋ねた。
『え、大分賣りました』と愛への高調も少し過ぎて笑子はやゝと顔を上げて榮一の顔を見入る。母に善く似た顔。眉から鼻筋の恰好、口元のしまつた具合ひ。如何にも母に似て愛らしく優しい。その眼の大きくて二皮瞼に黒い瞳から洩れる溫い視線はどう云つても女だ。
『兄さん、私、兄さんをお母様と思ひますから、兄さんあなたも私を可愛がつてください。私は兄さんひとりしか頼りにする人が無いのですから』と云つて居つた妹に斯までに信頼せられるとは弟と云ふ者は妙なものだと考へる。答するにも言葉が無い唯默つて居ると、
『兄さん！』と妹が呼ぶ。
『何に？』

「雑魚の阿婆さんがあるんですわ。その人が色々そんな世話なしてくれ
「半襟品のお洒さんてない、衣服ついてよこうして貰るの？」
「それにや分よ、私は買れた日はどうして拵らへたのよ」
「私前から居りましたわ、衣服ついたりして」
「臨る時は何も買れ無かったよ」
「徳品でおや様は何も買れ無かったよ」
「次く次く物品が、思つた丈は、まだ
の時と上は中名が
「名は、
「て、
「私
「ノ、
「臨る時は何も買れ無かったよ」
「徳品でおや様は何も買れ無かったよ」
「それにや分よ、私は買れた日はどうして拵らへたのよ」
「私前から居りましたわ、衣服ついたりして」
「半襟品のお洒さんてない、衣服ついてよこうして貰るの？」

『今日は好いお天氣ですね』と云ふて居る。門に下駄の音がする。五十恰好の筒袖を着た男が這入つて来る。

『ア彦吉がまた来た。あれ天理さんを弘めに来るのだつせ。お母様が病氣が悪いから。——恥しいから内へ這入らう』と妹は障子を閉めた。

『こんな散髪を見られたら恥しい。』と障子の陰に蹲がして足音が段々遠くなる。

彦吉は表の庭の中門の前へ来て、

『誰さんかと思へば若旦那様でいらしやいますか？　久しくお目にかゝりませぬ。その後は御無沙汰を致しました。文藏がまた長らくお内でお世話になります。』……五六年もお目に懸らぬと見違へる様に御立派におなりなさりましたない。これでは道でお會ひ申しても見違へましたわい。その後御具合がお悪いと承りましたが、どんなお事で御座りますか？』と腰を曲げて兩手を揉みながら頭を色々に向けて極く落付いて口上を申立てた。

『母様はまた何かリョウマチスでお悪いとか誠にお加減が悪いことで御座ります。』と丁寧にお辞儀をした。天理教の人は何處か違ふて御安心で御座りますから。』

一もそれに相當の挨拶をした。

『お父様は矢張り兄様に學資を送つて居らッしやいましたか？』

『ア、貰ふのは貰つて居たがね。』

『困りはなさらず無かつた？　お父様があんなに大きな家を建てたでしよう。そしてまへから借金のあるのに、それでもお父様は平氣ですね。……妾、お父様が金を返して呉れと人が來るのでしよう。それでもお父様は平氣ですね。……妾、お父様が何かの話から兄様には學資を送らぬと云ふことを聞いたでしよう。吃驚してもう兄様には學資を送らぬと云ふことを聞いたでしよう。吃驚してあゐかと思つてゐたら百圓でも二百圓でも出す癖に月に十五圓か二十圓のお金を兄様に送れぬと云ふことがあゐかと思つてゐたら百圓でも二百圓でも出す癖に月に十五圓か二十圓のお金を兄様に送れぬと云ふことがあゐかと思つてない。』

『然しそんな事は怎うでも善いさ。』と榮一はあまり問題にし無い様に見せて居る。

『然し兄様が耶蘇教學校へ這入つたと云ふので怒つて居らしやるのですな』

『そうだらう。僕は怒るとか泣くとか云ふのが面倒臭くなつたわ、笑さん。』と眉の間に皺を寄せて云ふ。笑は勢に思つて默る。然し少し經つて、

『兄さん、御病氣はもう全快なしたのですか？　矢張り血色はお悪いが。』と尋ねた。

『肺は樂をして御馳走食へば自然と癒るがね——金が無いから僕には養生は出來ぬよ。』肺病と胃病は金持の病氣だね。』と榮一は一寸と笑つて見る。笑子も笑つた。笑つて太陽を仰いだ。

で御座りますわい』と吸殻を落しながら云ふ。

榮一の好奇心が聊かそゝる。

『一つ、聞かして被下るわけには行きませんか？』

『へえ、中山ミキ、眞道彌弘言知姫尊が即ち世に云ふオミキ婆で御座りますが、天理教の御教祖さん？』

『一體あのオミキ婆さんとよく云ひますが、どう云ふ人ですか？』

『はゝア、——と少し瞼ら脹らまして恥し相に云ふ。

『へい。大和の國ですね——中山ミキの生れたのは。』

『その人はもう昔死んだので御座りますか？』

『いゝえ、明治二十年九月廿六日に亡なられたので御座ります——先づ。天理様の起りと申します

と、ミキが小さい時から美人で、十三の時既に丹波市字三島中山善兵衛に嫁入に參つたので御座りますな。此の善兵衛の内は大工職で御座りましたが嫁入したのが文化七年九月十五日で御座ります。夫婦仲よく暮しまして、一男五女を拵らへました。處が或時黒痘瘡が大流行を致しまして、お隣の大工屋足達家の五人の小供が皆死んで終ひましたが、獨り殘つた第六番目の息子と云ふのがおミキさんの

『今日はもし、お天氣かおよろしう御座りますに』と彦吉は白椿の木から太陽に視線を轉じて、腰の煙草入を探しながら云ふ。

『さア、今日は綺麗に晴れましたね。――何卒此處へ腰をお懸けなして』と新見は促した。

『いやこれで結構の下に御座ります』と云つて白椿の下の岩に腰を下す。

『お江戸の方は嘸珍らしい事が多いことで御座りましようね――何日こちらへお歸りなさりまして御座ります』と答へたが頭が重くて彦吉と顏を會はせて話するのが何とはなしに物うひ。

彦吉は煙草を揉んで皿の大きな烟管へ次ぎながら、『此五葉の松は枯れましたが、まだ一體どう云ふもので御座りますか？』と訊ねた。

『ハア、枯れました。――』と一寸答へて續けて、

『彦吉さんは天理教の信者でいらつしやいますか？』と訊ねた。

『はい。』

『天理教と云ふのは一體どう云ふもので御座りますか？』と笑を浮ばせて。

『さもし、一日に天理教と申しましても一言半句では御話し申すことは出來ませぬが申々勿體ない致し

痘が天理様の御蔭ですつかり今では本復致しました』と座りますわい――』

て終りの方を曇らす。榮一は何だか哀れに思ふた。

『大和の本部は既に大きいもので御座りますな――』と唾を吐いて。また語る。

や雑談院などと申しましても話になりませぬわい。お正月の御鏡が一石二石と云ふ大きな奴で御座ります。それがお下りになるときは材木をひく鋸でゴシ〳〵と小切に挽くので御座りますから、たいしたもので御座りますない。』白椿の散りかゝ

ますわい。それがお下りになるときは材木をひく鋸でゴシ〳〵と小切に挽くので御座りますから、たいしたもので御座りますない。』白椿の散りかゝ

な誰にでも雑談にして食はすので御座りますから、たいしたもので御座りますない。』白椿の散りかゝ

つて居る花から、蜂が出る。静かだ。

『それじや四海同胞主義ですね！』

『本が伊非諾伊非册の二柱から出た人間で御座りますからない。』とまた唾して下駄で消す。膨して居る。榮一はじつと彦吉を見た。訊い顔色に白毛混りの髪、汚れた筒袖に母指の爪先の出た白足袋、帯は黒の小倉の角帯だが、紺がもうさめて居る。

『天理教では神様は伊非諾伊非册の二神ですか？』

『神は十柱で御座りますが、此の十柱の神様が日と月の二神から別れたので御座りますから――まア二人の神様と申しても宜敷う御座りますな。』彦吉は門の方に足音を聞いて一寸立ち上つて、垣の花形

お乳を貰つて育てゝ居りましたで御座りますな。それで御座りますから、おミキさんは此子だけは殺さ無い様にと世話を焼いて居りまして御座りますない。それでおミキさんは此處が神仰の頼み處だと思ひまして一生懸命にお願を掛けたので御座りますっ。すると不思議なことにはその御卵が聞かれてその子が助かつたので御座ります、之が抑〻天理教の起りで御座りますな——まだ〳〵御教祖様の御威徳は數へられぬ位多いので御座りますが。……肺病も全快するは、腸を病んだ人も天理様のお陰で生き返つたとか。それは〳〵數へきれません程で御座ります。』と得意になつて、薄い唇を大きく張つて喋る。何とたしに野郎な處があるので榮一は云ふ事の出來ぬ嫌厭を感じなければならなかつた。然し女豫言者テポラの事など思ひ出してミキの自

『あの、家・屋敷を賣つて教會に持ち寄りすると云ふのは一體どう云ふことですか？』

『いや、あれは中山ミキが四十歳の時、天理様のお教は是非とも世界に弘めねばならぬと云ふので自分の田地諸道具を皆天理様に差上げたので御座ります。これが起りで信者になりますと皆家屋敷を寄附致すので御座ります。……何しましても大和の本部まで參詣致しますのにビタ一文もいらぬと云ふので御座りますから結構な事で御座ります。……私もこれ長年煩つて居りました黄

『預つて置くから、今日は是非とも町へ出て來る様に云ふて吳れと仰ひまして御座ります。』

『私に來いつて？　そう？　どうも有難たう。お使立申しまして誠に濟みません。お晝は？』と不安の念に驅られながら丁寧に云つた。

『はい。町で頂戴致しまして御座ります。』

『常さん。ねばり込んで御馳走になつて來たな。』

か。アハ……』と笑つて煙草に火を付けて居る。

常吉は一寸手を延してマツチの箱を叩き落した。

『助け給へ、天理王ノ尊……』と笑つて、『若旦那樣それじや別に御用事は御座りませぬか？』と問ふて、急いで中門を出た。

彦吉はマツチを拾ひながら、

『こらまた常が惡いことをした、エヘヘ……。仕方が無い奴じや。』

『なんぼ天理樣でも常の惡いことする事だけはよう止めんな。アハ……。』

『嬶に子迄産ましてまだ惡いことがしたい樣では困るなお歲は幾つじや。』

『三十じや』

の際しから外を見る。常吉が歸つて來る。榮一は唯瞳を据えて足先を見つめて居る。

『十柱の神？　二神から別れた？……』觀念と云ふ花嫁が容想と云ふ子を産んで宗教とか理想とか云ふものを口にして居るものは自我をさへ失はねばならぬ。だから……』我が隠れ無い樣に凡ての自我を足先に集める。足先は容觀界の現實だ。觀念の中に迷ふて居る。』など考へて行く。視覺が鈍れて形も色も色々と亂れて來る。唯無意味に時間と影が移る。蜻蛉が一匹飛んで來た。

『や、彦吉さんか？』と笑ふ。彦吉は畑道を吸つて居る。そこへ常吉が中門を一寸覗いて若日那の居るのを見て這入つて來た。

『何ぇふので、貴面目になつて、若日那、町の旦那が居たのぇ？』

『お客にお歸りになつてお會ひ申しまして御座ります。』

『福物は怎うしたの？』

『奥樣も宜敷申されまして御座ります。』

常吉は直ぐ

田宮の濱へ出ると干潮で濱が皆露出て居た。

辰の親が渡して呉れたが、舟の中で辰の手を曲いて善い心持もしなかつた。

新田に渡つて、自分の生の茅野なる一町許り横過つた。此茅野へ小さい時に女の連れと、茅花を抜きに来た事があるっその中に田宮の鶴子様も居つて熟心に抜いて居た。自分は抜いた三四十本の『茅花』をなほ神鶴子様に與へた。すると翌日學校で皆に嬲られた。また或時は此處で雲雀の巣を見付けて置いたが翌日行くと卵や誰れかが壊してあつた。

茅の芽は春に會ふて萌え出て居る。輝色、鶯色、が交り合つて美しい。雲雀の囀がする。十四五町向ふに大きな土手が見える。それまでは皆麥畑だ。よく實つて居る。ふり返つて觀ると古田の堤は破て蔽はれて居る。その下に蒼い水が流れて田宮の濱の上には四五抱もあらうと思ふ榎の木が實に何ともいへぬ美しい葉を擴き出して居る。河上の方には徳島の城山が確然見える。川を通る舟もない。唯吉田に寄つた川岸の茅野に風が渡つて今年出た青い細い葉に波が打つて居る。

『お名いの。』

『番ばつて、雨戸をかやして明けて下さい——』と番は呼ばつて、雨戸をかやして明けて下さい——』と番は呼ばつて、雨戸をかやして明けて下さい——』

『ヤレ寝たいのに——寝た方がよかろ——』

『ヤレ寝たいのに——寝た方がよかろ——』

様と寝た方が、——猫よかろ——ションガエ……。』

様と寝た方が、——猫よかろ——ションガエ……。』

馬も嘶いて居る。

馬も嘶いて居る。

『はい、有難たう。』三人は内へ這入る。西に納屋には歌が聞える。

『はい、有難たう。』三人は内へ這入る。西に納屋には歌が聞える。

『それにや今から出掛けよう。——清吉様はまア内へお這入りなさい。』

『それにや今から出掛けよう。——清吉様はまア内へお這入りなさい。』

『大きくなりましたね。——今から町へ行きますと、充分許されない中に許きまして日の暮れない中に許きまして日の暮れない中に許きまして日の暮れ

それから段々と連想すると、蠟石を彫刻した事、姉に倉へ入れられて中で小便した事、「ち」の木から落つた事、越前から監部が二人来て監督さんを床の間に祭つて拝んで居た事から、田舎廻りに市川市十郎が来て、幡随院長兵衛を半屋島の小屋で演じたが、自分等が、その真似をして西らの厩の軒と、市橋歌一さんの納屋の軒で芝居を初めた事があつた。

あの時の事を思ふと独り笑へて来る――

自分の宅から黙つて姉様の着物を取り出すやら、化粧の間から、鏡やおしろいを持ち出して、與力恣の暗い暗い下で自分がお化粧をして、兎に角、女に化ける積りで涼み臺の舞臺へ現はれ、れ席の幕の開くのを待つて居ると驀て幕が開く。女だけは出たが中々男が出て来ぬ。自分はまた納屋へ這入つて歌一さんに、早く出て来いとエふ、歌一様は自分の脱ぎ捨てた衣服を裏返しに着て、顔に紅で三つ四つの輪を入れて、今帯をメめて居る處であつた。メめ終ると、

「一」坊々は後から出て来なはれよ」とエつて舞臺へ現れる。そして何か「エッサ、エッサ、〳〵」と繰返して奴が使に行く眞似をして居るらしい。自分も笑はせて見て居る女の子も男の子も皆笑つて居る。自分等も美しいと思つたから、姉様の長い紬の衣物の裾を取つて俛いたまゝ如何にも萎れた風をして出て行つた。勿論髪は市ちやんの黒の前掛けの束髪で

茅野が終つて、自分の宅の麥畑の間を通り抜けて西の新宅の田圃へかゝつた。雲雀の聲が蟬の様に聞えたと思ふと鳴き止つて何處かへ降りた。徳島へ行つて父に何か云はれるのかと思ふと胸苦しい。いつその事此様な時れ時れとした野原に小屋でも建てゝ自然を樂しんだ方が遥かに神に近い。が、此雲雀の鳴いて居る野原は世界の全部では無いとも考へる。榮一は畝道を歩み乍ら思ひつゞけた。

父の怒が何が恐ろしい。お梅の迫害が何だ。榮一は男だ。明治の俠客主義者だ。凡ての權威を退けて平和と平等を來らすべき責任を帶びて居る者だ。永遠の平和と平等の爲めには、火と劍とを辭して はならぬ。父を子に背かせ、婿を嫁に、嫁を姑に』、と叫んだキリストの熱を持つて居るのだ。

慣習の家長制度! 父とは何だ? アポクリフにはキリストが『爾肉にあるものを父と呼ぶ勿れ、父は一人なり、即ち天に在す神はそれなり。』と云つた事があるが、之だ。父とは何だ? 權威と

惡魔事を考へながら土手へ上つた。五六間もあらうと思ふ高い堤。此堤は自分の切れて新たに造つたものである。土臺の青石に金色の四角な一分か二分かの長方形の小さい時に洪水で居るのを辰や、初ちやん、市ちやんと一緒に取りに來た事があつた。

「坊々やめよう——」お母に叱られたけん」と云つて来た。それで芝居はお仕舞になつて子様に可愛がられたり賞められたりしたに、思つて居た芝居が出来ず、中途で止めさが迎つたのでと、臆病な時に起る様な動悸の打ちかたをさせて家へ帰つて行つた。そして鶴子様に買つた厚紙と見ると紅摩の風景寫眞であつた。然し此芝居をしてから移転の為に忙かつたので、その十鶴の美しい時の美しい様に一日中止められたのも、村で鶴子様は、坊々なぶ、半分かあまり高かつた寫めにく直ぐ見ろ、恥しくなつた。その翌年の四月に門から、その後は勿論互に音も沙汰もする事が出来無かつた——なと考へろと過ぎた人が鶴子様とすると又た何だか一層妙な懐き方へ、北海んで居ろと色々な温泉の思て人出が押大かな砂糖を盗んだ事や、鍋釜を黒くして一変に逃した事、黄粉が好きでマッチの箱に詰めて臨れて水飴つた事、買ひ食ひすると叱られるのだか、五厘や一銭を溢み出しては村はづれの駄菓子屋で、ビスケットの形に砂糖を固めた物を善く買つた事、西らのお婆様について大

あるの處が案外にも広が見えた。自分は鶴子様がそう云ふたので恥しくなつて来たが、後の方で見て居る鶴子さんが川上のさかえさんに、

「美しいな」と、

囁いて居るのが聞えた。自分は鶴子様がそう云ふたので恥しくなつて来たが、後の方で見て居る鶴子さんが川上のさかえさんに、

無かつた。然し歌一さんの女が僕を紳つて、蹴つたり蹈んだりして奥へ引ずつて行つた事を覚えて居るの。そして二個度の幕の間に自分が主た加藤清正になうと思ふておしろいを水で洗ひ落して居ると、

「綺麗であつたソー、今の女の人は」と賞めて急いで自分の懐へ突入れて奥へ行つた。何か知らぬが、薄い四角い厚紙を、そして「誰れにもいふたらいきまへんでよ。」と云ひ捨てゝ表へ出た。

は家一、衣裳を取りに歌一さんの處であつたから外に出た鶴子さんは川上の榮さんに、

「新兒の坊々が今加藤清正になつて居つたでは、おまはんも見て来なはれ」と叫んで居る。それでドヤ〳〵と急に納屋は賑やかになつて女の子達が六七人這入つて来た。その中に衣裳を取りに歌一さんは衣物も何も持たずに、

「ヨオイ、ヨオイ、ヨイトコサ、明けりや、お寺の、鐘が――鳴る……』と初めるのだつた。自分も益さんのお父さんに太閤記十段目を練習して一度宛に上つた事があつたが、三味線にも合はず、聲も充分出ず、中途で止めて貰つた事があつた。

種々のことを思ひ出すと、人間の過去といふ物は恥しいものであると涙へられる。

北村へ這入つて車に乘つた。榮一が徳島本町の父の宅へ這入つたのが五時過ぎであつた。市中は何となしに騒々しく居た。

九

榮一が小學校の教師となつてから、早や四日たつ、父は市の要務を帶びて、上京して留守であるから、夕飯もいつもより早く濟して散歩に出た。東京から歸つて、丁度一週間目、その日は土曜日であつた。町には學生がぼつぼつ、散歩に出て居た。佐古の方まで散歩して、日も全く暮れたから、東新町をとぼとぼ歸つて來てゐた。一丁目の角へ來ると、大勢の人が軒に立つて、讃美歌の聲が中から聞

谷の大師さんで一晩お籠りした事。――あれが夏の夜で蚊に食はれて一睡も寝られなの終日の二十一日には吃度二銭か三銭かの小遣銭を貰つて、初ちやんや市ちやんや西さんと連れ立つてお参りに行つた事、その時分には胴もしつも持つて居た事、それからりの松明行列――「御盛さんのお通りぢや」と大騒山路の大谷では毎年するのを裏座敷の格子越に見た事、また之れも夏の終り秋の初め、稲田に涼しい風が吹くと、折々高く低く山路遥に獅子の太鼓を練り廻して居るのが寝耳に響いて、小太鼓は皷膜を破る様に鋭く大太鼓は耳たぶを引張る様に濁つて、淋しく物哀れに然し何か透き通つた様に聞えて、継母と姉と自分の三人の家内が、今にも何かに襲はれて消えて終ふので二三の小さい胸で心楽じした事などを思ひ出す。それから思ひ出すのは盆の地蔵踊のこと。

川の佐へさん――村の世話役で面長のいつも笑つて居る人――の庭で一晩中脚(涼み台)を五六つも積み重ねて、その上に竹の四本柱を建て、幕を張り、音頭を出して、その調子で皆が、手足大抵、踊るものは箕笠を着て居たが、変ちきりんな態をして居たものもあつた。音頭は太閤記十段目とか二嫩軍記三段目とかさはりを善く遣つて、三味線の益さんが傍の上へ昇つて、三味線は四ちの益さんがお極りで、

い曲線だ。頬に赤みがあつて淡泊とした女である。

榮一は『鶴子様だ……』と胸の中で云つて、珍らし相に見て居る二三十人の間に這入つて窺つて居た。歌が濟んで、ベンチの小供は騒ぎ初めた。十二三の男の兒が隊長となつて、部下の五六人の家來が皆從ふ。組ひろい狹いを爭つて居る。

の中に黄い聲で——

『われ等のいくさは肉ならず……』と歌ふ者があると思ふと皆に傳染して大きな聲で歌ひ初める。終りは唯『ウエヘエイ』と叫ぶ門口に立つて居るものも、ベンチに掛けて居るものも皆笑ふ。牧師とも見える洋服姿の五十恰好の男、髪を一寸分けて、小形の新約聖書を開いて居る。小供は矢張り大騒ぎをして居る。

て居る人がテーブルの前に立つて、八字髭を生やした口の幅の廣い、唇の右が少し下へ捻れ

牧師は『今からお話を初めますから、小供さん皆お靜になさい』と丁寧に注意した。すると隊長は口の右を右手で捻らして左の人指で八字髭の形を拵らへて出て行つた。部下も皆同じ眞似をして出て行く。之は牧師の顔の形を眞似して居るのだつた。外へ出て、

『口いがみ、〳〵』と叫んで居る。

女の子のひとりが榮一の居るのを見付けて、

える。

紫一も立つて窺いて見ると。間口四間に奥行五間許りの土間にベンチを十脚許り遣いてある。之れに小供が一ぱい腰を掛けて居る。正面の右二間は板壁になつて、その前に粗末な梯子で二階へ登る様になつて居る。梯子の横に、讃美歌を大きな字で書いた紙が懸つて、左の二間は奥まつて疊を敷いてある。此座敷の前に三尺許りの縁がある。之れにも女の子が、せり合つて腰を掛けて居る。座敷の眞中に白いテーブルクロースの掛つた机、其右手には大きなオルガン、此オルガンの上に錆たブリキの笠のついたランプが吊つて有つて、横の黄いな壁には、古びたユダヤの地圖が懸つて居る、座敷の裏側に入つて居る障子は紙が茶色で處々破れて居る。左右の壁の眞中に煤けた細い柱が現れて居る。右側の柱に半紙が四尺許りに繼いで小ましやくれた字で、聖書研究會、毎火曜日午後七時より徳島本町マツケンジー氏方、說教毎日晩午前十時及午後七時より通町教會堂にて、と書いてある。

右側の最後のベンチの後には、隅に倚つて燒芋屋の荷車が遣いてある。

通りかゝる人は、一度は必ず說教場の內を窺くつて行く。窺くと第一に目に付くのは、小供に讃美歌を教へて居る廿前後か十八九と云ふ、それは綺麗な婦人である。髮をマガレットに結んで、紫の袴を穿いて居る。眼は大きく黒くて、二重瞼の二重瞼の福々しい女。その眉の形と云へば全く話に出來ぬ程美し

し酒を飲んで居るらしい顔を赤くして居睡つて居る。そのすぐ後に此講義所の家主で、お隣りの吉田洋服店の主人が、寝て居る三つ許りの女の子を抱いて、聞いて居る振をして掛けて居る。この壁によつて、筒袖を着た白の兵古帯をしめた二十五六の青年が腰を下して居る。此講義所の番人、如何にも敬虔らしく天からインスピレーションでも受けて居るかの様に、眼を閉ぢては祈り、眼を開いては牧師の口に注意して居る。

ベンチ、二つ置いて洋服屋の主人の側に掛けて居るのが年頃二十一二の青年、これまた筒袖で黒の兵古帯、小薩張りとして居るが下駄を見ると廣い薄ぺらな筒の皮の様な物に、棕櫚の緒をたてゝ穿いて居る。労働者であるらしい。もひとりは新見栄一で、講義所の番人の後のベンチに紺の羽織を着て、何だか氣の落ち付かぬ様な態度で掛けて居る。この外に机の陰には鶴子さんが聞いてゐた。

牧師は頗る熱心だつた。或時は沈鬱な労働者の青年に、其次の瞬間には栄一に話して居る様に視線を轉じて説教する。

又二三人集つた。

裏に車夫が立つてゐるので、

説教者は熱心にイエスとニコデモの話しを語り終つた。その眼は焔に燃えて居た。車夫が軈り音高く歩ると共に鶴子は一寸と頭を上げて往來を見た。

『今度來た先生！』と囁いた。すると少しの間に皆、柔和を裝ひ初めた、然しこの愼みも暫くの間で一人去り二人去つて子供の大抵は逃げ去つて終つた。牧師は默禱を終つて『讃美歌を一つ唱ひます』と、云ひ乍ら、梯子の横に懸つて居る紙を一枚一枚裏返して、

エスきみエスきみ　みすくひに
おれをもらさで　いれたまへ
主よ　主よ　きよたまへ
くだけしこころの　ねぎごとを

と、初めに書いてある讃美歌を撰んで美しい婦人に『之れを』と云つて示す。美しい婦人はオルガンの前に腰を掛けて奏き乍ら唱ひ初めた。その歌が新兒には身に浸みこす様によく感ぜられた。

歌が終つて、美しい婦人はテーブルの影に坐つて俛いて居る。牧師は說教を初めた。說教が大分進行すると今迄講壇所の前に黒く集つて居た者が、一人去り二人去つて僅かベンチに腰の脊の小さい丸髷に結つた女が一番前に。此女は少かけて居るものは五人になつて終つた。四十許りの

解決して居るのだ。人間なら人間で済んだのだ。ふこ居る。飛び降りて天の使が捧へたとアポクリファが書いても、人間は冷血だと云つて、笑ふてしまふだらうが、キリストが、どうせ十字架で死ぬのなら、薄命なエユオリオンの様に、人間は死ぬなら死ぬと示して置けば善いのだ。彼は世界を迷はす。人間は疲れる。熱がない哲学者が背腹人のだ。寝人らうとするの哲学者の口を裂いて、その火、を呼ぶ必要はあるまいか？……永遠に燃えて居る。鐵の火箸を其へて置く焼け火箸を、悪ろしい所に滿つと鹽辛い血の味がする。ひり〳〵と顎の痛が口に差し付けるのだ……焼けて血が口

痛る。そして延髄の處が重くなる。空想の哲學を産み出した神經中樞が破壊されると人間にも全く飽いた。唯人生を痛罵したい……が疲れた。東京から歸つて來て人間にも全く飽いた。一禮して、

新聞が終つてアーメンに加はつた者は番人と榮一の處へ遣つて來た。一禮して、

『失禮ですが貴君は今迄にキリストをお聞きになりましたか？』

『はア』と輕く答へて、一寸鶴子の方を見て俯向いて指をもじ〳〵さす。

説教は長いもので一時間位かゝつた。説教がすむと美しい婦人はまたオルガンの
鞴の酒呑先生が目を醒した。そしてついと立つて踊つて行く。最後の讃美歌は、

みめぐみあふれ　インマヌエルの
ちしほのいづみに　つみをあらへ
ぶどにかのうへの　ぬすびとすら
このいづみをみて　よろこびけり

と、云ふのであつた。初見は聞いて居ると自分も全く耶蘇のお弟子になつてしまつたかと思ふ様な心持がした。鶴子様の高い聲が胸を貫く様に鋭い。栄一は目を閉ぢて鶴子様の唱ふのを聴いて居た。歌が終つて牧師は祈禱を初めた。然し栄一は目を閉ぢて居る間に、色々な事を考へて居た。

……キリストが都の大きな塔の眞上に誘はれて、『爾此處から飛んでみい』と云はれて、よう飛ばなかつたのは卑怯だ、もし飛び降りる勇氣があれば、僕は彼の前に跪くのだが……人生には塔の上から飛び降りて居た時には、人生問題は凡て

『いゝえ。』と鶴子は答へて、跛の番人が表の戸を苦しそうにして閉めて居るのに氣が付いて助けに行つた。

榮一は『徳島木町の何處あたりでいらしやいますか?』と問ふ。

『徳島木町で御座ります』と答へたが、

『新兒で御座ります。』と答へたが、橋本は市長の息子だとは思はぬらしい。

『何處か洗濯屋のお近くで御座りますか?』と尋ねて居る。

『洗濯屋の隣りで御座ります。』

『それじや市長さんの――』

『ハイ。』

戸を閉めて戸の外に立つて居た鶴子は新兒と聞き、市長と聞いたから、内を覗いて居る。そして驚いた聲をして、

『私……いや、……眞に忘れてしまつて居た。どうも失禮しました。』と叫んで這入つて來る。鶴子に取つては若い美しい靑年に禮をするのは何だか罪深い樣に感ぜぬでは無かつたが、

『新兒さんでいらしやいますか、大きくお成りなしたから見違へましたよ。御免ください。』と笑ひ乍

『何處でお聞きなさいました？』

『一週間前まで、東京に居りましたので』

『學校に居らしやいましたか？』

『ハイ。』

『何處の學校に？』

『明治學院に。』

『ア、そうですか、明治學院に居らつしやつたんですか。それじやあなたは信者でいらつしやいますか？』

鶴子が進んで來る。

『いや、まだ信者じや無いのですが……』

『チット私の内へも遊びにいらしやい。通町の教會の裏に居りますから。』

『失禮ですがお宅は？』と締けて問ふ。鶴子は牧師の側まで進んで、

『橋本さん、失禮致します。おやすみ』と丁寧にお辭儀をして歸らうとする。

『田宮さん、一緒に歸りましよう。少しお待ちください。お急ぎですか？』

門の戸が閉ぢて居た。もう九時半であつた。

新見家は朝が早いので宵寝だが、今夜は主人が留守だから特別に早く寝た。小僧の吉三郎を煩し

て居たが、室内の空氣が重々しくつて、壁の臭ひがするので胸が悪くなる。お梅がこちらに、益川かむからに寝て居る。九時半は外出時間を半時間過ぎて居る。

別に叱りもせぬ様だ。栄一は徒子に會つて少し刺激せられたから今から勉強せうと決心し

た。

『ランプ！』

押入の戸を開けてランプを取り出さねばならぬ。あの大きな押入の戸を開けると激しい音がする。お梅の安眠を破る！　九時半！　之れから勉強、必然明日の朝は叱られるにきまつて居る。』と思ひながら恐る恐る玄關の押入からランプを取り出した。

『マッチ！』

臺所の隅。足音立てずに。』とマッチを探したが無い。奥の行燈の臺のマッチを取つて来た。

二階へ登らうとすると、段に紙が敷かれてある。吝なことをしたなと獨言云ひながら、出來るだ

ら禮をするの。

『あ、鶴子様。』と榮一も腰を上げて挨拶した。

『暫く、御機嫌はおよろしう御座りますか？』

『あなたもね！』

橋本牧師も笑ひ乍ら、

『田宮さんは、新兒さんを御存知ですか？』

『はア、同じ村の前と裏で、同じ學校友達ですの……新兒様は大きくおなりなさいましたね。』と振りの自

らくお目に懸らぬから全く忘れて居りましたわ。新兒さんは御親類にも當る

山な、愛嬌のある話し振りをする。

『長くお會にならなかつたのですか？』

『そうですね、一寸七年で御座りませう。ね、新兒さん？』

『さうですね、七年にもなりませうね。』

三人は揃つて新田橋を越えて、通町を歸つて來た。二町目から鶴子と榮一と二人で話し乍ら歸つた。

夜の空氣が冷かつた。

ると、二階立の家にはまだ戸が開いて居てランプの光が輝いて居る。黒い影が障子に寫つたり消えたりして居る。

『アレは女の影だ。障子一枚取るとマガレットの鶴子樣が現れるのだ。女は可愛い、あすこに飛んで行つて見たい。……然し勉強しやう。』——と榮一は戸をピッシャリと閉めて机の前に坐つた。ランプの油は少ないし、ホヤは掃除して吳れて無い。吉三郎まで自分を輕蔑して居ると思ふと腹が立つ。硯箱も變へて終つてゐる。散歩に出て居る間にと思ふと散歩を悲しく思ひ、三時間のうちに、室の有樣が變つたのだと思ふと時間が憎い。

『然し不平が人間の職務では無い。默想錄に何か書いて見よう、今夜は思想の統一は無いが。此問題はなるべく早く完全した者を得なければならぬから……下から聲がしたのじや無いか？　お梅の野郎が二階へ上つて來る樣な氣がするが、僕の錯覺か、まア默つて待て。——なに我慢するさ——何か書いて見よう。』

榮一は筆を取つて、三百枚許りの原稿紙を綴つた帖を開いて『唯物論の實在觀』（五月十二日）と書いた。

『墨が薄い。字が泌む。こんなげすつた墨！　大きくても質が惡ければ糞にも立たんじや無いか、小

け物音立てずに上り初めたが、家が新しいからギユウ〳〵と木が呻る。

『なに勉強しに上るのだから、呻つても善いさ。また別に足元に注意する必要も無い。』

上つたが、呻りは一層家の隅々まで響いて大地が動が起る様だ。

『こら少し悪かつた。』と思つたが猶上ると猶響く、『或はお梅が叱るかも知れぬ』と耳底を澄まして下から叱ろ様にもあるかと思つて居ると、妙なものだ。時過ず、下からお梅の鋭い聲！

『だれで、そんなにドン〳〵二階へ上るのは、人が寢て居るのに、』

悪い事をした、然し生意氣だ、『誰で？』僕と解つて居て、とオ、へたが、

『ハイ私です。』と温和しく返事をする。

『兄さんで？　今から御勉強？』、

『ハイ、』と答へて置いて、トン〳〵と昇りつめてお梅の襖を開いた。

書齋には紙の上敷が述べてある。榮一は少なからず懲いた。

お梅は僕が訪ひ感も何も無いと思つて居るのだなっ。まアよし……ア。今夜も戸を閉てるのを忘れて居た。と戸を一枚開いて乾の方を見た。また明日の朝は小言を聞くのだ。鶴子様はまだ勉強するのか知ら？

トの所謂デングン、アン、デツヒを其へたる、絶對の實在なりと假定するも可いけれども、絶對實在としてこれを認識することは最近の心理學が許さざる處である。

『……』

カントの現象論とハミルドンの相對論を思ふと頸筋に冷水を流される樣に感じる、……

『……』

これ丈の事が、去年の二月の二十一日、祖國を離れるべき日だ。僕が社會主義の事を一寸と言ふと安部磯雄氏の『ソサール』を讀んだ事があると云つて居た。明治學院に居たとか、『それでもあなたも、信者で無いと云つたと云ふのは不思議な事ですね。』と云はれては、僕の胸が少なからず騷いだ時には少し失望して居た樣だが、『瑞西』と平民社の『ソサール』を讀んだ事がある! 彼は世界で最も貴い愛のシンボルだ。然し認識論が云ふことを聞かぬ。認識は神を知らぬと云ふ、……此唯物論の實在觀でも解決した上で、唯心的神が其の力を以つて世界を創造したと云ふならば、キリストを信ずる。……チエ、また空想に耽つて居た。

『……』

……數に暮人が實在を知覺するに當つて、その知覺する者はエネルギーなる事は明白な事實である。或は電子の形態を論ずるも、皆之れ主觀の空想或は假定であつて、客觀の事實としては形態を有するイオンを假定するも可いけれども、絶對實在としてこれを認識することは最近の心理學が許さざる處である。

きくても古梅園なら尚でも善い。中得だ……まア幸抱するさ。然し何から何まで、よく厚徧しやがるなア。きやつ！

「生意氣だ。」など考へながら筆を下す。

「電氣物質説は非常なる速力を以て、その研究の歩を進めた。最近の或新聞紙には電子の形態を論じおるを見たが、或は此電子の如き将来に於て、或は此電子より人間の自覚を説明するの時期がくるかも知れ無い。」

『ウム、下から階はしないか？　お梅が二階へ上って来る様に思ふが、何にかまうものか。我輩は勉強するのさ。我輩は思想に超絶して勉強するのさ。何もあるものか。我輩の能力の凡てを発揮さすさ。Light は For か Lad とか云ふ意味は無い。真理を求むる哲人は透明だ。自らには。色も香も涙も、輪廓も景も無い。唯透明なガラスだ。凡俗の埃や塵には無関係だ。……然し鶴子は美しい、また可愛相だ。兄さんが今度満鮮の郵便局へ転勤するって？　別れるのが辛いだらうね。猶りの兄様が気候の不順な満鮮へ行く。僕は同情する。鶴子様は高等女学校が出来るとすぐ二年へ入学したつて云つたね。今は補修科を修めて居る。……それからと――』

然し其の時期になつても自覚の中に含まれたる目的論的見解が盲目的機械論に征服せられる事はあり得ない。相当にして、不可思議な時間空間の中に表顕したるイオンが、その中に無限の実在即カン

たい！　何だか戀したたで子が産みたい様な氣がする。生れて初めて悲慘事を考へるのだ。藝術品の中で子を産む程立派な作物があらうか？　人間の子は肉付きがよくつて跳ね廻る！　戀！　生殖！　伊賀駒吉郎さんの様に六百頁も七百頁も女性觀を書く必要は無い。戀！　僕は女と居たい！　凡ての哲學を解決するのだ。耳の底に殘るのは今別れる時の鶴子の最後の言葉！

「おやすみ！」

僕は身體がぐにやぐにやになつて終つた。下女と、宿屋の給仕と、ミルクホールの姉さんにしか挨拶して來た時の胸の中。僕は急に飛び付いて抱きしめて城山の森の中へでも連れて行きたかつた——あまり御子さんが優しいから——少なくも、別れると云ふ聲がして恐る恐る手が出せ無かつた。然し、肉を離れた戀！　と云ふ聲がして恐る恐る手が出せ無かつた。僕は彼女の手を握りたい。然し肉慾を超絶して？……遂に僕は惱める者だ。悲那時に鶴子様の顏を一目見れば、アヽ、もう寢て夢に鶴子様を忍ぼう。あゝ睡い！」と榮一は机の下に足を入れて仰向けになつた。

「……」と身體を縮めて兩手で顏を蔽ふた。その時

急に、

そのフオースなる物を盲目的とすれば、吾人の意識はその盲目的フオースの進化したものとせねばならぬ。然し認識は相對で、機械論的見解を認識するには目的論を離れて知ることも出來ない。

……」

面倒臭くなつて來た。我輩の此様な論法では唯心論になるかも知れぬ、認識論に這入つては面倒だ。もう筆が進まぬ。頭に哲學を默想する様な餘裕は無い。鶴子が凡て占領して終つて居る。……然し哲學者が此様な事では困るもし僕が日本の哲學界に貢獻しようと云ふのなら、も少し虚心平氣にならねば駄目だ。此世紀はカール、マルクスが云つた様に哲人が出で〻社會を根本から解決せねばならぬ時じや。世界は豫言者の代りに眞の哲學系統を求めて居る。……駄目だ。戀に哲學を棄てはれては！

世界の最大哲學者は皆慾主義の無妻主義者だ。キリストや釋迦は云ふに及ばず、エピクテタスもアウガスチンも、スピノザも、ライブニツツも、カントも、ヒユームも、ロツクも、ミル、ショウペンハウエルも。それに佛教も基督教の多くの聖徒哲學者——僕だけは情欲から離れて理性の鍵をしかと握れるものだ？　最も根本的のものが哲學ならば、肉は哲學の最も聖なるものだ。……僕は既に鶴子に囚はれた。

女性觀を多く說く必要は無い。男も女の子だ。男がまた女を產むのだ。子が產みたい！　子が產み

『もう十一時だつせ。』榮一は立うともしない。
降りようとしたが、また歸つて來て、
『兄さん、此居間の上敷はない。疊が新しいのですから、机を置いたり、本箱を遣くと、上に形が付いて汚れるからならない。晩方に一寸吉三郎と倉から出して敷いたのだすワ居るから解らんが、もしや、上敷の事で怒つて居る様を事なら、そんな理由じやけん怒らん様にしてつかはれよ。』と云つて、辯解して居る。
榮一は一寸顏をお梅に向けて、足先から頭まで、どうぞ早く降りてつかはれよ。』とまた引き返して、窓の障子を開いて、戸が閉ぢてあるかを驗べる。
『吉三郎が閉てたのじや。若旦那は宵に閉てゝ無かつたが――』
と、云つて榮一の横顏を凝視て居る。
お梅は、
『もうお寢なはれよ。』と下へ降りて行かうとしたが、襖の所まで來ると榮一が笑つて居る。それで自分を笑はれたと思つたのか、

『兄様もう、おやすみ』と、ふ聲が入口の襖の方にして、後を見た。然しお梅は居ら無かつた。自分の神經であつた。それでまた讀書でもしようかと思つたが、頭が重くて讀書する勇氣も出ぬ。また、

『ア、鶴子様が戀しい。怪那に戀しいのなら別れ無かつたら善かつたのに。』と仰向けになつた。怪麼に仰向けに臥て居る處をお梅に見付けられたらと折々入口を見たがお梅も上つて來ぬ樣だそして晉くの間鶴子の容貌より振を想像して居ると、

『おやすみ、兄さん、浦團の中へ這入つて——』と云ふ聲が入口の方にした。入口を見ると今度は眞にお梅が掻巻きのまゝ立つて居る。あはてゝ起き上つて、机に倚と、

『兄さん、そんなにして寢て居つて、足で机の上のランプでも引繰り返して火事でも放つた事なら大變でよ、お父樣のお留守に危い。ほだけん、夜は早く寢て。朝早くお起なはれと云ふのに、兄樣もう下へ降りて、おやすみ！』

『火事をやる？　大きな事を云ふ』と考へたが、默つて居た。

『兄樣。もう、おやすみ。』榮一は顏さへ見せぬ。

る。帯は走つた爲めか解けて居る。

後から追つ馳けて來る兒の風體はちやんとしたから、止めに行かうと思つて居ると、新見の屋敷の隅あたりまで二人が馳けて來て、後の子は突然前の貧乏人の子をつき飛ばした。

貧乏人の子は手に持つて居た包みを向ふに飛ばしてドシンとうつ伏に倒れた。倒れた時も起き上る時も別に泣く樣にも見えなかつたが、手拭の中の米が散らばつて居るのを見て、大きな聲を上げて泣いた。つき飛ばした兒は得意になつて『ウエーイ』と町の遙か向ふに集つて居る小供の群に凱歌をあげて飛んで歸つて小供に近寄つた。可愛相に、その子は、唯、町を向ふへ走る腕白小僧の影を見送つて、うらめしそうに泣いて居る。

新見は一寸微笑んで小供に近寄つた。可愛相に、その子は、唯、町を向ふへ走る腕白小僧の影を見守つて、うらめしそうに泣いて居る。

『可愛から、泣いちやいけないよ。可愛いね。』と榮一は繰返して小供の衣を振るつてやつた。小供はその影が大勢の中へ消えるや否や、そこに散らばつた米も砂も小石も共に手拭を拾げて拾ひ入れる。

そして口の中で、

『わし內へ往んだらお父さんに怒られるわ、アーー』と云つて泣く。榮一は同情して小供を助けて

『いやな笑ひ方するの……』と云ふた。そして、何か復讐したいと思つたのであらう、暫く考へて居て、

『兄様、まだお降りなはらんので？　私がランプを持つて降りて消しますから、あんたは先へお降りなして、』と云つて見たが、返事が無い。

『あまり起きて居つたから火の用心が悪いけん、もうランプを消しますでよ。』と今度は脅迫的に出た。

榮一は決して反抗はしなかつた。飛び立つて下へ降りて仲の間で寢た。床の中で泣いた。

十一

それから三日立つて火曜日の夕方であつた。新見はぼんやり嚴格しい門の前に立つて、通りの人を見るでもなく、また別に考へるでも無く、意味なしに時を過して居たが、不圖氣がついたのは福島橋の方から走つてくる二人の小供である。

先の子は淺黄の様に洗ひ切つた紺の筒袖の所々破れたものを着て、舟の様に大きい草履を穿いて居る。年は十か十一かで惡る相な兒である。手には模様入りの古い手拭に何か穀物を包んで持つて居

泣かずに居るんですよ。』

此度はもう榮一に反對しなかつた。然し猶泣いて居る。小供と歩調を合して歩みながら榮一は尋ねた。

『何故あの子があの様に突き飛ばしたの？……あの子、何處の子？』

『岩城ツて云う宅の子。』

『どうしたの？』子供は云はふとしてまた聲を出して泣き初めた。

『ね。可愛いから泣いちやいかんよ……どうしたの？』

『……あの……わしが、福島橋のねきの米屋で米を買ひよつたら、あの子が皆と一緒に居つて、こいつは此間船場で……遍路しよつた奴じやつて云つて頭はつたけん、急いで逃げて出て來よつたら皆が泣かしてやれと云つて後を追かけて來たん……』

『そう。惡い子だね』と榮一は言葉を返したものゝ此子供の大膽な告白と資本家の子弟の殘酷を思つて涙ぐんだ。共後二人の間に言葉は無かつた。日も全く暮れて、城山の烏の啼く聲も聞えない。子供に導かれて福島橋を渡つて、右に折れて半町と行かぬ中に長借屋の下駄屋と宇屋の間に奥まつた路次があつた。路次を處々折れてついて行くと先づ澤庵の腐敗した堪え切れぬ臭氣に貧民窟の影を覗ひ得

米を拾ひ集めながら、小供に尋ねた。

『あなたの家は何処に在つて？』

之れを二三度問ふたが小供は中々云はぬ。四五度聞いて漸く。

『むこうの方』と頻で方角を指すばかりで確と所を云ふことはない。然し口の中では続けて。

『内へ往んだらお父さんに怒られる』と云つて泣きじやくりをして居る。

『それじや、私が送つて行つて、上げましうか？』

『うゝうむ』と肯いた小聲でひとり言を云ふ。

『なぜ？』

『なんでも――』と急いで散た米を掻き集める。そして新兒を排斥する様な氣味を見せて、飛び立つて走り出した。新兒は小供に手を掛けて。

『あなた、私が行つて言ひ解けをしてあげよう。ね。』と親切に云ふたが、小供は唯默つて走る。走る小供にまた追ひついて。

『米をあんなにしたからお父さんに叱られるだらう。僕が君の宅へ行つてお父様に謝つて上げよう。

見て氣晴しがしたい様な氣がして這入れぬ、貧民窟と云ふのは悲慘な所か！　壯年者が病んで臥て居ると云ふのならまだ希望と云ふものがあるが老衰と來ては話にならぬ。身が縮まる。』

『有難とう』と新見は遠慮して、後ろをも一度見たいと思つたが、『あの薄い蒲團の中のあの老人』を眼の前に畫いて見ると、また見るのがおそろしい。

女は榮一に愛相をいつて道いて、土間から三尺許り高い床にうつ伏にもたれて包みを擁いたまゝ泣いて居る息子に、

『おまへ、お米を出さんかい。何を愚圖々々して居るので？　もう泣くのを止めて寵の下でも造ろは んかい。』と云つて居る。危機が迫つたと新見は内へ這入つて、

『おばさん、實はね、私はお子供さんの代りに云ひ譯けを致そうと思つて參つたのでね。……』と云ひ終らぬ中に、

『え、うちの子供がまた何か惡い事でも爲ましたので御座りますか知らん？　うちの子は仕方の無い惡い子で御座りますのでない。惡いことでも致しましたら御免なしてよ。』と早口に云つて、榮一には別に頓着しない様な、また尊敬も拂は無い様子である。

『早く寵の下でも見んかい。』と一つ頭を撲つて米の包みを取り上げる。之を見て榮一は、

たのである。

實に想像より豫想外な所に舞ひ込んだ。子供は先に走つて影は消えた。想像しなかつた天地。家根は低く家は小切つて普通の家の玄關の土間だけも無い。人間はこれだけまでも家を區切る必要があるかと思つた、多くは戸が閉ぢて光も無かつたが、光の付いて居る所も豆ランプが精々で、大抵はブリキ製の糸心の燃え出し、ずつと榮一は兩側を見て通つたが、左側で光の付いて居る三軒目に、女の疳走つた聲で、

『馬鹿野郎が、福島橋の所まで一寸と使ひに遣つて今迄かゝるてなんなら……』と叫ぶのが聞える。

次いで子供が打たれると子供の泣き叫ぶ聲が起る。急に新見は此家の前に現れた。

『御免なさい。』三十五六の女が竈の前に踞んで火箸を持つて火を焚いて居る。榮一は一寸と後ろを顧ると向側は煙つて居る丸つか十かの女の子が竈の前に坐つて、年寄の身體の不自由な人であらう通りに頭を向けて臥て居る。『此煙と此老妻！』と榮一は臆病な心が起つた。『あんな老人を僕が世話するとは、云ふ日になればもう御免だね。あれでも生きて居りたいかな。』と眉の間に皺をよせやうとして新に『さ、何卒内へおはいりなして、ほんとに御隠遁敗う御座りますが』と鋭い目に愛相をしやうとして新見を見たつ。引詰の髪にしけの一面にして居るのは糸屋か機屋に出て居るからであらう。這入れと云はれても、四尺許りの後ろにあの老人が寝て居ると思ふと、這入らずに直ぐ歸つて行つて美人の顔でも

のを見詰めて、また榮一の顔を見返つて、

『ハイ、いや別にこれと云ふ病氣では無いので御座りますが三月まで鐵道の方に出て居りましたのですが三月の初めに鴨島で足を汽車に轢かれまして、エヘヘ……一生立ち上る見込が無くなりまして、それからぶら〳〵して居るので御座ります……どうぞおかけなして。』

女が竈の前へ蹲んだので父親の顔が見え無くなつた。子供は矢張りうつ向になつて顔を見せ無い。

『そうで御座りますか！　そらどうも誠にお氣の毒で御座ります。』女はふりむいて榮一の顔を見て、

『ほんまに、お客樣、もうつくづく、生きて居るのがいやになりましたわ。宿があんなに怪俄をしても鐵道の方からは二十圓の御見舞金で見放されますしない。それかと云つて便つて行く所は御座いませず。私は朝早うから晩の遲うまで機屋の管卷きを致しまして今日の細い烟を立てゝ居りますが女一匹ではどんな事が御座りましても二人の男を食はす事は出來まへんでなで。今夜はあれが久し振りにお米の御飯が吹べたいと申しますので五等米を五合許り買ひに遣りますと、此通りでないと』と恨めし相な口吻が如何にも哀れである。

『それはね、おばさん、私が見て居りますと、お内のお子さんが怜悧にして、なか〳〵氣轉が利きますから屹度歸つて來るのを何處の子か知りませんが後からつき飛ばしてね。このお子さんが倒れて通りに米をこぼしなしたのですよ。

『その包を私に貸してくださりませんか、その米代は別に差上げますから』と申出た。然し女は、

『どう致しましたんぞいない？』と云ひ乍ら竈の火の明かりで米を驗べて居る。石や砂の混つて居ない様だ。が、米を棚に置いてつか〳〵と子供の側へ來てまた頭を一つ揺つた。小供は泣き叫んだ。女は、

『早くあしこを見んかい。』と大きな聲で叱り付けて、『お父様。米が砂や石と一緒に混ぜつて今夜は食べられでよ』と隅へ向いて云つて居る。すると隅から、

『お客様。どうぞ、ちつとおかけなして。誠に鬱陶敷う御座いますが』と一寸と蒲團の中から首つき出して新兒に禮をする。

新兒は吃驚した。此家は三疊敷一間に、一坪の土間と云ふ作りだから二人の外に人が居れば必ず目につく筈だ。實云へば這入つて來た時子供があまりお父様お父様と云つたに、男の親の様な者も見えぬ。唯隅に翻起きたまゝ巻いて捨てゝあるのだなと思ふた蒲團が置いてあるだけだと思つた。が、聲があつて初めて氣が付いた。此蒲團が父親なのだ。髪は長く生へ延びて青い顔色、唇の艶の無いのが、入口の柱に片手をかけて左の足駄の爪先を立てながら、

『ハ、有難たう御座ります。御病氣でいらしやいますか？』と優しく尋ねた。父親は竈の下の燃ゆる

白が讀めた。がこの人々に何をして遣るかと云ふ方法を知ら無かつた。

『三年生までいらしやつたのですか？』

『續けて行つて居りましたら今は四年生で御座ります。四年生に及第つてすぐ止めましたので。』

『年は子守に遣つて御座りましたから遲れましたんで。』

紫一の心は二つに分裂した。一方は無理矢理に恁麼うるさい所で博愛主義などの眞似をしなくて早く逃げて歸つて、あの立派な臺の敷けて居る家の中で哲學の一頁でも讀め、君は恁麼ものに手を出して居ては遂に平凡と相去る一歩だ、と云ふ聲がすると共にまた他方では親切は生命だ、冇機體の社會で或ものが生きる爲めには或るものが犧牲にならなければならないと云ふ聲がするのである。

『失禮で御座りますが、あなたさんのお內は何處だんで？』と女は尋ねて居る。

『いや何處つて……此處からは遠くはないのですが——あのお小供さんは今何をして居らしやいますか？』

『今之れと云つて何もさして居りませんが父親の使をしたり、私の糸繰る手傳をしたりさしてをりますわない。あしこに丁稚に來て哭れんかと云ひますので、福島橋を向へ渡りますと散髪屋が御座りますで、やらうかとも思つて居りますがない。ものになるまで辛抱が出來るかとも思つて心配して居りま

お子さんが悪いのでは無いのです。……』

『そうで御座りますか――それにまあまあなた様はどちらのお方か存じませんが御親切に云ひ解けに御出でゝ下さりましたので御座りますか？　誠にお禮の申し様も御座りません。いやうちの子も悪い子で御座りますので。誠にどゝむなりまへんので御座りますから、學校へ行けと云つても行きませぬ位ねの兒で御座りますから、もう親も手にあまして居るので御座ります。』

『どうして學校がお嫌ひなのです？』

『いやなんで御座りますの――三月の節句の翌日で御座りますの。私が今日は食ふものが無いから何處へでも出て行つて、何でも貰つて來て食ふて呉れとよく聞かせて外へ出しました處がもし、晝頃になりまして泣く泣く歸つて來て頭痛がすると云つて臥込んでしまひまして、その翌日が丁度學校へ上がりますが、もう行くのはいやと申しまして參りまへんのですわ……父親が字は一字も讀めぬので今日困つて居りますので、せめては尋常だけでも卒業させてやりたいと申しますが……いやどうも貧乏する子供までが自分で食へぬ中から尋常の三年生まで出しましたので御座りますから……』

女はこゝまで語つてあまり烟るので火吹竹を取つて口を敲ふた。榮一は大抵女の云ふ事で子供の告

榮一は夢の様な思をして暗い路次を出た。城山に赤い光の天氣豫報が上つて居た。福島本町の角で小僧の吉三郎に會つて一緒に歸つた。

然し吉三郎と、何の話もしなかつた。

夕飯をすまして、約束があつたから、鶴子樣を訪れた。

十二

新兒は今自分の宅の門の前に靜に立つて居る。今夜も外出時間に遲れたのだ。先きからいくら叩いても開けて呉れないので稍退屈して居る。

一寸と通りに出てみたが、德島本町は皆よく寢て居る。それも其筈。もう十二時少し廻つて居るのだ。東京から歸つて來て今までに三度遲れた。二日前の日曜の晩、教會へ出席した爲に吉三郎が火の用心の拍子木をたゝいて屋敷をぐるりと廻つて丁度門は閉ぢると云ふ所へ歸つて來たと、先きの土曜の晩も遲れたのと、今夜とで三度である。

今夜は遲くなる理由がある。榮一は鶴子を訪れて遲くなつた。それも日曜の晩教會から歸りに、鶴子の兄樣の時行さんが歸つて來て居るから、是非とも此二三日の中に一度遊びに來て呉れと云はれた

す……どうぞ、そんなにおたちなさらずに、ちつとお掛けなして。』と云ひながら一寸盆をとり上げて麥が湧いて來たのを見に居る。そして隅の手桶を取つて門口の方に出かけた。水を汲みに行くのであらう、

新兒もおまりこんな陰氣な所に居りたく無いと思つたらしい、

『散歩にでもですか？　そらおよろしう御座りましよう……私はもう失禮致します外に用事も御座りますので——これで失禮致します。どうぞ私の歸つた後でお小供さんをお叱りにならぬ樣にお願ひ申します。』と云つた。別に來代を汲そうとも爲なかつた。

『どうも有難う御座りました。またちつとお話にお出でなしてくださりませ、お身體をお大事に。』と云つて見た。然し心の中では無意味な僞言を云ふと笑つて居た。

『さようなら、病んで居る男に向つて、

『有難う。さよたら誠に辭儀敷う御座りますが時々お話に。』

『どうも御親切に。また伺ひます』と答へた。

然し心の中で、新兒は、貧民を愛しないのではない、怎麼處ばかり見て居ると人間が縮み込んで終ふとも思つた。

冷かな空氣に觸れて門の横に蹲ばらなくちやならないのであらうか？　自分は全く父の親切を要求する權利が無いのであらうか？……けれども鶴子の可愛い今夜の應接振り？　兄様は撫養から歸つて來る許で遂に歸ら無かつたが僕は却て滿足した。　老爺さんと老婆さんが寢てから後僕が鶴子様を愛すると云ふ段になると、僕は近頃の女學生の氣質と云ふものを知つて居る。が鶴子様は福々しい亞米利加美人だが　莊重な處は除き去られて居る。　佛蘭西タイプと型を異にして居る。

然し二人が机の前で西洋歷史の話をして居る中に自然と手を握り合つたには自分ながら驚いたよ、いやうれしかつたが、自分の膝の上に泣き倒れられたには恥しくもうれしかつた。

實に鶴子の悲しむのも尤もだ。義理の老爺さんやお婆さんの下で下女働きは苦しい。尤もお父様やお母様が、あの様な最後を遂げなさらなかつたならは それに違ひはない。　尤もお父様やお母様が、何れ、お友達と身の上話が出ても震ひ上つて立ち退くのであらう。僕に一歩は指かないであらうが、何れ、お友達と身の上話が出ても震ひ上つて立ち退くのであらう。僕だつて妾の子だと云はれるのは決して善い心持はしないもの。……

からだ。

新兒は空を仰いで見たが星が眠む相に光つて居る。實は自分が眠いからである。榮一は父が九時限り門の戸は一切開かぬぞと云つた事を覺えて居る。それに今夜は父も東京から歸つて居る事だから實際遠慮して激しく叩きかぬ。亦吉三郎の安眠を破るのを非常に氣の毒に思つたから、十一時頃鶴子の宅から、歸つて來たが遠慮して叩きもせず、一時間程助任橋の方まで散歩して來たのだ。いや實は自ら進んで出かけたが、途中疲れて來たのと、明日學校に出て生徒に眠む相な顏を見せたくない、生徒に讀み方を教へなくても、書は眼を開いて居る位ねの事は教へねばならぬと思ひ付いたから、吉三郎には氣の毒ではあるが、再び戸を叩きに歸つた。眠らねばならぬと思ふと實にねむい。今までが眠むい樣に見えるる。

榮一は一度叩いてみようと門の戸近く寄つたが爺を握つて戸を叩く段になると、叩く一つひとつが吾父の胸に釘を打つ樣に感ぜられる。また隨つて父の怒が自分に報いてくると思ふから我と吾身を碎殺する樣な者であると考ると、敷石を下駄で踏むのも恐ろしくなつて郵便受の下で蹲し踞んで思ひに沈んだ。

『何故僕はいつも乍ら、眞の父を此樣に遠慮しなければならないであらうか？

何故自分は家の外の

戀と云ふものはあんなものであらうか？　然し鶴子は僕を生捕つて終つたのだ。我儘云へば僕もあの様な美しい戀人を持つとは思はなかつた……然し戀とは何だか馬鹿らしい者だね。僕は〇〇の〇〇か〇〇の快樂の爲めに長い戀と云ふのでは無いのか？　神聖と戀？　莫迦々々しい。まるで淨瑠璃の文句を夢の中で讀む様だ。つまらない！

嗚呼もう飽いた。戀に飽いた。我儘の戀はこれだけの觀念で上等だ。もう觀念もいやだ。快樂は一瞬だ。戀は苦痛だ。醒めた後が苦しい。戀はいやだ、頭痛がする、女を愛すると云ふのも要するに苦しい快樂を貪るにしか過ぎぬ。人間が子を産む爲めに妻君を？　無意味だ！　唯だ子を産む爲めに擁いて寢るのだ。安眠が出來るなら、美人などいらぬのだ。佛陀！　小一波にしか過ぎぬ。早く冷かな、沈んだ黒い海の底に落ちて行きたい。諸事涅槃！　衆生、寂滅。

乘的思想！　人間！　面倒臭い。え。フム。チエ舌を噛み切つて死んでしまひたいな。生きて居ると貴族主義の臭がする。僕は香水の匂ひは嫌ひだ、社會主義だもの、涅槃と死！　社會主義は此時だけに……一……榮一は立ち上つた。屋根の瓦も落ちよとばかりに猛烈に檜の柾板の立派な戸を突き開けて撰り上げた。

鶴子様はクリスチヤンになつて朋友が滅つたが教會の親切な奥様方のお仲間入りが出來て沢して淋しくは無いと云つて居られたが、あれは祝賀すべき事だ。僕は奥様と名が付く人は誰れでも好きだ。奥様の仲間人りをして居る鶴子はそれだからすきだ。日本では妻君は下女か子を産む機械か判然せぬが、女が多勢の子を持つて泣いて居るのは決して悩い者では無い。苦痛美と勢力美の交つた可愛い者だ。

僕は鶴子を愛したい。愛する。……然し何と無意味な事だ。僕は人生の歩趨を知ら無くて戀をして居る。無目的の人間が？　人間の歴史を進化さす爲めにそこに到達する！……チヤンス！……噫。人間にはチヤンスも運命の進化と云ふ權威も無い。……唯人間は冷い海の中に沈んで行くのだ。鶴子を戀するのも沈みの一尺にしか過ぎぬ。無目的だ。無目的でなくて、盲目的なのだ。そうかとつて無目的だから死ぬか戀するかと問はれると、勿論生きて鶴子と一日の苦痛を共にしたい。然し我執に戀人と快樂を共にするなどと云ふ事は無意味だ戀人と泣くのだ。そして最後は心中！　戀はそれで遂げる。然し一體戀とは、何だ？……

でも、今夜の様に突然戀が成立すると、セキスピヤの十二夜物語の様で何だか馬鹿々々しい。一體

あるのだ。ないくじの様な大乘は雨に解けて終ふ。と云つても、釋迦は革命の失敗者だ。つけずに彼世に火をつけた。婆羅門迷妄は語かつたが印度列國の存在を○○しなかつたのは大馬鹿だ。日本の坊主に至つては猶以つて馬鹿だ。大乘教！　法身佛！　國教！　本願寺！　馬鹿にも程がある。佛が折角人生は盲目的○○の連鎖で遂に涅槃に達すべき事を說いたに今は政府の餘唾れを拭い。けれども誰れがナザレにイエスありと知つて居る。故に我輩は之れから佛教的大革命を始めるのだ。此革命に凡俗は參與する權威が無い。然し果が結ぶ。此小さい德島の市に僕が生きて居ることを知る人は多くあるまい。』

榮一は苦しい謀反氣を起して全身を震はした。

下駄を採り上げて撲り上げた。

玄關の戸がガラ〳〵と開いた。榮一は誰れが開いて呉れるのかと待つて居たが、父が手燭を持つて戸を開いた。父は榮一が門へ這入るや、顏をつく〳〵見て居た。が、默つて怠に袴を固めて榮一の左の頬を擲つた。

榮一は涙に咽せんで自分の室に閉ぢ籠つた。

彼は机に倚りかゝつて忙然唯泣いてみた。泣くと大分氣が鎭まる。暫くしてからして居てもつまら

然し何の反應も無い。世は矢張り眠つて居るに睡から睡りに移つて居る樣だ。だから、も一つと今一層烈しくやつた。が矢張り答は無い。死者も別にの中から飛び立つて居ると犬が濕い顏して居る。向への軒から雀が一羽また一羽飛び立つて五軒口の軒に一ー」父を起さずに雀を起した。罪が深い。然し資本家が猶罪が深い。垣と云ひ門と云ふものを造らへて自由勝手に人間が出來ぬ樣に屋敷を構えて威張るから罪が深いのだ。耶蘇の坊主も隨分罪深いキリストにあるものは悅ぶべしだと吐かして、べらんめえ、現世主義の、貴族主義の、個人私有財産主義の泥棒主義のゴリ〳〵で固め上げた遺傳宗教で滿足しやがつて、神の國が來るものか……僕はもう煩悶に堪えぬ。釋迦——涅槃——熱——淚が氷る。が、死ぬには勇氣がありすぎる。王立か？　獅子吼？　さア、これから……今から、革命だ。我に自由を與へよ。然らずば死！　悶への淚が知らず、識らず流れる。人は知るまいが宇宙は我胸に革命を起して居る。ア、僕が此處に蹲つて居る間に福島濱側の貧民窟には神を呪つて居るものがあるのだ。苦しい生命。之れでも矢張り生きたいのだ。……柔順と稱せられた僕が之れから天の星を降らせ海原を旱魃にする權威があるのだ。何も遠慮して恁麼處で愚圖々々する義務も無い。善より惡が賢こい事が多い。戸を叩くべしだ。革命の鐘だ。革命も佛教的革命だ……佛教の眞髓は小乘的〇〇に

此一瞬間でもよい酒にでも醉つ拂つて此苦痛を脫れたい。熱烈に女でも摑へて死ぬ樣な一瞬！　此刹那！　夢！　夢！　影！　影！　空！

思ひつまゝて世界を盲目と觀じ自分を虛空と觀ずると一秤の法悅からくる微笑の催し……と云つて、之もつまらぬ厭な生命の一部分だ……實際は謎の現實を捕へて戀と云ふ一瞬の夢に隱れようと。戀しい？　よ——し！　一瞬の快樂で足る！　消へるなら消す。亡びるなら亡びる。打衝つて破滅する時に破滅する處で打衝つて破滅する。ア、自殺がしたい。二度も三度も自殺がしたい。

然し鶴子、鶴子、君は僕を神秘に隱してくれるか？　兎に角僕を愛して呉れるか？　美しい、綺麗だ、そして僕の者になれば僕が救はれる、贖も肉も榮一を愛し給へ君、君は可愛い。即氣狂ひだが君が僕を愛して呉れないと全くの氣狂ひになるなら。どうせ世界は氣が狂つて居るのだから君の爲めに氣狂ひになるなら僕は今少しの狂ひの中でも尚な方だよ。戀。僕は遂に戀に囚れた。そして囚れた事に贊成する。戀は氣狂氣たるを要する。贊成、鶴子を得る爲めに狂氣とならう。オ、うれし……涅槃がある。女は神だ。牛獸主義贊成？　やつつけるじや僕も。然し父が僕をあの樣に打つとは？　もうタル、フオーズ！

ぬと思つたか涙を拭いて頭を上げると、壁に懸つて居る。

榮一はサータス、レザルタスを思つて、ゲーテ式失戀派哲學者の意味は虛弱だと思は無いでは無いが、自己の非哀な運命と資本家社會の地獄を泣かざるを得ない。そして自分も一歩々々『永劫の虛空』に居ると考へあたらざるを得なかつた。

『嗚呼、永劫の虛空！　何が榮一の虛空を充し得るのだ。僕は影の様なものだ。さうだ苦しい夢を見て居るのだ。生命と見えるのは僕の夢だ。』

面倒臭い。父が養子に新見家へ來ながら、本妻を捨てて僕の母を妾に置いた。母が死ぬとお梅を入れた。人生は中々忽しい。その間に父は代議士になつたり、貴族院書記官になつたり、今度は代議士になつても忽しい。家は新築しなくちやならぬ。財路は取らなくてはならぬ。その間に德島鐵道の取締もしなくちやならぬ。お梅の機嫌は取らなくてはならぬ。……あの德島本町の哀れな工夫の家庭！　取締役の父がもう少し省る所があればあんな家庭の慘事も起らぬに。僕が父のかはりに人を可愛がらうか？　いや。自分の生命の處置にさへ困るに貧民の世話まで出來ようか？　此刹那！　自分の身體は唯燃えて居る。

間、他人に見られない様に氣狂ひになるのだ』と玄關の押入から蒲團を出さうとしたが、

『どうせ、氣狂ひだ。どうせ、父やお梅からはいぢめられるのだ。父やお梅が寢て居る間だけでも手足を延ばさう。今夜は寢ずに居てやらう。今夜どころが、死ぬまで起きてゐてやらう。死ぬまで？いや我輩は死なぬ』とから考へ乍ら其處で身を倒した。暫らくの間、暗い暗い押入の中で禪の眞似をした。

『禪の眞似？　之もつまらぬ。疲れる許りだ。明日の教授が面白くなからう。兎に角寢よう。そして小さい薄い夢でも見よう。もう仲の間に移る必要も無い。此處で寢よう。

と。吉三郎の横に床を延べて寢巻きも着かへず、そのまゝ床の中へ這入つた。床は矢張り心地が善い。『これなら一層寢巻きに着かへて』と。も一度起きて寢巻きに着替へた。榮一は考へた。

『寢床だけには敵が居らぬ。――嫌な睡は最後の救じや。……ア、、女よりか寢る方がよい……』

十三

父に叱られ又殴られてからと云ふものは一層父と自分の間に蟠りのある事を感じた。それのみならずお梅は勿論弟の益則までが自分を馬鹿の様に見下げてゐる不愉快さ。事情も何も知らずに雷同

云はぬ、僕はもう……。唯絶を頭へよ。然し疲れた……。

又疲労は榮一を夢の夢に誘つた。机の下に足を入れて仰向きになつて少しの間睡んだ……。

キーとゴふ音に驚いて目醒めると、宅の入口に。またお梅が立つて居る。

見付けられやつたと今更の様に心が騒いだが、仕方もなし、頭をたれて机に倚つた。

『お休みなさい——お父様がお休みつて、榮一さん。』とお梅が齒の根にしみる様にゴふ。

『有難とう御座ります。』と榮一は柔和に答へて、二階から降りることに決心した。

『が、どう考へても、生命は眞面目の様で眞面目で無い。僕が之れから寢る？　つまらねえや！　疲る？　馬鹿にしていら！　醒めて狂ふものを暗い床の中に突き込んで、僕の自覺と生命を數時間な

りとも奪ふとゴふのか？　偽よ！』と榮一は立ち上つて二階を降りかけた。

『榮一さん、まだ二階の戸が閉つて居ますまい。』

『しまつた。』榮一は再び宅に立ち歸つて戸を閉ぢ始めたが、乾の方の鶴子の室はまだほつと明るい。

影は鶴子であらう。『怪麼に遲くまで鶴子は何をして居るのだらう』と思つたが、こちらの戸を閉てる音に鶴子も障子開いて閉て始める。

此一瞬榮一は滿足した。閉て終つて玄關に降りた。榮一は全く氣狂ひたる事を自任した。『少しの

か學校とか教會とかゴふものが非常にすきでそこで人々の服裝とか骨相とかを研究するのである。それから最後の理由は家に居つても面白くなし、とゴつて、遊びに行くところは無し、時間潰しに教會へ出席するのである。

が榮一は自分許りに教會行きを勸める。小供と女にも教會行を勸める。弟の徒則にも閉口して居る。それで父と自分の中が益々割れる。父も怒る。

云ふので父もお梅も苦い顏をして居る。事が此斯進行すると事は愈々面倒になつて來るものである。

徒則も張つて行くとお梅が不服をゴふのは彼の持論である。然し徒則を曰張つて行くとお梅が屢々歸る。そこへ田舍の本妻の處へ榮一は基督教が非常に榮一にも教會行きを勸める。小供と女に

榮一は今しも學校の教授を終へて自分の宅の門へ入らうとする所であつた。

門の側には通路車が据ゑてあつて中には面付きの惡い十二にはなるまいと思ふ子が

な顏をして榮一の這入つて行くのを見守つて居る。玄關の側の中門から內へ這入らうとする所で

バツタリと出會したのが四十五六から五十二三迄の女乞食。腰を前に歪めて頭は垂れ、

つて出て來た。

『お茶が欲しいと思ふんで御座りますが——奧樣……』

する馬鹿者と思へばそれつ切りだが、自分の勢力伸闊が家族のうちにさへ恁麼に狹ばまつたと思ふと少々悲觀せずには居られぬ。が榮一は却つてこれで反抗心が起つて讀書の時も默想の時も多く、鶴子に對する夢と神秘とが日に進すると考へて居た。

此二三日は機械的宇宙觀と、目的論的宇宙觀に關する默想を主にやつて居るが、之れは決して書物を開かぬ。書物は何等の權威が無いと思つて居る。實際有つたにした處で生死を賭して何究して居る事だから書物に相談する暇は勿論無い。それに一方には家族と健康の方から壓迫がある榮一の胸は推察するにあまりある。

榮一は唯生きて居るとゝふだけではあるが矢張り動いて居る。勿論系統ある動きかたはせぬ。然し、暇があれば鶴子の顏を見て行くのと、日曾の妹に曾ひに歸るのと。日曜日に教會に出席するのとは、他の凡ての盲目的活動と少し違つて稍筋道があると云つて善い。

彼が日曜日に教會へ行くに就ては別に理由もない、鶴子様がオルガンを奏く爲めかと云ふに、それで終ふ事がある。それでは何かと云ふに、榮一は何か許りでは無いっ或時は鶴子を胸の思ひから消して牧師が基督に關して說教する中に自分を刺激して基督の樣な熱烈な血を遡らす處が無いかと考へて居るのと、今一つは榮一には妙な癖があつて大勢集つた所が好きなので。ステーションとか芝居と

『それじや。』と云つて、榮一は下駄をはいて乞食の所まで行つて鐵瓶を傾けると。乞食は濕紙を椀に乘せて受けようとする。

『變なことするね。』

『勿體のう御座ります。此様な醫陶敷い椀でお湯を戴かして乞ひましては。勿體のう御座いますが、眞にクラシカルな乞食もあつた者だと思つて、馬鹿にせられた様な氣で濕紙の上に湯を注ぎ入れて、鐵瓶持つて這入つた。乞食も出て行つた。

が『あの乞食、金が欲しいのかも知れねえ、多分湯は方便だらうと思つたから、金が欲しければ遣る。いらぬと云ふまでやる。』と思ひ立つて急にまた裏口から廻つて中門に出た。所が驚いた。彼女、四角い竹で編んだ籠の上に、

此者歸國セント思ヘドモ旅金ナキ者ナレバ大方ノ御惠與ヲ乞フ。

と、書いた一尺五寸四角許りの板を乘せ中門の側に土下坐をして居る。

『勿體のう御座います。有難うて眼から涙がこぼれました。』

『君金がいるかい。……いるならこれを上げよう。』と懷の中から一圓紙幣を取り出した。

新見は此野郎少しずうずしい奴だと思つたが、兎に角物が欲しいのに違ひないと、にしようと、

『あの……君は、お茶がいるのですか？　お茶がいるならば僕に従いて來給へ。』

『若旦那様でいらしやいますか？　どうも有難う御座ります。どうも有難たう御座ります。奥様に先程お願ひ申しましたが……中門から來るとはけしからんとのお叱り――それに若旦那様の御親切。目から涙がこぼれます。』頭に中古の手拭を被いて居るが顔が黒くて痘痕面である。中門から臺所の裏口までに腰を折つて爪先で歩いて薄い唇をペロ〳〵動かして居る。口は動かす爲めに作つてあるがこれだけまでに動かしても善いものかと、いやになる程能辯である。榮一先生、全くクラシカルの乞食もあつた者だと閉口した。

榮一は臺所へ這入つて湯が沸いて居るかと思つて、兒廻したが、沸いて居ない。奥へ行つて鐵瓶を提げて來た。長父鉢には何時も火があつて湯が沸いて居る。臺所に來ると女乞食は裏口の敷居の前に土下坐して居る、鉢仕事してゐる廂髪の下女が吃驚してゐる。進んで行つて、

『此處へいらツしやい。さ。湯を上げませう。』と竈の前の踏み上がりの上に立つて云ふたが、

『どうも勿體のう御座ります。どうも勿體のう御座ります。』と云うてどうしても這入つてこない。

驚いて居たが、
『それでは催かだけれども取つて置き給へ。』と一寸微笑んで銀貨を籠に入れた。そして直に門に這入つた。心の中では自己の慈善を罵つた。知らぬ顔して自分の室に這入つて机の前に坐つた。何をしようかと考へたが別に之れと云うて讀む本も無い。横にある小さい鏡を取つて見入つた。この顔に鶴子が惚れるかと云ふのが問題であつた。然し自分手に『美しい顔だ。伍那女が居れば僕は戀をするなど』と云つてみた。口を大きく張つて見たり、笑つてみたり、眺む眞似をして見たり。して長い間鏡に見入つきいて居た。
遍路は一圓の金に思ひ切りが悪いのであらう、門の外に吉三郎の聲と乞食の聲が相混つて聞える。『まだ乞食は居るのか』と耳を澄まして行衛を見に出た小僧の吉三郎に、
『勿體ない事で御座りまするが、唯今の若旦那に、も一度會はして下されたう御座りまするが……。』
度お目にかゝつて御禮を申したう御座りまする。伍那な旅乞食にあれまでの御心……。』腰をかゞめて左手を土にすれ〳〵にして述べたてるところが如何にも哀れに憎い。小僧の吉三郎は乞食を眼の下に見て、

『若旦那様とやら、恁那旅乞食に一間遣らうとのお仰せ。有難い事で御座りますれど。若旦那様とやら。鐵瓶持つて湯まで貰はして頂きまして、お金一圓遣らうとは、勿體のう御座ります。』

と、つゝと立つて乞食の店を終つて車まで歸つて行つた。その訴ふる様な聲、その疑ふ様な聲は全く此女はクラシカルの乞食だと云ふ事を思はした。人相が惡いから捨てゝ終うのは本意では無い。然し人相が惡い。

『それでは之れを取り給へ。』と門まで追つて行つて二十錢銀貨を差し出した。

『勿體のう御座ります。有難うて眼から涙が……一圓もやらうと仰つては私の様な乞食でも、どうしても貰へませぬ。』と竹籠を車に收めて車の轅に手をかけてひき出した。然し車の中の子供は憎い憎い面をして口の屋根を支へてゐる陽の一本の柱を摑へて貰へ貰へとゞふ意味であらう搖すつて搖すりまくつて大騷を始めた。

『君はいらんのかね、物乞ひに來て。遣るとゞふならば貰つて置けばいゝじや無いかね。』とから駄口をつめた、女は二三間行つて車を止めた。引返して來て、

『勿體のう御座ります。』とゞひながら洟一の前に土下坐して籠を差出す。洟一は此乞食の變な動作に

ある。

『勿體ない事で御座りますが、何卒も一度お日に懸る事が出來ますれば……恁麼遍路に一圓もやろと仰しやる若旦那に。どうぞ丁稚さん若旦那樣にも一度お取次ぎをお頼み申します。』

吉三郎はまた通りの東西を見て居たが西の方を見るとフロックコートを着てステッキをついた紳士がやつて來る。旦那のお歸りと見て取つた吉三郎は一層強硬な外交手段を取り初めた。

『おまはん、國へ往ぬ、國へ往ぬと云うて幾月此の徳島で愚圖々々して居るで、もう、一月にもなるでないで、……それにおまはんは此間、寺島の鐵工場の横で何やら物を納んだと云はれて職工に蹴られよつたでないで。おまはんあまり慾が深いでよ。二十錢も貰ふたらもうお歸りなはれ一圓も貰ひたいつて何でぃ。お通り。』

と、云ひ終らぬうちに乞食はペタリと土下坐して、うつぶき入つた。市長の旦那は增々近づいた。吉三郎は少々當惑の顏色で眼尻に皺をよせ、出て居たお梅はもう少し開けて顏だけを出す。市長の大旦那は愈々現場に立ち臨んだ。吉三郎は丁寧に

『お歸り』と迎へる。

『吉三郎。どしたんな?』

『何んじや知らんがな。おまはん、もう貰うたらお往んだら善いでないでかだ。若旦那はもう奥へお這りになつたでは。』とやつて居る。

『一圓のお金を遣らうと仰るのであまり勿體ないので一度は御辭退申しましたものゝ——若旦那が一圓遣ると云つた？　怎那乞食に——馬鹿らしい。うちの若旦那はどうかしとるのかいな』と胸の中で吉三郎は吃驚した。そして、

『どうすると云ふので、それで、またその一圓を貰つて呉れと云ふのでかだ。おまはんの使ひはやようせんがな。おまはんもうお金は貰うたんだらうな。』

『一圓のお金は御辭退申しました處がそれでは二十錢やると仰つて二十錢は戴かせて頂きましたが、わたしの小供が申しますには自分の宅へ歸らうと云うのに、金がなうて困つて居るから一軒々々貰ひ歩ひて居るに何故あの一圓を貰はぬか、一軒の内で貰うのも百軒の内で貰ふのも貰ふのは同じでないか？　遣らうと云ふ所で貰つて置かな先で困つて終ふで無いかとから申すので御座りますす。何ならも一度若旦那樣に此處まで出ておもらひ申す譯には參りますまいか？』とうつぶき入つて頼む。

『然し若旦那はもう奥へお這りになつたがな。』小僧は左の手を腰の上に置いて乞食にはあまり頓着せぬと云ふ樣子で首を左右に回して、通りの東西を見て、その目で一寸と見降ろして頗る應揚な態度で

『一體。どうしたの？』

『いや内の若旦那があんな善いお方だろうな。それで此奴に一圓見せたんかと云ふと貰ふところのでよ二拾錢も。』

『オホー、二拾錢もの!?』

市長が這入ると、

『之れを遣つて返れ。』

入れて云ふ。下女は洗濯屋を見て、

『今日は』と挨拶する。

『や、今日は——この人は一體どうしたので。』

『さ、どうしたのか知らない。先きにも澁紙と椀とを持つて中門を開けて默つて裏へ廻つて、裏口の處で土下座してお茶を吳れとこふでないで、私も吃驚してな。そしたら奥樣が出て行かせと仰つたのでは。そしたら若旦那があんな善いお方でしような……』

『フム、』

『若旦那がお金二十錢もおやりになつたら、付け上りくさつて一圓呉れと云ひ腐つて往なんですわ……此奴その癖に性が悪いので御座りましてない、此間も寺島の鐵工場の處で何やら盗みよつて、職工に打撲上られよつたのでつせ。』

『泣きよるのかい？』

『泣きよるのか何か知りませんが、こうしたらお金でもくれると思つて居るんでしよう。』

掌川から女中も出て来た。中門から頸だけ出して見物して居る。隣りの洗濯屋から亭主が出て来た。向への角田の妻君が障子を一寸許り開けて見て居る。車の中の子供は、

『お母往のう——お母——お母——』と叫んで居る。

『お前此處は何處と思つて居るので、寝る處で無いでよ。さつさとお歸りなはれよ。』と小僧は市長を横に置いて大に威張つて居る。然し乞食は身動きもせぬ。

『吉三郎。奥からもう二錢貰つて来て遣れ？』と市長は云ひ殘して玄關へ歩を移した。吉三郎は隣りの洗濯屋の亭主を見て、

『厄麼者に二錢もやる者があるでかな。なつ厄麼者に。』と云ふて居る。隣りの洗濯屋は變な顔をして。

『恁麼金は乞はぬわ』と土の上に投付けた。此小氣味の悪い投げ方に吉三郎は『アレ、遣るよと云ふのに貰はぬと云ふ遍路じやどうで。まアあきれるは。ホホ……』と指の先に棘を立てた様な笑ひ方をする。

『非道い奴じやな！』洗濯屋も云ふ。

榮一は先から事の成り行きを八分通り知つて居たが、何だか矛盾して居る様に思ふので鏡を捨てゝ忙然考へて居た。すると、下に女中が、

『若旦那が一圓も乞食にお見せになるのがお悪いのですは』と云ふ聲を聞く。

せねばならぬ様な氣もするし、白分の親切氣に白分ながら感謝して呆れる様な氣もする。そして白分も父の家を捨てゝ氣狂ひの様な乞食生活を送るなら、せぬ慈善主義は味噌にも糞にもならぬとも考へる。が、乞食の身の上が可哀相だと唯直覺的に泣きたい氣もする。また、徹底だなどと取つても付かぬ空想に自分の身の立場を置いて考へて見ると、何とはなしに涙が落ちる。

牛分泣きながら、玄關の二階まで出て、

『吉三郎。まう遍路は行つて終うたか？』と尋ねた。

下女は續けて喋らうと思つて居ると玄關で、『よし、よし』とお梅の呼ぶ聲がしたので洗濯屋に挨拶もせず、默つて這入つた。吉三郎は下女に變つて喋り出す。

『此奴、此間もあの寺島の鐵工場の横で職工に擲かれたのでよ。何やら盜んだのだつて。狡い猾奴じやな。』

『ウム、此乞食は、長いこと、徳島に居るで無いで。此間だつて……それでもう十五日も廿日にもなるな……西船場に居つたがな。』と洗濯屋も應じる。

女乞食は何を思つたか、洗濯屋が云ひ終るか終らぬにつうと立つて、

『此奴丁稚めが。覺えていやがれよ。こら、よくまアよ大勢の前で恥を晒しやがつたな。覺えていやがれよ。』と莞々しく立つて車の所に近寄つた。近寄ると子供はワアと泣き叫ぶ。

吉三郎は乞食の正面攻撃に飽氣に取られて物もえはず恥し相な赤い顔に變な笑を漏して、洗濯屋の亭主を見た。洗濯屋も淋しく笑つた。然し吉三郎はハツと氣が付いたと云ふ樣な調子で慌てゝ車の脇に走つて行つて、

『ホレ、二錢上げるはら。』と車の中に抛り込んで門へ立ち戻つた。

が乞食は車の中の二錢銅貨を取り上げて一寸後ろ向いて、

鶴子の家を訪れると、鶴子は居た。鶴子は榮一寸用を濟まして二階へ昇つて來た。

『今日は、お婆様は？』

『阿爺様もお婆様も皆留守なのですよ。獨りお留守番でしたの。よく來て下さいましたのね。然し、からしは廣島へ行く都合になりましたのですよ。』

『そうね。』

『どうぞお愛ひを帶びた様なまた得意である様な句調で始めた。

『何しに廣島へいらつしやるの？』

と云ひ乍ら自分の机の脇に坐蒲團を据えて。

『幼稚園の方へ』

『そう？』

『勉強に？』

『はア、保姆養成所へ』

『へえ今向ふの角を廻つて居ります。』

『まだ向ふの角までか？』と急いで二階から驅け降りて玄關に出た。然し玄關に自分の下駄が無いから、お梅が奥から出て來て、急ぎ樣が何か意味あり氣であるから、廻つた。急ぎ樣、お父樣が一圓も遊路に遣つてはいかんと仰しやりましたよ。』と傳へて來た。

『兄樣、』が聞かぬ振して門の方へ出て行つた、殘酷だ。資本家は殘酷だ。トルストイが自分の失敗した經驗から、慈善を罵つても僕は持つて居るものを皆遣る。遣れば慈善も無くなれば慈善も無くなるものが無くなる。何を遣れまう遣るものが無くなる

『云ひませうか？』

『云つて頂戴。』

『ホホ……ほんとに聞いてくれる？』

『聞きますとも。聞かずにどうしましよう。』と云ひ終らぬ中に鶴子は榮一の手に接吻した。榮一も返した。鶴子様。云ひましようよ。……それでも云ふのが恥しいわ。オ恥しい。』

『それじやね。鶴子様。云ひましようよ。……それでも云ふのが恥しいわ。オ恥しい。』と榮一は頭を一寸縮めた。

『ね。先きね、私がね……云ふの止めようよ？』

『お云ひなさいな。どうしたの？　今日はいつにない元氣のないのね。どうしたの、先き？』

『先きね、乞食に一圓呉れて遣つたの。その乞食の事思つて泣いてゐるの。』

『さう。善いことしたのね』と鶴子は別に驚きもせぬ。が、その涼しい眼で榮一の顏を見詰めて握つた手をグツと占める。片手を差出して榮一の左を呉れと求めた。

榮一は美しい鶴子の眼付に耻しくて一寸顏を背けたが、鶴子があまりに見詰めるので、自分も鶴子の面を見入つた。見詰めれば見詰める程鶴子は綺麗だ。絹の様な滑かな頰に薔薇色の色合ひ、何故此

『そうですか、それは善いですね。小供は可愛いものですね。』

鶴子は忽ち、變な日付をして榮一の顏をつく〳〵見て居たが、悟られてこうれしいやら辛いやらの新兒は、唯、

『はア』と答へた。

『ちよいと、あた、泣いたの？　どうしたの？』

『どうなしたの、一體どうしたの妾に云つて下さらない？』

『そうね。云つても善いけれど――』

『妾に云つて頂戴な。妾に云へない様なこと？』と一寸前の障子を開いて庭に足音がした様に思つたので見てみた。然し人の影もないから、また閉ぢて、涼しい口を辯かし乍ら。

『妾に云つて下さらないの……妾を愛して下さるなら云つて頂戴な――』と鶴子。

『鶴子様。あなた私を愛して下さるの？』と鶴子の手を取らうとすり寄つた。

『愛してくれるなら』の一言葉で油の様に解かされた榮一は、

『鶴子様。私の心をほんとにうち開けませうか？』

『うち開けて頂戴。』

『私、それで困つて居るのですよ。』

『まア、お坐りなさい。』

『いや私は立つて居るのが好き。』

『そうそれじや立つて居りましよう。』

『私、お父様にあの女を出して貰ひたいの——あなたどう思ふて？』

『どうして？』

『あの、アウガスチンがね悔改めて信者になつたのは、妾に励まされたのだそうですね？　なんでしようアウガスチンが妻を——若い妻を娶らうと思つて皆と相談して居ると前から連れて居た妾が、アウガスチンを捨てぬと云つてアラビヤへ隠れて終つたのでしよう。妾はそれを思つて居るのですよ。愛するものがあるのでどれだけ人間は柔和になつて居るか、知れませぬよ——』

鶴子は如何にも厄するとまた反つて、お父様のお氣に觸つてどんな事が起るかも知れませぬよ——』

智恵深らしく語り出た。栄一は恋しい女から此様な言葉を聞くのがうれしくて堪らぬ。が

様に美しいかと疑つた。視線と視線は永く合つて沈默のうれしさに二人は醉つた。

が元氣な鶴子は『それだけ？　まだあるのでしよう。すつかり云つて頂戴な』

した。

『私ね鶴子さん。私もお父樣の家に居るのでしよう。』

『何故？』

『何故？』

『でも……』

『何故？』

『何故？』

『でも……』

『私ね鶴子さん。私もお父樣の家に居るのでしよう。すつかり云つて頂戴な

居らしやるのね。』と賞めなくてはならぬ様になつた。

賞められて鶴子は下を向いたがまた新見の鼻筋のあたりを見ながら。

『然しわたしは、あなたのお心は充分察して居りますよ。』

『そう、あなた、察してくださつて？』早や涙ぐんで居る。

『ね、鶴子様、私はもう世の中がいやになつたわ。』

『なぜ？』

『父もあの様だが、自分も謎の様な人間に成つて終つたのよ。』

『あなた、此世が嫌ひ、私が居ても』と云つて置いて可愛らしい鶴子は新見の冷い青白い頬に接吻した。そして小さい聲で、

『私も……』と鶴子を聞く抱きしめた。

『斯うして地獄へ落ちても私は神様に不平は言はぬわ』と囁く。

『あなたもお辛ひが、私もほんとに不仕合せですよ。あなたは私のことを思つて御覧なさいどれ丈幸か知れませんよ。』

『ほんとにね。私は鶴子様に同情して居るのですよ。鶴子様の爲めなら死んでも善いと思ふ位同情し

『然しね……』と云つて見た。

『私はクリスチヤンだから嚴格に。一夫一婦主義を守りたいのですよ。でも妾は私の愛した人なら。その人が、たとへ怎の樣な女と罪を犯しても決して捨てませぬわ。その罪を許して地獄までも追つ掛けて行つて基督の處へ救つて來ますわ。アヽウガスチンもその樣な事を云ひましたね。また私は思ふのですよ——眞に愛しあつた者なら一生どころか二生も三生も一夫一婦で送りもするし送りたくて堪らぬだらうと思ふのですよ。あなたのお父樣だつて決して好んで女遊びはなさらぬと思ひますわ……』

『そうか知らん？　プラトニツク、ラブの實現する事があるでしようか？　そらいけ勿論世界が笇盤の珠の樣に思つた樣に動くものなら一夫一婦主義は理想でもあり實現もせられませうがね——』と低い聲で榮一はいつた。

『だから、お梅樣を。今の所獨り愛していらしやるのならそれで善いでしよう』と別に榮一の理窟ぜずに云つた。

榮一もその大膽な判決の廣さに驚いた。美くしい鶴子が何故か光る樣に思はれる。鶴子の目は全く斯う云つて終つた時に大きく見張つて瞬いたのだ。それで『鶴子樣。あなたは眞に大きい心を持つて

「そうかも知れません。然し白紙の様な人間の眞似は僕は嫌ひですよ。僕は色を白く塗りたいのです。」

「さうですね。」

「さうですよ。それでも自己の主張を他人に無理矢理に強迫するのは眞理の敵ですよ、神で無い以上は、自分に思ふ存は他人を支配する者ですよ。変な頭つくり〳〵感心ことを考へて居るのですから、いつも感心の許容や同情して貰ふ感めて貰ふと思つたらいつも感めが得られないに苦しくて苦しくてたまらないのですよ。そうでしょう此度廣島へ行くときめるに付きましても心配してくだされるのだけは、ありがたいに心配してくだされるのだけは、ありがたいに方にミセス・テーラーがおいでになつて、それが僕の人に心配して頂かうと思つたらいつも実望。それが僕の人に心配して頂かうと思つたらいつも実望。」

「何故？」

「何故つて、あなたが此の一週間許りいらしやらず無かつただでしょう、さうでしょ？」

「病気でゝ。」

「ご病気？」

「ご病気でしたがら——」

て居るのですよ。』

『オ……ラレシ……ト……私の、めなら死んでも……』

うか？　そしたらすぐ天國へ行けますよ。』

『ほんとに？』と繪に醉つた人々が先から先へと世界を創造して居る。

……死ぬと鶴子様に會へないと云ふのなら私は苦しくても悲しくても淺いの此浮世に居りたい

ね。』

『私も』と一の美しい日をつくづくと見詰めて居る。繁一も瞳から鶴子の胸へ、詰めて、鶴子様は何故こんなに美しいの？』繪を描き返して、ぢんと沈默のよろこびに沈んで行く。

か鶴子はまた聞ふた。

『それではあなたはどうなさるお積りなの？』

『どうって、革命を起すのです。』

『革命？　悲しい事ね。』

『オ……まア何でも淺いわ。然し最後の勝利は愛と沙默だといふ事をお忘れなさるな。』繁一は笑つて居る樣な氣がしたが默つて鶴子の名に接吻した。

そして靜に口を開いて、

あなたが毎晩泊りにいらしても済んで居りますわ。……さうあなたお父様にお叩かれなしたの、今度叩かれるたら吃度私が變りに叩かれますわね。』と髭の髪を掻き上げながら首を左に傾けて云ふ。

『鶴子様。あなたは三日もお休みになつて居らしたの？　三日も？』

『ア、恰度床の中に居ましたのは三日ですよ。三日も寢たのね？　頭が痛めましてね。ほんとに苦しかつたわ。』

『それじや來れば善かつたにね。三日も寢たの？　今度御病氣になつたら吃度看護に來ますわね。』

『來て下さいね。お約束して置きますよ。あなたが來て看護して下さるなら、すぐと回復りますよ……あなたそらさうと肺はどうなの？』

『私の肺？　もう善いのでしよう。然し無理が出來ないのですと。』

『あなた自分の病氣を他所の人の事の様に仰るのね。』

『それでも此病氣だけは解ら無いのですもの、自分には。』

『ね、あなたが、私の病氣の時に看護に來て下さると仰るからあなたが今度もしも、肺でも惡くなつて成りになつたら廣島からでも飛んで歸つて來て看護しますよ。電報打つて下さいすぐ歸つてきますからラザロの様に死んでゐても、鶴子様が『起てよ』と云つたら。』

『吃度？　うれしいことね。鶴子様の看護？

『どしたの？』

『どうもしないのですがね、心配で心配で堪ら無くつてね、もう年だから外へ遊りたいと云ふし叔父の方では高等師範へ行けと云ひますしね、私は神戸の女學院か東京の女子學院へでも這入つてみたいのでしよう。ほんとに苦しくてね。まあ元へ來て面白いお話でも聞かして貰はふと思つて居たのですけれど。あれからどうしていらしやら無かつたの？』

『ね、あまり氣晴るものですからね、內では不審に思つて居るし、お父樣も恐つて居らつしやるしね。それ、時行さんがお歸りになつて遲くまで話した晩などはね、私、父に叩かれた位ねですからね。あまり氣晴るのは惡いと思つたから控て居ましたの。』

『ホヽヽ——あの初めていらした晩？　非道いのね！　あなたをお叩きなしたの？　榮一樣を？　私の可愛人を？　何故？』

『私が遲りに叩かれゝば淳かつたに。遲くなつたからお叱りなしたの？』

『それじや、何故私の宅へ泊りにいらしやら無かつたの？　內は年寄許りだから遠慮なしやいよ。內の爺さんや婆さんは淳い人だからね。今度から遲くなつたら私の宅へ泊りにいらつしやいよ。

系の人々なので遂にそれに賛成することになつた。市會の議論の中心點は、市の當局が何故富田川の浚渫を忘るかと云ふ問題である。そして寺島派は一種の收賄行爲がそこにあると云ひ觸らして居るのである。そして、十四萬圓からかけた浚渫船が、僅か二三年しか使用しない中に、もう廢物の樣になつて、船大工島に繋いであるのは市長の無能の爲めであるのみならず、新しい浚渫船の注文の事につて、最初富田川浚渫問題がある樣に云ひ觸らされて居るのである。それで、市會の增田尊德は先づ質問したのであります。それで、市長に是非とも一時會、二十三番、私は浚渫問題に就て市長自らに質問したいのでありますと議長は市長が別室で、代議士連と浚渫問題で相談中である爲めに、一寸と顏が出せ無いから、土木課長でも善いです。』と云つて、最近大阪から修繕して歸つて來た浚渫船が毎日船大工島で遊んで居るのはどう云ふわけであるか說明を願ひます。』と質問した。

それに對して、土木課長は、『遊んで居るのでは無い、一日に五百噸乃至六百噸の土は浚渫して居るけれど。あんな舊式な機械では、とてもこの大きな川底を浚渫することは出來ないが、一月雨が降つ

榮一も父の議員操縦振りを見るためと田舍の生活の單調を消すために傍聽席の隅に隠れて居た。

今日の議場が混亂すると云ふことは始めから見えすいて居た。それは去年の三級補缺選擧の時に公民派が寺島派の市會議員細田保氏の補缺だから必ず寺島派の或者を推すことに協成するとうてゐて、本年二月の選擧間際になつて、寺島派は花田貞藏を選出することに公民系の新兒市長をいぢめることを畫策して、富田遊廓の檢番取締しまたは島にはことごとに運動し、美事、政友系の勢力を持つて勝利を得たのである。それ以來、寺一も二もなく反對するのである。その最も極端な一例は今度の臨港鐵道問題がそれである。政友系は例の積極政策からいつでも事業を起して議員も儲け、選擧民にも悦ばれる爲めに事業のあることを喜ぶのであるが、臨港鐵道問題だけは甚だ無かつた。それはこの問題が最初請願者辯護士仲間――即ち寺島派から市會に持ち出されたからである。最初の提案は市の繁榮の爲めに臨港道が必要であるので、これは當然徳島市直營の事業として政府の補助を仰いでやるが善いと云ので有つたが、政友系の之に反對した理由は、政友系は新兒を始め市の有力者を含んで居るが、寺島派の提案に贊成することによつて、利益の多くは提案者に歸はれると思ふたからである。然し更に研究してみると地主は多く政友

れば善いのです。』
『では、土木課長や君は市會は無用だと云ふのかね。』と辯護士の井上が坐つたまゝ議長の許可も受けずに叫んだ。
『何吐してるんだ、摑み上つて。』と結城が怒鳴る。
『市長を出せ、市長を出せ。』と三谷が叫ぶ。
助役の島山が市長室へ飛んで行く。給仕が何か議長の耳に囁いて居る。
『市會を馬鹿にして居る。』と結城が獨言のやうに云ふ。
『謝罪させろ。』『議場から非難が起る。
傍聽席に居た紫一はこんな聲が議場の所々に起るのを聞いた。然しそんなことを新聞記者は何とも思つて居る。それを議長が睨みつける。八釜敷く突ひ合つて居る。
い。議場には三十八人しか出席が無いが、まるで何處かのクラブへ行つた樣に八釜敷い。
井上に立ち上つた。そして、
『土木課長、それは、』
出した。
本田氏の唯今の言論は市會を侮辱したものとして、謝罪を要求します』との動議を

て、土砂が上流から流れて来ると、約二萬噸から五萬噸の砂が浚渫した後を埋めたゝめなから、自然に對する不可抗力には打勝つことは出來ないとしてあきらめて居るのであります。』

と、答へた。

それで、市會が、あきらめて居ると云ふ言句が、如何にも悲しそうなので、議員は皆笑つた。

『それは、私共が御請求申したのではありません、市參事會も、市當局も、德島港には全くあきらめ樣な、全く無効であると申上げて居るのでありますが、何故修繕にやつたかと問ふたが、土木課長の木田は、

その時、增田はグツト癪に觸つたが、

『責任を轉嫁しやうとだふのでは無い。そんなことがわかつて居るならなぜもう少し早くから、市會に注告しないかと問ひたいのである。私は今日まで德島港が駄目であると云ふことを聞か無かつた。』

增田は運送業者である爲めに、特別に浚渫問題に八釜敷いのである。

『然し皆樣は、御說明を申上げても御用ひにならないのです。こんなことは、專門家にまかせて下さ

『摑んだとゴふのは、何處に證據があるんだ、そんな無禮なことを云ふと、許さんぞ』

『貴樣が摑んだから摑んだと云ふのぢや、よく良心に聞け』

『馬鹿！』

本田は泣いて居る。

『馬鹿つて何だ、貴樣こそ馬鹿だ。』

助役の畠山が這入つて來た。土曜會の北田が席をはづして、畠山の所へ走つて行つた。

『市長を早く出さ無くちや駄目だ、新見君はどうしたんだい。』

『いや、すぐ來る、話も大分進行して居たようだつた。』

『然し、本田には謝罪させ無くちやいかぬよ、畠山君』

『謝罪の必要なんかあるものか。』

『そんなこと云ふから君等は官僚式と云はれるのだ。』

井上は楠本に胸を摑まれて、今にも喧嘩せんとして居る。今楠本は井上を擲つた。三谷と結城が驅け付けた。外のものは忙然見て居る。政友系のものは小さくなつて居る。殊に無帽の近眼の花田眞誠は顏を眞靑にして震へて居る。

『賛成、賛成』

さうすると、多数の口からもれる。

『何の謝罪だか薩張わからんじや無いか？』と政友系のものまでか、課長いぢめに賛成を叫んで居る。

『黙れ、活辯』

活辯は楠本徹次が、土木課長を救うてやるのは今だと立ち上つて、

『引込め女郎屋の亭主！』

議員の口からも楠本に対する罵倒の聲が漏れる。

楠木は罵倒の聲を聞くや、

『君らの云ふことは少しもわからぬじや無いか』

『貴様に用事は無いわ』と井上が返す。

『貴様てなんだ』と楠本が議席をはずして、井上の處へつめよる。結城は大きな聲で、

『議長、謝罪、謝罪』と叫んで居る。そうすると、土木課長は。

『馬鹿臭い、何だそんなことに』と口籠つた。すると結城は赤い顔して怒り出した。

『馬鹿つて何だ、貴様こそ、馬鹿だ——摑みやがつて』から聞くと、先きから沈黙を装うて居た本田は青筋を立て、

西村議長は、唯今、市長より、浚渫問題に就て御説明がありますと云ふと、新見市長は極く簡單にこんなことを云ふた。

『富田川が全く駄目であることは既に諸君も御存知だと思ひます。それで此度内務省とも、縣當局とも、殊に御地の港湾道を以つて究の結果どうしても駄目だと云ふことがわかれば、小松島か吉川港に臨港鐵道を敷設するといふことに決定したのであります。従つて、徳島港を放棄するに忍びませんから、一年十數萬圓といふ多額な費用を浪費するに忍びませんから、現今の浚渫船は一隻も殘つて、解散することにいたします。谷派の代議士諸君とも御相談の上その方針を取ることに決定しましたから、諸君におかれましても、左樣御了解あらんことを希望します』

これに對しては、議席から質問の一言葉も出すものは無かつた。それは、先きの井上と楠木の暗暗で、議席は反動的に安靜を要求したからである。

議長は『それでは本日はこれで散會いたします』と宣告した。そして、議員は各自、喋り乍ら休憩室の方へ流れこ行つた。

榮一は、狐に憑れた樣な氣になつて、傍聽席を出た。そしてその足ですぐ鶴子を訪問して議會政治

徳田氏は、議長を連呼して居る。市長は八釜仕を連呼して居る。堀田は議長席へ近づいて行つた。そして議長席の下から、

「議長、前本を態と此に附してください。」と耳やうと、議長、前本を態と此に附してください。」と耳打ちした。

と一任して居る三等理事局長の榎本厚吉は、

『懲罰無用。懲罰無用』と叫んで居る。

然し、政友系の口からは、

『最初は井上が悪いのだ』

「井上、謝罪。」と叫ぶものがある。

そこへ市長が這入つて来た。そして番外席につくと見える。

栄一は父の議場を何とも思つて居らぬ態度にすつから感心してしまつた。

そして市長が這入つてくると、議席はまた馬鹿に靜かになつた。そして懲罰問題も、謝罪問題も忘れたやうになつて、凡てのものが議席に返つた。井上は、自席の机にもたれかゝつた儘ハンカチで涙を拭いて居る。

本田は番外席に坐り直つて

『懲罰無用』

と叫んで居る。

その態度が如何にも癪に障つて、權威があるらし

や、同じく辯護士で市會議員の河井の子供がよく出來る。勿論貧乏人の子供でよく出來るおとなしい谷本と云ふ子供などもあるが、衣服の穢い子供は矢張り出來が惡い。それで榮一は此處にも社會改革が必要だと思ふた。榮一は自己の案出した學習心理を應用して、注意力の集中と趣味と『繰返し』と、言語中樞と視覺に訴へる爲めに隨分注意した。然し教室の喧躁は取れなかつた。それは教室の狹いためと、心理的能力の違つて居る各種の子供を一教室に追ひ込んで教へる爲めであつた。

榮一は自分の教室を『豚の教室』だと呼んだ。それで榮一は石井常次が自分の教室に居る間は完全に授業が出來ぬと思ふた。然し首席訓導にも又は校長にも訊す勇氣は無かつた。あまり榮一の教室が八釜敷いので、隣の四年の教室に居る師範出身の澤村と云ふ男が覗きにくる。『君靜にさしてくれないと困るよ』と云ふ。

毎週月曜に開かれる教員會議で首席訓導と校長はたゞ『訓練、訓練』と云ふことだけを繰返す。榮一はそれが自分を指して云ふのだと思ふと頭があがらなかつた。それで首席訓導はどんな風に教へて居るかと覗いてみると女生徒の四年生が、靜かに授業を受けて居る。感心する。然し榮一は女生徒であれば あれ位の靜肅は保たしめ得るとも思ふた。

教室は毎日八釜敷かつた。それで校長が臨席する樣になつた。然し校長の臨席位で石井常次は沈默

のつまらぬことと、四十人足らずの市會に二人までで女郎屋の亭主が居ること、議場に於ける父の偉大なことを讃美して居た。

翌朝、食事の席に、榮一は一寸、父を賞めた。之は榮一が父を賞めた初めてゞ有つた。それに對して、父は『さうかおまへも來て居たのか』と答へたのみで有つた。

十六

小學校と云ふ處は妙な處である。

榮一は尋常二年生の乙組五十三人を受持たされたが、低能兒の多い組であつた。榮一が黒板に何か書いて居るとすぐ生徒がわい〳〵騒ぐ。車輓の子供だと云ふ石非常次は年齢も十一になる小僧である。狂暴性と云ふものか注意力は少しも纏ら無くて、机の上に平蜘蛛の様に擴がつて一机がこの兒には低く過ぎるのである——視を出してみたり、鉛筆を噛ぢつてみたり、雜記帳に樂書してみたりして居るかと思ふとすぐ隣の石板を取り上げる。隣の兒が泣く。全級の生徒が騒く。榮一はほと〳〵閉口した。

組で矢張りよく出來るのは中流以上の子供であつた。辨護士で市會議員をして居る增田尊徳の次男

の小學校の男女教員の間に出來た戀愛問題は教員間にも面白く傳へられて居た。その二人は今は夫婦になつて美馬郡の山奥へ教員になつて行つて居るそうであるが、教員仲間ではまるで死刑囚のやうに惡口を云うてゐた。

兵式體操と修身だけは八釜敷かつた。柴一はその形式的の軍國主義教育の中毒に驚いてしまつた。

柴一は小學校は彼が長く奉職すべき所でないと思ふた。然し生徒は可哀相であつた。世界的に偉大になり得る國民が今日むざ〳〵とその芽生え時に殺戮されて居ると考へれば堪らなかつた。

ミールやニソフヰアとエミールの戀愛教育を思ふと、自分と鶴子の戀愛が幸福なものであることを自ら祝福して毎晩會ひに行つた。

柴一は自分の戀の成功を喜んだがまたふと何だか小説じみた悲哀の情緒が湧くので戀の趣味が一層增した樣に思はれた。

十四時間の苦痛を贖ひ得ると信じて絶えず鶴子を訪問した。もう一月すればまた別れねばならぬと語る一分は二

しなかつた。それで榮一が榮一を侮辱するやうなことを云ふ。然し榮一は澤村と首席訓導の林や林に變態心理がどんなものだかわからないものだと考へたからだとしてあきらめて居た。

教員生活は愉快なものやなかつた。殊に教授細目の作成に至つては沙汰の限りであつて甚く勇氣だに無かつた。榮一は日本の小學校は人間を殺す處だと考へた。

る、榮一は尻から五番目であつた。榮一よりつまらぬ男教師二人と女教師一人と、月給一圓や五十錢の差で二十六人の教員が皆階級を異にして居の若い何にも知らぬ男教師二人と女教師一人と、福島小學校校長の長りで今年の四月に中學を卒業したた十九になる高年の四人であつた。

然し實際の學力では各先生中榮一に肩を並べ得るものとてはもし。科學でも宗教でも社會問題でも文學でも藝術でも讀めない本とては無かつた。それで榮一は授業の休憩時間にも獨逸文の哲學書などを讀んで居た。

それで首席訓導も澤村もあまりいぢめなかつた。同じ教員室に居ても女教員と男教員と話をすることは稀であつた。それをすることは罪を犯すことのやうに皆のものが考へて居るらしい。然し去年こ

ハハ、コツコリこまんと行き會つた。こまんはもう立派な女學生で下女の樣な面影は少しも無い、そして愉快さうに笑ひながら、

『お晴びに？』と榮一にお晴びをすることがあると云ひ出すのである。

榮一は聞ふた。

『お晴び？』と榮一は聞ふた。

『實は、私が貰女になれと勸めたのだから全く關係が無いとは言はれまいが、然し、問題は奥樣がそんな事を思つて居ると聞いたの？』

と、聞かれてこまんは赤い顏をして、

『旦那樣と道で會つて聞きましたのです』

『旦那樣が、唯今お宅へ一寸お顏に參りましたら奥樣が「榮一と伸つたので吃驚したので御座りますわ——」と答へるので、はい每晩行つて遊んで居りますと申しました。そしてお手前は？』

『ヘイ、それがどう致しました。さう云へばお梅は隱口して終つただらうには「と榮一は頭いい言葉を並べ立てた。す

然し、それ程頻りに催促するのに、其の理由を書かないのは、何か別段の事情があるのではないかと、疑念を抱かずにはいられなかった。

其の翌日、即ち六月十日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十一日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十二日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十三日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十四日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十五日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十六日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十七日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十八日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月十九日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

其の翌日、即ち六月二十日の夕刻であった。突然一人の見知らぬ下女が、一通の手紙を持って来た。其の手紙は、昨日来た女からのもので、それには、今日一日待っていたが、とうとう来なかったから、もう一度来てくれるようにと、書いてあった。

人しか入學の許可をして呉れませんでしたの。』と云つて人が通りかゝるかと思つて通りを見て居る。

『そうですか？　それは善かつたね。實際此頃の高等女學校の生徒などは云つても宛になら何しろ自分手に勉強して滿足する人が一番豪いのですよ。僕などもと云ふことをかしいが、僕など眞に教へられたことと云ふことは少しだね。君なども滿足して。

ば駄目だよ。』

『はい。有難う御座ります。若し那とは少しか御付き合ひ致しませぬが色々と受けました御恩は眞に忘れません。屹度御恩返しいたします。』

『御恩返しとかなんが何とか、えらい歌舞伎めいて來たね。御恩も何も有つたものじやないっ君、今五十年して見給へ、下女とか云ふ事は昔噺になるよ。今の中に看護婦にでもなつて人に笑はれ無い様にして居るが榮一は反つて視線を浴せかける。

『それでも、あなた様が居らしやらなかつたら妾は看護婦などには夢にもなれませぬわ』

『そんなに拝まなくてもいゝじや無いかね。』

る」こまんは手に持つて居た更紗の風呂敷で顔を蔽ふて、

『オホヽヽ、そんな嘘が云へますものか？　オホヽヽ』と笑つた。

『然し一寸は假物だから、逆につたら合點することがあるものですよ。』

『それでも……オホヽヽ』

『僕は君とは係があると云はれたら嬉しいよ。』

『君と那の御冗談じやありませんよ。ホヽヽ。』

『目の娘人に差支へますか？　それじや關係があるとは云ひますまい。が僕は思つて居無いから其積りで心配し給ふな。なにお梅の野郎がどう云つたとてそんな事は氣にかけ給ふな。それはそうともう入學が出來たの？』

『お陰樣で。』

『そら都合が善かつたね。勉強し給へよ。凡ての女の人は僕が君によく云つた樣にフランシス、ウイラードやナイチンゲールの樣な人間になれるのだからね。』たとひなれなくとも立派な子供のお母樣にはなれるのだからね。』

『精々勉強はして居ります。今度の入學試驗にも高等女學校卒業生許り應じましたがね。その中で二

『吉三郎。眞に朝は忽しいな。若旦那の様に朝が遅いと困るな。徳那にまで遅く本を讀まれると困るな。精々七時までに切り上げて貰はな、な。』その云ひ方が面憎い。吉三郎は笑つて許り居た。

『これでも下女が二人も居つて、若旦那に一人だけ、附けて置いて、若旦那お獨りのお雜司から何からすつかりさせたらな善いのじやけんど。女中が居らん上に八時頃まで雜司を待たされると一寸困るな。な。これ吉三郎。』

『へエ、へエ、……』と吉三郎は唯榮一の顔を見て笑つて居る。

『榮一様、昨日こまんさんが來ましてな。若旦那によろしくつて云うて居りましたでよ。』

『そうですか？　それはどうも、有難う御座ります。』と輕く答へて、お梅を相手に爲なかつた。榮一が怒るであらうと思つて揶揄つたにあまり答への輕いので、

『若旦那は昨日こまんに逢うて色々面白い話が川來ただらう、な。』吉三郎。『榮一は別に驚きもしなかつた、吉三郎がお梅に告げた事だと思つたから。

『女中が居らんので奥や吉三郎が困つて居るのは、脇から見たら面白うて小氣味が善いだらうな。』奥様がむづかしいからその間じや』とこまんが云つて居つただらうな。榮一様。』

『そう云つて居りましたか知らん？』

『ほんとに、若旦那は善いお人ですね。それに何故あんなにお父様が可愛がりなさらぬでしようね？』

『善い人だ？　人を馬鹿にしてるね。僕はもう失敬しますよ。歸つて少し勉強しなくちやならぬ。』

『それじやまたお目に懸ります。』と二人は立ち別れた。が、こまんは別れて一町許り行くと吉三郎が風呂敷包を持つて向ふから遣つて來るのを見た。吉三郎はこまんが誰れと話して居たかを聞いた。若旦那とだと少し顏を赭らめ答へると、吉三郎は苦々しく笑つて通り過ぎる。そして二三歩進むと、

『をかしいな！　誰やら。』と振り顧つて叫んで置いて道を急いだ。

翌日の朝榮一は平常の様に、父やお梅に遲れて食事しようと八時十五分程前に二階のスタデーから下の臺所へ降りて來た。榮一は朝の五時頃から大抵三時間讀書する習慣がある。一

と、お梅は變な顏をして『流し』の前から、

『お早う、今日はいつもより遲いのですな』と云ふ。

『いえ、平生の通りで御座りますよ。八時前で御座りましようね？』

『八時ですか、もう。私などはもうちやんと六時半頃に朝の御飯をすましてそれからお雜司にかゝつて居りますのですよ……雜司が怠しうて困る。はや、二時間も御雜司許りして居つて。』

吉二郎も怜悧板の間に飯を食つて居たが、お梅は吉三郎の方にむいて、

また榮一は怒らぬ。

『榮一様。今日はお辨當が出來まへんでよ。益則さんのが澁う出來兼ねた……』お梅は益々脅迫して來た。が榮一は何とも考へて居らぬ。

『ア、澁う、雜司がすんだ。もうお雜司がいやになつた。榮一樣、私はもう嫉を梳き付けんならん程手を煩掛けて拭いて居る。吉三郎は食事が濟んでお膳の盛を頂いて居る。ア、忙しかつた。』と言ふて流しを立つて奥へ這入らうとして、『よろしく』と冷かに笑つた。

榮一も云はれた通り靜かに膳を『洗し』に『運んだ。』お梅は榮一がどうするかと思つて、立つて見て居たが、茶碗を洗ひながら笑つて居る。お梅は心細く、

『可笑しい人！』と低い聲で嘲つたが、榮一の耳には這入ら無かつた。笑ひも止ら無かつた。

その時、茶碗を洗ひ終つて桶から取り出す處であつたが、茶碗は碎けた。榮一は、

『アレ、ほんまに、可笑い人じやな』とお梅は再び繰返した。此の嘲罵の聲が今度は少し耳に這入つた。

石めがけて投げた。茶碗は碎けた。榮一は、茶碗取り上げ榮一は、粉微塵になれと敷

『小氣味が善いは、そら、お父様や弟様が困るのは。そして私の様な駄性たれ目が、此頃は毎晩毎晩、あの可愛いこまんさんと、打ちくつろいで話が出來るだらうな。』

『そうですね。こまんは綺麗になつたから、嬉しい御座りますよっ。』

『綺麗になつたから嬉しいだらうな。』

『嬉しい御座りますよ。ほんまに水仕は毒じや。私が早や七日で手や顏の艶がなくなつてしもうたもの。なそら、水仕奉公をして居つたら綺麗な人でも穢うになるはな。宅に使はれて居つたけん小まんも穢なかつたのじや。これ、恁麼に荒れて來た。どうでで。』

『吉三郎。そうだらうな奥樣の手のきめを見なはれ、榮一は心の中でお梅の小さい根性を嘲笑して居た。併しお梅には足る程惡口を云はされて遣らうと思つたから、小言を云はれて甘くも無い飯を出來るだけ落付拂つて腹一杯食はふと決心して居る。

『な、吉三郎。これから女中が居らん間は自分手に御飯を焚いて自分手に食ふことにせんで自分だけ本を讀んで居れば善いと云ふ人があるけん……』

決して思はぬ。が、父を之等の諸點に就いて納得させるには尋常一様の手段じや駄目だとも考へた。

海の様な寛容で、女遊びも惡妾も、笑つて許して遣りたい氣もした。然しキリストの様な熱と血の流れて居る多くの聖徒を思ふと、また『否、否。』と反對せねばならぬ様に思はれた。

一緒に住んで居ると、突然父を摑へて諫めるのも何だか變な氣がするので、延ばし延ばして三十日も過ぎた。諫めると云ふ事はなか〳〵出來ないものだ。

三日斷食してゐる何處からか知らぬが歸つて來た晩、父とお梅が長火鉢を間に置いて煙草を吸ふて居るのを見付けたので、折もよしと榮一は二人の前に現れた。

『唯今歸りました。』と榮一は手をついて平氣で謝した。

父は默つて知らぬ顏をして居る。お梅は愕いた顏をして、

『お歸り。宅ではどんなに心配して居つたかも知れまへんで？』

『いや一寸考へることがありまして――』

父は威張つた口付をして榮一を一寸と顧て、

『榮一、貴樣の様な不孝者は無いぞ……善く考へてみい。』と冷い落付いた口調で云ふ。一座は暫し身

『ア、破壊れた。アハ……。』と夢の様な軽い笑ひを洩した。お梅は、
『吃驚した。危ない。ようまア妾の日にでも破片が飛んで来なかつたものじや。』と云つて奥へ這入つた。
榮一は學校へ急いだが、その日の授業を面白くすまして何處かへ隠れてしまつた。三日許り家に歸らず、何處にも行かなかつたのでも無い。勿論こまんの處に居たのでも無い。鶴子の處に居た。
三日目の晩方貞吉の生氣の無い痩せた顏をして歸つて来た。歸つて来た時一人の女中はこまんの代りに臺所で忠實に働いて居た。
鶴子は榮一に決して父に反抗してはならぬと勸て居たが、然し榮一は鶴子の寛容は、ルーテルのプロテスタンチイズムを帶びた近世的色彩が無いと考へた。そして父の反省を促す爲めに自分が氣狂ひになつても善いと考へて居た。諫めて駄目だとは決して思はぬ。榮一は一々父の反省を促すべき事を數へて『第一反省を促すべきは金その者の價値に就いてである。第二は株式の一攫千金の夢である。第三は市長の價値そのものである。第四には女遊び。第五にお梅と本妻と自分等子供の所置を明瞭に付けて貰ふ事である』と思ひ惱んだ。そして父は必ず自分の様な心になれると考へた。彼は駄目だとは

は泣いて居たい。そして、も一度『お父様』と呼んだ時事をしなかつた。

榮一は涙をハラ〳〵と流しながら、

『お父様、一生の御願ひで御座りますから、私の云ふことを御聞き下さい。』と指ゆびを終らぬうちに咽んで語尾を明瞭にゴふことが出來なかつた。お梅はたゞ四日前悪口をつたのを氣にして榮一のだし出すことの遲いのを苛つた。

少し過ぎて榮一は顏を上げる勇氣もなく、

『お父様、榮一はお父様の眞の子なのですか？——私は何故か知りませぬが心の底からお父様を愛する事が出來る樣にと思つて、日に日に泣いて許り居ります。然し心から底から愛する事が出來ますれば大膽山で涔へて參りました——どうすればお父様を眞に愛する事が出來ろかと思ひまして。世界に何か人間の心と心を繋ぐ糸筋の樣な物があれば、その不思議な力でお父様の胸へ私の傾向いて、泣きながら沈默した。然し胸の中は空つて來たのです……』と云つて、も一度『お父様』と呼んだ時、榮一は涙をハラ〳〵と流しながら、

『お父様、榮一は何故か知りませぬが心の底からお父様を愛する事が出來る樣にと思つて、日に日に泣いて許り居ります。然し心から底から愛する事が出來ますれば大膽山で涔へて參りました——どうすればお父様を眞に愛する事が出來ろかと思ひまして。世界に何か人間の心と心を繋ぐ糸筋の樣な物があれば、その不思議な力でお父様の胸へ私の傾向いて、泣きながら沈默した。然し胸の中は空つて來たのです……』と云つて、も一度『お父様』と呼んだ時、榮一は涙をハラ〳〵と流しながら、

『お父様、榮一は何故か知りませぬが心の底からお父様を愛する事が出來る樣にと思つて、日に日に泣いて許り居ります。然し心から底から愛する事が出來ますれば大膽山で涔へて參りました——どうすればお父様を眞に愛する事が出來ろかと思ひまして。世界に何か人間の心と心を繋ぐ糸筋の樣な物があれば、その不思議な力でお父様の胸へ私の傾向いて、泣きながら沈默した。然し胸の中は空つて來たのです……』と云つて、も一度『お父様』と呼んだ時、榮一は涙をハラ〳〵と流しながら、

『お父様、榮一は何故か知りませぬが心の底からお父様を愛する事が出來る樣にと思つて、日に日に泣いて許り居ります。然し心から底から愛する事が出來ますれば大膽山で涔へて參りました——どうすればお父様を眞に愛する事が出來ろかと思ひまして。世界に何か人間の心と心を繋ぐ糸筋の樣な物があれば、その不思議な力でお父様の胸へ私の傾向いて、泣きながら沈默した。然し胸の中は空つて來たのです……』と云つて、

『——』誰める？

阿諛腐な眞似をする！

重盛時代には泣き聲であつた。然し父は二度か三度まで返

た價値もあつたが、二十世紀には父を諫める男は

動きもしたかつた。

然し榮一は、厳格な犯すべからざる態度を取つた。父は周章て、長火鉢の端にもたせて。

榮一の動作には無頓着な風をして居る。お梅もそうだ。然し二人とも心の中ではどんなことを榮一が爲出かすか知れぬと思つて心配して居る。

が榮一は中々、容易に口を開かぬ。その高慢な王様氣取りで居る様な視線を父に浴せかけて居る。

父は自然耶が嵩じて来て恐ろしくなつて来たから、

「榮一、貴様は氣が狂つたのか？　どうしたのじや？　已に向つてその生意氣な態度は一體何ぢや？」

と、叱つたら、

お梅も、

「榮一様の口付き、いやな口付き。そんな、いやな目付き、なさるな」と苦しい笑ひと共に榮一を制止せざるを得なかつた。

榮一は急に和な笑をその白い痩せた頬に浮べて、喜びに充たされて居る様な瞼の使ひかたをして、

『お父様』と女の様に愛らしい聲で低く云つた。そしてまた續けて『お父様』と父を呼んだが今度の聲

が『凡てが過去に冷かであつた。父と本妻の間の關係を現在に溫く甦らそうとして居る。父は既に五十六！　そして三十年間も本妻と離れて居るのである。三十年を取り返す事が出來るだらう。いや始めから情も熱も無かつた。……然し云はずに濟ますことはできない。情も熱も取り返す事が出來るだらう。』と頭を惱ました。

『自分も妾の子の癖に何を云つて居ると』と心の中で榮一は自らを嘲笑した。今日はいつもの火と違つてよくものを云ふ——

『默れ！』榮一。生意氣なことをぬかすと承知せぬぞ。お久にはお久だけの食ふものをあてがつてあるではないか？』

お梅はつゝと立つて便所に出て行つた。榮一はその大きな丸髷が醜く見えた。お梅の後ろ姿を見送つて、稍穩當に、

『私はお父樣に叱られても申しにげる事だけは申上げます。少しの間だけ御辛抱して聞いて下さい。もし聞いて下されば私はもう死んでも宜敷う御座りますね。お父樣、私の一生のお願ひで御座ります。お父樣。馬詰のお母樣の御話によればお父樣は此頃非常に株で御損をなされたそうですね。お父樣、私の一生のお願ひで御座ります。何卒投機だけはお止めなして下さい。話によれば馬詰の家庭敗も指折當に入つて居るとか……お父樣、これを

一人も無い、家を出て女と食付くとそれで善いのだ。近頃の小説に父を諫めると云ふ様な陳腐な眞似をする主人公は一人も無いわい。……』と哄笑の聲が起る。

それをうち消して榮一はまた。

『お父様……』と呼んで『私はお父様。どうも申上げねばならぬ四つ五つのことがあるので御座ります。失禮ですが、お父様は御自身で此頃の生活を人間の道を渡つて居らつしやるとお思ひなさいますか？　私はどうしてもお父様の此頃の生活は人間の道を眞直に渡つて居らつしやらないと思ふので御座ります……』

父は頭を垂れて居るがお梅は知らぬ顏をして煙草を燻して居る。

榮一はまた言葉を繼いで、

『私は田舍のお母様に對して無慈悲だと思はざるを得ないのです。』

『そうです、無慈悲です。全く無慈悲です。生きた可愛い女を墓の中へ生き埋めにすると云ふのはお父様の事です』と榮一は云ひ放つた、然し彼は泣いて居る。

だ。本能が此へろ事が出来たなら此悲劇は起らぬ。がかつたら誇かつたのだ……運命だ、運命だと思ふと彼は何の責任をも感じない。

『それじや、お父様その御自分の金と云ふのを見せて貰ひましようか？　お父様は新児家の財産は盗んだのではないから安心して哭れ。』

かう激烈に詰めかけられてはたまらぬ。

『云ひたいだけ云へよ。然し新児家の財産は盗んだのでは無いから安心して哭れ。』

『何とでも云ふとも怎那大きな家はよう自分手には建てまい。賭博うちなら賭博うちでも語い。お前が何程家ら相に云ふとも怎那大きな家はよう自分手には建てまい。賭博うちなら賭博うちでも語い。お前も怎麼大きな家に住めるやう様になれえよ。世界には豪い泥棒もあつたもんじや。――』

『泥棒なら盗賊でも語いわ。お前も怎麼大きな泥棒でも盗人でも語いわ、よ。お前も怎麼大きな泥棒でも盗人でも語いわ、よ。お前も怎麼大きな泥棒でも盗人でも語いわ、よ

新兒家の先祖に對して何と申譯をなさいます？』』榮一は急に儒者になつた樣な氣がした。

『わしがどうしやうと勝手ぢやないか？　お前等の知つた事では無いわ。生意氣な子供が何をぬかすんだ。それじや已をどうする積か？　勝手にさしてやるわ。もう已も年が寄つて役に立たぬからお前の勝手にさしてやるわ。』と父は云ひ放つた。

『あなたは自分の金で自分が賭博打つから許いと仰りますか？』と榮一は父に向つて失禮だと思つたが元氣づけて云つた。

『ウム、貴樣等生意氣な書生が何を知るか？　貴樣よくも親から今日まで養はれて居て親に向つて、そんな生意氣なことが云はれるな――』』父の額に靑筋が立つて居る。父は火鉢によつて俛いて色々と將來を考へて居る――

こんな郷に家庭の亂れるのも皆運命だ。十六の時に養子に行かなければならなかつたのも皆運命だ。彼は新見家に養子に來無かつたなら唯大津村の酒屋の次男として世を終ら無ければならなかつたのだ。そして新見家が無ければ決して學問も出來なかつたし、運動の金も出來なかつたらう。がお龜を妾にしたのは抑へる事の出來ぬ情熱からだつた。そしてお梅を入れたのも抑へる事の出來ぬ本能の命令に從つたからであつた。お龜を入れた時にお久が反對をするが。お梅を入れるとお龜の子が反對をするが。皆運命

お父様は何故お母様が死んだ後にすぐお梅を引ぱり込んだのだらう。』と柱に倚りかゝつて獨り言を云ひ初めた。

榮一は内分手に、氣狂ひの眞似をしてゐる事に氣が付いて居る。妹が折々氣狂ひの眞似をして本妻を困らすと云ふ事も思ひ出して居る。然し妹の氣が狂ふとは云はれる時の心理狀態は低廉時をこふのかと思ふと同情する。氣が違ふと云ふのは高熱の心理狀態が普通の人より永く續くのだと想像する。

そして此高熱の心理狀態の處が何となしに淸々して抑壓したくない程面白く感じられる。

『お父様。私はお父様を愛して居るのです。』と鶴子が忽に乘り移つたかと思ふ樣な氣がしたので、鶴子のだふ樣な女句調で、すろのが嫌ひです。』と云ふた。

『私は何故お父様に嫌はれるだらう。私が明治學院へ入學したのが惡かつたかしら？　然し今頃の樣な眞逆つた世の中で誰が官吏や辯護士になる馬鹿があらう。私が明治學院から歸つたのが惡いのだらうか？　ア、然し今頃お父様は理由も聞いて下さらずに私をお責めなさる？　然し私は……そうじや。もう云ふまい。僕は勝手に勉強しよう——』と大きな聲で自問自答した。榮一はこれだけ云へば父に解るかと思つたのである。

前は長男だから口がきけると思ふと違つて居るぞ。近い中に從則に相續權を讓つて了ふ積りで居わ……こちらでは。お前の様な賢い人には泥棒の家を繼ぐ事は出來まい。な。否だらう。また纏がぬわい。な安心した方が善いだらう。』

『いや私はお金の一文も他人から貰ひたいことはありません。相續權などは勿論從則が相續したければ悦んで讓りませうよ——。』と、云つたものゝ榮一は涙も涸れ、善の標準も無くなり、唯鐵で作つた機械が胸の中に運轉して居るのでは無いかと感じた。

『お父様。あなたが私のお父様ですか？』と忙然した問を發した。また之れだけしか發せられ無かつた。父は榮一が氣違ひの様な變な顏をして此妙な問を發するので。

『已はお前の父じや無いわ。』と云ひ放した。

榮一は頭が變になつて來たのだが、別に自制しようとも思はず。

『ウアー。アー……』と泣きたい様な笑をして、日には涙を泄へ、『お父様』とまた父を呼んでみた。

そして立ち上りながら、

『お父様は何故私を可愛がつて被下らぬのだらう。なぜお父様は榮一を可愛がつて被下らぬのだらう。

かと見てゐた。榮一の顏がお龜の顏に見えて口の先にちらつくのである。

十七

家を出て久し振りに鶴子を訪れた。鶴子は榮一の顏の變れたのに驚いた。原因を尋ねたが榮一は答へ無かつた。榮一は初めから熱烈なキッスでも與へられたら答へもしたであらうが、何だか行儀作法の眞似をして居る樣に思つたから云はなかつた。またその瞬間に鶴子は自分に根本の同情を與へ得る女では無い。鶴子は近世的男性とかふものも知るまい、たゞ田舍者だから。と考へたので、沈默して居た。

榮一は戀人とかふ者も無意味であるとかふ氣がした。矛盾した世界に何の戀の甘味があるかと頻つた。然し戀は疑つて益々甘味のあるものである。憂ひの戀！　之程奇しい物は世界に無い。榮一が

あまり沈默して居るので鶴子は熱して來た。そして共手を取つた。然し榮一は戀の興を湧かさうとはしなかつた。今日は戀を嘲笑に來たのだとかふ氣がして悲痛な情が燃えた。手を振られて大嶺山の森の中の三日間を。三抱へもある杉の森の中の小の中を思ひ出す……あの天狗が居ると云はれて居る森の中の三日間を。三抱へもある杉の森の中の小さい祠の中で三日斷食して默想した事……夜更けて杉の枝に風が强く吹き付け、十日頃の高い月が白

父は先きから何を感じたか頭を俯瓶とすれ〳〵に置いて泣いて居る。が、榮一の態度に何か超自然の力がある様に思はれて恐ろしく感じて居る。

お梅は縁に出て立ち聞きして居たが、二人が沈默したので這入つて來た。すぐ榮一様に氣が狂つた様ですわね。』と長火鉢の前に坐つて煙管を入れた箱を膝の上にのせて、長煙管を取り上げながら云ふた。また平氣な調子で吸ひ初める。

榮一はお梅の下品な態度を見て、

『フン』と鼻で嘲つて、家を出た。鶴子を尋ねるのだ。

お梅は旦那が泣いてゐるのを見て、大きな聲で笑つた。

『旦那さん、何をお泣きなはるので？　馬鹿々々しい。榮一様さんの仰る位の事が何だす。私なぞ爪の汚とも思つて居りやしまへんむ。旦那それじやけんいつも云つて居るでへんか？　早やり別嬪さんを榮一様に世話してあげなはれつて。別嬪さんを側へ付けて置いたら、旦那に一言も仰りはしません わ。旦那は妾の云ふとほりになさらずに、自分にお困りなさるのですわ――』と得意になつて論ずるやら慰めるやらする。

父の善一は唯過去を追想して默つて居る。折々、便所の方の縁側から榮一の母の幽靈でも出て來ぬ

一は自分の唇を鶴子に近づけて、

『鶴子様。世界の捻が少し狂つて居るよ。北極星が二十三度半傾き過ぎて居るのですよ……』と低い哀れな聲で云つた。鶴子は何の意味だか充分解ら無かつたので唯默つて居たが。鶴子は何の意味だか充分解ら無かつたので唯默つて居たが、亦自分に對する柔和な親切な愛と同情に云ふに云へぬ紙高い秀でた、普通の基督教信者より勝れた徳を見出して居るので、多分また何か他人の爲めに苦しんで居るのであらうと思つて居た。鶴子はキツスをした。そして憂ひを帶びた低い聲で、

『どうなしたの？』と伏目になつて訊ねた。

『鶴子様はいつ廣島へ行らつしやるの？』

『私？』と鶴子は顏を斜にして、

『わたしね、廣島へ行きたくないわ——』

『なぜ、あなた、夫では、此頃そんなに悲しそうにして居らしやるの？　妾はあなたを捨てゝ廣島へ行くのが何だか心元ないの……』

『私も鶴子様に別れるのは嫌ひよ。私は鶴子様が廣島へ行くと私の傍に居てくだされる、それじや？　私も鶴子様に

分の坐つて居る祠堂の中を覗き込む其瞬間、眼をパツト開いて、淋しい歌声に充され乍ら月を見上げた時の感想を思ひ起す。その時は世界に戀など云ふ『我』の這入つた劇は演じたく無いと思つた事を回想ずるっ『然しっと考へて人間の溜つた苦悩の中にもあの高い會話の中にも鶴子の調子の高い大きな松の梢を渡る風の音の神秘が通つて居ると考へると、頭を仰けて鶴子を見上げたいろと眉の間の輝いて居るのは何の爲めであらう。がまた鶴子を抱くのは何だか子供に戀する様な氣もせぬではない。』あの大瞳山の森を渡る嵐を一言葉で靜めた時、高く光る月を一寸と手を擧げて光を消し出した時それが眞の詩であるまいか？』と思つたりすると馬鹿らしくて鶴子が立ち所に消えて自分の幻の側に居られぬ。

榮一は鶴子を抱いて眼を閉ぢた、そして鶴子の幻の中に現はれて來るなら、然しっ幻の中に鶴子のつけて居る香水の薫りが匂ふ許りだ。

榮一は想ひから想ひに移つて、全身の血脈が皆幻でありだと心にきめた。客觀は最早や實在で無いっ世界は凡て狂つて終つたっ

との関係は毎度云つた通りでしよう。もろね鶴子様……どうしても近い中には破裂するのですよ。』

『どうしたの？　破裂つてどうしたの？』

『私はもう相続権を取られて了つたの。』

『誰方に？』

『お父様は徐則に譲るのですつて。』

『お父様もう。』

『非道いのねお父様も。』

『ね。節子様。東京に居つては貧は充分送つて呉れず。歸つて来ては。繼子扱ひにせられるつて。』

『ほんとにね、同情致しますよ。』

『僕は何にも準禁治産者にせられるのはつらくもありませんがね。お父様の僕に爲てしやる通りやおうちに居れませんか？』

『それでもあなたの爲を思ふのですの。』

『お……父様はそんなに貴君がおいやなの——それじやしやうがないし會に爲し居らりしやるのが悲しくて堪らないのですよ。』

『此儘居れば父に殺されるより外は無いと思ふのですの？——それであなたはどうなさるの？』

『殺されるね？　あなたが殺されたらどうしましよね？』

云つても遣ろまい？』

『ア、私も行きませぬよ。』

つて、行かう。』

『いゝえ。』

『その前は風呂へ水を入れて貰つたりお使に行つて貰つてね。私あなたに、沸みませんか。』

『なぜ？　私、貴女の爲めなら生命でも捨てますよ。』

『それでも妾は、妾の可愛い人を使ひたく無いものゝ。ぬ、神様でも切れ無いのよ……』

『それはさうと鶴子様。私はもう近い中にお父様の内を出る積りなのですよ――』

は驚いて、

『どしたの？』

『實はね。怒つちやいけませぬよ。皆云つてしまふから。今またお父様と喧嘩して來たの――』

『喧嘩を？　妾が喧嘩をしなさるなと云ふのに。』鶴子は少し曇つた。

『鶴子様、私が理由を話すまで聞いて下さいな。私とお父様

お婆様の聲が聽つて、降りて行かねばならぬようになつた。

榮一は窓を開いて色々と考へた。もう十五日に近い月が庭を照らして柿の葉、蜜柑の葉。桃の葉が光る。近所は極く靜かで何處の家にも光は見えぬ。月の走るのが早い。門口の戸を開いた音がする、鶴子が何處かへ使に行くらしい。榮一はひとり物思ひに沈んだ……

明治學院を捨てた動機と今の無意味な生活を考へ較べると、情なくなる。そして、人生の凋落を痛切に感じる。

が、一方では今度こそ忘れを立てゝ化學を研究して大發明でもすればあゝもしたい、學校も無意味であろまい。社會改良とか宗教とか云ふ樣な空想な事を止めて、一つ工科大學へでも這入つて大發明でもやれとゝ云ふ聲が心の中に起る。……月が雲から現はれた庭には蟲々までよく遊んで遊具だ！

人間は遊ぶべきだ。科學とゝ云ひ宗教とゝ云ひ人生と云ふのは非常な無意味だ。人間は遊ぶのだ。人生は一種の狂言だ。遊ぶのが人間で、よく遊ぶのだし、道徳は小さい人形を、そして宗教は大きな衣服を製造して遊ぶのだ。これも矢張り遊ぶのだ。人生は一種の狂言だ。遊ぶのが人間で、よく遊ぶのだし、道徳は小さい人形を、そして宗教は大きな衣服を製造して遊ばぬのは畜生だ。

現代の人間は遊び方が間違つて居る。遊びかたを人間に教へる必要がある。父を諫めるのも、遊び

『近い中に私も何處かへ行かうかと思ふのですよ。』

『何處へ？』

『さ、あなたのいらつしやる處へ附いて行きましようか？』

『廣島へ？　それではお？　そしてなにをなさるの？』

『何でも善いのですよ。小僧でも、丁稚でも、百姓でも……』

『百姓？　おたし百姓婦ひ？』

『エ、貴嬢百姓婦ひ、フム、あなた百姓婦ひ？　普通の女學生と同じね……百姓程神聖な者がありますものか？　トルストイのシンプル、ライフ主義には眞理が多いですよ。』

『いや、ちよつと、いつて見たのですよ。そんなに眞面ふから攻撃していらしやら無くとも善いでしようアモスなどゝ云はれたのは百姓ですね。』と、だん〳〵解けしたが、榮一は矢張り自分の立場を辯解しようと、

『實際僕は百姓が戀しくて戀しくて堪らぬのですが、安氣な百姓許りが人生じやないと思つて居るから今は小學校など教へて居るのですよ。』

『ほんとに百姓程神聖な生涯はありますまいね。』と今度は鶴子も百姓主義に贊同を表したが、下から

鶴子は机によつて聖書を一章讀んで、下へ降りて行つて寢た。
榮一は床へ這入つたが夢許りみて寢られなかつた。

十八

この晩から榮一は頭が變になつて、強い震ひが、自分の胸に絶えず起つて居る様に思つた。
そして此の強いふるひは何物にも恐れないが、自分手に自分を顧て折々驚くことを發見した、そしてきた此の夢が眞やら眞が夢やら分別がつかない様な氣がして
が強く外界に現はれて來る時には
來る。

鶴子の宅で宿つた翌日の夕方、榮一は表庭に水打つことを命ぜられたが忽にバケツや杓を破壞したくなつたので、日茶目茶に壞して終つた。そして我と我身を不憫に思つたので涙を流して泣いて見た。泣いた後、城山の森の中へ隱れたくなつて、夕飯も食はず十二時頃まで大きな樟の木の影で泣いた。十二時頃に鶴子を起してまた消めて貰つた。

吉三郎とお梅は榮一が全く氣狂ひになつて了つたのだと騷ぎだした。
然し榮一はまたその翌日、ナイフと云ふ者は悳那綺麗な柱でも削れるものか知ら、削れるものなら

が間違つて居るからだ。と反問して自己の今迄取つて来た遊び事の様な哲學研究を辯護した。

鶴子は思つたより早く歸つて来た。鶴子が二階へ上つて来ても、榮一は知らん顏して考へて居た。

『あなた、もうおまり考へないのが、およろしいですよ。然し困りましたね。でも神様は人間がどう一厘に任せなさいな。』かう云つても默つて居るのかと思つて。

『一寸と、あなた御免なさいよ。茨があなたに反對したのが惡かつたのですか。それで御怒りになつたなら御許しなしてよ。ほんとに、あやまりますから。』と詫びた。

榮一は怒つて居るのでは無いが、十分許り一言も言葉を發せ無かつた　鶴子も知らぬ顏をして悉の棚子によつて、沈默して居る。然しまた何が泣いて居る様であつた。鶴子の泣くのを氣にも止めず榮一は胸の中で獨り泣いてみた。が、榮一は少したつて鶴子にシエレーの詩でも一緒に讀うかなど云ひ出した。そして一時頃まで鶴子が』面白かつたと云ふまで一緒にシエレーを讀んだ。その夜榮一は强られて鶴子の宅で泊つた。鶴子は自分の室に榮一の床を延べたが、鶴子が床を延べる間にシエレーの話から東京の社會主義黨員の活動を話した。鶴子は『愉快ですね』と繰返して居た。

つて夜遅くまで泣いては話し、話しては泣くのが嬉しくて堪らなかつた。

自分には別に氣狂ひになつて了つたとは思はないが兎に角、變な事を爲て居るとは氣が付き乍ら色ない[1]たづらをして四五日も早や過ぎた。

此間も或時は懐からナイフを取り出してよろこんでみたり、新しい白い倉の壁に『超然』『偉大』『仁身』『』といふ文字を大きく二重文字で樂書きしたりなどして急しく送つた。

鶴子は六月廿六日の晩十時の蒸汽船で廣島に行くことになつた。

廿六日は早や來た。土曜日であつたが、田舍から至急話したい事があるから歸つてくれと云ふ本妻の手紙を受取つた。——此手紙は既に開封せられて居た。然し別に怒りもせず、お梅や吉三郎がたとへどんな邪推をし惡計を廻らしても腑の汚とも思つて居らぬと心中大に意氣上つて學校を休んで歸つて行つた。

町を出るとパアと打ち開いた吉野川の平野。もう水田が一面に出來て世界を賑かに見せる。桴色の眞墊な色が飛び〳〵の茅葺の屋根に表はれて泰平の氣が滿ち充ちて居る。

榮一は自分の手にバケツや杓を破壞した事が可笑しく不憫になつて來た。何故すぐに惣麽打ち開けた日の照る平野に出て來なかつたか、小供じみた氣狂ひの眞似などもせずにと思つた。

一つ削つて見よう。此柱は父の贅澤のシンボルだ。削つても善いなど考へて表の床の間の檜の眞柱を二三ケ所削つて見た。削ると柱の見えが大分悪くなつたので、笑ひたくなつて笑つて見た。怎麼笑はまた、あくる朝で五日位長生きするなど考へた。意氣なり弧に挙固を一つ見舞つた。吉三郎は憎い奴じやが不憫な奴じや一度殴つて頭をなでゝ可愛がつてやりたいと思つたのでやめた。處が『若旦那、何をなさるんだんぞ？』と生意氣な口返事をするのが憎かつたから其場へ吉三郎を引き倒して馬に乘つて耳を出來るだけ引張つた。するとも感覚があつたのか泣き出した。それで、

『ウフム、アハアハ……』と笑つてみた。

が小學校へ教授に出ると、生徒が皆自分の云ふことを聞くので嬉しくて堪らぬ。それで悧口な美しい女の子を見付けると抱きしめて、心の中で泣いた。女生徒も新兒先生に抱かれるのを嬉しがつて居る。

榮一は鶴子を見る毎にじきに泣きたくなつた。鶴子の魂は榮一の掌に充分這入つて居らずに、這入つてもすぐ指の間から抜ける一種の幽靈の様なものだと思ふからだ。さう云つても鶴子は戀しいから、また鶴子と自分の關係を誰れも邪魔しようと云ふ競爭者も父兄も無いから、來る日も來る日も會

眞面目腐つて家に這入ると、母も妹も裏座敷で針仕事を爲て居るらしい、母屋には居ない。裏座敷へ榮を傳ふと、

『お前はんはほんとに鈍なの。怎麼處をさへ潜らう縫ぬので、怎麼『ヲクビ』の處こへな？　怎麼ことで居るのが聞えた。榮一は榛の外に立つたまゝ、

『お母様。今日は、御病氣は如何で居らつしやいますか？』と訊ねたが、内から障子を開いて、

『榮一様で、よく來て呉れたな。手紙は屆いたかいな。有難う。お陰で段々……』

と沈んだ様子であ

る。

『榮一様。笑さんはほんまに鈍でこまりますわ。まだ袷の一枚が獨りで充分縫えんものですからな』

『御厄介でしようが、何分によろしくお願ひ申します。『ヲクビ』を縫うて居る。

りますか？　今日は。』

『まア、内へ這入つて艶の上へお坐りなはれ。そんなに榛の先で跼まずに、今日はまア悠然なはれよ。笑さん一寸と座蒲團を持つて來て。』

笑は默つて立つて臺所へ走つた。榮一はその後姿を見送つたが、粗末な木綿着に赤い唐縮緬の帶、

また併し人間の世界に住まなければ折々茶碗の一つ位ゐ割る勇気も出て来ねば駄目だ。やないの出す必要があるの必要じや無い。それは豫定せられて居る。僕は何にも好いて好んで床の間の柱を削りはせぬ。何たか命ぜられた様な氣がして削つたまでだ。……とその時の事を回想して事情を止むを得なかつたのを辯護して居る。

「一里二里と人分我家に近いて、牛尾島の渡にかゝつた時に。

「デ、然し自然より戀人と抱き合ふ方が善い。いやさうでもない。自然の戀人と一緒にあると氣の立つことも無いが。いや戀人と二人で淋しくて堪らぬ勿論獨り居ると氣の立つことも無いが。荒野だから別にとがめる人もなし。お梅や吉三郎の様に悪口をふ人もあるまいし。さうであつた。鶴子と二人で出かけたら淋しかつたに。いや〳〵鶴子は馬詰村には恥しくて歸れぬ。アヽ、鶴子が戀しくなつた。鶴子が戀しい、僕は鶴子にどうしても一日會はずには居られぬ。今日はどうしても歸つて行かう。明後日、出發するのだから一時間でも多く顏を見て置かう。

など考へながら歩んだ。

戀人の家屋敷の跡を見た時一寸と立ち止つて、『鶴子様』と口の中で云つて、自分の家の方へ歩を運

『いつ、そんな事を云つて来たのです？』

『何時つて、一昨日、龜公が町の方から出て来て早や布れて廻つたのですわ。町の自分の内に多く居るけんない。内には何にも知りませんわ。處が昨日になつて新旧の方の連中が揃ひで内へ遣つて来て不服をとなへるでないで——そら恐ろしかつたでよ。恐ろしかつたな。』と茶を持つて来た、笑をも話の中へ引張り込む。

『兄さん、どんなに恐ろしかつたか知れませんぜ。』

と、應じて縁側の櫺嬪を伺つて居る。

『一體どうしたのです？』

『どうのこうのつて。皆玄關へ並んでな。さう、笑さん何人居つたいぞいな。八九人も居つただらうな。』

『さうです。十人も居つたかも知れまんない。』

『十人も？』

『十人も来たのですか？』

『それがな、默つて、旦那様に御目に懸りたう御座りますと云うて落ち付き拂つて、玄關へ皆つかつかと上つてくるでないで』

下手に着物を着て居るから細帯をしめて居るあたりが格別否らしい。髪は乱れて首筋には汚れが黒くついて居る。大きな足をバタ〳〵と音をさせて走つて行く様は、自分と兄弟だと決して思へない。

『え、有難う。然し今日は一寸と異つても跡ね。』

『第一様、いつに無い今日は妙な事をいふな。今夜は泊つてお出でなはれ。妾も此の具合もよし、今日も態々に起きて坐れる位ぢやけんな、今夜は悠然とお話うと思つて居るのじやがな。東京の話でも——』

『いや然し是非とも今夜は跡らねばならぬことがあるのです？』

『さうですか？　用事つて、どうせ川事なのでせう？』

『別に用事と云ふ用事でもないのですが、お友達が此二十八日に廣島の方へ行くので話せねばならぬことがあるのでして。』

笑が滑稽を持つて来た。

『さ、お敷きなはれ……笑さんお茶を……さうですか、その様な用事なら別に止めは致しませんがな。妾の今日染一様に来て貰ふた川事といふのはないが。外の事でもないが、お父様が今度急に秋の年貢を四分方引き上げると仰やるのでない……』

代立てる時に御年貢御上げになるならなると仰しやつて下されば私の方でも考へが御座りますが、もう稍も大きくなりまして肥えの二回もやりました時分に四分上げると仰しやるやうなことでは私共の方ではどうも仕方が御座りません。無理を申しますと警察の方からお廻しになるでしょうから御恩返し致しますから何卒御内儀の方から、無理御やめなさりまして下さいまし。然し善くまア私達の様な貧乏人を御困らせなさりますなら無理を申します。どうせ警察から年貢を取り立てこちらも無理を申します。どうぞ官敷御内儀の方から、町の旦那の方へお傳言を願ひます。あなたの方から警察の御厄介になるでしょうから、私は胸痩が悪うなつて来たでよ。何んぼ女でも。』

と思うて調子を降ろして云ふで無いで、私は胸痩が悪うなつて来たでよ。何んぼ女でも。』

『へエ、恐い事が起りましたね。』と紫一は別に驚きもせず笑つた。

『ほんとに恐ろしかつたでよ。それで、すぐ十人には縛られたら如何しやうかと思つたでは。男は居らず私は病人なりな。三人が三人ながら殺されるわな。ぢきに。』

と、稍誇張して、

『フム、お父様は非道い事をしますね。』

『こちらが困ることを知つて居つて、こんなことをするじやけんなっ ほんとに困つたな。』

『誰れが出て行つたの？』

『私は恐ろしかつたから出て行かなかつたがな。初め女中が出て行つたんだすわ。そして後から笑さんが出て行つたでわ——な、笑さん。』

『そして出て行つたら？』

『旦那様はお留守で御座ります』といふ返事がありましたら？

『お母様。それでどうなさるの？』

『それで、おまはんを今日至急來て貰うて、おまはんに相談しようと思つて居つたのですわ？』

『さ、然し、私がどうこうつて困りましたね。』

『然しどうかせな。一體龜公が布れたつて、眞だらうか？』

『嘘の様ですね。然し嘘であれば、そんなに怒つて來る筈もありますまいぬ。お父様のことだから眞でしやうよ。利子の拂ひが出來ずに困つて居るのでしよう。』

と、半分冗談にして、

『多分それ位ねだらうな。併し貧乏して來たら、いやな事が色々起つて來るものじやな。噂ではお父様今度株で六萬圓損してつて云ふでないで。あれは眞で？』

『どうですか？私も此前歸つた時、お母さんから聞いただけのです。六萬圓損したつて？』

『それじや、おまはんは一緒に居つても知らんじやな。六萬圓も損したそうでよ。龜公がそんなことを云ふて居りましたわ。』

『もうそんな事は煩さくつて——』

『ほんまにな。もう近い中には此家屋敷も他人に取られて終ふと思ふた

『ほんとにお困りでしたね。それで、どうなさいました。それから?』

裏の堀に子供が二三人蜘網をおろして騒いで居る。『モズ』が柿の木の上で喧しく鳴いて居る。

『内の方では全く知らんけん、町へ聞き合せて見てから、よくよくのお話は致しますと云つて置いたのでよ。』

『そう云ふと歸りましたか?』

『え、一時間許り、互に相談の様なものをして居つたが、歸つて終ひましたわ。ほんだけんど昨日はまたどうせられるかと思つて夜も寢ずに心配して居りましたわ。』

『巡査に云つたの?』

『巡査に云ふたら善いのじやけんど。内の恥を曝らす様なもんじやけんな。それに巡査に云ひに行く途中でどうせられるや解らんと思ふて誰れもやりまへんだわ。……然し榮一様どれだけ昨日は心配したや知れまへんでよ。』

『番頭はどうしたの?』

『番頭と云つた處で内の人ではなし、耻かしうてお父様が四分も年貢を上げて、新田の人が脅しに來たと云へまへんわ。』

『何でも無い？
『家が焼かれようが壊されようがどうでも善いですよ。人間が殺されても人間の魂は殺されん気遣ひは無いでしょう。』と極端な議論をする。
『併しまア私は家を焼かれるのは嫌ぢやわ、な、笑さんそうでないで。』笑子はたゞ笑つて居る。
『まア紫一様。そんな事はどうしようで。私また十人も来られて矛かさればの否ぢやわの。』
『平怯ですわ。お母様、十人や二十人が何ですか？』
『大きなことをばふな。オホヽヽヽ紫一様も大分人間が変つたな。な、笑さんの。』
『そうですないと又笑は曖昧な答をする。
『ほんとに、ほだけんど、どうしような。お父様に話らしじやな。』
『お母様。何にも心配入りませんよ。私が引受けますよ。何に仔細は無いですよ。』紫一は内庭の水の無い泉水を眺めて居る。お母様。心配は入らぬですよ。小作人の帳面は内にあるでしやうし、紫色の薬瓶や、硝子の壊れ物が並べてある。こちらの車に蜘蛛が巣をかけて居る。

ら。』

『なに他人に取られても善いでせんか。裸體で産れたのだから裸體で生きて居つたら善いのでしよう。鳥などは寢てても起きても着のみ着のまゝじやありませんか？』とキリストのソロモンの榮華の譬へを思ひ乍ら、

『併し鳥の様な美しい衣服を着て居るなら私も不服はないが、女であつたら、申々そんな事は口には出まへんわ――』

『女ぢやからつて、男と別に變つた事も無いでしよう。人間は衣服着て居るより裸體の方がどんなに美しいか知れませんよ。』と榮一流の裸體主義を述り始めた。

『そら理窟からいふたら、まアそうじやな。併し世の中はそんなに理窟許りで行けんから困るぢやないか？』

『理窟じやから世に會はんと云ふ道理があります？　道理ならこゝ世の中も渡れるのでしよう。道理は世の中に合はしてこしらへてあるのですもの。』

『もう榮一様にはかなわぬ、、、それではどうしたら善いので、榮一様の理窟から考へて――此度の事は？』

『此度の事、何にも困つた事でも無いですよ。私から見たら……』

書き終るとすぐ馬詰を辭して歸らうとした。門を出かけると後から草履で追つかけて來るものがある。

『兄様』と聲をかける。誰かと思ふと笑子だ。榮一は鶴子の事許り思つて居たので笑子のことを忘れて終つて居た。笑子の顏を見ると涙が出て居る。

『どうしたの笑さん？』と尋ねると、

『兄様、私あなたに聞いて貰ひたいことがあるのですわ。』

『どう云ふことだ？』

『此處では皆に見られるから何處か濱の方へでも行きましよう。』

『笑さん。どう云ふこと？　笑さん今日は叱られたね。ほんとに氣の毒だつたね。』

笑子は默つて居る。そしてまた少時して、

『兄様早やう。何處か人に見られん處へ行きましよう。』

と、非常に人に見られるのを嫌つて居る樣だ。

『それじや東の新宅の濱へでも行かうか？』

『何處でも善いけんど、お母様に誰れかがまた告げるとまた叱られますわ。』と門の方を見てそは〳〵

お日様がよく照るので蜘蛛の巣が光る。』『エ、ありますよ。……それでどうするので。』

『處を調べて端書を出すのですよ。此間四分上げると云ふたが都合があつて見合せると云うて――』

『お父様の名前でも私の名前でも苦いでしよう。』

『そらまたお父様の名前で？』

『お父様が怒りまつせ。怒られても知りませんよ。』

『お父様が怒つた位』お久は笑を噛みて、

『笑さんもうお黙の支度なされよ。……然しおまはんの善いと思ふ様にしてつかはれ、私はもう心配するのがいやじやけん。』

笑が裏所の方へ廻を走る。

『お父様が勝手なことするから、こちらも勝手にすれば善いでせんか……帳面は何處に』と尋ねて榮は下女に端書を買ひにやらせて　年貢を引き上げることを見合せると云ふ通知を書いた。

二時頃まで書くのがかゝつた。途中で便所へ行かうと思つて臺所へ來ると、笑が『流し』に立つてお釜の中から水で洗ひ落した飯粒を拾つて食つて居るのを見た。そして實に不憫に思つた。

ると私の眼の前で『うちのこの子は鈍じやけん役に立ちまへんね。針のもちようさへまだ知らんし、茶碗の一つもよう洗ひまへんのでよ。』とお母様が仰しやるのでしよう。私もうその時死んでしまふかと思ひましたわ――』

『笑さん、そんな短氣を起しては困るね』

『兄さん、併し考へてつかはれ、朝は大抵誰れよりも一番早やう起きて大釜の下を焚き付けて女中さんや番頭さんを起して朝御飯の支度に取りかゝつて、晩と云うたら九時頃まで夜なべさされるんでしよう。それだけ働いてもまだ働きが足らん働きが足らんと仰つて迫つ立てなさるのでしよう。それに一つお皿をめいでも叱へと仰るのですからない。』

『辨償して居るの？』

『え、昨日やかし五錢償ひましたわ。』

『お母様そのお金を取る？』

『お取りなさりますとも。』と云つて泣いて居る。

『兄様、ほんまに、私の心を察してつかはれ、……女の親には死に別れ、男の親があつもあの様だし、繼母のねきに居るから女中よりつらい辛抱はせなならず……私はもうどうしてもよう辛抱しませ

して居る。

『そ、じや急いで行くから追ついといらつしやい』と榮一は急いで早足で歩くく。笑も小走に追いて行く。土手にたつて、東の新宅の濱の簸影に二人の姿が隠れた。榮一は綠色の新田と青い川を眺めながら笑子に問ふた。

『笑さん、どう云ふこと?』

『兄さん、私もう死のうかと思ふ程辛い事許り……』と咽んで默つてしまふ。兄は笑子をぢつと見詰めて居たが、貴ひ泣きをして来たつ

『笑さん、なぜそんなことをおふの?』

『妾はもう馬鹿にどうしても、よう辛抱しまへんわつ。昨日ちよつと一寸お皿を壊したら来る人来る人にふて鈍じや鈍じやと布れて居るのですわつ。今日も晩から怒られて許り居つたのです。私ほんまのお母様があれば……』榮一は唯默つて居る。田宮の濱から新田へ渡し船が渡る。澁み切つた水に染が

うつる。

『今度田敷の十七になる娘さんが西の新宅の高行さんの處へくるのでしよう。共娘さんは、大抵自分手に嫁入の衣裳を縫ふ人ですと、そしたら昨日田敷の叔父様が(お久の從兄にあたる)宅へいらつしや

『なに、それ位なの事。町でね笑さん、こきんさんが今度看護婦になつただらうな、したらね宅では僕が宅を困らそうと思うて看護婦にした位ねまで思うて居るのだよ、何だね、人の親切を恐れる様な人間でどうなる？　そら笑さんは辛いだらう。併し僕の事を思つて見給へ、何にも辛い事は無いよ。僕は二度の食事も充分に食はして見れはしないよ。シヤツなどは勿論門外で泣くと上を通る人が不審がるから』と制した。

『お父様とこへばお父様じや、自分の子が怎麼に困つても知らぬ顔して居るつて……』と笑は恨んで居る。

『笑さんそれはまだ善いがね。此頃学校へ行つてゐても弁当さへこしらへて呉れないのだよ。それに夜は勉強せよとこへばつて居るよ。』

『お父様がそれまでなら善いがね。此度は則に後を譲るつてばつて居るよ。』

『それまでなら善いて居る。栄一は涙を拭きながら川の方を見たが静かな海に小波がたつて居る。そして或処は青く、或処は紺別光つて門く見え、或処は青く、紋のやうに見え

んわ。……三日まへない……』と云つて默つて終ふ。笑の胸は何から云つて善いかと思ひ亂れて居るのである。十日程前奥でつまみ食ひをして居る所を見付けられて叱られた時のパノラマや、繼母の御飯をつぐとつぎ樣が下手じやと云はれた事、鷄が一匹七日程前に居らぬ樣になつたが、罪は自分に被せられた事、御佛壇の掃除が悪いと云つて叱られた事、笑さんはいつでも行燈に燈心を四本も入れるといつて叱られた事、朝晩の味噌汁の鹽梅にいつも小言を云はれる事……先から先へ考へて行つて、三日前に、繼母が床の下に敷いて寢たと云ふ一圓札が紛失したと云うて、罪を自分に着せた事を口に出て來ぬ。今迄何度か此樣な難題をかけられた事も思ひ出す。

それで榮一は『三日前にどうしたの？』と尋ねたが、笑は泣いて返事をしない。暫くして、

『三日前にない、兄さん。わたしが取りもせんのにお母樣がお金を盜んだと仰るのですよ。一圓一

『あの。お休みになる時床の下へお敷きなしたんが朝になつて無いのですつて――』

『然し笑さんは自分に盜まぬものを盜んだと云はれたら辛うござりますわ。』

『それでも盜まぬものだらう。盜まぬのなら何にもそんなに苦にしなくても善いじや無いか

ね。』

一緒に行おう、」

「それじゃ兄さん、私を連れて行つてくださいッ！」と袖で涙を拭きながら頼むのだ。

可愛い女の子の依頼心が現れて居た。

二人の後ろ姿は午後の日に消えた。車で徳島へ来ると、お日様がもう西に這入つて居た。行先を失へた二人は濱の山を眺めた。

「笑さんに下女公などさしたくは無いが……それでも時の運ですよ。星の廻りが悪いのだから仕方が無いでへんな。」と元分明かに慰めながら栄一は笑子に云つた。

「兄さん、それでも、淋しいとぶつて兄さんに手紙は書けないはね

え、それ思つたらほんとに辛いわ。然し笑さん、月に一度か二月に一度は必度會ひに行き

色々誡めると、笑子は黙つて萎れて居る。しほれた處を見ると、また可愛くなつて神戸へ逃してやらうと思ふ。

萎れて居るのを見てあまり哀れに思つたから、

『笑様、瀧の焼餅でも食ふか？』と云つた。

『兄様やめましよう。十銭のお金でも今は使へまへんでせんか。』と咎める。

『兄様、もう中洲へ行きませう。蒸汽は何時に出るのか知らん。』

『まだ行くのは早いよ。八時に出る方は十時だからね。』

『もう何時か知らん？』

『もう七時だらう、大分暗うなつたから。緩然した方がいゝですよ。あまり苛らだゝなくて。』

『それでも蒸汽に乗込まなくちや何だか心配だ——』

『なに心配はない。兄様が付いて居るよ。然し笑さん腹が減らぬ？　何か食ふか、そばでも？』

『そばでも？　妾は何にも食べたく無いのですが、兄様はお腹が減いたでしやう。下へ降りて何かめしあがれ。』

それで三宜亭の方から白糸亭の前を通つて神武天皇の銅像の前へ出た。北白糸亭の玄關には富田橋竣

ますよ。』

『兄さん、妾もこれを思つたら辛いけんど、かうやつて兄さんと一緒に居ると、何だか私は極楽にでも居る様な気がしますわ。私、そら兄さんに手紙を出す事の出来んのは辛いわ、それでも田舎のお継母に泣かされるより善いわ……』と安心して居る。何だか不憫だ。

『ア、兄様。中洲に電氣燈がついた、綺麗な。御覧』と何だか樂し相だ。然し榮一は笑が未来に對する何の目途もなく、電氣燈を見て居る様を見て、田舎娘の前途を思ひ、日を眩まし、涙を落さざるを得なかつた。

『兄様ぶだ泣いて居らしやるの？』と笑子は榮一の返事の無いので振りむいて云つた。

『ね、笑さんが神戸へ行くのも善いが、病氣にでもなつた時はどうもしようかと思つてねえ』

『兄様、そんな事を思つたら家を出る事が出来ますか。私の様な息災な者が病氣になりますものか？』と微笑んで豪い勢である。

『併し笑様、あなたがあまり元氣が善過ぎるのですよ。田舎の人が町へ出るとそれだから困るのですよ。町が色々と珍しいものだからね。つい浮かされて少しの間は面白くて元氣も善いが、漸々に労が醒めるのですよ。町へ出て脚氣に罹る人でも、始めは誰れが脚氣に罹ると思ひますか？』と

見る積りだから歸つて行きますよ。そして駄目だと思つたら出て來ますよ。』とエふた
ろ父の事より鶴子の事を思つて居た。そして鶴子の美しい薔薇色の頰と鬢の散らばつて何とも云へぬ
姿を想像した。
笑子は『そら、その方が善いですよ。二人とも隱れて了つたら、屹度後から探しに來るでしやう。
さうすると事が面倒になりますからない。』と兄の意見に賛成した。
話して居る中に汽笛が鳴つたので、榮一は急いで乘込んだ。船は間もなく棧橋を離れた。殘された
笑が淋しそうに棧橋に立つて居るのを眺めてゐたが、男らしく無いと思つたから三等室に降りた。併
し三等室の暗い隅に兵庫の棧橋が現れて、そこに吞の低い、髪の赤い縮れた、頰のパツチリした、手のたゞれた不愼な女が俛いて立つて居るのを見た。

十九

榮一が知らぬ顏して宅へ歸つたのは晩の七時であつた。父はお梅と晩酌をして居た所であつた。父はすぐ『笑はどうした』と尋ねた。昨日田舍からすぐ使が來て無かつた。榮一は重い頭を抱へて鶴子を訪れて來たから父には知れて居たのだ。然し榮一は答へ無かつた。榮一は父に怒いた樣子であつた。父はすぐ『笑

工部卿令嬢と筆太く書いた紙が貼つてあつた。二階には二味線や、喧しい聲が聞えて居た。

『笑子に』笑さん、お父様も多分此の中に混つて居るのでしやう。安氣なものだね。アハハ……』と笑つて言はれた。

笑子と榮一は晩の八時の蒸汽船で神戸へ行つた。そして仁生町の口入屋へ行つて見たが、保證人が無いので吉田由太郎(船頭)の宅へ引き返して事情を打ち開けて話して萬事宜敷頼む、父の方へは一切秘密にして置いて呉れる様にとくれ〳〵頼んで置いて、翌の十二時の蒸汽で引揚げた。

笑子は送つて來たが、榮一は汽船に乘込うとして一寸笑子を顧て、

『笑様近い中に全體出て來るかも知れぬよ。』と云つたが、

『兄様必度出て來て下さい待つて居りますよ』と笑子は頼む様に云つた。

『未だ乘込むのは早いまだ少し話しましやうか?』と棧橋の先に笑子を連れて行つて、人に聞えぬ様に、

『笑さん、ほんとに、しつかりして働いて下さいよ。御頼みだから』と笑子の顏を見詰めた。笑子は頷垂れて居た。

『私ね、もう、色は黑いが頰のポツと赤い所には決心の情が現れて居た。繋けてまた。

ずうと歸らずに居りたい様な氣がするがね。も一度なり、二度なり、お父様に云つて

た。鶴子は榮一がまだ瞼を腫らして居るのを見て、
『今日もまたどうかしたの？』と尋ねた。
『ア、また悲劇を演じて來たの』
『誰と？』
『お父様と』
『どうしたの』
『私は妹を隠したのですよ』
『何處へ？』
『いや』
『云つて呉れ無い？』
『いや恥しくてゝへない。あなた大抵想像出來ますよ。出來るでせう』
『ア、衝突しましたよ』
『大抵想像は出來るけれど。またあなたお父様と何か衝突なしたのでせう』
『ね、あなた、妹さんをどうなしたの？』

出帆の真際になつて、色の白いマガレットの鶴子は、綺麗な絹物に纏はつて甲板に立つた。そして特別に榮一の方を見て居る様に思はれた。

烟を殘して船は出て行つて終つた。榮一は家へ歸つて直ぐ床に入つた。そして鶴子の顏を想像して見やうと思つたが、横向きの顏の輪廓なら少しは似顏も畫けるが、眞向きの輪廓はどうしても現すことが出來なかつた。出來なかつた許りじや無い。鶴子の顏を忘れて了つた心地がした。その代りに色の黒い眷の低い髮の赤い妹が俛いて泣いて居る幻が現はれる。

それで榮一は『鶴子が戻や逃げて了つた』と小さい聲でひとり言をいつた。

二十

あくる朝、夢を見た。

『サアビ』とか云ふ亞米利加アジニア州の農夫の夢を見た。此度亞米利加と獨逸との間に起る戰爭は此隱謀者が捕まるので、此隱謀者は三十八日斷食すれば捕まる。此隱謀者が捕まると獨逸の戰爭は勿論、世界に戰爭と云ふものは全く無くなる。だから『斷食して見よ』とゆふのであつた。それでサアビは夢の通り『斷食』してみると、三十八日の斷食は別に困難でなく、隱謀者も安々と捕へられて、獨逸と

晩の八時頃に、ヨコリ榮一は鶴子の家へ、やつて行つて、戀人が別れる時にする様な眞似を一時間許りした。そしてその中の二十分は沈默で、後の四十分は公然の夫婦だと世界に廣告して廻る事の出來なかつた樣な話ノ繰返しに過ぎなかつた。然し二人共涙を流した。

中洲へ見送りに行つて、女のお友達が大勢皆美しい當世流の髪を結つて綺麗な顏をして來て居たり、その中にはミセス、テーラーも居つた。女學校の先生も居た。同級生も居た。下級生も居た。男の見送りは牧師と榮一のみであつた。

榮一は鶴子のお友達の美人を一つ見やうとでも思つたか、鶴子が入つて居る二等室へ行つて、大勢の中を見廻したが、まだ出帆までには二十分位あるでせうから、少し話してゐらつしやい』と强ひるとはなしに强いたが。

『まだ出帆までには二十分位あるでせうから、少し話してゐらつしやい』と强ひるとはなしに强いたが。

何だか男らしくないと思つたから出て來た。

二等室の出口を跨いでゐる時、

『あの綺麗な男のお方はどなた?』と鶴子に問ふ者があつた。

『あのお方は市長のお息子さんですよ』と鶴子が得意に答へて居る聲を聞いた。

云ふのは世界に威張りたい連中が捏造した遊び事だ。まア我邦には関係はねえ——と一頁を斥見して、二頁を返したが、倫敦電報とか、紐育電報とか、何とかかんとかふ電報で埋つて居る。その中には前代未聞の大夜會など云ふ文字も見えて居た。少し惡魔夜會に出席して、西洋の美人と舞踏して見たいと云ふ氣も起つた。三面を見ると、大森の水死美人とか又復華厳の瀧とか、水死美人を讀んで見ると戀人の心變りを氣にして水死したのだと書いてある。失戀した惡女に惚れられると幸な物だと思つて、華厳の瀧を讀むと失戀したと書いてある。一寸戀人の心を引からうと思つて、奇妙な藝をやつて生き損ひをするのだねとも考へたが……然し尤な處もあると頷いた。

惡魔文句を讀むと、戀とふものは奇妙なものだ。戀して居る人は仕合せだ。新聞に接吻した。て戀に価を付けて呉れるから——など思つて、直ぐ鶴子と自分の關係に思ひ及んだ。

四頁の廣告を見ると、新刊の哲學書や小説の廣告が出て居る。岩水健著『ロッチエの研究』とかふのは、長々しい効能書きをそへて定価一圓七十錢で販賣致しますと出て居る。此廣告を見ると、何だか自分は生存競爭の敗者の様な氣がする。少し社會改良とか、家庭改善とかふことを止めて、二三年も勉強すれば、之れ位の著作は何でも無いがと思ふ。それから鶴子に自分は近い中に哲學の著作を

亜米利加は勿論世界に戦争がなくなつた。――と云ふ夢であつた。

何だか標準もつか無い夢だなと思つたが、夢の事から瑞西と巴里義とへ帰化すれば善いのだ。早く帰化権を得た方が善いのだ！

人民は瑞西と巴里義とへ帰化すれば善いのだ。

……？……何だ？　偶像だ？　ヘーゲルだ！　幽霊の様な者だ、……など夢の様に考へて居た。

いつに無い朝寝をしたので、父は戸を開けて神様を拝んで居る。いつもならば『栄一起きて戸を開け』と云ふのだが、今日に限つて黙つて居るから、こいつは一つ新聞でも読んで遣らうっと、哲学とか云ふ面倒臭い勉強をし無くとも、新聞の人つた者がしたから、バサッと新聞許り読んで居ては彼が食へぬ……然し一寸新聞を読ま

「新聞！」と云ふ声がしたから、新聞を読んで一生を送る人は多い。なに新聞を読まう。一寸新聞を読みます』と頼む様に自分に云つて見て、寝巻きのまゝ玄関へ急いで飛んで行つた。

論説は何だか中亜民國の危機とか云ふもの……ア、老子非子の國が危いと云ふのか？……亡びやうが亡びまいが、我邦にはちつとも関係はねえ。……亡びても我邦さへ生きて居りさへすればそれで善い。敵が攻めて来て僕を殺しても僕の幽霊は残る。幽霊が残つたらそれで善い。中亜民國の危機とか

ノックを開く事にしやうかと思つたがハーノックは五冊に成つて居る。今日一日に讀んで終ふには オーアの方が都合が善い。オーアのは僅か三百六十頁。一日には易い仕事だと將へた。然しハーノックのは厚いだけ實がある。まア兩方共と二冊を二冊ながら机の上に置いて兩方の一頁を開いて見る。

ハーノックの方はスベ〳〵の紙で印刷がハツキリして居る。オーアの方は日本紙の様な雅味のある紙に大きな字で印刷が出來て居る。

『どちらを讀まうか？　え、ハーノックに せえ、』と、宵のある方を『とオーアをブツキ、ケースに押込んで頭を抱へてハーノックを讀み始めたが、『之を讀んで何にする？　之を讀んでも名譽でも買へるか？　ハーノックを讀んで居ると鶴子にぶつたら鶴子は『あなたは學者だ』とぶつて接吻の一つもして哭れや うが。もう鶴子も廣島へ行つて終つた。……そうだ鶴子は今頃汽車に乘つて岡山あたりへ行つて居るだらう。岡山から西は僕は知らぬ。鶴子は景色が善いつて喜んで居るだらう。明日は手紙が來る。その中には多分、

『厭しい君と別れて內海の夕陽見ん力もなく、自然を樂しむ餘裕もあらばこそ。唯南を望んで、君の美しき姿を幻に現はし、翼あらば飛び行きて抱きもせんなど思ひつゝ、思はず知らず袖を濡らし

一冊出すと云つた事を思ひ出す。然し今となると心臓が鈍れて筋肉の所々が痙攣する様にも思はれるから哲學の著作は一頁も出來ぬとも感じる。胸骨が悪くなつたから新聞を寸々に引き裂かうとしたが、まアまアと一頁を汲して見ると初め氣が付かなかつた新刊紹介といふ欄がある。その中に岩永佐藩ロツチエの研究といふ標題で批評が出て居る。『行文頗る流暢にして讀者をして何處に論意あるかを疑はしむ』と書いてある。榮一は『アヽ之だ。我誰が書いても恁麼批評しか受ける事が出來なかつたらどうするの悪い？』と新聞を膝の上へ投げ付けて遁いて仲の間へ歸つて來た。仲の間へ這入りかけるとお梅が神樣を拜みに行くのとパタと出會した。お梅は、

「またたばんの事で……』と呟いて傍へ出た。榮一は默つて衣服を着更へながら『馬鹿々々しくて小學校の子供などに滿足はして居られねえ、社會から見れば自分等一文の価が無いのだ』など考へて居ろ。母親も今日は止めにして哲學の本を一冊讀みあげて終はふと思ひ立つた。思ひ立つと慌てゝ蒲團をグル〳〵と巻いて玄關の押込へつき込んで、二階のスタデーへ飛び込んで机にもたれた。

「何を讀んでキリスト教をゆさぶつしくわん唯物史觀の立脚地から教理の變遷でも研究して見てやれと云ふ氣になつた。がハーノツクとオーアとどちらを開くが問題になつた。實教師は曾つてハーノツクを異端だから用心しろと云つて居たからハ

仰いました。』と傳達して來る。それでも默つて居る。下女も默つて返事を待つて居る。

だと思つたから、

『あなたは下へ降りて行つても宜敷いですよ』と無意味な返事ではあるが兎に角爲て、下女を下に降ろす。

『お梅は僕の蒲團まで檢べてゐるのか？　日に日に。腹の立つ野郎だな。えい』と立ち上つて下に降りる。玄關に現はれるとお梅が今蒲團の隅から隅へ目を配つて居んで居る。榮一はつと進んで行つて、

『失敬な！』とお梅から蒲團を取り上げて居むかまんかに押込に押込んでピシヤンと戸を閉ぢて終つた。

お梅は『フム。をかしい人。人が居んで上げるつて云ふのに居まさんで、勝手にするが善いわ。その變りになんぼ汚れても洗濯はして上げまへんわ。』と嘲笑つて居る。

父が出て來た。父は出て來るや否や持つて居る長煙管で榮一の頬を耳からかけて擲りつけた。

『ア痛た』　榮一はそこへ倒れた。然しすぐ飛び起きて家を出た。その日一日歸らなかつた。晝食も食はずに山へ登つて瞑想してゐた。そして晩は九時頃まで勢見の繪馬堂でうろついてみた。が、寒くて仕方がないので歸ることにした。大麻山で三日斷食した元氣は今は何處かに消えて榮一は哀れに閉

つ……』位ゐの文句が書いてあるであらう。さうすると言文一致で出來るだけハイカラに、

『甲板の上に立つて居た君の……戀しい人のその面影！　日を閉ぢても目を開いても目先に現はるゝは君が姿？　嘗てお君がスタデーで與へられた接吻、どうして忘れる事が出來ませう！　夕べが來る毎に遊びに行く處が無くて勉強室を開いて物乾を見ると、主が去つて開かれぬ二階建の家。君は永遠に去つたかと思つてもやらうかと心は先から先へ亂れて行く。讀んで居る事は何が何やら薩張り解らない。

『之ではならぬ、僕のジニアスは哲學だ。哲學の研究を女などに妨げられてはならぬ』と思ひ直して讀んで來た處をまた始めから讀み直すと少しは解つて來る。大分解つて來た嬉しいと思つて居ると、

『榮一樣、蒲團を蹴んで入れんでかい？』と玄關でお梅が叫んで居る。またお梅が生意氣なことをぬかして居る。あれだけ蹴んで置いたら結構じや無いか。放棄といてやれ、と聞えぬ振して本を讀んで居る。下女が上つて來る。

『若旦那奥樣が蒲團を蹴んで押込みへ入れてお置きなはれと仰しやつていらつしやいます』と云ふ。

矢張り知らぬ顏して本を讀んで居る。下女が上つて來る。

『若旦那御飯をお召上りになりますかつて……そして玄關の蒲團を蹴んで入れて置きなされます樣に

になる。で、墓所へ行つてマツチを取つて來て玄關の障子を燒いて見ようと云ふ氣になつた。然し玄關はあまりだと思つたから仲の間の障子に一寸と付けて見た。本當に燒けたなら燒けても善い、灰になつても善い、自分も燒けて灰にならうと心持がいゝだらう」と思ふ。仲の間の南から二枚目の障子に火を付けた。ぼーと燃えたが障子の格子も壁も家もと思つたに、燒けも燃えもしない。上まで燃えて行つて鴨居の所で止つて終ふ。之じやくも一枚燒いて見て遣らうと思つたから南から三枚目の奴にも付けて見た、之れは前よりも好成績で紙の燃え樣も盛であり、障子の煙つたのも甚しかつた。も一枚と思つたが此上燒いて眞に家を燒くと、町内を騒がしても面白くないと思つたから止めた。序に鶴子からの手紙に火を付けて燒き捨てゝ了つた。

斎はひに怪麼亂暴をして居る間お梅も父も吉三郎も益則も出て來無かつたので善かつた。何に出て來ても血を見るまでさと思つたが、それでも出て來て喧嘩するより喧嘩しない方が遙かに善いと自分に祝詞を云つて家を出た。然し今日も學校には出席しなかつた。

家を出て何處へ行かうか！　今日は雨降りだ。昨日の樣に奴が原で座禪を組むとゆふ事は出來ぬ。大麻山の眞似をする勇氣も無い。一つ之れから小松島の方へでも遊びに行かうと思つ

ぢられた門の前に立つて。雨がしよぼ〳〵降つて来る。門はいつまで經つても開くことは無い。榮一は女の様に泣いたり。一時間程して下女が便所に出て来たので下女を呼んで内へ入れて貰つた。

昨日の雨が未だ止まなかつたが六時頃に『廣島にてさる人』と云ふ名前で、女の手紙が来た。勿論それは鶴子からである。鶴子は御身の事が戀しくて堪えられぬ。恁麼に戀しくては廣島で三年も勉強をつゞける事が出來るかと思ふなど書いて来た。然し此手紙を見るに別に永遠に夫婦にならうとか公然許婚しやうなど云ふ文字も見え無い。のみならず、未だ自分を慕ふ情が足らぬと思つた。

が、鶴子と自分の關係を思つて、父と自分の關係を思ふと今にも消えて了ひたい様な氣がした。

そして鶴子の様な美しい女に對して自分の様な美しく無い境遇に居る者は、どうしても、永遠の夫婦にはなれぬと云ふ氣がした。

色々考へて居ると『如何でも善い。ア、死にたい……死ねゝば人でも殺してみたい……』と云ふ氣が唯起る。自分ながら恁麼危險な情緒が起つて来ると、マツチを取つて家でも燒いて見たいと思ふ氣

然し警鍾の鳴らぬのは火事の無い證據だ。それでも火事をやる樣な事をしたから自分に如何樣な難題を父やお梅が持ちかけるかも知れぬ。するとまた警察の手を借りて如何樣な慘酷な事を自分にするかも知れぬ。それが知りたい。幽靈であれば飛んで歸つても先の見え透いて居る禁錮の身だ。小松島へ遊びに行つても仕方が無い、肉が付いて居る幽靈ぢや、と思つて居る時にザアと烈しく雨が降つてまた榮一が持つて居る番傘の上に小石を投げ落す樣に降る。人力車の轢る音も忽いで菓子屋の小僧が戸を半分閉める音も雨の音には勝らない。之では如何する事も出來ぬ。此雨に小松島まで行く勇氣は無い。然し何處へ行かう。まア歩くだけ歩く事にしやうと、とゆつくり出來るだけ暇を取る樣に歩いて居ると、橫町から小學校の生徒が二三人。重い傘を持つて桝を半分雨に濡らして學校へ出掛けて居る。美しい。

もう十一時にもなるかと思つたがまだ七時半だ。二軒屋まで行かうと大道の角の派出所までやつて來た。到底小松島へ行く事が出來ぬのはわかり切つて居る。わかり切つて居るなら東新町の叔母の內へでも久し振に遊びに行かうと思付く。叔母の所へ？　あの穢い小い家に、子供の大勢ある貧相な叔母の處へ、あの愚痴な無學な哀れツぽい叔母の處へ？　よした方がいゝだらう。よした方が。叔母とは

たから徳島橋を渡つて、縣廳の前を通つて、富田橋を越へて、徳島新報の前へ差かゝつた。

軒下に吊してある新聞を見ると田舎新聞に珍らしく長い話と云ふ見出しで、

『挿畫の下に粋な話は少し古いが此間富田橋竣工祝賀會の日糸亭に開かれた析大和樓の三七、錦樓の鳴門は市長から祝儀を澤山貰いたが散會後二人共三宅亭へ市長に呼ばれて翌朝早くコソ〳〵と歸つて行つたとか、粋な市長にはありさうな事だ』

と、云ふ意味が出て居る。栄一は今更ながら世界と云ふ處は自由勝手のきく所だ。金さへあれば千人の美人でも一度に抱いて寝る事の出來る世界だ。僕は今迄道徳と云ふ圍を知らず〳〵世界はもう疾くの昔に此圍ひを破壊して居るのだ。人間は昔から自分を解放して居るのだ。

まア不思議なのは世界だと考へながら重い足駄をトボ〳〵と『中の町』の方へ運んだ。

然し目に浮ぶのは、障子に付けた火の燃え立つ様子……ペラ〳〵……ポーと馬の走る様に燃え立つた時には浦島が玉手箱を開いた時の様な心持ちがした。あの燃えたがすぐに家を飛び出したから消えたれはあれなりで消えた様に思つた。

た燃え立つて今頃は大火事になつて居るかも知れぬとも考へてみた。

して居る。』と商賣して居る中には古道具もあり時計屋もあり質屋もあると云ふことはツキリ此處は質屋で此處が菓子屋だと云ふ區別はつかぬ。何間歩いても玉の上を歩いて居るか風に乘つて居ると云ふ調子でポカリ〳〵と歩んで居るった。

『ホレ、危ない！』と聲をかけられて、氣が付いた客觀世界がボツと明くなつて此處に理髮店がある、此處に着物屋がと區別が付く樣になつた。それで叔母の處へ行かうと決心した。派出所の角まで引返して大通を並んで居るのが松浦の長借家である。長借家の一番こちらが叔母の宅で格子戸を開けて這入ると叔母が丁度掃除をして居る。

『ア、榮一樣で、今日はどうしたんで？』學校はやめたんで？』と驚いて一寸ねる。

『何ぞ、用事でもあるんでか？』と返事せぬ中に續けて言ねる。

『いや別に用事も無いのですが、頭が變になつて神經衰弱でも起つた樣ですから此頃は學校を休んで居るんです。今日は雨降りなり內に居つてもあまり面白くないから遊びに來たのですよ——』とごふと、叔母は笑ひ乍ら、

『それじや、まアお上りよ』と云つて、榮一の上つて行く處を、

一時間か三十分は話も出來るか知らんが三時間四時間とは話は出來ぬ。叔母の話は大抵極つて居る。一た榮一樣、內が貧乏に成つても親類で誰一人顧て哭れる人は無しな。一錢の金も貸して哭れず、偶に遊びに行つても泊つて歸れとも云つて哭れず、徳島本町の兒樣は市長になつたり代議士になつて豪い出世もしたけんど、今になつては一言半句四季の挨拶に來て哭れん。わっ、食ふに困つて二回なり三回なり借して哭れとゴうて行つても內にはそんなお金は無いから此度はお斷り申しますと反付けられるとエふ工合でな。內の父さんはあの通り仕事はせずにブラ〳〵して居ると世浮世に生きて居るのが眞にいやになりますわ……』相も變らぬ事を川舍辯で說き立てられると泣き言許りだ。泣き言聞かせて貰ひに來たのなら二十一日の緣日に瀧の大師堂へでも行つて、道側に泣いて居る遍路乞食の話を聞いた方が遙かに勝つて居ると思つた位で閉口した。叔母の內へ行くのも詫いが泣かれる。覺悟は詫いかのもの、默つて聞いて居るとじやと思つたので行つて見たものゝ、

して居た家でわ』

『ア、知つて居りますよ』と榮一は答へたが小學校時代の昔を思ひだす、從姉の花さんがなる程牛屋島の榊へ嫁入して居た事がある。然し離縁せられたが――

『あの榊が此頃土木に手を出して居るんでよ。兄様とも昵懇の間じやから甘い事そこらあたり誤魔化して居るんだらうな。……怎麼事おまはんの前で云ふと怒るかも知らんけんど……まア榮一様此處より二階へでも行かんで今日は皆學校へなり外へなり出て留守じやからない、まア二階へでもお出でなはれ……』

『エ有難う』と默つて怠な小ない段梯子を上つて叔母について行く。

『火でも入れるわな。御免なはれよ搦みさがしてあるけんど』と叔母は云ふ、叔母の云ふ通り取り亂してある。六疊と四疊の二つを打ち通した室に窓の方には二つの小さい机が並んで居る。之れは叔母の親類の女の子を女學校へ出すので月に幾何か叔母を補助する積りで子供を預けて居るがその二人の女學生の机である。その机の上は勿論のこと壁の側の行李支那鞄などは蓋もせず衣服は疊みもしないで取り散らしてある。榮一は坐敷の眞中へ坐る。叔母は火の無い火鉢を前に据えて坐る。

『煙草喫まぬから火は入りませぬよ』

『榮一様、兄さんは今度、大分コレ貰うたそうで……』と母指と人差指とで輪を造つて示す。

『知らんと云ふ道理があるでかい。同じ家に住んで居つて』と榮一にすり寄つて脊中を叩く。

『ほんとに知りませんのですよ。』實際のことを云ふ。叔母はそれでも、

『あの富田橋の濱の土手で……榮一様は悧口だから化けて居るのだらう』と來る。そう來られては堪らぬ。

『實際知らぬのですよ。富田橋や土手で賄賂を貰つたのですかお父様が？』

『さう云ふ話じやな』と苦笑して妙な振りして云ふ。

『さうですか、全く知りませんでしたよ』

『さうで、知らん方が善いなア。内では叔父様がそんな話を聞いて來るんでよ。それに大城の方から來とる土方の頭が宅へ此頃きて居る人でな。折々話が出てな、兄さんは甘い事をして居るつて噂をするんですわ——』

『そんない甘いこと行くでせうか？』

『そらなんでも牛屋島の榊を知つて居るだらうな。それ馬詰の隣村の牛屋島の榊……うちの花が嫁入

歌留多取りの歸りに惚れた男を待つて居る女と、まと書いてあつたな……あの本は何處へ行つたか知らん。此あたりにあつたと思うたが……』と立ち上つて机のあたりを探す。色々な雜誌を引つ繰り返して見えぬ。

『見えぬわ――』と云つてまた元の所へ歸つて來る。

榮一は熱心に女學世界を見て居る。

『榮一樣。何んで面白いことでもないでか？　面白いことがあれば聞かしてつかはれ――』と雜誌を覗き込む。

『さうですねー――』と忙然した答をして、世界各國の女學生氣質と云ふ題の所々を讀んで、ともずると叔母の宅に居ることを忘れる位熱心になる。米國の女學生の自由な戀愛談の所を讀んでクス〳〵と笑つて居る。

『何がをかしいので？　云つてつかい――』と叔母は顏を見上げる。それでも榮一は續きを讀んで行く。叔母も少し馬鹿氣て來たから、

『榮一樣今日は叔母樣の家で御飯喫べて御歸りなはれよ。御馳走はないけんど内へ歸らんのならよ。』

と、立ち上つて梯子段の所まで來て云ふ。

『さうでか、下にも火が無いやらあるやら解らんけんそれじやもう火は入れんでよ……』と淡泊りした叔母は、氣輕なことを云ふ。

『然しお父様もよくそんな事が出來るものですね』とまた云ふと。

『さうしても居いでせんか。市上になつたらこれ位の事はせな。千二百圓やそこらの年俸であんな大きな家に住んでは會計が立つて行かぬではっと叔母は何でもないやうなことにこゝふ。

『然しですよ叔母様。市には市參事會員や市會議員とこゝふものがあつて中々小さい橋をかけるのでも大變が相談してするのですがね――』

『そんでも、金のかゝる事聞くでか。今時の人は皆利口じやから、かざますと直ぐこゝふ事聞くでか。それでなくとも、受負仕事はらちがあかぬとこゝふ事で市長が自分手に取り締るとこゝひ出したらそれ切りでないで』と説明して叔母は痩せた顏に得意の色を輝かす。

榮一は自分の側に捨てゝあつた女學世界を引き寄せて見る。目次を見ると中々面白相な事が書いてある。叔母はそれを見て、

『今時の人は女の子でも雜誌や小說つて、色々な本を買うて讀むんじやな。お金が入ることじやな隨分、それ東京ポックとかパックとか云ふ本があるでないで面白い本じやな。少し古いんじやけんど。

衛的だといふやうになる。壁が穢いと思ふ。忽ち裏の方がずうと見ると便所や物置場や畑やそれから向ふの藁湯の煙筒か秩序も無く配列せられて胸が悪くなる。雨空の澄みきらぬのも心地悪い。早く何処かへ行きたいと思はれてくる。然し行く処は無いと考へる。また綴けて雑誌を讀む。少しは面白い。そして霊の来るのを知らなかつた。

霊には香の物と汁と御飯とで食事を済ましたがそれから何をして善いか知らなかつた——午後の長い間を、また二階へ上つて雑誌でも讀んで居る中に日は暮れて夜れると思つて二階へ上つて雑誌を讀んだ。午後四時だ。時間の立つのも早い物だと今更ながら感じて、きまり悪く叔母があまり長く居ては叔母に善く思はれぬ。そこらあたりをよく云うて歸つて行かうと、それから先は何をして善いやら全く解らぬ。何處へ行つて善いやら全く解らぬ。今夜は何處か宿屋へでも泊方がない、宿屋？　そうだ。宿屋にしやう。然し今から宿り込まで何處へ宿らう？　二軒屋？　二軒屋にしやう。然し今から宿り込まで五十錢かそこらは要るからと金も二圓二十錢許り持つて居るのを宿りでなくても中等の宿りでもあまり早くて

自分は無意味で歩いて居るのだと思ふと自分手に可笑くなつて笑ひ乍ら行つたがまた何處へ宿らう？　二軒屋にしやう。然し今から宿り込まで五十錢かそこらは要るからと金も二圓二十錢許り持つて居るのを宿りでなくても中等の宿りでもあまり早くて

有難う』と唯簡單に答へて置いて讀み續ける。叔母が下へ降りて行くと榮一は考へた。

『も少し丁寧に返事すれば善かつた。貧乏の中でも甥だとこそ思へば晝飯も食へと云つて呉れるのに、昔と違つて飯を三杯多く食はれても困る今じやに……心からか何か知らぬが一緒に食へと云つて呉れると嬉しいものだ。叔母も可哀相だ、叔父が女郎買ひをして妾宅騒ぎをした許りに破産したのだから、大城の大川とエへば近村で誰知らぬ金持ちであつたが、明治の變り目にとう〳〵破産して了うたのだ。叔父は因果としても叔母は罪が無い、可哀相だ、然し我家も屹度大非のやうになるに違ひない』など考へながら女學世界のあちらこちらを渉り讀みした。色々な想像が浮ぶ。この前叔母の内へ來た時に叔父が居たら、叔母が叔父は近頃唯信心許りで臨場の濱の大神宮さん許りお參りに行つて少しも仕事をせず暇があつたら何やら呪ひの樣な眞似をして居るとエうた事を思ひ出す。そうすると五分刈の頭に白い髮が大分、びて口許も三四分荒らく生やした眼尻の皺が特別に多く深く寄つた顏の三角になつた、頰の細い銅色の叔父が唯ふら〳〵用事も無いのに町を歩いて居る樣が夢のやうに現はれる。何となしに淋しい、衣服に付いた垢の匂ひがする。壁に立てかけてある襖の破れが目につく。机の下の反古がいやに大非の隅の煤にまみれて蜘蛛の巢や、唯三四寸ブラリと下つて居る塵糸が非美

笛一、二次郎の三人は、無論に。然し少し恥かしい——綿の袷衣に島打帽を被つて居ては。然し勇気が無い仕事は困る。なに家々に燈のついて居る時だから別に見る人もない。

と、直ぐ赤な顔をした四十恰好の背の男が、向ふの火鉢で火を起して御覧をお焚きなはれ』と云つて呉れる。

行平鍋に入れて来た酒は最早冷えて了つて居たが、

『一杯呑ませて下さいませんか』と頼むと、

『いゝとも』と答へると、

『寒いでせう？』と問うた。それで、

『寒くはありません』と答へると、

『お上げるけん、向ふの火鉢で火を起して御覧をお焚きなはれ』と云つて呉れる。

行平鍋に入れて来た酒を三合出して呉れる。

『お肴は？』と問ふと、

『肴は無いけんど沢庵なら』と云つて呉れる。

『沢庵で三合食ふかいな？』と問ふ。

『いゝ、沢庵で三合食ふかいな？』と問ふ。

『いゝ、沢庵で三合食ふかいな？』と問ふ。

『いゝ、

た。 給馬堂へすぐ這入つて菓子を賣つて居る店へ、腰を降した。羊羹の一つも食つて見た。然し甘いと思つた切りで唯……つまらんと思つた。給馬堂から徳島金龍を見降しても景色の事も何にも感ぜぬ。家が無意味に並んで居る。人間が無意味に動いて居る。おちらこちらから煙が無意味に立つて居る。榮一は『僕の様に毎日々々遊んで彷徨いて暮すと別に不愉快な事もない。大臣になつて乾分を大勢連れて威張るより大分面白い。恁麼に氣儘にうろつくのが大分面白くなつて來たわい……』など洒へた。

あまり長くも此處には居られぬ。菓子屋の婆アさんも店をしまひかけた。どれ、それじや歸つて行かう。歸つて行くのじやが無い何處かへ行かう。然し宿屋へ行くのは未だ少し早い。二軒屋の端まで行つて見よう。『どれぼつこと石段を高下駄で降りた。下の巡査派出所では、巡査が何かコツ〳〵書いて居る。無意味なことをして居ると心の中で笑つて、呉服屋の前へ來ては無意味な人間が裸體を恥かしがるので着物があるのだと心の中で思ひ乍ら町の端へ來たがまだ日は暮れない。もう少し、も少しと思ふうちにとう〳〵決心橋まで一里を來て了つた。もう大分暗くなつた。これから歸れば丁度宿屋に入る時に都合が善い。『どれこと雖ひ戻つて塀木を町の方へと歩いて行く。町へ入ると精米所がある。精米所の隣りが鍛治屋——二軒目から向側がある。鍛治屋の隣りが木賃宿、ア木賃

十七八分すると沸いて來たので、盆を取つて濟いのか惡いのか知らぬが、取らぬと火が消えるからと取つて沸くのを眺めて居た。

『暇だ。暇だ。』と頭の中から叫ぶ。『哲學問題はあまり苦し過ぎる。唯客觀の現實を樂まう』と答へて置いて米粒が角力を取つて居る樣に動くのを感心しながら見て居た。『暇だ。暇だ。』と茶碗と箸を借つて來て主人が持つて來て呉れた梅干と干魚を菜にして食ひ始めた時に、坊主頭の五十恰好の男が細い目をして這入つて來た。顏は銅色で酒氣を帶びて居る。然し何處かに愛嬌がある。

『今晩は』とこちらから挨拶をした。それで向ふも、

『今晩は、善く降りますな』と答へた。男は座敷へ上つて火鉢の側に坐つて煙管に火を付けながら、

『失禮ですが、あなた樣はどちらで？』と問うた。

『え、こちらで御座ります。然し生れは神戸でした——』

『神戸と云ふと海を一つ越へてござすな。』

『さうですか？

初めて米を洗ふことだと思ひながら非戸から水を汲み上げたが、向ふを見渡すと水田に細い雨が落ちて勢見の山がボーと見える。悲哀な濕りツぽい景色にまた何とも云へぬ雅致がある。

米を洗ひ乍ら――』僕は實にローマンチックな人間だ。ローマーチツク……自由意志……悲哀なのだ――然し――僕は何と幸福な口に會つたのだらう。幸福だ。僕は恁麼美しい一瞬間を經驗する事が出來た。僕は雨の夜に自分手に米を炊く』など考へた。

米を洗つて、内へ持つて入ると、例の主人が『それ炭を上げるでよ。二錢のもあつたらいゝたらうな』と炭を見せる。

『こちらの室に火鉢があるでわ』と二尺許りの土間を遣いた隣つた室の障子を一寸開いて呉れた。開けろと云へぬが向ふの方には六人の男と女が三組になつて抱き合つて寢て居る。中には子を中にして居る者もあり、裸體になつて着物を薄い薄い蒲團の上に置いて寢て居る者もある。蚊が居るが蚊帳はつらぬらしい。こちらの入口の隅に鐵の火鉢がある。主人は、

『あの火鉢でー――』と示して呉れた。幸ひ火種がある。二錢の炭を入れて火を起した。大分待たねばならぬと、榮一は隅に向つて坐つた。然し矢張り三組の男女が眠の前にちらつく。

『え、まだ學生で御座りまして職業も何も無いのです。近頃腦が惡いのでブラ〳〵しに居ります。』

『さうでいらつしやりますか今日は何處からお歸りで？』と尋ねられて、榮一は答に困つた。

しばらく二人に沈默したが雨がまた烈しく降つて來たらしい、戸の外には恐ろしい音がする。榮一は何とは無しに感情が興奮する樣に覺えた。然し胸には悲壯な血が湧く。小さい聲で、

『此處に集てゐる人達はどういふ人達ですか？』と頭を對手の頭にすれ〳〵にして聞くと。

『え、皆、乞食です』と一寸後を見返つて、自分は乞食と同宿して居ても地位が違つて居るよといふ態度で返事をした。

『いや、寄ふとあアやつて寢ッので、夫婦とか何とか云ふ六づかしいことはあの仲間には無いのですな。』

『さうですかね』と慾いた樣子で榮一は答へた。語をついで榮一は、

『乞食だけですか？　これらの人は？　よくやつて行けますね。』

『そいまたヨに一升も一升五合も米を貰ふ事は普通ですからな。そしてそれをまた此處らへ來て賣る

のですが一合三錢か四錢かに。』

『おなたさんは？』と榮一が尋ねると、

『越中で御座りますね。何をして居らつしやいますか』と訊ねた。訊ねられて視線を炭火の方へ轉じながら、少しの間默つて居たが、廻りをして居ります。唯今の處では』

『はい、何です、油料事業の遊說で、田舍廻りをして居ります。唯今の處では』

榮一は、殖林事業の遊說……大きな事を云ふ男だなと思ひながら、その男を見ると一寸息を切る。

『遊說とはどうゝ云ふ處を？』と大きな聲で聞くと、

『大きな聲をせん樣に、皆が寢て居りますからな。』と制して大きな聲で會話を避けようとして居る。

榮一は此人の動作が不思議で堪ら無かつた。紺の羽は低い聲で。

『殖林の勸誘で御座りますから家々を尋ねて行くので御座りますがない。あの村で三日、此村で五日と家々を訪問して殖林の道を講じて居るので御座ります。』

『さうですか、それは善い思ひ付ですね。』と贊成の意を表すると。

『あなたはどうゝ云ふ御職業で居らつしやりますか』と問ふから、

が厭はしいので乞食の眞似でもいゝから、日本の爲めに國の爲めなら決して身を厭はずに遣つて一つ外の人の思ひ付いて居らぬ殖林事業の遊説をしやうと寺を出たので御座りますが……もう寺を出て今年で十年難行のありだけはして來ましたが……實際どうも世間の人は馬鹿としか思へませんな。」と述べたてる。

「さうですか、中々熱心に奮闘せられたのですね。」

「隨分やつて來ましたな。」

「然し殖林と云ふのは一體どう云ふのです。」

「私のいふのはいや何に、面倒なことはないので、日本の國は材木國であるのに、材木を伐つて了ふと家を建てる木は少なくなる。それに家を建てる木は伐つてから二十年すれば丁度や物になるから二十年目に立つて居つた木で三十年すれば尚よくなる。それが——と說いて廻るのですが——日本に五千萬人の人口があるとしますと一人に付いて一本づゝ、植ゑてはどうですか——桐を家のもの一人に付いて一本づゝ、植ゑる必要があるが——桐は一番早く植ゑるなら五千萬本の桐の木が生へる理由で、之れで色々な木を

「フム、と栄一は感心した顔をして、明日の朝の分が御覧の方が御覧より甘いか、然し彼も魚の上物で落胆の分に少し強した。

「あなたは明日の朝は何処へ？」と問ふ。

「さ何処かしれませんが、彷徨くのがすきですから。」と答へたが、

栄一は某商人の新しい絽の衣服に目を付けるっ

「何故です？」

「こんな振してはどうしようもない。」と栄一の

「何でも善いでせう、自分の主義さへ通せばよ

な。」と答へる。

「世の中の人は羊馬鹿と思はれば事業には取りかゝれませんよ……自信が必要ですね。」と栄一は笑ふ紙味でふと「世の中の人は心の中は読まんで

の心を読んだかの如くにふと、男は改つた口調で、

「全くさうですな。これで私も越中の高林寺の僧侶で御座りますが、今時の坊主が酒色に溺れ居るの

女が泣き倒れて居る。二階から三つ四つの荒々しい顔が、眼許り光らして下を覗いて居る。

連中だ。主人はすました顔してまた盃に酒を注いで居る。

二階から覗いて居る顔が、

『どしたんで、一體？』

『ひきずり落したんぢやわ、二階へ逃げて來よつたのを、あしこまで上つて來た奴を。』と話して居る。

僧は落付き拂つて煙草を薫らして居る。ちつとも騒ぐ樣に見えぬ。

『困つたものです。下等社會は。』と云つて少し高く止つて居る。

新見はゴールキイの小説をパノラマで見る感がした。胸が壓迫せられる樣に重い。然し木賃宿の内は何か活氣が滿ちて居る。生命の水が湧いて居る樣だ。

『あれ所じやないのです。一昨日の晩なぞ、そら非道い喧嘩しました。息子が歸つて來ましたので。なんでも此處の主人は此處のお神さんと後から一緒になつた樣ですな。息子は先の女房の子の樣ですから……』

榮一はまだ老人の夢の樣な經驗談を聞きたいので、

『遊說の結果はどうですか？』と再び尋ねると、

清親爺がすぐ思ひ立つて國を出ましたが……いや世の中の人は耳が無いので困りますわい――

――と眼の下に皺をよせて冷かに笑つて　俛いたまゝ烟管に煙草をつぐ。

障子の向ふに主人の罵る聲が起るが、唯、罵る聲許りで罵られる者は誰れか知れぬ。主人は酒の醉が廻つたのだ。

榮一は煙に卷かれて唯苦笑した――此老人にもまだ若々しいドン、キホーテ式愛國心があるかと思つて、

『いや、ドン、キホーテ式は實際怪麼封建的時代の老人の頭に多く湧くのだ。武士道は低木的にドン、キホーテ式だから寂しい人生だ。此老僧の孤獨な情熱の生涯を何とはなしに冬枯れに會つた桐の葉が一枚一枚ひら〳〵落ちると共に細い灰色がゝつた幹が眞直につつ立つて、枝も僅か二三本幹の先についたなり西風に震ひ上つて居るのが眼の前に浮ぶ樣だ。木賃宿階級の社會は之れだから愉快だと思はざるを得ない。

『それで効果はどうですか？』

と、問うた時に急に二階から落ちる物音がして女の泣き叫ぶ聲がする。主人の聲で。

『此の畜生奴が！』と物狂はしく聞える。榮一は障子を開いて立ち上ると、佛壇の横の梯子段の下に

みたら、老僧は頗る眞面目に、

「感心したのあなたに、さう云はれて貰はぬ理由には行かぬ。よし貰ひませう。……然しあなたは豪い。世界にあなたの様な見上げた人は一寸少ない……」と嘆賞して居る。

榮一はシャツもズボンも脱いで褌一つで火鉢の前に坐る。老僧も衣服を脱いだ。

合せて小氣味よく笑つて暫く默つてゐた。外は雨が急しく音をたてゝ降つて居る。

ツクな眞似をした。他人の爲めに着物を脱ぐと云ふ聖人の眞似をした。我輩も聖人の中だ。」など笑ひ

午ら亜晩は御浦團にくるまつて寢た。

二十二

翌朝暗い中に、一晩五錢で借す煎餅の様な浦團から起き出た榮一は、筒袖の襤褸を着たまゝ大手を振つて我家に歸つて行つた。

勢兒の金比羅の下から大道を急いで歩いて居た時にこんなことを考へた——

『人間が大きくなると餘裕が出來て來る。餘裕が出來て來ると何物にも慾かなくなる。人生が眞似の様に見える。善も別に賞めた事でなく。惡も決して惡いものでなくなる。……惡を責めなくなり、惡

『今の處は駄目ですな。どうも私を乞食の様に思つて信用して呉れませんからな。』

開いた障子が閉ぢやうと向ふを見ると、主人は甘さうに飲んで居る。新兒は喉が乾く様に思つた。六人の乞食は靜に眠つて居る。

『つまりあなたの風體を見て信用しないのですか？』

『まア、そんな者ですな。之れが一月前までは袈裟があつたのですが、木賃で一晩泊つて財布も何にもかも取られたので、袈裟だけ殘つた奴を旅籠賃の代りに置いて、今は恁麼襤褸の筒袖一枚になつたものですからな。人が信用して呉れんのも尤もですわ。』

『それじや、あなたの衣物と私の衣服を交換しませうか？』とぶつて見た。

『冗談じや御座りませぬ。虱の居る様な襤褸と、あんた様のやうな立派な絽――』

『さ、お上へまいらう。おかまひ無くばつと』と矢張り眞向目に主張する。

『冗談じや御座りませぬぜ』と大きな聲で斷る。

こいつは一つローマンチック風を吹かしてやれと榮一は考へたので。

『何だえ。君、一枚や二枚の着物位ね。裸體になつても知れてるじや無いかね。それじや人に遣ることも知らないだらうね――』と一寸をよう貰はぬのかい？

と相手にならぬ。

『お父様。栄一で御座ります、栄一で御座ります……一寸とお父様に申上げたい事が御座りまして参りました』と出来るだけ柔和な聲を装うて父を揺り起した。父は暫くして目を醒ましたが無意識の中でふと様に、

『栄一か？　今日はもう要事があるからな、外へ出歩いてはならぬぞ。』と至極穏當に云つた。それで、

『お父様、どんな御用で御座りますか？』と問ふと、父は默つて亦た前圍の中に入れた。栄一は父が何時に無い用事があるなどふから不審で堪らなかつた。父は一寸と首を傾けて暫くの間栄一は默つて居たが、

『栄一、用事があるからな、今日は二階の東の間から出てはならぬぞ。』と叱る様に命じた。

女中が『旦那様郵便が参りました。』と父の枕元へ手紙を持つて来た。栄一は怠惰に、鶴子からの手紙はそれだと気が付いて、『これは私の、』と手に取り上げて封を切つた。

厚い重い封筒の手紙は四五通の手紙を見た。

讀んで行く中に栄一は手足が震へて胸が騒ぐことを感じた。鶴子はもう自分を馬鹿にし切つて居るやうだ。一生涯獨身主義で送ると云ふことを繰返し繰返し書いて居る。そして何かその文字の下には、

に同情する様にたゝ。悪をする位に行が胸の中に出来てくる……その変りに、清は安石の様に珍らしくなる。そしてその時が人間の危機とでもいふ時だ。「こんなことを汚へ作ら家の門へ来たのが午前五時半であつた。

栄一はどう処分して宜いかとお梅と二人で考へた。が、栄一は一日は騒いで、父も遂に頭痛がすると云つて市役所にも出勤せずに居り、医師の三木浩を招いて診れるなと断つて栄一の全く発狂したことを告げた。

三木は実情を聞いて理由も無く精神病院に送れと云つたが、新見は笑込乍ら、「已の子の息子が女に惚れて発狂したと新聞にでも出されては市長の名誉にも関するから。内々で出来る限り度々したいが——」と答へた。然し外に策も無いので先づ神戸の港山脳病院にでも送ることにしやうと一決した。

それで今朝は安心して寝て居るとの答を得たので奥へ這入つて行つた。

栄一は門の戸が開かれて間も無く帰つて来た。下女に父が未だ寝て居るかを尋ねて、未だ寝て居る。栄一は父の枕元にかしこまつて坐り。——

奥にはまだ行燈がついて益則もお梅も父も寝て居る。

然し怎麼事ではならぬ。主義に立つて居る者が未來に對する恐怖とか、自分の居る位の事で身震ひする樣なことでは、駄目だと思つたから、身を起して窓に立つて見渡すと、晴れ渡る朝空に、川に沿うて生えて居る老松の綠が如何にも對照よく見える。北の方には裁縫女學校の容れ宿舍の窓から顏を出して此方を見る者がある。呑氣だと思つたから、怎麼呑氣な世界は僕には不適當だと、また室の隅に倚つて考へた。また鶴子の手紙を讀んだ。讀んで居る中に、二階へ上つて來た。榮一は答へ無かつたが東の隅に居るのを見て、

『榮一、榮一、榮一は何處に居るか?』と父が言ふ。

『榮一、貴樣はな、氣が狂れて居るからな、嘗らく學校を止めて保養した方が善いと思ふが、どうじや?』と父は顏色を變へて云ふた。

『お父樣、私は何にも氣が狂つて、居りませぬよ。紙狂ひでも何でもありませんよ。』と榮一は答へた。

『それぢや何故、家を燒いたり、床の間を削つたりするのか?』と眼を瞋らせて問ふた。此の間ひを待つて居ると榮一は、

『お父樣を詐くした許りに——私の胸を悟つて貰ひたい許りにです』と答へた。父は憎い笑ひに洩

新児の家庭に対して不満である様なことも言いて居るのでも無いが、態を自然的にするとこふ勇気も無く、全く冷かして了ふことも恐れて居るらしい。然し全體の調子は『否定的』である。それで榮一は地球から抛り出された様な氣がして居れば『……』榮一は鶴子に裏切られたことを悔しく思つた。然し仕方がない。』と繰返して以後は文通が出来ないからと言き、之は消燈後廊下の電燈の光で夜半に書いたのだと讀んで居て堪らなくなつたから急に立ち上つて二階のスタデーへ這入らうと襖を蹴立てゝ二階へ駈けにつた。驚いたのは、自分のスタデーは洗濯物の爲めにでんぐり返してある、腹は立つが東の部屋へ飛び込んで行つて、打ち倒れた。そして唯、泣いた。泣いても泣いても足らない。頬の筋肉がビリ〳〵する程泣いたが、まだ足らぬ。そして唯、泣さたくて堪え切れぬから、鶴子の裏切が猶憎い。泣いて泣いて泣いて泣いて来た。

『お父様が今日は學校へ行つてはなりませぬつて……』と傳へに来た。

『何故？』と自分に問ふたが解することが出来ない。たゞ未来に對する恐怖と自分の室の荒されて居る事に對する想像とが相混つて、動悸の高くなるのを感じるのみである。

『お父様。何故私を腦病院へなんぞへお入れなさるのですか？』と尋ねた。然し父は榮一の眼を睨んで、

『お前の眼付が、普通の人の様になれば出してやるわ。……榮一、そこを放せ』と云ふた。

『放せ、榮一そこを。』と撥ぎ取らうとする。それで榮一は……

『お父様、それでは私はもうあなたと一生お口に懸りませぬ。私とあなたの道は別れをいたします。……お父様、私はこれで一生のお別れをいたします。私は私の道を急ぎます。そしてあなたにはあたたのお杖、果てた古い道を歩ゆんで下さい。私は小さい腦病院に行きます。……それでは、お父様、さよなら……最後に私はあなたを刺んで、之を今生の見納めにさせて頂きます』

よなら……最後に私はあなたを刺んで、之を今生の見納めにさせて頂きます』

腦病院へ、之から出かけて行きます。……それでは、お父様、さよたら、私を

外は朝日が輝いて居た。榮一は思はず獨言をこぶふた。『あゝ、どうしてまア日本の家庭はこんなに暗いのであらうか、外はこんなに輝いて居るに？』と……

その晩榮一は叔母から少しばかりの金を借りて神戸行の三等船客となつた。

垂た筒袖そのまゝで。

らして、

『己を善くするどうして己を善くする事が出來るか。』と冷酷に云ふた。

『お父樣がお梅や外の女に現をぬかさ無ければ何にも氣は狂せしないのだけれども……』と泣く樣に獨言を云うて、暫く默つた。然しその時「僕の樣な者を氣狂ひと云ふのだらうかな。」とも考へてみた。

『お前の着て居る着物は何じや、それは。そんな物を着て歸つて氣違ひでないと云へるか？』と父はまた笑ふた。そして今度は稍改つた口調で、

「榮一、お前、今は氣がをさまつて居てもまた氣が狂はないやうになるまで、腦病院へやつてやるから、そこへ行つて呉れよ。』と宣告した。

腦病院と聞いて榮一は突然立ち立つて父に近づいて行つた。そして父の顏を見詰めながら、

『腦病院に這入れえ？　這入ります。仰る通り。もし內に居るとお父樣や御家內を傷けることがあるかも知れぬと仰るなら……然しお父樣はいつ、私の云ふことを聞いてくださるのです。』と涙を拭き乍ら訴ねた。父は無頓着に、

『それじや行くな？』と駄目を押して立ち去らうとした。其の時榮一は少し踏つたが、つか〳〵と進んで行つた。父の袖を捕へて、急に子供心に立ち歸つたかのやうに——

神戸へ上陸つた、榮一は故意と鍛冶屋町の店に手を經て東出町の沖仲仕の權藏部屋に送られた。口入屋の亭主に頼んだが、不景氣で何處にも口が無いからとゝふことで、とう〳〵東出町の權藏部屋に送られた。

榮一はこれが、自らが受く可き苦き杯であることを信じた。榮一は何處かのエ場に送つてくれとはよら無かつた。そしてすぐ波町四丁目の日入屋に送られた。

二七四

に送られた。

權藏部屋の生活はあまりに苦し過ぎるものであつた。壁一枚に二人平均に詰込んで、狹い天井の低い、物置きの様な所に寢かされた。榮一には革命も、社會主義も、凡ての理想主義の問題も一度に消えた。社會改造さへも許され無い程墮落し過ぎて居ると云ふことに氣がついた。彼は毎日七方の手傳にやられた。或時はまた鐵のヅクを擔はされた。沖仲仕に出て、ウエンチ番位になりたいとゝふ理想も有つたがそれは理想ばかりで有ることがわかつた。熟練の無いものは仲仕さへ出來ないと云ふことが理解された。部屋ではすぐ榮一に『書瓢箪』とゝふ異名がつけられた。榮一は屠根を葺く時に用ゆる土を運ぶことが、自分に最も適したものであることがわかつたので、毎日それを志願して、遂く脇浜

――（屋根に土を運ぶ時に、桶に土を入れて、鐵砲の様に肩にのせて、屋根にかついで行くことを錬摩とゐふ）――をやつて居る時でも、無理な註文ばかりするのである。或時の如きは土の運びやうが遅いと云うて、彼を屋根の上から衝き落したが、幸にして『なる』（柱）にひつかゝつて下まで落ちも無くてすんだ事もあつた。榮一が坂井を徳としたのは、畢丸政が榮一をいぢめる時にいつも泣いた。そして彼はたゞ、部屋に誰かゞ拾てくれたからで有つた。榮一はそんなに、いぢめられる時にいつでも榮一自由の身になりたいと神に祈りたかつた。然し彼は自分が全く奴隷以上の苦しい生活に沈められて居ることに氣がついても神に祈る信仰も無かつた。或時は自の「日本」を拾つて、『いぢめられ日記』を書いた。

その『いぢめられ日記』は實に悲慘なもので有つた。榮一はドン底より實在を呪つた。また或時は社會主義のことを考へて見たっ また或時は社會主義の時代になつて、この『畢丸政』の様な執政官に出會したものなら、とてもやり切れ無いとも考へた。

彼は權藏部屋に來て最初に貰つた二圓三十三錢の金で單衣の古手を一枚買ふた。それは一枚二圓で有つた。久し振りに氣持ちが善くなつたので、鍛冶屋町の店を訪問した。二十數日間の新聞の綴込みが見たい爲めで有つた。然し勿論、父の様子も伺ふ爲めで有

郎買の話をして居た。然し栄一は、性慾を起す元気さへも無かつた。彼には理想も、性慾も、希望も、親友も、文化も、新聞も、金も、着物も、品格も、安らかな寝床も。

書物も何にも無かつた。彼は自分に『今僕は消極的聖人だ』と云つた。全く彼は聖人で有つた。

見もた賃銀として一日六十五銭を貰ふ筈で有つたが、それは表面だけのことで有つて、食費として五十銭を除き去られると、一日に十五銭しか剰らぬ勘定になつて居た。然し彼はその十五銭に対する所有権をも捨てた。折々大きな店の装飾棚や、硝子戸の前に立つて、そのみすぼらしい姿を憐れんだ。が仕方が無いとあきらめて居た。

髪がのびた。然し散髪する必要が無かつた。味噌髭が生えた。然しそれを剃る慾望も無かつた。

彼は社会の凡てを呪ひたかつた。ドン底に落ちて、始めて社会の呪ひ方を彼は知つた。然し彼にはペンも紙も机も雪氣燈も無かつた。権蔵部屋には十畳敷に二十二人も詰まつて寝るのだが、そこには五燭の電気が一つしか無かつた。彼は仕事場で思ふ存分『罪丸政』と云ふ男から毎日のやうに侮辱された。

罪丸政は彼が『一』かた『罪』で有る爲めに、こんな、あだ名をつけられたのである。彼は二番の消防の筒、先だと云ふのが自慢で、仕事場では、火事の話ばかりしないが、栄一は話があんまりつまらぬから、『書生ポの書瓢箪は生意氣だ』と云つて『鐵砲撃ち』

とをよく知つて居た。然し東京から歸つて來た時の擧動だか悲しくなつて、新聞を見せて貰う勇氣も無く、そのまゝすごゝと東出町の權藏部屋に歸つて來た。そして、一枚の煎餅蒲團にくるまつて泣いたっ店を出る時に、利井は榮一の住所を尋ねて居たが、榮一はわざと返事をせずに飛んで歸つた。

その後、榮一には辛いことが續いた。仕事先で毎日の樣に負傷した。そして瓦屋根を踏んで土を運ぶ時に、正午の太陽が上からカンカン照りつけて、瓦が玉の樣に光ると、彼は勞働の神聖を思ふたっそしてその瞬間が彼には最も宗教的な時であつた。

彼には進歩も成長も無かつた。彼は白いこの頃の生活を『銅線の生活』だと叫んだ。たゞ時間的に延長するのみで、それ以上進化する望みも何にも無かつたからである。

雨が續いて降つた。そして權藏部屋の男はみな毎日、家でごろ〳〵して居た。賭博がはづんだ。賭博をしないものは渾名『讃岐』とよばふ三十男の病身ものと榮一だけで有つた。

その内に、川崎造船所の雜工に雇はれて居たものが鐵板に跳ね飛ばされ即死したので有つたが、その葬式には榮一もほと〳〵勞働者の生活の悲哀を思はされた。

つた。

村井は洋服を着て店の椅子に腰を掛けて居た。に、村井は狀紙に何か頻りに書いて居た。そしてらぬ顏をして居た。それで、榮一は、

『村井さん、今日は……』と挨拶をしたが村井は氣乘りがしない何調で、

『おや、坊々、どうしていやはるんだ？　お父さんの所へは、大旦那が東京へお越の節、一寸とお立寄りになりましたが、何の便も無いと云うていらつしやいましたが……』

『いや……何とか云ふて來ましたか？』

『先達つて、大旦那が東京へお越の節、一寸とお立寄りになりましたが、何の便も無いと云うていらつしやいましたが……』

お忘れ申しましたら、家を出てもう二週間も立つがあなたは、こゝにいらつしやつたのですか……丸坊主になつて居らつしやるから、一寸と會つてもわかりませんな……大層痩せて、お焦げになりましたな。一體どこにいやはるんです？』

『父は心配して居りましたか？』

『いや、別に』さう云つて村井は怠しく手紙を書いて居る。榮一に對して全く愛憎が無いこと甚し い。然し彼はそれを別に氣にも咎め無かつた。彼はそれを金と力の無いものが、此世界で尊敬せられないこ

榮一が這入つて行つた時

『ハー』に倚りかゝるまで知

『内へ歸れ、私からうまいこと云うてあげまつさ……然しな、ぼん〳〵、大將は、どえらい大病だすとさ。もうあかんと云うて居つたわ……腸チブスやと。榮一つ、あんか歸つておあげやす、あんたも親不孝やな、學問するとあんたのやうになるからや、私や嫌ひだ』

『え、お父樣……病氣？　もう、あかんて？』

榮一は非常に變になつた。それで漸く、

『お父樣がわるかつたと云ふ電報が來たら知らして呉やはるのだす？　村井から此間、あなたが貧相な姿をして店に見えたと云ふことだけは聞いたけど、一體どこにお父さんのことも、もう少し早く知らさ無きやなら んのやけんどうするものか、後繼ぎじや無いかあなたは……然し、榮一つあん、わからんもんやさかい、失敬しとりまして、ん』

榮一は自分の下宿——卽ち權藏部屋のある所を詳しく教へた。それを聞いて穗積は、

『ア、、知つとる、知つとるとも、あしこかいな、ありや二番の消防の小頭の柴田のうちや、わたし

そして来る日も来る日も雨がつゞいてまる九日間は食ふばかりで、仕事には少しも出なかつた。それでその間の食費は全部借金となつた。そして榮一はこの借金を支拂ふ爲めに二ケ月は、たゞ働きをねばならぬと云ふことを考へてラサールの『賃銀鐵則』どころでは無く『賃銀地獄』と云ふことを思ひついた。榮一は古着屋の店先を通る時——餅屋の前を通る時——生れて始めて泥棒してみたいと云ふことを感じた。

彼は彼の手と足を見詰めた。そして自己の姿を見詰めた。そして自己の悲慘な姿に泣いた。耐會は改造ずることも何にも出來ぬ程團結してしまつて居るので、彼が勞働運動など夢みてるたことは全く夢で有つたのだ。日本の勞働者は日醒すことが出來ぬ程疲れ切つて居る。

彼は毎日この疲れた日課を繰返した。そしてそれが月の何日で、何曜日であるかも忘れた程で有つた。丁度雨の時れた第一の午後、彼が脇濱の山口の建築場から大勢と一緒に歸つて來る時であつた、榮一は兵庫の店の穗積と宇治川尻でひよつくり出會した。勿論穗積が知らう筈は無かつたが、榮一から『ぼんぼん……そんな風でなにしていやはるんだ？　あんたも物好きやな』と冷かされた。それに對しても榮一は別に何とも答へ無かつた。

ふことだけは學び得たと考へて居た。

葬式の日に、榮一は出來るだけ、無關心であることに、心をきめて居た。然し瑞巖寺の葬式場で十二ケ寺のお坊さんの後について、三度、棺のぐるりを廻つた時に、無關心では居れ無かつた。默つて歩いて居る中に、父と彼との『生』の交渉がパノラマのやうに見えた。それで、榮一はハムレットがオツフエリアの葬列を見たより以上に——榮一はその時さう感じた——實在に對する驚異と悲哀に泣いた。凡てが神秘であつた。少しも音樂的で無い銅鐘の響き……印度的續經の音譜：榮一はその無意味な葬式の音樂を聞き乍ら堅く決心した——彼は凡ての『死』の線を飛び越えて、因襲と固息と傳統と迷妄と戰はねばならぬと云ふことを。

彼の前には今大きな世界がある。それは榮一が嘗て父に云つたことのある大きな腦病院である。……軍國主義と、資本主義の『パラノイア』に惱まされて居る、地球大の腦病院である。榮一が發狂して居るのか、地球が發狂して居るのか、戰ひは之れからであると決心した。

二十四

父は遺言も何にもせずに死んだので、親族會議が遺産取り調べをしたが、家屋敷地が二ケ所も三ケ

あいつよう知つとる』と云うて居た。

榮一はそれで穗積と別れたが。晩に榮一が柴田の狹い庭で、立つたまゝ、飯を食つて居る時に、新見の店の小僧六藏が村井からの手紙を持つて來た。それは父の死を報じたもので有つた。

榮一は俯向を斗分食ひくさしにして主人の柴田に理由を述べて暇を貰ひたいと申出た。その時ちぐれ毛の細目でやぶにらみのおかみさんが出て來て、

『あなたは、うちに四圓五十錢の借金があることを知つとるから、拂つてくれはりまつしやろか』と尋ねて居た。それで榮一は初めて兵庫の店のことを話した。そしてすぐ一緒に取りに來てくれと云ふその金を取りに行く命令を受けたのはそこに居合せた翠玉政であつた。おかみさんは飽迄も言葉を換はさずに歩いた。そして東出町から鍛冶屋町まで二十分以上も少しある歩いた。

村井は榮一の借金を拂つてくれた。翠玉政は妙な眼付をしてそれを受取つて歸つた。

その晩榮一は徳島行の船に乘つた。村井も同船した。

榮一は村井に多く彼の顏を見せ無かつた。そして話もしなかつた。權藏部屋で『讃岐』の死を見た彼は。父の死が特に意義あるものとは考へなかつた。彼はドン底で意志は鐵の如くあらねばならぬと云

度經驗する事も主義の運動の爲めに必要な事であると自ら辯解して、安井の叔父の言に從ふことにした。今榮一はあの辛かつた權藏部屋生活の二ケ月を忘れることに努力した。

榮一が兵庫に來てから、榮一は世界が變つた事を自覺した、自分は主人だ、まづ云へば資本家だ。然し自己が客觀に景色を眺める事はまだ遠い事で、自己はまだ眞の自己を發見する事は出來ぬと悲しく思ふた。

今は、自己の凡てを捨て、社會に化しようと覺悟した。五月の始め頃の勇氣と熱烈とは既に失せて、苦い客觀の權威が固く自分を縛め上げ、泣くにも泣けず、叫ぶにも叫べぬものにして、深い海の底に沈めにかけて居る樣な心地がした。近頃は自己の破滅を思はずには居られなかつた。

放浪中鶴子から一通の手紙も手に入れなかつた。が、こちらも一通も送ることが出來なかつた。

また放浪中、奮鬪的生涯の苦痛は到底女の如き弱い者が堪え得べきものでは無い。鶴子と云へども所詮自分と一緒に來ぬと思つたから、戀は一種の罪だとして捨て置いた。

また不思議に晝だけでも戀を忘却した。いや少なくも忘却せんと努力して居た。

所にも抵當に這入つて居るには合くあきれて終つた。

榮一は凡ての會議に與からずに日に日に勉强して居た。二週間位はどうなることやら榮一には隨分かかなかつたが、ある時大阪の安井の叔父が事情を聞くので一々訂したが吃驚して遣るから、あしこをやつて行け。已れが徳則と義敬は無い、田舍のお母様は、何にも心配することは無い、お前は、兵庫の店を甘いことして世話するから、何にも心配することは無い、田舍のお母様は、あれでは少し氣の毒だ、自分の貯金も大分あつし、裏座敷を殘すことにしたからあれでじつと居て貰ふ……』と云つて呉れた、叔父は笑つて居る。それも其筈、笑は父の死んだと云ふ事さへも知らず。勿論つても來無かつたからである。

綱屋と藍の寢床は共壞されることになつた。

大きな家は通町の松田が抵當の擔保として受取ることになつた。本次は裏座敷へ這入つた。大きな事は進行しなかつた。

榮一は兵庫の運送店へ來た。

榮一は實業に自分のジニアスがあるとは思はない。勿論彼の希望では無かつた。然し彼は今直に下層社會に飛び込んで行く勇氣は無かつた。權藏部屋と木賃宿は彼には餘り暗かつた。それで實業を一

く皮膚が滑らかで綺麗で、男がその横へ行くと少しの間だけ快感を覚へさすものだと云ふ。唯「書物、書物」と、少し金廻りが善いと好きな んな快感が五年も十年も續くであらうかと心配する。哲學書を多く東京の丸善から取り寄せた。で、船積から歸つて、此書物の間に身を投げて卵と牛乳を 啜りながら横になるのであつた。淡路出の四十恰好の下女のお徳が「旦那様、 したが……」と云つて來るまで外國雜誌の評論でも讀んで居る。淋しい。膳に坐つても菜食主義だ。 御馳走のある筈が無い。海苔で舌鼓をうつ。ア、、ヒユームの様に妹でも居れば。」と思ふが、妹も居らねば猫も居らぬ。榮一は神戸に來て直に妹の行衛を尋ねて見たが何處に隱れたか一向知れぬ。賴んで置いた吉田由太郎も「妹を鹿の様に云つて叱る。由太郎の宅には寄り付きもしなかつた相だ。寢る時になつて男の友人でもあればと思ふが、今迄一人として心からの友人の無いのが悲しい。然し鶴子が……と思ひ出すと手を握り合つたり、抱き付き合つた、友愛の情の細かであつた過去を思ふ「セツクス」を救きにするならば鶴子はよい友人だと……慕しく、なつかしくなる。「鶴子は立派な女だ」と獨言を云ふて、その友情が求めたい氣がする。「友としての鶴子！」と繰返すと胸に聖い泉が湧く様だ。蒲團の中で低廉な事を思ひながら本を讀むといつの間にか睡つて居る。之が一日だ。

然し不愉快な事許りでも無い。小僧と番頭と下女が、可愛がつてやる爲めに愛嬌に充ちて來た。ま

然し人間のあせつて居る都會に出て、運輸事業を始めると、自分と云ふ袋には全く底が無い事を自覺せずには居れぬ。學校と云ふ、社會に關係の無い所では底なしでも善かつたが今は底がいる。此底は何に？　布片では駄目だ。』『女か？』と榮一は胸に手を置いた。が、今になると、名譽も得られず、戀は破れて自己が段々と收縮する。無限に延ばした翼が一枚一枚羽根を落して今は筋までも切り斷たれかゝつて居るのだと思ふた。

運輸事業を始めた。老ファウストの如く海に望んだ。然し何處にメストフエレスが潛んで居る？　何處に神秘があるか？　何處に堤を造つて海を干すか？

榮一は權威を持たぬ。出來るだけ謙遜して、郵船會社に、自分の店に、さては沖に繫留る船に立ち動いて見た。社會主義の實現とか無政府主義的自由とかは思ひもよらぬ事だ。大きなミネソタ號が榮一を乘せて笑つて居る。

榮一は朝五時から起きて勉強する。八時から小僧六彌と一緒に船積に行つて晩の八時で無ければ歸つて來ぬ。晩に船積から歸つて來て肉を食ふのでも無ければ、酒を飲むのでも無い。それかと云つて戀しい人が待つて居るのではない。また戀の興味も湧かぬ。女と云ふものが無ければ淋しいと思ふが——然し女の事は何かと思ふと早や飽きが來る。女と云ふものは唯肉付がよ

美しく見える。然し榮一は猫を抱いて此美しい市街美とでも云ふものを考へてみた。

満屋牛七と二勝の心中劇がさあと幻の様に現れる。瓦屋根が銀のやうに光る。

翌朝小猫が居の大評判となつた。穗積は『こいつは牡だ！』と大騒ぎを始める。『牡だ！』と細川が冷かす。四日の間、朝から晩まで此猫で皆笑つた。榮一は毎晩抱いて寝たら丁度いゝわ、』と下の方から這い出て主人の鼻息きを伺つて、例の小さい柔かた濕ふた鼻を、榮一の鼻につけて上唇を舌で舐める。『猫のキッス！』だと榮一は独り笑つたが、起きて見ると蒲團の下に小便や糞をしてをる。之を店員に話すると皆『若旦那許りじや無い。私の處にも。』と云ひ出る。四日目の朝は昨日降りであつたが、此小猫が無遠慮にも穗積君の法被の上へまた遣つた。穗積君大いに怒つて、小僧の六彌に命じて濱へ捨てに遣つた。小僧は平べつたい顔に大きな鼻をしてゐるから、濱へ捨てに行つた。いつもならば六彌は穗積の大きな薄ぺらな唇から、嘲笑の聲を洩らしながら、濱へ捨てに行つた。いつもならば六彌は穗積の云ふことなどを聞くのではないが喜劇の結末をつけやうと思つて、云ふことをきいた。小僧が歸つて來るのを待つて居た若主人は『どうした？』と尋ねた。『あまり可哀相であつたから、濱の菓子屋へやつて來た。』と云つて居る。それで喜劇の一幕が濟んだ。

十一月の終りになると店の者が公然と遊廓の話を若主人の前で話し始めて、細川の如きは休暇を煙

た経済上思つたよりも融通が善いので、居員に俸給を増してやつた。それで此調子なら居員輩と利益配分上差の方針で事業を擴張して見ようかと云ふ夢が出來た。之は愉快でなければならない。

十一月の始めから少居見物を初めた。人情史を研究して見ようなど考へ付いて、十一月の滿月の晩まだ小さい猫で、瞼に赤い所が多かつた。赤い細い縮緬の頸玉をして鈴を付けて居たが、馬鹿に痩せて、白と黒との斑の毛が格別長い様に思はれた。

懐れ味深い榮一は之を拾ひ上げた。懐へ入れてやると、今迄泣いて居た小猫がちやんと泣きやんで唯吹をグワラ〳〵云はす許りだ。折々懐の中で大騒動を初める。榮一は笑ひながら、捨てゝ置くと段々胸を擧ぢ登つて榮一の鼻尖を伺つて『ニヤオ』と泣く。そして濕り氣のある小さい柔かな鼻先を榮一の鼻につける。心持ちが悪いが、憎くもない。『ニヤオ』と泣いて懐の中へ這入る。

首だけ襟から外へ出してやると月を見て居る様だ。榮一は生命に疲れた戀人を擁いて居る様に感じた。月との對照が殊にいゝ。本町を歩みながら色々と考へて見たが、猫が愛らしい。月影が瓦屋根に落ちて夜露の多い所が光る。電信柱と電線の影が道に寫つて、白い絹に紋様をぬいた様だ。月夜は街でも

東京では『新紀元』の一派と柏木派が分裂して後、『新紀元』は廢刊する、I氏やF女史がその後を引き繼いで小さい新聞を發刊して、罰金ばかり拂はされて居たが、新見はそれを三、河の山奥に住んで居る主義者から聞いて、十圓を送つた。榮一は、何とかして日本に於て、民主思想が、もう少し徹底的に宣傳せられねばならぬと考へたが、自分の今の立場ではどうすることも出來なかつた。榮一には、英國の社會改良家トインビーの樣に貧民と共に一生を送りたいと云ふ希望が益々盛んに起つて來た。

それで、榮一は凡ての性の慾望を握らんとした。然し、周圍の誘惑があまりに強過ぎた。そして、最近起つて來た、自然主義文學の感化は榮一の胸にも、強く感ぜられた。榮一は美と女に敗けることが、何だか勝利のやうに感じた。

丁度十一月の末であつた。榮一は村井に賴まれて、神戸の市會議員の三級の補缺選擧に運動せねばならぬことになつた。その時の候補者には、榮町三丁目の鳥井運送店の主人が三級候補で出たのであつたが、演說會は、あとにも先にも、たつた一回開いた切り、それも福原游廓の近くの菊水亭と云ふ四百人位るしか這入れ無い寄席であつた。辯士は多く雜誌屋や新聞屋——それも月に

茸入れの中から出して榮一に見せた。あまり駘々しくなつて來たので增長して、此誘惑を恐ろしいとも思はなかつたが、面白い現象ではないと思つた。

猫の事件の濟んだ次の晩、穗積と楠公さんへ散歩した。穗積は榮一を大弓へ引張る。榮一は氣で這入る。榮一は穗積の樣な大膽で無いのを殘念に思ふた、社會研究だ。何にも見て置く必要があるとまた大弓の前へ來ると、綺麗な凄い程婀娜ぽい女が『お連れがお這入りになつたのに、そんなにしてお歸りにならなくても善うお出でゝ、』もう少ししたら歸りますわ、內へ這入つて、少の間待とん、』と云ふ。仕方なしに這入る。穗積は榮一の菜食主義の事や猫の事を女に喋べる。榮一も別に惡い心持ちはせぬ。暫くして出て來る。二人の女が、

『またお出やす。』と送り出す。榮一は全く女の魔力に驚いた。穗積は色々女の事を喋べる。然し榮一はまだ堅固な積りで居る。

つた話もしなかつた。

唯、小畑は村井から聞いたことを、同志に吹聴して居た。それには新見は餘程大學者だとか云ふので、榮一の隣りに坐つて襲者の名を教へてくれたのみならず、襲者仲間の事情によく通じて居ると見えて、宴會の席では頗るもてた。小畑は特に襲者を紹介してくれた。宴會は十二時半過ぎに果てたが、小畑はまた榮一に第二次會を開くから三人の襲者等と一緒に花隈まで行かぬかと誘ふた。そして榮一は、美の探及者として拒む氣になれなかつた。

花隈の美しい電燈が多くついて居る中に「玉の家」と書いてある下にある時に、格子戸の中から、女の黄い聲がきこえた。そして五人の車が止つた。車が止つた小秀とか云ふ、代之助」と云ふ名のついた女が特別に榮一を大事にしてくれた。花壇から一緒に歸つた小秀とか云ふ、榮一も美しいと思ふ二十二の女は、恥しそうな風をして、話もあまりしなかつた。

のゝ中には、も一人梅澤君と云ふのが有つたが頭痛がすると云つてすぐ二階へ上つて寢てしまつた。

小畑は今夜は、此處で泊ると云ひ出した。そして、新見にも是非泊つて行けと勸めたが、榮一はみんなの冗談話に尻が落付いてしまつて、立ち上つて歸る勇氣も出なかつた。喜代之助も親切に遲いから泊つて歸つて下さいと勸めた。そ

一回出すか出さぬか、廣告塔門で、三ケ月一回　新聞紙法に違反しないやうに出して居る、名前だけは大きな日本金物新聞とか、村木新聞とか、陽明軍油新聞とか、阪神船具新聞とか、でも『海の大日本』とか云ふ名の附いた妙な半分政治ゴロのやうな、地方政治専門家であつたが。話は拇いものばかりであつた。それで、榮一の新しい思想と、訓練された演説は充分聽衆に感動を與へたなど書いて居た。そのわけでも無からうが、その三日後に　新兒榮一氏の雄辯は特に聽衆に感動を與へたなど書いてもらつて一杯だけの酒を呑んだ。

そしてその當選祝ひが、會下山の簡非花壇に開かれたが、その席へは是非新兒君が出席して下さるやうにと、鳥非氏は當選したので初めて、藝者にお酌をしてもらつて一杯だけの酒を呑んだ。榮一はこの時初めて、藝者の踊りと云ふものを少人數で見た。榮一はこの時初めて、多くの人々が陶落することの無理で無いことを知つた。宴會に連なつて居たものは、鳥非氏を入れて、合計三十一人で有つたが、新兒を除いて外は凡て先に云つた、小ほけな川判新聞社の記者連ばかりであつた。そして榮一は此處で、地方の政治と云ふものはどんなものであるかをよく理解した。鳥非と云ふ人は店の村非に云はすと、早稲田の專門學校の出で、長く神戸で回漕業をやつて居る人だそうである。溫厚な人らしい。然し榮一とは別に立ち入

『若旦那えらいことが起りましたぜ！』と云ふ。

榮一は、慌たゞしく

『何です？』

と、尋ねた。

『大福丸が、一週間程前の暴風雨に、遠州灘で難船してマストは折られる、梶は取られる、荷物は三分の一流して、漂流して居た所が、アメリカ行のコレヤ丸に發見せられて、船頭九人だけは一度救助されたお、——なんでも、船頭は、生命だけは助けてやるが、船と荷物は捨てゝ行けと云ふので、住みなれた船を捨てかねて仝艘曲だけを貰ふことゝした、漂流をつゞけた處がいつの間にか、伊豆の大島へ近づいて居たのですお、島の人は漂流船だと云ふので早速救助船を出して、船に殘つて居た荷物の半分位ねはまた村の人に流されたそうですが、村の人は强慾なものだから、船に殘つてしまつたそうです。神戸海上では、この電報を一昨日受取つて、すぐ、伊豆の何とか云ふ港へ人をやつて居るそうですがね……これで相談をして來たのは『丸二』の東京積のアンモニア五百俵ですだらうと云ふのですがな……保險會社の云ふのには、水濡れも無く大丈夫な。あの荷物の半分は流れてしまつて居るのだそうです。所がまだ二百俵位ねは沈沒と違つて、流失ですし、それも、態々船頭

して、艇に、小秀は二人の床が並べて延べられてあることを告げてくれた。榮一は、世界は便利に出來ているもの内に居るよりかと感心した。墨堤と云つても別に下品な、猥褻な所とては少しも無かつた。徳島の父は小畑と二人で同じ宅に寢た。

翌日、榮一も『遊びに來て下さい』と云ふて歸つた。

二十六

翌日、客代之助は長い長い手紙を車夫に持たせて、鍛冶屋町の新兒の店まで屆けた。開け放した榮一はそれを、店のものに見せた。そうすると村井も、六も、穗積も、女中のお徳も、大きな聲で笑ふた。

その日の午後、店に二人の洋服を着た立派な紳士が車で乘りつけて來た。榮一は變に思ふたが、それは『神戸海上保險』の人々で有つた。村井はその人々を迎へて、二階の應接の間で一時間許り長々話して居たが二人が歸つた後に、荷物の『送り狀』を書いて居た榮一の所へ村井がやつて來て、

にたゝぬものにしてくれるなら、保険金を支拂ふと云ふのです。』

『妙なことを云ふのだね……僕にはそんなことは、わからぬがね。』

『そこでですね、私は船は沈沒させることは出來ないから、荷物を海へ拋り込んでしまうか、水で濕らすかすると善いと思ふのですがね。』

話をして居る中に『丸二』の店から電話が懸つて來た。話は矢張りそのことで有つた。村井は弱つて居る。アンモニアは、少し在荷が不足なものだから、」『丸二』でも欲しいと云つて、保險金は欲しいし、兎に角取調べに、人を送つてくれと云ふのである。そうかとそれで、榮一は、村井と相談して穗積を送ることにして、電話で、『丸二』へそうふてやつた。

穗積は、晩の七時半の神戸發の一二等急行で、早速穗積を汗へ探しに行くことになつた。

その晩榮一は、喜代之助と小秀の方に引かれる様な氣がしたので、花隈の方へとぼとぼ歩いて行つた。然し何だか氣恥しくてならない。

丁度、福原まで行つた時に大鼓の鳴る音がするので、何かと思つて見ると、福富傳次隊が、路傍で演藝して來た。榮一は、暗くなつて

が海の中へ抛り込んだものですから。」會社ではどうも、保險金を、全部支拂ふことが出來ないから。お見舞金で辛抱してくれと云ふのですがな……勿論、なんだそうです。もし、あれを、船の底へ穴をあけて沈沒させて了ふか。それとも荷物を全部流失させて居ると、保險金は、全部支拂ふと云ふのですね、それでは。今這入つて居る港でも、船の底に穴をあけさへすれば保險金はもらへますかと訊ねましたところがね、「差上げます」と云ふて居りました。』

『丸二さんは知つて居るのだらうか？』

『こつき、二人で寄つて來たそうです。』

『そんなことをしても、變なものだと、すぐ反對したよ……殘つて居たアンモニアに、わざわざ、水をかけて駄目なことにして。』

『そんなことをしてもいのかね』と、榮一は、石山の船が播州の飾磨沖で、難船した時も、資本主義の經濟學とかふものは、變なものだと、すぐ反對した。

『こら、かはないのですよ、神戸海上の云ひ分によりますと、なんでも丸二さんは、一年に二萬五千圓位ゐの、保險金を拂つて居るそうです。それで、今度の荷物の保險料は總額四萬圓たらずだそうです。だから、この後御愛顧を受け無くてはならぬから、船を沈沒させてくれるか、荷物を全部盜

から出て来た。そして、また花隈まで急いだ。

花隈の方は明るかつた。榮一は、福音傳道館の中はなぜあんなに暗いものかと考へ直してみた。兎に角山手の裏手の尾町は明るい。美しい着物をきた、日のぱつちりと大きい色の白い女が、水も垂れるやうな黒髪を島田に結んで、細い道ですれ違ふ、それだけでも、榮一はうれしかつた。

『玉の家』ではお喜代之助と小秀は、招きが行つたが、新兒が來ると思つて、わざ〳〵それを斷つて待つて居たと云ふ。そうゝはれて見ると、何だか、もう少し早く來ればよかつたにと思つた。

小秀は、秋田美人で、如何にも美しい。今夜は特別に美しく見える。榮一はその傍に坐るだけでも大きな特權だと思つた。

榮一と小秀とお喜代之助と女將と四人は長火鉢を圍んで坐つた。女將と云ふのは少しも女將臭くない。何處かの商人の妻君の樣な風采があつた。小柄な、お菓子が出て、お喜代之助が今夜は芝居にでも連れて行つてと云ふことであつたが、榮一のだんまりに坐が白らけてしまつた。榮一の希望は寧ろ、小秀と話を切つたが、榮一のだんまりに坐が白らけてしまつた。榮一の希望は寧ろ、小秀と二人で、昔鶴子と自由に戀の遊戲をしたやうに遊びたいことであつた。然し喜代之助は榮一に熱心で

居る若い青年と自分とを比較してみて、自分の不甲斐無さを慣慨した。それで、花隈へ行くのを中止して、多里通四丁目の福音傳道館までついて行つた。そして說教の終るまで聞いて居た。新見は說教にさして感じもしなかつたが、勞働者の說しには非常に感じた。低能に見える川崎造船所の人夫だと云ふ、三十五六の男が熱心に自分が無頼漢であつた過去より、イエス、キリストの救によつて、救はれたのは、全く感動されて、涙が流れて抑へることが出來なかつた。

帰るとすぐ忍であると說して居る。榮一はそれには全く感動されて、泣心してクリスチヤンにならうかと考へてみた。そして、決心してクリスチヤンになつて居た。然し。まだ新見にには哲學が邪魔して、處女懐胎とか、昇天とか、奇蹟とか、わけのわからぬ多くの宗教的迷語に共鳴することが出來なかつた。

牧師と云はれる人は四十恰好の痩ぎすの眷の高い如何にも感傷的な——寧ろヒステリツクな、同じことを繰返し、繰返し云ふ人であるが、救はれた人は『忍の座』に出て來いと聽衆に——二三十人しか居なかつたが、二三人のものはつかつかと出て行つたが、榮一にはその勇氣が欲しかつた——それで、榮一は悔改めたいと思つた。然し、今夜會ふ可き笠の美人——殊に小秀の誘惑の方が、宗教よりも強かつたので、榮一は悔改めの爲めに、忍の座に出て行く勇氣も無く、すごすごそこ

『それになぜ、遊びに行くの？』

『奥さんのお腹の大きい時だそうで、なんでも』

それから栄一は郵船會社の篠田の遊び振りを喜代之助から聞かされた。そして威張つて居る篠田の裏面を聞いて彼は苦笑した。

こんな話をして居る中に梅若が外から歸つて来た。梅若は宴會の模様を訊して居る。それを尾の上那に歌舞伎へ連れて行つて貰うんだと云つて喜んで居る。それを聞いて小秀は新兒に。

『新兒さん、明日の晩は中歌舞伎座へ連れて行つて頂戴ね』

と哀願的に云ふ。新兒はすぐ承諾した。喜代之助は、

『私もね』

と、云ふ。勿論、栄一は拒む勇氣は無かつた。

それで梅若はもう寢ると云ひ出した。そうすると、喜代之助は、

『新兒さん、今夜は私達二人の間に床を引いてお呉れ』

は、除り淋しゆうおまつさかい、寢ながら話しまは』

とふ。

それで、栄一は小秀と喜代之助との間に別の床を取つて

あらぬに、それ迄注文は勿論出せなかつた。

『如何程儲けたか知らないが、彼奴等は、その度、いゝ気になつて、益々市民を苦しめるに違ひない。』

『全く市長さんによく似てゐるよ。』

『市長と言へば、小秀はその報告をする。

それから、市長と言葉が合まる。市長と悪口との関係が暗にある。そうすると。

『一寸と、姉さん、知つてる？』と小秀が大きな声で話を途中で切つて、小畑さんの耳へ口を寄せる。

『土木課の山田さんも郵便局の篠田さんも通つて居るんですつて。』

『えゝ』

『あの人はお子供衆は無いの？』

『五人もあるのですつて。』と喜代之助が眼を円くして訊ねる。

を出すのだよなど嘯をして笑つただけであつたが、それが原因となつて、新聞にまで出されることになると、何だか氣の濟ない感じがする。その日、店は非常に忙しかつたが、村井はとうとう一日中、店に顏をみせなかつた。

その日の夕方、榮一が手數料を二十錢して居ると六が濱から歸つて來て、濱での判評では、店の細川が、濱の菓子屋の娘——先に六彌が子猫を遣つた店の——に子を孕ませたと云ふことだと報告した。菓子屋の娘と云へば、まだ十五か十六で細川とは十も違ふにと榮一は考へたが、自分に關係もあるものだから何にも云はなかつた。然しその晩、沖から歸つて來た番頭の細川も、山田も、穗積も、皆變つた顏色もして居らなかつた。然し次の朝、穗積と細川とは何か榮一には分らぬが、濱の榮一の机の所へやつて來て、『大將、細川に氣をつけなあきまへんで！』と忠告した。それが何を意味したか榮一には理解されなかつた。然し細川はその晩とう〳〵歸つて來なかつた。翌日も、またその翌日も歸つて來ない。そしてまだ二十歳にならぬ山田と小僧の六彌と自分と四人で船積に日の暮れる程働いた。然し困つたことは、村井が持つて居るのでは——それにはまだ五百や六百の預金が有つた筈であることである。銀行の通帳は村井が海上保險に立て換へねばならぬ、金が一文も無い

もらつて寝た。女達の付けて居る、香水が心持よく匂はれて。榮一は、凡ての問題を忘れて、たゞ性と肉との誘惑に床の中で震へた。然しまた榮一は、之等の藝者達の性格が、鶴子などより以上に立派なものであることに氣がついて、たとひ、之等の女達の或者の誘惑の手に落ちても、そう悲しむ可きことでも無いと考へた。

二十七

年の暮も近づいた。そして荷物が澤山出て運送業者は何處も忙しかつた。穗積は五日に伊豆から歸つて來たが、船は大丈夫だし、荷物も半分は助かつて居るから保險金は取れまいと云ふ。それでも今の荷物を全部水に浸らす勇氣があれば、神戸海上は保險金を支拂ふだらうと報告した。村井は電話で一応二一に聞いて見ると荷物は全部を浸らして保險金を取るとぶつて居た。

それから二三日たつてであつた。神戸新聞を見ると。村井の夫婦喧嘩のことが出て居る。妻君が村井に殴られたので大きく云つて警察署へ訴へ出たものだから書かれたものらしい。然しそれには村井が『やとな藝者』と關係して居ることなども書いてある。村井が『藝者と關係して居たことは、店のものが二三週間前に評判して居たが。妻君が姙娠中だから。あの客な男が、外の女に手

村井に、預金がどれ程あるかと聞いて見たが、『私の月給を貰へば三百圓しかありませんよ』とすげ無い返事をして居た。

二十八

次の朝榮一が二階の書齋で早くから讀書をして居ると、『若旦那、棧橋の篠田はんがいらしやいました』と小僧の六彌が云ひに上つて來た。（棧橋と云ふのは郵船會社棧橋支店で、川崎造船所の横の事務所のことである。）

『何の要事か知ら……お通りつて、二階へ、』

榮一は別に氣にもせず云ふ。下女のお德は……

『篠田さんが？　あの店へよく來る？　肥へた、八字髭の、金緣眼鏡の？』

座蒲團を。例の水竹先生の榮一とは棧橋でよく知つて居る。店へも榮一が來てから三四度來たことがある。然し座敷へ上つた事はない。三四分、村井と大きな聲で戲から樣な事をいつて葉卷を燻らして居るかと思ふと、プイと歸つて終ふ。そして村井が後で大きな聲でカラ〳〵と笑ふのが常だ。

少しすると梯子段の方に大きな音がする。四十恰好の大きな男が上つて來る。モーニングの洋服

ろ——榮一は閉口してしまつた。村井は飾磨から百七圓の手數料を取つて來て持つて居る筈である。

『丸二』は事件が片付くまで手數料を請求することが出來ない。仕方が無いから、德島の近藤から廻つて來た通信三百三十圓を融通することにした。

十二月の九日の朝榮一は二階の書齋で新聞を讀んで居ると、細川の不正を働いて居たことが理解された。それは、穗積が伊豆へ行つて留守して居る中に北海道小樽たばの米百五十石を、十二月一日神戸出帆の博多丸に積んだ筈であるに係はらずその中五十石を拔いて居ると云ふことがわかつた。それで榮一は俄かに驚いてしまつたが、何へて來たら會つて見ると、六彌が、飾磨の莊田の主人が來たと傳れ取調べた上でと莊田を返した。

村井はその朝、平氣な顏をして、莊田の跡つた後にすぐ『細川やりやがつたな』と憤慨して居た。然し莊田の事件を話すると村井はあちらこちらと電話をかけて居たが、細川が東京へ行つたと云ふことだけはわかつた。そして、山田は來の五十石が東川崎町四丁目の谷非と云ふブローカーが買つたと云ふことを物語つた。そして、何にも知ら無い山田は、今日まで細川に不正があるとは知ら無かつたと村井に告げた。『仕方が無いな！』と村井は舌を鳴らして居た。

姿だ。

篠田は、

『や、失敬、新見君、今日は善い天氣だね、』と高帽を體の上へうつちやりながら。八字髭をハンカチで拭いて佇立つたなり輕く禮をして云ふ。雀が裏の倉の屋根に四五羽囀つて居る。

榮一は手をついて禮をした。

『さ、どうぞ、こちらへ――』と云ふ。

篠田は床の間の書籍棚の洋書を見て、

『新見君は讀むね』

『どれ一つ本を拜見さして貰ふか、』と本棚に近く寄つて行く。

『フム、哲學書許りだね。然し。ア。此處にカールマルクスの資本論がある。そうすると哲學者と云ふのでもないのかね。お。ウエステルマルクの婚姻進化論もある。僕等には解らんもの許りを讀むね。』と平氣な調子で云ふ。篠田は極く書生肌でいつも快活な男である。それだから桟橋でも皆に好かれて居る。

暫く默つて書物に眼を通して居て。また。

『菜食主義でしてね……而もそれが極端な奴で。』

『妙な眞似をおツ始めたのだね。』

『然し人間は肉を食ふのが不思議なのですよ。生理學上から云つても胃の構造から齒の構造から無くても盲腸も虫も蛋も解放して自由と生命を與へるので動物ですな……それでも見ても、人間は菜食動物ですな……それで人間だ！　君の樣なグニヤ〳〵した身體で肉を食はな死んで終ふぞ。君。』

すなアハハアハハ』

『肉を食ふのが不思議？　日本の百姓も皆死んでしまいますよ――』』

『なに肉を食はぬと、死ぬのなら、日本の百姓も皆死んでしまいますよ――』』

篠田は机の上の帳を日に付けながら、

『實際人間は肉を食はぬのが眞實だね。釋迦も殺生を禁じた位るだから。……然し僕は肉を食ふね。』

と、大きな聲で笑ふ。

『それは何んだね。』

『なにつまらん、頭の中の日誌ですよ。』

『それから向ふに積んである紙は？』

『これですか？』……と榮一は二三百枚積んである紙をバラ〳〵とさせ乍ら……これは お笑ひなすつ

ね。』

『そうですね。神學校歸りがありますね。』

小僧が下からお茶を迎んで來た。

『然し、君は面白い本を持つて居る。君は詩をよく讀むのだね。』と云ひながら與へられた座蒲團の上へ胡坐をかく。

紙巻煙草を一本出して火を付け乍ら、

『君は煙草は？』

下女のお徳が煙草盆を運んで來て篠田の前に差出す。

『吸ひません。』

篠田はポケツトから莨巻きを出して火を付け

『そら感心だね、それじや酒もだらうね』

『え、此頃は飲みません、私にや飲んでも飲まなくても別に何とも感じませんからね。』

傍に居るお徳は口を添へて、

『肉も魚も召上りませんのですよ。』

『一體そらどう云ふ理由で？』

『幕までにですか？　出來ましやう。廿五日頃までには融通致しましやう。百圓位ねなら出來ますよ。』

『有難たう。何分宜敷頼みます……國元の妻が今度病氣になつたとかで金を送れつて云つてくるので

ね。』

『はア、宜敷御用立申しましやう。』

『それじや、僕はもう何も用事がないから歸らう——朝早くから失敬しちやつたね。』

『云ふ、が、眼の下を一寸と赤らませて眼鏡の底で瞳をモジ〳〵させてゐた。

『そうですか、それじや失禮します。』と新見も別に引き止めやうともしなかつた。

篠田はまた山高帽を取り上げて下へ降りた。

新見は送り出しもせず。

『それじや、これで御免。』とまた机の前へ坐つた。女中は店まで送り出してまた二階へ上つて來た。

小僧の六藏もあがつてくる。煙草盆を取りに來たのである。そして榮一を見て、

『あの篠田、大將（榮一のこと）今日は金借りにでも來たのですか？　あいつは桟橋で一番生意氣な奴だつせ。』

居やがるのに、今日はヘエコラ〳〵頭を下げてゐやがつた。あいつは桟橋で何時も威張つて

やいけませんよ。一人間の顔の歴史」の研究です。』

『そら奇抜だね』と篠田はまた大きな聲で笑つた。

暫く三人は沈默して居たが篠田は少し改つて、

『和兒君。今日はね……實は少々御頼みがあつて來たのだが、君。誠に恐れ入るが金を少し貸して呉れまいか？』

『聞きましよう。あなたの事ですから、アハ……』と輕く笑つた。多分金の事であらう。此間花隈で聞いて呉れるやうな遊びをするものだから暮に困つて居るのだらうと想像したのだがね——また君の内のこだから運轉もきくと思つてね……來たのだが、君。誠に恐れ入るが金を少し貸して呉れまいか？』

『ア、宜しい。幾何？』

『百圓程欲しいのだが、』

『百圓？』と胸の中で聞いて見たが、男らしく、

『今日御入用ですか？』

『いや、今日でなくても宜いのですが、此暮には是非欲しいので、ね。』

『あの豪ら相にして云ふの』と女中が笑ふ。

『然しあいつ、中々幅がきいてるからな。外の小僧は皆あいつにビク〳〵して居るね。已だけじや。

『豪いね』と女中が續けて笑ふ。

あいつの机の處へ行つて悪戯してやるのわ。』

『篠田に此間英語を大分教へて貰ひましたぜ。大将。……ドグと云ふのが犬、ふのが本船で、スチーマーと云た。アまだ覚えて居る。チモニーがフイトル居る。それからウランチはランチ。それだけじやもう皆忘れて終うでしやう?』

『よく覚えて居るな。』

『これだけ位ほんまに、こゝにある本が皆スラ〳〵と讀める様になればな——新兒回漕店で丁稚なんぞして居りやへんのやがな。大将だけ、實際英語が喋れたら桟橋へ行つて威張り散らかしてやるんやがな。異人をつかまへて話が出來んじやけんど——クラン、チユン、キチ、パーとふ風に英語許りで喋つてやるんじや面白うない。』お徳は腹を抱へて笑ふ。

と、立つたまゝ云ふ。

『だつて、篠田さんは、お前、一番校橋でえらいのではないか？』と榮一が答へると。

『あの人は東京の高等商業學校の卒業生ですつて？　その學校卒業したら、あんなに威張れるのですか？』……一寸と物干臺の方を見て居る。『ア、今日は善い天氣だ。山へ遊びに行きたいなア』と窓の方へ飛んで行く。六彌は年が十四だ。腕白盛りである。『やい。六。そんなに走つたら埃が立つじやないか？』と榮一が叱つても知らぬ顏をして物干へ出る。

『錨山が見える、錨山が！　山へ遊びに行きたいなア』と六彌は叫んで居る。

お德が六彌に、

『篠田さんは棧橋でいつでも何をしとるの？』と尋ねると。

『あいつは支店長の次席じやから、椅子に腰かけて威張つて許り居るワ。』と答へて六彌は篠田の威張つた方の眞似をして居る。

『唯威張つて許り？』

『あいつ婢を國に置いておいて、福原へ遊びに行つて仕方がないだつせ。大將、あなた聞きました

か？』と謳に腰を下ろした足をブラン〳〵させながら、六彌が尋ねる。

北長狭の家と云へば、そら穢い家だつせ。』

『そう？　六は行つた事があるか？』

『何度も行ぎましたわ。』

また下から『六――』と叫ぶ。

『知らんわ……ね、大将。村非の嬶はいやな奴だつせ。吝な吝な。それは吝な……』

お徳は六の顔を見て、

『面白い顔をするの……然し六さん、下へ行かな村非さんがまた怒つて来ますよ。下へ降りていらつしやい。』

『ウム、あの三吉が怒たつて何が恐ろしい者か……』して軈て襲の意味を現す……それにね大将、子供が三人あるのに、どいつも、こいつも皆お凸さんでね。それは〳〵乱暴な餓鬼許りだんね――オ、三吉が上つて来よろ』と梯子段を上る足音を聞きつけて小倅は急いで物干へ飛んで出て、屋根の上に隠れる。

果して足音は村非だ。襖の陰から身體半分現して、

『六の野郎また隠れやがつたな。今二階に聲がしてゐつたが』

『威張つたらそれで善いのかい？』
『威張つて、金儲するんです。』
『欲が深いね。威張る人には金は無いものだよ。』
『それじや威張るだけで善いから、若旦那、英語を教へて呉れてやおまへんか？』
『夜學校へやつてやらうか？』
『夜學校、英語の？　行きますわ。やつてくれるなら。』
『六、もう何時だ？』
『九時でしやう。』
『村非が來たか來ないか降りて見て來い。』
『三吉さんは今日は來ませんわ。大將。此間の新聞を見たでしやう。』
『ウム、見た。』
下から『六ー』と呼ぶ。確か村井三吉の聲だ。
『ア、三吉が來やがつた。また大きな聲で人を呼びやがる。知らんわ。』噂すれば影とやら』と云ふのは眞やな、な。お徳さん……村非は山の手の高等淫賣に血を啜られて居るのに違ひなし。……大將。

行くことを見た。そして新見廻漕店の運命も永くは續かぬと考へた。

彼の淋しい心は今の處は、女ならでは慰め得られないとも考へたっ然し一面に於んとする意志、社會に奉仕せんとする意志は猛然として、彼の心の中に頭を擡げて來たのである。

それで、彼は、玉の家へも、十一月の末に、野代之助と、小秀とを芝居に連れて行つた切り行か無かつた。彼はこの生活の危機に、宗教で無ければ切り抜け得ないことを痛切に感じが無いでも無かつた。然し彼は今は外部の形式や教條を八釜敷く云つて居れない中から篠田には百圓貸してやつたが二丸二に立て云ふことの見當が多少ついた。

年の暮の總勘定は安定的なものでは無かつた。無い中から篠田には百圓貸してやつたが二丸二に立て替へた保險料は這入らず、細川に倒された千圓近くの金には借用證書を書かされるし、來年はどうなることかと多少心配が無いでもなかつた。

然し彼は出來るだけ早く自分を自由の身にして、勞働運動の方へ突進したいと考へた。然し小さい店を張つて居ると、それを全く打捨てることも出來ないのである。

と、呟きながら下へ降りて行く。

榮一も女中も氣の毒で、村井の顏も見られず、村井が降りて行つた後で顏を見合せて笑つた。

六も尾根から降りて來て笑つた。それで榮一は『六』を連れて、また沖へ船積みに行つた。そして沖の船積は榮一にも最も樂しいものであつた。

二十九

榮一は自分が商人に適し無いことを、つくづくと思ふた。そして自分が今日の社會組織に、どうしても合は無い人間であると云ふことをも考へて見た。そうかと云つて今直に店を捨てる勇氣も持つて居なかつた。また夏のやうに權藏部屋に這入る勇氣は無いし、新聞記者にはなりたくもあるが、市會議員當時に會つたやうな連中の中へ這入る勇氣もなし。自分に自分が愛想がつきるやうに感じたつ

凡て爲すことに興味が湧か無い。勞働が縛られたやうに考へられてならない。そして選擧運動以來自分の心が全く淨代之助や小秀の爲めに荒らされて行くことを思ふた。そうかと云つて、彼はそれに打勝つべき工夫を知らなかつた。自分が今墮落すると共に自分の周圍のものが凡て陷落して

Ich habe satt das ewige Wie und Wenn;

Es fehlt an Geld, nun gut, Do Schoff es denn,

永遠の『如何にして』と『もしも』には飽いた！

金が欲しいのだ、それで善いのだ、今それを呉れ！

丁度家を出てから五日目の午後五時五十二分、列車が小さい法隆寺ステーションを西に走る時、北東の森に靄の中に消え行く黒ずんだ伽藍の影が見え無くなつた時、口には云へぬ悲哀の情が胸に漲つた。

榮一は今にも泣く様に見へた。榮一はもう旅に疲れたのだ。そして彼は人世にも疲れたのであつた。

『もし……もし、レールの上に横へて凡てのものが虚無になるのならば、僕は今覚悟して次の列車に死んでしまつても、もう駄目だらう。僕を救ふものが虚無になるのならば、僕は今覚悟して次の列車に死んでしまつても善い。唯全部消え切らぬ様に思ふから、幽霊のやうな生活を続けて居るのだ。……家を出て五日になるが、僕の胸には何が充された。僕を救ふてやると云ふものは誰も現はれても来ぬ。それは神か？　いや、祈つても神の手はあまり短かい。女か、女は神より猶小さい！　金か？　金か？　あゝ穢ない、おれはもう駄目だ、もう駄目だ――』

榮一は眼を閉ぢた。うと〳〵する。列車は恐ろしい音をた

明治四十一年の最後の日が來た。そして榮一はこの年の最後の日を祈りつゝ送り出席した。福原口は何となしに喧噪で。充分除夜祈禱會の氣分にはなれなかつたが、彼は明治四十二年には必ず、勞働運動の一歩が踏み出し得るやうにと祈つた。

それも皆しくゝとした陽氣であつた。居蘇機嫌で、村井も、穗積も、山田も、穴彌も、女中のおとも、徳も嬉れしそうであつた。榮一も勉めて快活にならんとした。然し、それは不可能であつた。何か知らぬか、宗教的氣分を味ひ『天の父』と云ふものに、まかせ切つてしまはねばならぬと考へ乍らも、詩學的煩悶が多年の習癖になつた彼には、全部を宗教に打込む勇氣に缺けて居た。

殊に新年に皆のものが美しい着物をきて花隈や福原へ遊びに行くと聞いては、自分だけ一人冷い室の中に殘されることが如何にも憐れに考へられた。

それで榮一は一人京都奈良地方の淋しい旅行に出かけることにした。

一月二日の朝、榮一は京都行の列車に身を揺られて、銀閣寺から御室の方まで車で廻つた。然し何にも面白いことゝては無かつた。翌月は奈良へ出たが、矢張り同樣であつた。それから、榮一はファウスト第二編の第一幕目にある皇帝の言葉を繰返した。

怎麼苦な回漕店に居るのが嫌になつた。もう内へ歸つて百姓するんじや。……』と村井は今年からの方針は全く『兵庫の米問屋と手を握るにありだ』と云つ居る。然し、一月は米問屋社會も比較的不景氣で、小栗も五千出した後で一千を寄蘭に出した切りであつた。東京では銀行の警戒の聲が高かつた。

莊田への金が拂無かつた。一月の支拂を二月五日に延ばした。

莊田から、二月になつて米が出無かつた。來る日も二百か三百の米で五人の店員が簿記を讀むのが仕事になつた。閑だのに小僧の六彌が惰けて、新聞の前に坐つて、新聞を綴めないから、店には新聞が散らかつ、混雜して居るやうに見せた。然し混雜に見せたのは之れの山奥から北海道へ移住する連中が、三十四十と押寄せて來るものも繁昌めかした中に榮一は人間の生きて居らねばならぬ理由を發見することが出來なかつた。

三十

榮一には一つの道が殘つて居た。

それは、死である。冷い、靜かた死である。それで彼は、死に得るか、死に得ないか、目茶苦茶に

てて走る。客車が總硝子で出來て居れば善いになど考へる。

天王寺から汽車はいやな程多くのステーションで停る。窓から見ると、天滿だとか、玉造だとか、大阪らしい無風流な名が、ステーションの角ランプに書いてある。停車場と停車場の間は沙漠の樣に瓦屋根が連んで、その上を黑い烟が流れてゐる。夜の大阪は實に物凄い。大風雨の海でも見る樣だ。

淀川の岸を汽車が走つた時、急に心中の名所だと思ひ出した。そして何時ぞや神戸の相生座で誰やらが演じた西屋半七と三勝の心中劇を思ひ起した。夜の大阪に心中？　何の關係があるかは知らぬが恐ろしい密接の關係のある樣に思つた。そして大阪が恐しい……人の集るところが恐ろしいと思つた。

店の方は可成の成績であつた。

一月二日の積初めには、小栗（島上町の米の仲買）から小樽行の米が五千俵、近頃これだけ大きな荷を扱つた事はなかつた。村井は、

『今年は屹度、運がよろしうおまつせ——』といつに無い笑ひを、例の鰐口から漏して居た。

然し二十數年來の得意であつた藍玉の取扱は新しい契約が成立したとかで、愈々、新見の手を經ずに直接本船に廻はされる事になつた。

小僧の六彌は、胸襞が惡いと云つて榮一の前で大に憤慨して居た。その憤慨のしやうが面白い。』もう

それかと云つて、猶奥深く、この實在の驚異の奥底に探りを入れる、感官を彼は持た無かつた。それで、彼は、實在の驚異と死の間を彷徨した。

彼は、麾にされた様に毎日、ぼんやり室に引て行くやうに感じた。手と足が馬鹿に大きくなるやうに思つた。腦と胸が段々小さくなるやうに——

そしてしまひには癆病人のやうに身體に粉が吹くだらうと考へた。

呼吸が苦しくて、舌の根がかばりつく。『今』と云ふ『今』は、一瞬でも、いや夢が見たい。一刻でも

呼吸をとめてみたい。

胸の底から泣けるだけ泣いて見たいと思つた。

私は灰だ……世界は火葬場だ、竈の中には血と肉を焼く火が燃えて、竈の外には

居るのだ。喉を破るやうな強い北風が地獄の底から吹くの嘘、火葬場！　この竈に

衝き込んで、後の半分を、氷で腐らして居るのだ。……然し……今に……死の權威に謀反したくてきくものか？？　此竈を打ち砕いて、此腐つた手で、燃え立つ熱火を摑み出して、自分の立つて居る、氷の上に投げつける！

氷が解ける。そして自分は立場を失ふ。それは何處かへ落ちて行く！　何處かへ！　何處か

何にか突進したいと思つた。尋常一様の死――水死。縊死。轢死。ダイナマイトの死――監獄の中の死、病死、劇薬中毒の死。そんなことでは面白くない。

兎に角、マラソン競争の様に、走つて走つて走つて。走り抜いて。そして。一度に心臓が破裂して、死んで了ふに越したことは無いと考へた。

然し、そんな、死――自殺はどうして遂げ得るかと考へて見た。

それで、或時は道の上へ、誰も人が見て居らぬのを幸に。自分の體を投げて見た。

然し彼にはいつ自殺するかも知れぬと云ふ危険性を持つて居た。

『この骸よ、死んでしまへ』と、

然し、それで、死ねそうにも無かつた。然し彼はナイフを見ても、海を見ても、薬屋の店先を通つても、いつでも、死と云ふことを考へた。

彼は出来るだけ、自己の身體を虐待しやうと考へた。

彼は死ぬ機會があるかと思つて、須磨明石の海岸を彷徨して見ると、悠みした眼にも實在の驚異が這入つてくる、殊に街を通る女の脊に負はれて居る子供の顔を見る時に、榮一は、自然にも増して、實在の驚異を見た。

實在の驚異が遂に彼に勝利を得た。彼は、凡てを背定する決心をつけた。凡ての背定——そうだ生命とその時間の上に流れる凡ての表現を背定することにした。彼は絶望の淵より驚異の世界に甦つた。彼は實在の世界に死の力を以つて強く生きんと覺悟した。凡てが驚異なのだ……死も、自己も、砂も、飯も、女も、娘も、汽船も追ひ求めて居る虚無それ自身すら驚異なのだ。色も、光線も、輪廓も、薔薇の花も、若き女の唇の赤い色も、皆、驚異だ。黒い血も、罪も、穢れた心も、凡てを背定した。彼は強く生きんと決心した。そして時間の上に踊り上つて、勇敢に前に突進せんとした。その爲めには凡ての實在を許容し、宗教と、その表徴の凡てを許容せんとした。自殺する勇氣を以つて凡てに折衝かつて行かんと決心して、彼は、段々、キリストに近づいて行つた。彼は海へでは無く、これから驚異の世界に身投げして溺れるのだと、自らに告げた。

それで、二月十一日、遂に、決心してイエスの弟子たることを、告白することに定めた。

彼の教會は、神戸の中でも、最も小さい兵庫の水木通三丁目にある、日本基督教會講義所で米國宣教師ウイリアムス博士がやつて居るものであつた。ウイリアムス博士は、ずつと前に徳島市に長く居つたことが有つた人であることがあるので、中學時代には、榮一も英語のバイブルで會話など習ひに行つたことがあるので、

へ！　何處かへ……そして。それから、永遠の夢が始まるのだ。

社會が何だ？　父が何だ？　國家が何だ？　文明が何だ？

だ？　價値が何だ？　美が何だ？……それは、凡て虚無じや無いか！

落ちるのだ……落ちるのだ。凡てが死と共に——地球の壊滅と共に——自我の消滅と共に——消え

て行くのじや無いか！　野心と、誤解と、迷信と、虚偽と、因襲のために固め上げた凡ての社會構造

のマイナスよ、引摺られて行かう實在よ、盲目の手引きよ、早く、宇宙の際に來てくれ！　わしはそ

いや、いや、弄んで居るのだッ！　虚無の上に虚無の虚無よ——マイナス

これから飛び下りて　死の世界のまだ向ふの世界へ飛びたいのだ！

彼はこんなに考へて。煩悶した。女も、書籍も、太陽も彼を慰め無かつた。

力よ無理想に憑かれて。煩悶をつかした。

こんな煩悶の中に丸一ヶ月半を送つた。

然し、實在の驚異は餘りに固く彼を捕へて居た。彼は自己の無能と無氣

呉服屋長敦屋と云ふ所には一軒の家が、二軒であるのに一家九人もそこに這入つて、寝るのは先づ、此処へ這入つて、住まねばならぬと考へた。然し、誰れも知己とては無いので、知己を作る爲めに、路傍説教をすることに定めたのであつた。

一人で讃美歌を歌ひ、一人で説教を初めると、多くの徒輩が集つて来た。街の雰囲気が美しく光る、『地にある穢れを捨てゝ、天を見よ』と叫び乍ら自ら、天を仰ぐと天は限なく晴れ渡つた春の夜に、無数の星が輝いて居る。實に美しい。星の下に長く引かれて居る電線さへが、夜に映つて美しい。栄一は、自分が、野に叫べる人の子――一個の豫言者であると云ふことを考へつゞく考へた。

彼は強くあらねばならぬ。厚き夜に反抗し、父に反抗し、家庭に反抗し、社會に反抗して来た以上は、一人強く生きねばならぬと云ふことを涙を流し乍ら考へてイエスの福音を説いた。

彼は三十分か四十分か、神の愛と、イエスの山上の垂訓を説いて居たが、聴衆には『何ぬかして居やがるんだい』と云ふものもあれば、『あれは何にや』と云ふものもあり、あれは『アーメンか』と云ふものもあつた。然し、栄一は揶揄られることを承知の上で来て居るのであつた。それで、そんな罵

が、福音館があまりに喋しいので、自分の性格に何ふやうなものを、探して居る所か、見利かなかつたのである。そこへ行くことにしたのである。彼は、その小さい講義所を見付けて二度目の日曜に洗礼を受けた。

然し、栄一は、信仰が好きであつた。それで栄一は、人に接してくれる。貧しいこの信者が、栄一は好きであつた。殊に牛牧師の親しみ深い態度は一般に温く、究して居る人々である——一緒に必ず淡川公園で、伝道師となる為めに、聖書を研の仲善生と云はれる人々と——その人々はT牧師とW宣教師の下で、伝道師となつた以上は、誰れにも敗け無い信仰を持たねばならぬと一生懸命になつた。然し栄一の初めての路傍説教の経験は恥しいものであつた。誰かゞ、自分の過去を知つて居て傍に立つて嘲笑つて居た。

彼れはまた三月の第一土曜日の晩、初めて一人で、神戸の東の端にある葺合新川の貧民窟へ、路傍説教をしに出かけた。そこは栄一が昨年の夏横浜をして居た時によく通つた処で、日本の貧民窟でも、此処程悪しく穢ない所は無いと思はれたものであつた。

神戸から人が住んで居るのである。八十何戸かある二

あやつて、悔心して居る。』

と、云ふやうなことを話して、終りは、くくりがつけられ無いので困つて居るやうであつた。

それで、路傍説教も済んだので、帰りかけると、

『君、一寸と、僕は君に聞いてもらひたいことがあるのや、一寸と来てくれんかと、呼び止めるので、彼は植木の後から、ついて行つた。

さうすると植木は、暗い暗い路次の奥の方へ彼を連れて行つて、長屋の或家の前に止つて、

『君は、耶蘇教の先生か？』と豪らそうに聴く。

『いや、私は先生でもなんでもありません？』

『君、先生でなくても、説教出来るんか？』

『出来ますよ』

『君、村上浅四郎と云ふ先生知つとるか？』

『いや、知りません』

『それじや君はまだ耶蘇教の新米やな、奥牛野の村上浅四郎つて云つたら、神戸の人は

そこへ年の頃二十近くに見える筒袖を着た疱瘡のあと有の低い不恰好で、明かに前科のあるやうな眼付をした獰猛な男が、新兒に近づいて來て、

『一寸と、貴方にも、あかしをさしてんか？』と云ふ。新兒は變な男だと思つたが、

『唯今この聖書を持つて居る。益々變なので、新兒は、どんなになることかと思つたが『一寸と待つて下さい』と云つて、話をすませて、

その男のお方が『あかし』をせられるそうでありますす』と紹介した。

『來たばかりの、『あかし』と云ふのは矢のやうなものであつた。それは『わしは、この間、監獄から出てのは、十五の時に惡心が起つて六軒道へ火をつけたのじや、そしたら、あのあたりがみな燃えたんじや——今は九年の徴役に、處せられてつひ先達つて出て來たんじや、聖書は充分讀めんけれど監獄の中で、『イロハニ』から稽古して、からやつて、聖書を貰うて來て、この本を買うて、お讀みなさい。わしも、まだすつかり善心になつて居ると云ふのではないけれども、今ではあの人は關西隨一の掏摸であつたけれども、山手の、村上淺四郎と云ふ人を見なさい、あ

思つてぼるね……然し傳が無いのでそれで、本部のある處を君に聞いて居るのやがな……』

『獄から出て、此の内（家を指して）に世話になつて居るのやが……毎日ぶらぶらして遊んで居るのやが……そらこの内は別に、わしが小さい時から世話になつた内ぢやさかい、何十日、遊んでも居つては小使にも不自由はするし、困つて居るんや……何んぞ、楽な小使のやうな仕事でも無いもんだつしやろかな。わしもこんな片輪者だつしやろな（右手より短かいことを見せて）……之にも色々事情が有つてな、色々聞いてもらひたいこともあるのやが……あなたのむ宅はどちらです。』

栄一は、この男が、鍛冶屋町の店へでも訪問してくると困るとも思つたが、

『兵庫の鍛冶屋町です、新兒廻漕店と云へばすぐわかります。』

『新兒廻漕店？　兵庫鍛冶屋町やな？　あなた今夜は、これからお歸りですか、わしもあなたが、こんな寒空に一人で辻説教に來ると云ふのは、餘程、信心深い人やと思ふさかい、色々話を聞いてもらうて、私の身の立て方について相談に乘つてもらひたいのだす』

新兒は、少し道が違いから、失敬しますと路次を出たが、植木は『そこまで送りまつすさ』と云つ

『誰れでも知つとるがな、監獄から出てくるものを、みんな助けて居る人やがな……そらそうと君、僕も、君のやうに、耶蘇教の脱教して廻りたいのやが、何處へ云ふて行つたら善いのや……耶蘇の本部と云ふのは、何處にあるんや』解つたやうな、解らぬことを云ふ』

『それじや、君の、教會所は何處や?』

『兵庫の水木通二丁目の傳道所です』

『そんな所に教會所が有つたかいな! 知らんな!……先生は何と云ふ人やや?』

『ウイリヤムスと云ふ米國人ですよ』

『異人さんか……異人さんは親切やな……君、尚敬やけれど、頼ぬますが、怒らんやうにしてくれ給へよ、君のやうに能く教して廻つたら、いくら位な月給が出るんや?』

『私は、何にも月給なんか、もらつて居りはしません、無い筈じや、何でも、月に一番少なうて二十五圓位出るのです』

『そんなことは、それは嘘かいな、……君は『鐵忽二十三年』と云ふ本を知つてるだらうな、あの男のやうに、乾度、月給が出る筈じや、傳道師になつたやろ、うちもあの人のやうに、傳道師になつて、かまいてやろかと云ふ話にやが、監獄から出て來ると、直ぐ傳道師になつたやろ、うちもあの

實行したいと希望を持つて居る榮一は、『よろしい貸してあげます』と約束をして、榮一は、居へ歸つて、村井に二十圓貸してくれと云ふたが、『榮一さん、何にしなはるのや、あの男に貸しなはるのや、あの男に貸すと云ふことがありますかいな、五圓でよろしい、五圓でよろしい。』と金庫から、五圓だけ出してくれた。

それで榮一は、その五圓の金を持つて、云ひ解けをして、植木に歸つてもらつた。

然しそれから植木は、毎日、新兒の居を訪問して來た。然し榮一は大抵、沖に荷役に行つて居たので、一度も會はなかつた。木曜日の晩、講義所へ行くと、ウイリアムス博士が『新兒さん、植木と云ふ人、御存知ですか』と聞くから『どうしましたか、知つて居ります』と云ふと、『新兒さんが、十五圓だけ私に貰へと云ひましたと云ふて來ました。それで、私は五圓だけ與へました』と云ふて居る。

怪しからぬ男だと思ふたが、新兒は、ウイリアムス博士に、初めての貧民窟の路傍說教のことから、凡てを物語つた。

そうすると、ウイリアムス博士は、反つて非常に喜ばれて、『それじや、私はあなたと一緒に、その貧民窟の路傍說教に行きます』と云ひ出した。

でついて來た。要するに彼は、仕事が無くて困つて居るから、傳道師になれるか、さも無ければ、餅賣の資本金でも貸してくれと云ふのであつた。

然し生憎、柴一は一圓足らずの金しか持つて居ら無かつた。それで、その資本金を直に與へることが出來なかつたり、その上に、植木がどんな性質の人間か、わから無いのでその儘別れやうとしたが、別れる段になつて、

『誠に濟みませんが、二十錢でも、三十錢でも、よろしうおますさかい、小遣錢貸してお呉れ』と妾顏的に出たので、

それで、柴一は財布の中から凡ての金を出して與へた。然しそれはタツタ八十一錢であつた。植木はそれで別に『行難たう』とも云はずに、之で失敬しますさ』と云ひ捨てゝ歸つて行つてしまつた。

柴一は妙な性格の男もあつたものだと感いてしまつたが、貧民窟が何だか底氣味の惡い所であるといふことだけは充分植木によつて了解した。

翌日は日曜日であるので柴一は、水木通の講義所へ行つたが、歸ると、植木が待つて居た。村井を始め店のものは皆變な顏をして居る。そして一寸と出て來てくれと云ふので、店の外へ行と、餅屋をするから資本金を二十圓貸してくれと云ふ。無理なことを云ふと思つたが、イエスの福音の通りに、

の修養と行つた切り少し遠いのと、片手間でやつても駄目な様に思へたので行か無かつた。

その中に須磨公園の櫻が咲いてまた散つて、播州から全國へ素麺が出る時となつた。それで……新見の店も少し忙しくなつた。

……

『荘田から素麺が三百？　荘田、あいつ内へ出したう無いんぢやけんど、細川の干関返して貰ひたいもんだ物を廻しとるね。金を拂ふて貰ふたら、屹度高木廻漕店へ出すにきまつとる！……何か來て居るか知らん？　チツト、阿波からでも荷物か出てくれな暇で暇で困る』

と、お茶口の六彌が呟くことを聞くのも少なくなつて、村井は『北長狹の汽車積の運送店の三好から電話を抵當に金を借りて、荘田へ渡しましやうや』

四月に這入つた と榮一に相談をかけた。勿論榮一はそれに反對しなかつた。

三好と云ふのは北長狹の運送店であるが、新見の店を買ひ受けたい希望があるのだと村井が云ふて居た。

夏が來た。それは女も戀も凡てを忘れて榮一は頗る平凡な生活を續けて居た。

あつたが。イエス傳研究史だけは百五六十枚書けた。沖へは相變らず通勤した。沖仲仕の間にも多く

然し新見はそれを聞つた。西洋人が行くと反つて、誤解があるから、陰でお助け下さいと彼の希望を述べた。

新見は此頃から。君のことは凡て。村井に委せておいて。自分は一層宗教的に進みたいと、決心を堅めた。

榮一は續けて宗教的に熱心であつた。然し彼の宗教的情熱は、彼の店の事業を少しも救は無かつた。村井も、穗積も。宗教には無頓着でおつた。彼が淺川公園で、野天說教をしても何とも云は無かつた。

榮一さん、近頃・豪い熱心だな。キリスト教に『一言云つた切りであつた。穗積も何にも云は無かつた。然し近頃は遊廊へも行かぬらしい。細川の事件で懲な、こり〳〵したものらしい。

その中、榮一も大分店に落ち付いて來たので『イエス傳研究史』と云つたやうなものを書かうと。ワンデーや。シユワイチエルなどの著作を朝々讀んで居た。そして毎日曜には日曜學校を手傳つたり。路傍說教を一人でしたりなどして居た。然し筆合の貧民窟の方へはその後二三度傳道館

為めに、村井が、ケチなことばかり云つて聞かせるからであつた。

七月の末に長く行衛不明で有つた、妹の笑子から手紙が來た。その手紙の内容は次のやうなものであつた。

「長い間の御無沙汰を許して下さい。私は兄様と別れて辛い事許りに出會ひました。十三度も本公先を轉て、終りに、竹田と云ふ、私の學校友達の家へ知らずに奉公すゝ様になつて、そこの旦那様のお世話で、臺灣の支店の支配人と夫婦になる事になりまして、今は妻記の様に臺灣に來て居ります。然し、淋しい漁村と云ふ處は氣候が悪いから一日でも早く本國へ歸りたいと思つて居ります。一月程前に馬詰のお母さんに兄様のことがあまり氣にかゝりますから、尋ねにやりました處が、お父様が亡くなられて、兄様は兵庫の店に居られると云ふ返事を見て、日々泣いて居ります。……私は父の死際にもえう會はぬ不詳者です。然しそれも、何かの因果だと思ふてアキラメて居ります。兄様お身體を大切にしてください。私は兄様獨りしか、賴りにする人がないのだから、どうど私を思ふて下さるなら、お身體を大切にして下さい。」と云ふのであつた。

七月も過ぎた。そして穗積には三ケ月分の俸給、六彌には四ケ月分の俸給が滯つて居る。之は穗積

の友人が出來た。

榮一には沖仲仕のおぢさんが、大きな聲で、冗談話をするのが何より樂しみとなつた。

夏の晝頃仲仕の連中が荷役を濟ますと、裸體になつて、海へ飛び込む。濁色の美しい骨格が波の上に白い泡が立つ。太陽は上から、カンカンと照りつける。海は美しく凪ぎへぬ生の歡喜の鄕か何處からともなしに聞える樣である。

榮一。を呼ぶ。榮一も褌一つになつて。二人三人の聲がまた。

「――」と呼ぶ。

「初見の大將來な！」

甲板の上から飛ぶ。

ドブンと音がしたかと思ふと、自分は海の底へつゐと降りて行く。白いラムネの泡のやうなものが立つ、どこまで落ちて行くものかと心配する程下へ降りた時に、また水面へ浮び上がらうと、青い水を兩手で掻きわけて、あたりを見ると、海の中も美しいものである。

海の凡てのものは壯大である。それで夏の太陽と、海とを讃美せずには居れ無かつた。

然しこんな處から、鍛冶屋町の暗い家に歸つてくると、凡てのものが小さく見え、穢く見えた。それは新見廻漕店の會計が全く行き詰つて居る

んな日に限つて、村井の話はつまらぬものであつた。

と六弥とが店の新兒の店で育つたのでは居られ無かつた。

二人は一月給が貰へる迄に、飯をウンと食ふだんね』と云ふて、實に旨いので、店の運轉が悪いのを知つて居るものが、折腹を抱へて笑ふた。

新兒の店の運轉の悪いのは荷物が出ないからであつた。父の生きて居た時には、徳島縣の荷物は九分通りまでは、自分の店を經て全國に廻されたものであつた。父が倒れてからは、たゞ無用の冗費が多くかゝつて月給と雜用に倒されるばかりであつた。

そこで榮一は丸二年作から心易く思ふことになつて、盆過ぎから元町の保險會社へ通ふことになつた。この間の經過は殆んど暴風のやうであつた。榮一は毎日低氣壓に襲れたやうに、憂鬱に充されて居た。

丸川の二日であつた。朝八時頃新兒は本町を淡川の方に急いで保險會社に勤して居た。（榮一が急

せても一人の『梅ケ谷』が太ければそれで滿足だと云ふのだ。平凡許りより『偉大』が少し欲しいと云ふのだ。全くだ。社會主義も此論理（？）の上に立たねば純正社會主義は實施せられる望は無いっ他人の向上を喜ぶのが社會主義の根本思想じやなからうか？　自分の地位に他人の地位に向上さすと云ふのが、社會主義であらうか？　何故、自分の地位を他人と同様の地位に置く必要があるであらう？　すとゝふのが、それとも、社會主義であらうか？　自分の地位を他人と同様の地位に引き崩ら、平等を差別の間に發見せずばなるまい。……結論は僕が汽車か電車かに轢かれて殺されたら、文明的偉人の非常に出來るのだ、アハ、。それ、汽車が東から下つて來る。僕は汽車が大好きだ。……

然し僕はもう駄目だ。今日も簿記帳の上で人生の日記を數字で書かなくちやならぬのだ。鐵のペン先と根較べだ。――

アヽキリスト教の孤兒院が、もう少し大きくて、僕の様な男でも入れて呉れるなら善いのだが……

然し恁麼事は『秘密』だ。他人に向いた日にや自力宗の頑張つた處を見せてやるのさ。之れを哲學者の『秘密』と云ふものさ。それだから哲學者には僞善者が多い。……ハーノツクの教理史から得た事

往来だと思つて遠慮したか行つて了ふた。

榮一は『兎に角、人間は変な者だよ』——と考へ乍ら、……三好と云ふ男も思つたより優しい男だ。人間は一日や二日の交際で胸の底まで知り合ふ事が出来ぬ……今朝向ふから禮をするとは思はなかつた——と倪いて道の小石を見詰めながら、駒屋の前のあたりを想像して見た。相生橋を渡る時に……

……資本家と云ふものに難むで居るが、資本家と利子とで生きて居りたい人間があるなら、初から労働しないのが善い。他人の尤な話だ。資本家が憎いとて、ふのに間違つて居る。

ば、生かして置くさ。他人が遊んで居るのが、羨ましい位なら、初から労働しないのが善い。他人の楽しむのは自分が楽しむのだ位ゐに思はなければ、人間も駄目だ。乞食は貧乏でも余計が持つて居ると思つて安心して居るじやないか？　凡そ透明體の様に考へなければ全く悟りを開いた人とは云へない。エマルソンの歴史論はある程度まで此意味だ。さう云つて僕は社會主義を捨てるのじやない。我が社會主義は外延的だ。——

結局、三好が僕の血を吸ると三好は肥える。三好が肥えるのは僕の肥えるのだ。三好と僕とが同じ太さであれば『肥えた人』が世界になくなつて、あまり単純で倘きが来ると云ふ論理かね？　萬人が痩

午後書き残した帳簿を取り出し数字の記入に取りかゝつた。書いて居ると、

……一瞬人間が頭を垂れ、腰を前に曲げてお辞儀をするが、何の理由かしら？

泣く時に背をかゞめるのだ。勿論ではどう解釈するのだらう？——と云ふ妙な疑問を起した。

それまでにげて、頭振するのは何の理由だ。俯向くことより、反ることに、意地と婦美の表徴

これな感嘆事をして居る。上へながら数字を記入する位の事は気楽な話だ。心地が善い。……それが『頭が』『高』い『低』いと矢張り勿論上の術語をクラシックな、作法の上にも用ひて居る。それは加速度の原理

頭が『高』い『低』いと矢張り勿論上の術語をクラシックな、作法の上にも用ひて居る。それは加速度の原理

さ。昔から、頭が『高』い『低』いと矢張り勿論上の術語をクラシックな、作法の上にも用ひて居る。それは加速度の原理

へ直線に延びると『擴張』になつて肉化する。

上ると活動の範囲が擴くなり繊化する。

のだ。之が醜儀の元則だ。四つ這ひに……動物の真似をすることが……だから醜儀の極致だ。

いや、それは極端だ。然し組織的に、物理的に、習慣や遺傳を解釋して見たいね。——とラスキンの墨術論から色々なことを考へ乍らインキ壺へペンを差入れる。

鼻が咳から口に出る癖がある。

一寸と窓から下の往来を見ると、

ハイカラの婦人が、女學生と連れ立つて歩いて居る。まだ夏姿で、窓紗な白のレースの肩掛を巻い

は何？　セオドル、ホールの『英國宗教運動の社會的解釋』は何を教へる？　大きな男の孤兒院が必要だ。宗教は肉化しなくては、愛の實在『なぞ』捕へる事は出來ぬ。經濟の壓迫した時に宗教熱が起るのは、凡ての國民の歷史だ。殊に現代の英國民は。それだ。大人の孤兒院を建設しろ、大人の孤兒院を！　現代の大要求は小供の孤兒院ではない。ジョウジ、ミュラーではない。石井十次でもない。希臘的獨太教の實利的『社會主義』無政府『主義だ？　偉人の孤兒院だ。此孤兒院には、世界で偉人と自覺して居る者を入院さすのだ。彼等の胸の底には、例の『秘密』があるから……そして基督も大きな孤兒だ。『父よ』と叫ばざるを得なかつた男だ。

相生橋を降りると、牛肉屋が並んで居る。立派な散髮屋がある。向ふから脊の高いハイカラになつて見たい氣がする。金がない。金が欲しい。……と考へながら石造

……僕もあんなハイカラになつて見たい氣がする。金がない。金が欲しい。……と考へながら石造

橫町を西洋の美人が飛んで來る。美しい顏をして居る。何故西洋人はあんなに、美しいのであらう保險會社の角まで來た。

と、ドアを押して三階の自分の新巢へ飛んで行つた。

包を解いて、ラスキンの『近世講家』の二卷を机の側に置いて、何間の重田にお晩餐をして、昨日の

『三好さんは、今朝から續けて居らつしやいましたか？』と問ふと、

『はア、村井君が御馳走してくれましてね』と目の下に皺をよせて、頬の兩脇に大きな肉の塊を拵へて笑ふ。

『さうですか？　御馳走が御座いましたか知らん』と云ふと、村井は、

『一寸と魚津からお取り寄せましてね』と眞面目に下顎をつき出して云ふ。

『それから――』若旦那も協商は全く賛成して下さいましたな』と内容も何も知らぬ栄一に裁可を請求する。然し栄一は内容を尋ねる時ではないと思つたから、

『勿論、賛成しますよ』と答へて置いた。

『それじや、一つお祝ひに「かしわ」でも驅りましやうか？』と村井が動議する。三好も賛成した。村井は六を呼んで財布から一圓紙幣を二枚出して、之で『かしわ』を買つて來いと命令た。栄一は村井の財布を一寸と見たが金が大分這入つてゐた。村井は栄一よりも、金持だ。

かしわに葡萄酒が出て、大分酣つた時、村井と三好が栄一の父を賞讃する。やれ、雄辯家であつたとか、才子であつたとか、女がすぐ惚れたとか、惚れられる様な人間でなければ駄目だとか、終には『玉の輿』の小秀の評價にまで移つて、栄一が父に善く似て才子肌じや、女が惚れる所を見ても

て、何だか呼つてゐる。

『一寸と自分を見上げないか』と思ふたが行き過ぎた。向ふの田中洋物店には西洋人が三四人這入つて居る。車が一臺支那人を乘せて走る。後から自轉車が走る。小僧が二人喋りながら行く、荷車が行く。

『社會は複數だ。』と結論して自分の席へ再び戻つた。ペンを取り上げて、ラスキンであれば、今の樣な市街美を否定するのだねと笑ひ乍ら『1.1880』と云ふ數字を記入した。

それから、數字と云ふものは可笑しいものだと思つて見た。午後の四時頃、『近世畫家』を道々讀み乍ら歸つて行つた。……世界も別に憎い所では無い。人間が動く所には恰度まア適當して居る……』なぞ、歸ると村井も三好も待つて居たと云ふ。

事になつた、どうか喜んで呉れ』と三好が云ふ。

榮一は別に苦い顏はせず、成るか、ならぬかはどうでも善いが、まア成立つといへば結構だと考へたものだから……

『さうですか？　それはお目出度う！』と口では第三人稱の地位に居るやうな調子で云ふた。そして續けて、

んと廣告をして、ちつと得意廻りもするのですな。それに……勿論、三好に借りて居る千百圓は三好が拂込んだ割にして千九百圓を此上に拂込む事になつて居るのですがね。さうさう……利子も欠張り拂込むんだ理由になつて居るのですな。……』と息をもつがずに早や口で述べたてた。

『それじや、配當は勿論、拂込み高によつて分配するのでしようね？』と新見は念ねた。

『さうです。つまりさう云ふ事になりますね』

榮一は別に反對もしなかつた。然し電話から、帳簿から、商標と云ふか廣告料と云ふか』新見』と云ふ名前の過去二十年間の存在は千五百圓では少し安いと思はぬではなかつた。然し榮一はもう店には飽いてゐた。それで何にも云は無かつた。

三十二

榮一は、愈々店も片付いたから、猛烈に宗教運動に前進せんとした。

そして、九月の五日から、毎日一人で元町二丁目の市田寫眞館の角で路傍說教を始めた。それは少し位ゐ雨が降つて居ても平氣であつた。彼は今日の教會の引込み思案に不滿であつた。それで、彼は

解る。此人に金の小二萬圓も持して南米貿易でも初めさしたならそら大きな仕事が出來るだらう——など云ひだす。

話を聞くと、三好も、榮一の父を全く知らぬ男でも無いらしい。田島克臣さんの内で何度か會ひましたと云ふて居る。

父と自分が善く似て居ると云はれると、なる程と頷かれる。父の色慾を遺傳したかと思ふと慄とする。それのみならず、借金しても何とも感じない處は父の惡い處を皆遺傳して居る——罪の遺傳？

——と汚へ込んで身震ひした。……オウサドックスの云ふ樣な事だと云ふて自分に辯護しても、何だか宿命のやうに感ぜられた。

晩の九時頃に三好は歩いて歸つた。（儉約な人で車を勸めたが乘らないと云ふ村井を榮一は引き止めて、協商の内容を聞いた。

處が村井が得意になつて說明する。

『内の名前だけが千五百圓と云ふのなら善い價値でありませんかア？　それに三好が三千圓の資本金を出すと云ふのですから此麼甘い話はありませんよ。又あなたも内で働いて下さるならば、今保險會社で貰つて居らしやつるだけは差上げる事になつて居るのですがね。それで、手が揃ふと、今度は、

『最後に私は云ふ、神は愛だ、私は倒れるまで云ふ、神は愛だ——之に口に見えぬ神が愛だとでは、愛する所に、生命と神が現れ給ふと云ふことだ』と、云ひ捨てゝ、彼は發熱した倒れそうになつた重い身體を雨に濡れつゝ、元町三丁目の瓦斯會社の前まで引摺つて來たが、口が脹むので、『あれ、あれ、もう倒れそうだ——嘔吐を催して來た——おゝ倒れそうだ』と自分に獨語し乍ら瓦斯會社出張所の大ガラスの前に倚りかゝつて居たが、彼は猶勇氣を出して、歩まんとしたが終に、パタリと雨の中に倒れてしまつた。そして身體の下部の筋肉が凡て痙攣することを感じた。また『此處で暫時安眠がしたい』と云ふ妙な考へが起つた。そして、彼は昏睡狀態に陷るやうに覺えたが、驀て、ドヤ〳〵と人々が口々から云ふ聲で聞いた。

そして『元町で辻說教して居た靑年じや』『行倒じや』『行倒じや』と口々から云ふ聲も聞いた。

『何處の人かいな？』と或人が聞いて居る。或人は『兵庫鍛冶屋町の新見回漕店の若主人だんがいな』と云ふて居る。新見は、今、自分に身體が自由にならぬことを知つて居る。然し、自分に近にもあると思つた。

自分の信ずる道を猛進せんとした。

彼は九月一杯、毎晩、元町で路傍説教して居た。折々巡査の干渉が有つて中止せざるを得なかつた。

然し彼はそれで萎む様な男では無かつた。

彼は道の上で、トルストイとジヨウヂ・フオクスの無抵抗主義を説いた。また萬國主義と、文明の根本的改めを説いた。

然し民衆の中で誰れも彼の云ふことを信ずるものとては無かつた。

彼は長く見無かつた狡猾を感じる様になつた。恰度、満一ケ月目の十月の五日の午後九時頃、路傍説教をして居ると驟雨が来た。それでも榮一は、説教を中止しなかつた。彼はもう一週間前から聲も完全に出ない程疲れ切つて居たつた。然し彼の宗教は遊戯では無かつた。

驟雨が来た時に彼はフラ〳〵として一度に息でも詰まるかの様に感じを以て絶叫する積で出て来た。

その中に見る見る中に発熱してくるのを覚えた。然し彼は、

けるヨナよりも悲惨な叫びを、神に向つて洩らした。

會堂の周圍は彼を狂人扱ひにした。それで彼れには親友が出来なかつた。

恰度、満一ケ月路傍説教をつゞけたが、彼の説教は何の効果をも示さ無かつた。

彼はニネベに於

な時に若代之助から鶴子の様な親切な女の人が居れば、『若代之助』などゝ今更思ひ出す勇気もなし、女中のお徳は、憲所の用事に忙しくて、手があまり苦しいから『もう死んだ方が苦しくなくて善い』と繰返した。十月の十二日に、とうとう新見がこんな重態にあるとは知らず。栄一は思はでもなかつたが、勿論『若代之助』などゝ云つて帰つて行つた。そして。『新見さんは餘り無理をするからいけません』と云つて博士は額に手を置いて祈つてくれた。そして、ウイリアムス博士は新見がこんな重態にあるとは知らず。栄一は思はでもなかつたが、勿論『若代之助』などゝ云つて帰つて行つた。そして。『新見さんは餘り無理をするからいけません』と云つて博士は額に手を置いて祈つてくれた。その時まで博士は新見がこんな重態にあるとは知らず。栄一は思はでもなかつたが、勿論『若代之助』などゝ今更思ひ出す勇気もなし、女中のお徳は、憲所の用事に忙しくて、手があまり苦しいから『もう死んだ方が苦しくなくて善い』と繰返した。十月の十二日にウイリアムス博士が、初めて訪ねて来てくれた。その時まで博士は新見がこんな重態にあるとは知らず。栄一は思はでもなかつたが、勿論『若代之助』などゝ今更思ひ出す勇気もなし、女中のお徳は、憲所の用事に忙しくて、手があまり苦しいから『もう死んだ方が苦しくなくて善い』と繰返した。十月の十二日にウイリアムス博士が、初めて訪ねて来てくれた。その時まで博士は新見がこんな重態にあるとは知らず。栄一は思はでもなかつたが、勿論『若代之助』などゝ云つて帰つて行つた。そして。『新見さんは餘り無理をするからいけません』と云つて博士は額に手を置いて祈つてくれた。そして、

彼は十五分間位ね雨の中に倒れて居た。その中に彼は全く元氣を回復して、獨手に立ち上つた。彼は十五分間も倒れて居る中に、誰れも助けて自分の内へ這入れと云つてくれる人も無かつた。社會は不人情だと思つた。然し、彼はもう充分立つことが出來た。それで、とぼ〳〵と元町四丁目の角の事の帳場まで歩いた。見て居た大勢の人々は『可哀想にな』と云つた切り、榮一は、ずぶ濡れになつたその衣服と身體を車に揺らせて、鍛冶屋町へ歸つたが、店へ着いた時には、もう二階の居間へ這ひ上る勇氣は無かつた。それで入口の所でまたパタリと倒れた。『どうしたんだす、若旦那?』と穗積が、机の前から飛んで來て、山田を二階から呼び下ろして、二人で榮一を床に寢かして、電話で、醫者を呼んでくれた。

醫者は、之は餘程重態です、肺炎の兆候がありますと云ふて歸つたが、榮一はそれから一週間は、たゞもう安眠も出來ず苦しみ通しに苦しんだ。熱は四十度から下ら無かつた。二三度朝は三十八度位に下つたことも有つたが午後には、すぐ四十度以上に昇つた。そして苦しい、苦しいと云つた。穗積と六彌は親切に氷囊や氷枕など、なにくれと無く心配してくれたが、こんな時には女手で無ければ、痒い所に手が屆かないと榮一は思つた。さうかと云つて、榮一には看護婦を雇ふ金と云ふのは一文も無い。村非は看護婦などゝ云ふやうな親切氣を知らぬ男だ。こん

着て居る蒲團が錦襴で造つたかのやうに見えた。そして彼は父なる神の手にしつかり握られて居ることを知つて驚いた。

と……否……神は父と呼ぶ可きものよりか更に接近したものであつて、彼自身にすら仕み給ふものであつて神自身に彼が着かつて居ると云ふ實感の喜びを感じた。そして彼がこの喜びを持つや否や、熱は忽ち下り、血脈は全く平常に復することを知つて驚いた。

翌朝榮一は二つの夢を見た。

一つはまだ少し早いのに海水浴に行つた所が、急に寒氣が催して、打病の肺がまた起つて、咳する度に口から血が流れ出る、白い砂地が血に染つたと云ふ、心地の惡い夢であつた。

夜明けになつて見たのは、榮一が店を捨てゝ獨り、朝鮮の方へ徒歩旅行して居ると、何處か沙漠の様な處へ差しかゝつた。

……『ア、此の向ふの村だ、カントが産れたのは』――と思ひ付いた。それから段々歩いて行くと『カントは獨逸人ではなくて日本の人だ、世界の人が皆誤信して居るのだ。今から百年程前の人で、本居宣長の朋友であつたのだ』――と順々に記憶が新しくなつて來る。道は荷車が一輛通れるかと云ふ程狹い。砂地だから車の輪の深く這入つた跡が付いて居る。左に曲ると大きな森がある。前に粗雑な胸の高さまでの、よく牧場にあるやう

床についてもう十日も過ぎたが、[栄]一の容態は少しも善くならなかつた。一分間に百二十二も打つやうになつた。

になつたのである。之を見た院長は、遂に死の宣告を榮一に與へた。さうかと思ふと脈が止ることがある。心臟が變

村井と久保さんとにはさう云ふた。十月十六日の晩七時頃、榮一の枕元には、ウヰリアム・博士を

始め、數名の醫員で榮一を知つて居る四五人のものが寄集つた。そして最後の告別會を開いて居た。たゞ一人久保さんが缺

凡ての人は默禱して居た。榮一も自分自身手の脈を握つて見てあげて美しい祈を捧げてくれて居ることを榮一は微かに聽いたやうであつた。然し榮一は、神が彼に委託した或事業——それは、貧民問題を通じて、イエスの精神を發揮して兒たいと思つて居ることの爲めに貧民窟で一生送ると云ふ聖き野心が遂げ得るまでは、死なぬと云ふ確心を持つて居た。

彼は死を飛び越えて。神秘の世界に突き込んで居ると云ふ一つの信念を抱つて居た。

床の間の柱に電氣の光が反射する一點を凝視した。一分、二分、三分、四分、五分、十分、十五分と凝視し

た。その間に彼は、また云ひ知れぬ、實在の不可知な驚異に卷き込れた。それは、凝視する光の一點が、虹のやうに見え、自分の横たはつて居る部屋がパラダイスのやうに感じられ、美しくも無い彼の

り一層深い泉で、その底は到底知る事が出來ぬと說明してある。泉を上から見ると、善男善女が智慧が增しますやうにと禮拜した證據に捨附木が一杯抛り込んである。本堂の前に立つて居ると耶蘇教の牧師が榮一に、『君は何處の學校に居たか?』と問ふから、芝の白金の明治學院に居たと答へると、僕等は同志社だと一路傍說教に來たのだと答へる。何處で說教するかと問ふと、此庭でだと答へて居る。

妙な耶蘇教だと思つて、此寺を立ち去つた。

二人は云つて居た。二人とも額新の多い人だ。榮一は君等は此處へ耶蘇教の傳道に來たかと問ふと、

カント崇拜がなか〳〵此地方に盛だなど考へ乍ら此村を通り過ぎると、カントと本居宣長とが、泥湯に這入つて居る。そして宣長はインマヌエルカントの背中をすりながら云ふて居る、『君の日本歷史の研究は破天荒の快著だ。僕の古事記の研究の様なつまらぬ者じやない。君はまだ一卷しか出版しないが、あれが全部出ると日本には革命が起るね』と湯をかける。

然しカントは默つて笑つて居る。本居先生——『いや、いや、君の煩悶には恐れ入る。僕の著書などは全く批判が足らぬから駄目じや』と云つて居る。

榮一は面白い事を見たり聞いたりした、次の村に行くと小學校の教科書を賣つて居る店がある。その讀本の名は『カント』と云ふのだ。中を見るとカントの小さい時のお伽噺の様な逸話がある。

な垣があつて、點燈が入口の所についてゐる。その點燈の正面にはカント、カントと書いて、最後に獨逸語を日本の假名に直した様な文字で、カントと讀ましてある。此處がカントの家かと思つて居ると、カントと桑畑が兩脇にある。これを行くと、カントが小さい時左に這入る道があつて、ずうと桑畑の間を通る。『此小僧！　まるで二宮尊徳の様だ。』と思つて居ると、カントが消えて、一寸とした寺が現はれて來る。『何だ？　寺じやないか？』と思つて居ると耶蘇教の牧師だと云ふ二人の男も禮拜して居る。見ると、何か池か泉の様なものがある。

本堂で貰つてゐる緣起を讀むと、所々に挿繪が這入つて、カントの小さい時の逸話が載つて居る。中にはカントが讀經の様に九艘飛びをして居る繪まで挿んで、仰々しく書いてある。またその中には、此本堂の右の泉はカントが掘つた泉で、山本勘助が久能山に掘つたといふ二百數十尺の深い泉よ

中へ』：V-Narod！：『人民の中へ』：V-Narod！：と云つたこと、トインビーや、貧民窟施民運動の人々が、貧民の中へ行つたことを思ひ、是非貧民窟の中へ行かう。そして貧民と労働者の間に労働組合運動を起す機會があれば、直にその方へ移つて行からう——と決心した。

新兒はこの頃、福音傳道館のT牧師から、ジヨン、ウエスレーの日記を借りて来て讀んだ。そしてウエスレーが肺病であるのに、懸く可き大きな事業をなし得たことを感じた。その中に書いてある、大西洋を帆船で横切る敬虔派の人々が、自らは船暈の爲に血を吐いて居るにかゝはらず、他人の爲めに死を決して、どうしても『死』を貧民窟へ行く』ことを聞いたなどは、白然主義文學の全盛時代であつて、教會の多くの青年が、その爲めに堕落して行くことを決心した。

この頃文壇は、

三十三

植木は塵芥掃除夫として、市役所の仕事をして、毎日六十二錢づゝを儲けて居たが、思つた程悪人でも無かつた。そして榮一が貧民窟に這入ると云ふことに就ては、色々と世話をしてくれた。家が空

の晩、貧民窟の一軒の家を借りることにしたが。その家と云ふものも、この水田の家であつた。

　榮一は相變らず、書は保險會社へ出て、夜は著作やら、路傍說敎に出て居た。病氣は全く善いと云ふのでは無かつたが、心配する程でも無かつた。毎日午後の『四時、熱』が出て居なければ、慣れて居るので平氣であつた。

　どうせ、近い中に死ぬのだから——一年か、二年か、長く生きて、三年位の中には肺で死ぬのだから、死ぬまであるだけの勇氣をもつて、最も善い生活を送るのだと決心した。彼は全くトインビーやフレデリツクスレーの基督敎社會主義に傾いて行つた。そして、マウリスや、チヤールス、キングスレーの基督敎社會主義では滿足出來なくなつた。たゞ唯物的なマルキシズムでは滿足出來なくなつた。彼は然し、現代の敎會が肉と靈とを離れて、經濟問題を離れて、愛を說くことに反對した。彼は愛は肉を離れてはなければならぬと考へた。時間の上に延び上る意志が精神で、空間に擴がる意志が肉だと考へた。それで肉を取ら無ければ、凡てのものに意義が無く、神も肉の形で表象され無ければ、我等には理解がされないと考へた。

　それで彼は、ロゴス卽ち『化身』は宗敎の奥義だなど考へた。

　須らく、現代を超越せざる可らず』の繰りに、『吾人は須らく、現代を超越せざる可らず』と口すさむで居た。そして彼はロシヤの革命家の連中が『人民の

無かつた。それで彼は一枚一圓二十錢の古疊を二枚だけ買ふた。そして植木と二人で其の室に敷いた。然しまだ障子が無かつたので、また古障子を買ひに行つた。そして、一間二枚のもの二組を買ひ求めて來た。紙も貼つてあるので便利なものである。早速その晩はランプも無い暗の中をそのまゝ浦團を敷いて寢てしまつた。

二日目、植木は晝一から昨日の殘りの酒を飮んで來た。そしてその理由を色々述べて居た。然の業一は植木を何故か信用するやうになつて來た。そして『一緒に今夜から此處へ寢させて貰ひたい』と言ふ。植木は『それに

いて居ると教へてくれたのも、植木であつた。それで榮一は植木と二人でその家を見に行つたが、それは北本町六丁目の大通りを西へ這入つて、第一の路次を山手に這入つた十軒續きの長屋の東から二軒目の家であつた。家は五疊敷で、表が三疊に奥が二疊敷ける。植木の話では去年の暮に此家で人が殺されて、近所では幽靈が出ると云つて、誰れも這入ら無いので、空いて居るのだと云ふて居た。

この註釋は榮一の好奇心をそゝり立てた。

それで榮一は家主の水田の家へ行つて、家を借りたいと申込むと、小供の性質が悪いので、とう〳〵クリスマスの前夜まで延びることになつた。

そして、クリスマスの前夜。十二月の二十四日、各教會には賑かに『クリスマス』『クリスマス』と騒いで居る中を、午後の二時頃から榮一は植木に助けられて、引越をした。榮一はその時木綿縞の筒袖を着て、自分手に荷車を曳いて、兵庫の鍛冶屋町から、宇治の新川までやつて來た。植木はその間に床の下を掃いて塵を收ければ浜衣類一行李と竹の本棚一つを積んで來た。車には蒲團と

いやうにしてくれて居た。それから植木と二人で遠な買ひに行つた。然し彼は五枚分を買ふ金を持た

と、パピ年ら、敷居に腰を下ろす。そして、ツ
『富田、おまいも近頃悪うなったな。あの『熊』の嬶はどうしてやつたんや？
か？……新見さん……植木も信用が出来んが。
い奴だつた他所の嬶を取るのを専門にしとるん
『林もう、やめとけよ。餘計なことをだふな
『然し、『熊』はほんとに可哀相やな、……富田
富田は懐手をして狭い土間の庭に立つたま
『おとくで十一人じや』
『新見さん、この男は悪い男だつしやろ。他所の嬶を下一人も妾にしとるんだつ
あるんや？』
『川向ふに五人と、新川に三人、筒井に二人。
無いで……』
『おとくはその中へ這入つて居るのか？』
『そんなことどうでも、善いやないか？』
兵庫に一人や……然し今關係して居るのは、五人しか

い。それで榮一は、
『今夜その人に會つて見ませう』と答へたが。
『植木、おまへ阿波屋（木賃宿）へ行つて、教ケ島（內山の土木の親分の名、貧民窟では親分の名で乾分が返事をするのだ）を呼んで來てんか？』と云ふ。
『よツしや』と富田は、行く。植木が飛んで行つた後で、富田は林に。
植木が飛んで行つた後で
『あいつ、惡い奴じやで……六軒道に火をつけたのや……新見はん、あんな奴に心許したらいきまへんぞ、でえらい口に會ひまつせ』
『あいつほんとに惡い奴じや』と林が相槌を打つて居る。榮一は『そうですか？』『そうですか？』と答へて居た。
富田は何となく親分風を吹かす男であつたキチンとして居る。
林は紺の筒袖を着て、角帶に前垂を締めて居る。丸坊主の小悧口さうな顏をして居る。
『寒いな、少しも火の氣が無いんじやな』

『おそのは？』

『おそのは、大阪へ歸へつた』

『おそのは、あいつまた來るぜ、あいつ、餘ツ程、淫奔がすきと見えるわ、おしかは？』

『おしかも居る……』

『もう居らんのかな！』

『もう一人居る……うちの二階に置かんと云ふのやけど、一人居つたら、皆容つて來るのやさかい。仕方か無いがな……』

榮一は先きから二人の會話を總いて聞いて居た。こんな世界は榮一には未知の世界であるだけに、もう少し多く聞いて見たいやうな氣がした。

『新兒さん、富田……な、富田……』

りましたんやで……な、富田……』

『えらいもんやな、林、まだ、こんなに寒いと云つて、富田は、胸を擴げて、腹の傷をみせやうとして居る、一反の白木綿で卷きたてた下に、一尺にも餘る刀創が上から下へ貫一文字に出來て居る。そして敵方が攻め込んで來た時の話を面白くして居た。

『他所の嬶を盗るの、面白いか？』

『盗りもなにもせえへんけど、向から来るのやさかい仕方が無いがな。』

『いや、そんなことも無いで……富田、もうおまいんとこ『淫売』居らんのか？』

『もう、そんなこと云ふてくれるな、初めての人に、聴こえが悪いさかい……』

『新兄さん、この男、悪い男だつせ、淫売を十一人も十五人も置いて、盆賃を巻き上げて居りまんのやで』

『然し、林、おまいんとこのやうに、嬶を淫売なんかに、出さんからな……もう淫売居らへんで……』

『富田のやうに云ふても、おまいんところのやうに、人の娘を淫売して食へるんと違うて、嬶に出よるか？』

『ウン……』

『それじや、まだ居るんやないか？』

『おさだは？』

『おさだも居る。』

ら、ほんとに可笑な奴やな……内山、よう頼み、こん夜から、此處へ來るのやで……』

『へえ、……』内山は『へえ』の外、何にも云はれない。然し新見も、内山を連れて來られて押付住で、頼み込まれるのは弱つてしまつた。

その中に、榮一が、水道の傍へ、着物を洗いに行つて、洋服に着換へて、保險會社へ出る爲めに出掛けると、富田と林と植木と内山はぞろ〳〵連立つて歸つて行つた。

そして、榮一が、その日の午後四時に會社から貧民窟へ歸つてみると、蒲團の中に内山が印絆纏をきたまゝ寢て居た。

榮一は、妙な處へ來たものだと考へたが、その晩、水木通の簡易クリスマスへ出てまた貧民窟に歸つて見ると、

『燈がおまへんさかい、富田のうちから、ランプを借つて來ました』とランプをつけて榮一の歸るのを待つて居た。その顏は酒で眞赤になつて居た。榮一はその晩、内山と一緒の蒲團に潜繩込んで寢た。翌朝内山の手の甲を見ると、一面に膿が出て膨んで血が出て居た。

話の途中に五十恰好の頭の真丸い、印袢纏に草鞋履きの男が、植木に連れられてやつて来た。榮一は、床から起きて、内山を見ると、内山の顔は蒼ざめてゐるのである。よく阿波屋の門に立つて居る男である。

『教ケ島、今夜からな、此處で泊るやうに頼んで置いたからな、こつちい来て寝え。宿錢だけ助かるわ』

『へえ、そら……』

内山は眼が悪いと見えて、眼をパチ、、パチクリして居る。然し、言葉數の少ない男と見えて『へえ、そら』とだつた切り何にも云は無い。

富田は新見に、

『まア、お寺の、納所坊主じやと思ふて置いておくんなはれ』と云ふ。

新見がそく〳〵汲定してしまつて居る。そしてもう汲事もし無いのに、向ふでは、もう汲定してしまつて居る。そしてもう汲事もし無いのに、向ふでは、もう汲定してしまつて居る。

『耶蘇教は人助けやさかい、教ケ島のやうな可哀相な男を、よう助けてやらな嘘や……』

草鞋履いて立つてた切り、一日中動かぬとだふのやか

けものやな……阿波屋の入口で。あゝやつて、

だし、親切でもあるし、一緒に居ることはかまわないが、養はねばならぬと思ふと何だか、重荷のやうに考へられた。實に新見も朝食もせずに、晝と晩とはうどんやで親子丼を食つて居るのであるが、あまり、内山が可哀相に思つたから。早速米と土鍋と七輪を買ふて來て、一緒に飯を炊いて食ふことにした。

二十八日の晩、榮一が路傍説教して居ると、昨夜阿波屋で會つた、伊豆と云ふ四十五六の貧相なり乍ら病身ものが、

『教ケ島がお世話になつて居るさうで誠に結構で御座いますな……私もお世話をして頂きたいのですが、どんなもので御座いませう』と云ふてくる。

それで蒲團が無いと云ふと、『蒲團を持つて行くと云ふ。疊が無いと云ふと、『今夜からでも善いと答へると、すぐ〳〵重い足を引摺り乍ら、闇に影が消えた。

それ以上斷ることも出來ないので『それじや、いらつしやい』と云ふ。

暫ねる。今夜からでも善いと答へると、すぐ〳〵重い足を引摺り乍ら、闇に影が消えた。

説教をすませて歸つて來ると、後から『大將、大將』と呼ぶ男がある。みると、五十位の仲仕風の男だ。隨分醉ふて居る。

『大將頼むぜ、お雪を頼むぜ』と繰返す。

翌日の午後ウイリアムス博士から、西洋人の教會の日曜學校からだと云つて、お玩具を二行李、車夫が擔けて越して來た。それで二十七日の朝早くから、貧民窟の子供に分け與へた。新兒の內へ二三百人の子供が押しかけて來た。それを聞いて林も。植木も、富田もまたやつて來た。そして、自分の好むお玩具を勝手に攫んで、『うちの、かつえに、やつておくんなはれよ』と、云ふ、それに三ノ宮筋によく乞食に出て居る日茶日茶女を見付けた。それはひつツこくお玩具を取る。大人も十五六人やつて來て。お玩具をねだる。榮一はその中の分配法に困却して保險會社に出た。

晩方、ウイリアムス博士の出資で、阿波屋の座敷を借りて、貧民窟のクリスマスをした。そして、お菓子と手拭を一筋づゝ木賃宿の二軒數の貧しい人々百人にわけ與へた。

內山は榮一が來てから、殆ど飯も食はずに寢てばかり居る。聞いて見ると、二十六日は一度も食はず、二十七日は朝富田に十錢貰つて、一膳食したばかりだと云ふ。それは、內山が誤解をして。耶蘇の納所坊主になるのだから、妾ふて哭れるものと考へて居るらしいのである。內山は、人も淺さう

『伊豆さんの職業は何ですか』と訊ねると、明日から『縄拾ひ』に行くのだと云ふて居る。

榮一は内山の疥癬が傳染して痒くてその晩は充分睡られなかつた。内山も、ボリ〳〵掻いて居た。

その晩十時頃榮一が寢て居ると向隣の日山と云ふ妙な名の夫婦ものが住んで居る家で大喧嘩を始めた。よく聞いて居ると、下の㊂で高利を借りた處が拂は無いと云ふので、破戸漢の様な男が怒鳴り飛んで行つて、理由を聞くと、俥かに、五十錢のことなのだ。それで榮一はそれを支拂つてやつた。そうすると日山は、榮一を神様を拜むやうにして拜むで居た。

翌日、朝早くから、植木がまたやつて來た。そして、不景氣で仕方が無いから、五圓の金を借してくれとまた云ふて來た。それで榮一は植木が此前に彼を欺いたから、切れるものや、切れるもんのやと云ふて來たっそうすると『わしも考へがあるね、どうしても借らな承知せんのや』と云ふて『ドス』、懐刀のことを榮一に見せる。そして植木の顔色が段々變に愚圖々々云ひに來やがつたら許さんぞ』と詰責して居

榮一には何のことか薩張判らなかつた。

『おしは、君ン處の隣の、吉田と云ふ俄鬼じや。……頼むぜ。大將』と云ふ。それで榮一が歸つて來ると、後からついて歸つて來た。そして西隣に這入つた。

ランプも何にも無くて。カンテラを灯して居るが、家の中には疊も何にもないが、床になつて居る古い板の上に、南京米の袋を敷いて寢るらしい。隅に小さく黒くなつて居るものがある。それが吉田の娘お雪らしい。着物を着たまゝ何にもかけずに寢て居る。

『お雪、こら、お雪、酒買ふて來い。』と怒鳴つて、自分の室に這入つた。そうすると、伊豆さんが、

『早やもうちやんとやつて來て隣の室に席を敷いて寢て居る。用事が無くて詰らない悲慘なので、立入つて話もせずに、榮一はあまり悲慘なので、立入つて話もせずに、

『伊豆さん、その蒲團はどうしたの？』ときくと、

『一晩二錢の貸蒲團を借りて來ましてん』と云ふ。

ち入れおことわり』と模様に幾千字と無く書いてある。『なる程』と榮一は合點した。

た、『明後日その大晦日に入る金があると見えるな』と云ふて居る。

その晩、果して富田は暴れに来た。七時頃榮一は貧民窟の訪問に出ようと思つて居ると、富田が『生意気だ』と云ひ乍ら、榮一を突き飛ばして、頬ぺたを三つ四つ擲つた。『殺すぞ』

とだか誰張りわから無かつた。それは新川の親分の縄張りで、富田の云ふことであるらしい。更に富田は、

と、九寸許りの『ドス』を引抜いた。頗る凄いもので有つた。然し榮一はビクとも爲無かつた。既に死を覚悟して、飛び込んで来て居るのだ、斬られることは少しも辭する所では無かつた。絶對の無抵抗主義者ではあるし、勿論反抗もしなかつた。

富田が『ドス』を振り上げると、七輪に暖つて居た内山が飛んで来て、『兄キ、何にするんや……まア

そんなに怒らんでも善いじや無いか』と、懐刀をもぎ取つた。

そうすると、富田は、七輪口懸けて飛び上つて行つて、七輪を庭に立つて居る榮一に投げ付けんとしたが、急に、何を思つたか、疊の上へ、打ちつけた。山の様に燃えて居た炭火が座敷中に散る。また内山が飛び上つて行つて、その火を拾ひ集めて居る。その間に榮一は裏口から逃げ出て、海へ祈

ろ。植木は林の前には何故か。頭が上ら無い。

『歸つて行け、歸つて行け！』と云ふと、すご〳〵歸つていつた。

今度は林が金を、十圓是非とも貸せと云ふ。そして、榮一の財布を探して居る。そして、『ドス』も、ピストルを見せる。そこへ富田がやつて來る。

を懐から取り出して見せる。何をして居やがるんだい。歸れ、歸れ』と云ふ。林が默つて來て、何をして居やがるんだい。歸れ、歸れ』と云ふ。林が默ると、今度は。

自分が金三十圓借りたいと云ふ。そして今度は、ピストルも少しも恐ろしいとは考へ無かつた。反つて面白かつた。

るとは考へたが。貧民窟に來た甲斐が無いと思つた。一言も返事をしなかつた。

なことが無ければ、それで默つて居た。一言も返事をしなかつた。

た。それで、內山が起きて來て二人の喧嘩を分けて居る。榮一は靜かに起きて、水道端へ面を洗ひに行つた。歸つて來た時に二人共歸つて居つた。

それで內山は町に榮一に『ユスリ』の手段を說明してくれた。『喧嘩を吹きかけて、仲裁するやうな風を見せてユスるんだつさかいな、一寸とでも、腹を立てたらいきまへんぜ……然し富田のおの勢じや、今夜は屹度、暴れに來まつせ。先生は逃げて居つた方が善いな』と云ふて居る。そして

民猪の子供は非常に榮一が好きになつた。そして榮一も彼等が好きであつた。

甚公に、虎市に、花枝に、數さんに、熊藏は午後の四時頃に榮一の歸るのが待遠いので。朝から遊びに來て、榮一の留守の間は、狹い狹い榮一の家の前の路次で、晝の間遊んで榮一を待つて居る。そして彼等の云ふ第一聲は、榮一の顏を見ると路次の東の端から、西の端まで飛んで來て、榮一を歡迎してくれる。

『先生、今日、お玩具無いの?』

と、云ふことであつた。榮一は先づ、甚公の頭を撫でゝ、虎市、花枝と順々に子供等の頭に手を按くのであつた。

そうすると子供等は皆『先生』の外套の裾を持つたり、袖を握つたりなどして、榮一の家まで隨いてくるのである。

その外に、榮一には、生れて始めて一人の信者が出來た。それは二十七日の阿波屋のクリスマス貧民招待會に、吾妻通六丁目の二疊敷長屋から、妻君に負はれて、集りに來た足の立た無い四十近い男が居た。聞けばその男はリウマチで、もう四ケ月も足が立て無いのだと云ふて居たが、二十八日の夕方榮一の處へ、優し相なその妻君が、

『先生、どうか誠に濟みませんが、耶蘇の御祈禱をして下さることは出來まへんだつしやろか』と云

りに行つた。

十一時頃に榮一が歸つてみると、一枚の障子は日光茶苦茶に擲き毀してあつた。

すると思ふたが、默つて寢た。

三十日の晩も、富田は榮一に來た。それでとう〳〵内山は榮一に忠告した。

「先生、富田に二十圓か、そこいらおやりなさい。その方が傷つけられるより結局徳ですぞ」と云ふた。

それで榮一もその氣になつて。保險會社から貰つた、僅か許りの、年末賞與、月給一ケ月分二十五圓の中から二十圓を富田に與へることにした。然しそれを知つて植木は承知しなかつた。とう〳〵、後の五圓を持つてし行つてしまつた。榮一は猶ほ月給の殘りを僅か許り持つて居たが、隣の二疊に寢ると障子を買ふて入れたので後は一文も無かつた。

明治四十二年はそんな淋しい暗い年の暮を貧民窟で送つた。然し榮一に取つて、たゞ一つの喜びは僅か四日ばかりの貧民窟の生活に次人の出來たことであつた。勿論内山の爺さんがその一人である。

が、伊豆さんも他の一人であつた。

然し此所に新しく、新兒を『先生』として仰ぐ一團が出來た。それは、貧民窟の子供等であつた。貧

祈つた。

然し榮一には何故斯うキリスト教が早く傳播するかと云ふ理由がわからなかつた。

出口の云ふ所でよくわかつた。それは出口が教へて廻つたのであつた。

兎に角、貧民窟の生活は榮一の若き血を湧かしめるには充分で有つた。

三十四

一月二日の朝早く植木が、丸井と云ふ男を連れてやつて來た。（植木の癖は榮一が起き無い先に榮一を捕へるにあつた。）そして、丸井は花莚を車で挽く、人夫であるが、彼の姉と云ふのが、博徒で今は監獄へ行つて留守で、一文の葬式代も無いので葬式を出す金を哭れんかと云ふのであつた。榮一は早速承知して家を見に行つた。吾妻通六丁目の五疊敷に表三疊に丸井の一族六人が住み、裏の二疊に姉が二人の女の子を連れて住んで居る。そして死んだ貰ひ子と云ふのは百日足らずの子供であるが、母乳は勿論のこと、牛乳を買ふ金もないのと、お粥とおも湯ばかりを與へて居たので死んでしまつたと云ふて居る。穢ない俵蒲團の中に屍を横たへて赤ン坊の着て居たモスリンの袷せの着物を取り除いて死體の顏を見た時に、何とも云

ふて來た。

それで榮一は早速出かけて行つて、病の癒える樣にと祈つた。すると三十日の朝方、榮一が年の中の最後の日の出勤に出かけて居ると、長い竹の杖にすがつて、足の立たなかつた筈の出口が路次の向ふからやつて來る。髮は石川五右衞門の樣に眞直に延びて、背ざめたその顏は、貧民窟で無ければ見られぬ姿であつた。

それからといふものは出口は貧民窟に於ける、耶蘇教の宣傳者となつた。明治四十三年の一月一日は丁度日曜日であつたが、榮一はその狹い五疊敷で初めてタの禮拜をすると貧民窟を布れて廻つた時に、出口は吾妻通六丁目の二疊敷から六七人の友人を連れて來て、狹い所は一杯であつた。

その中には繩屑拾ひの伊藤、井戶淸への石野夫婦——之は夫婦に子供を連れて來た『羅宇管げ換へ屋』の老爺さん、それにも一人の紙屑拾ひの年寄が有つた。それに伊豆の內山が加はつて晩の禮拜は實に愉快であつたつ

榮一は幸福であつたつ。榮一は出來るだけ平易に話をした。そして、皆のものが一人、一人祈つて歸つた。その中の一人は『祈禱』と『感謝』を間違へて『病氣の癒されんことを感謝し奉る』など云ふて

元日の夕の礼拝に出て来て居た井戸渠へ屋の石野が、宅へ来た。それをも榮一は引き受けた。吾妻通六丁目の藤本の借屋に住んで居る、石野の宅とその妻君とが、果然と坐つて居る。そして死んだ子が貰ひ子だといふことがすぐわかつた。

榮一が行くと、石野は、

『死んだのは、この子です』と、丸井の宅の子供より未だ小さい赤ン坊の屍體を隅から出して来た。

坐蒲團を三枚折り〳〵、〳〵と兵児帯で巻きつけて、まるで土人形の様にしてあつた。その顔は、丸井の宅の子供のやうに眼が潰れては居ら無いが、色の青い、頭に濕疹の出来た醜い子であつた。こんな醜い子であれば、勿論育てる勇気は起るまいと榮一は感じたことであつた。之れは死體檢案がゐると云ふので、最も近い田澤醫師の所へ飛んで行つて来てもらつた。田澤さんは老眼鏡をかけて、穢いからか無性からか體の上りもし無いで、庭に立つたまゝ、

『その子、こゝへ連れて来な！』と云ふた。

そうすると、石野がそれを榮一に見せた様にして、醫者に見せた。田澤さんは。

『ア、、よし。之か？　之は營養不良じや！　もう、わかつて居る。わかつて居る。』と立つて脈も取らなければ屍體に觸れもしないでその儘玄關へつて行つてしまつた。

へぬ不快な気に打たれた。それは。子供の眼瞼は全く潰れた様に赤くむけ、頬の肉は全く落ち、手はひからびて。柴の葉のやうになつて居た。

それで栄一は丸井に色々と様子を聞くと。金に困つたから、殺さねばならぬと知りつゝも、僅か五日間の金に目が眩れて、姉がこの子をもらつたのだと云ふて居る。それで栄一は一先づ自分の家へ引返して、行李から。紬の綿入と羽織を出して、之を質屋に持つて行つて。六圓三十銭を借りて来て五圓だけ丸井に渡したのだと云ふて居る。丸井は植木と相談して、新児の向筋に住んで居て。半年程前迄西隣の吉田の嬶であつた『おいぬ』と同棲して居る。『たべろう』さんの所へ。屍體を片付けてくれと云つて来た。『たべろう』は『おひたべろう』とも云はれて貧民窟の葬式の出来ない人々の屍體を獨で片付て煙草の木箱や蜜柑箱に、それを詰めて呑に負ふて、春日野の火葬場へ運ぶのがその職業で有つた。その日も彼は夕刻、蜜柑箱に赤ン坊の屍體を詰めて丸井の宅から運び出した。

之を見た、栄一は全く憂鬱になつた。そして急に貧民窟とその恐ろしい罪悪がいやになつた。神は愛では無い、暗黒と、死と、貧乏の創造主だと罵りたかつた。

然し一月二日に死の面を見た栄一を意地の悪い神はそれだけで許さ無かつた。一月五日の朝、また

代を後から持つて来ますから。』と云つて出た。

内山は榮一の心をよく察して、

『先生、私が質屋へ行つて来てあげます』と云つて、榮一の處へ走つて行つた。榮一のそれでその金を持つて、石野の行李には、もう後、たゞ圓の金が出来た。

紙一枚、筒袖の綿入二枚、浴衣二枚、そして帯二枚、合計五枚しか殘つて居ら無かつた。

榮一は心臓がドキつく様な色々な試練に會ふ度毎に強くなつた。榮一はその日神戸海上から歸つた後にも、まだ石野の棺が出て居ら無いことを知つて……新兒に耶蘇のお葬式をして貰ふのだと云ふて、歸りを待つて居た爲めに——生れて初めて、キリスト教のお葬式と云ふものを貧民窟の三疊敷で施行した。

然しそれには格段な説教とかふものも無かつた。』こんな醜い世界を見るよりか、死んだ赤ン坊の様に、早く天國へ飛んで行つた方が幸福だ。』と述べたにしか過ぎ無かつた。葬式が濟むと石野は自分手に棺を持つて、春日野へ運んで行つた。榮一も石野の後から、沈默いまゝ隨いて行つた。正月の雪れた時に、榮一は春日野の火葬場の前に立つて、石野に棺を隠して隠亡が棺を運ぶ事をカタ〳〵はせて居た。

栄一が後から随いて行くと、

「アレはな、あんなにして、貰ひ子をして食つて居るのじやがな……この近所はあれ許りじやから困るわい。」と言ふ。死亡診断書を取つて、出口の所へ立寄ると、花の井野はあれで、二、三遍目です……貰ひ子をしては殺し、貰ひ子をしては殺し、その度毎に家を変へるんですんだな……近所に堪かしいさかい……あんなこととして居ると云ふのやけんど、あれの事か、どんと情く、らでな、花の井野は毎晩、嬶に淫賣をさせて、自分はあの年が寄つて、嬶の淫賣の立番をして、その日の暮しを立てとるんだんがな……今晩も内へ来て、栄式代が無いさかい、耶蘇の先生に頼んでくれとぴひますさかい……そんなことを云ひよつたら詰が當るぞ、貰ひ子する時には、五、六晩か、十回かの金の爲めに眼が眩んで、死ぬと、そら栄式代が無いとか、かんとかぶふて、隣近所をも、てんなにして、そんな烏獣のするやうな眞似はおかしは出来んと云ふてやりましてん……然しあなたも、こんなうるさい新川と云ふ所へお出でなしたんですから、もし助けてやつて下さいませ……この後は、私もよう云ふて、改心させまつさかい。」と同じことを繰返して居る。

栄一はそれで花の井野の家庭の事情がよくわかつたので、その足で直に花の井野の處へ行つて、「栄式

飯を分つ爲めに、一日二食に減じて……それも、お粥に梅干で辛抱し無くちやならぬと、理想を植ゑられた男は何と云ふ不幸な男であらう。

『世の中には、阿娜な女と、絹の着物と、芝居と、音樂がある中に、自分だけ社會改造を夢みて、貧民窟の眞中に据ゑられて、泣き乍ら、屍體の片付を命ぜられるのは何故だ？

『社會は餘りに間違つて居る。……然し云ふまい。たゞ大きな、社會改革の時代を待たう。それまで出來るだけ貧しきものを慰め、新しき日の來るのを待たう。今日の金持の道徳の腐つたもの、變りに新しいクリスチヤンの道徳を産まう。十字架の道は、貧民窟の路次にあるのだ。』

そう考へて、榮一はいつも新生田川に架つて居る日暮橋を渡るのであつた。

そして、その橋の名が如何にも、その日暮しの貧民や勞働者にふさわしいので立止つて、たゞ騒がしくて、に打たれるのであつた。

一月七日の日曜からは狹いその五疊敷で日曜學校を始めた。七十人も來るので、たゞ騒がしくて、お話も何にも出來なかつた。然し、もう、ちやんと、新川全體の子供は新兒を知つてしまつた。朝の禮拜に兵庫の講義所に行つたが、その後にウイリアムス博士は貧民傳道に之から月々二十圓づゝ補助するから、日の午後婦人矯風會のするから大にやつてくれと云ふてくれた。新兒はそれを感謝して受けた。その

『なぜ、こんなに苦悩せねばならぬ様に、自分は薄暗い新川へ、帰つてくる道々そう考へた。

「私はエレミヤのやうに、泣く爲めに造られたのであらう』と榮一は明るい元町筋から、

ならないのだ。

「然し、間違つてしまつた。世界には私のやうなものが、いくら煩悶したつて、女性の△△△の中へ、蛇が這ひ込んで居る刺青をたゝ無いのだ……貧民窟にはペストが這入つた。

谷中にして居る、淫売のおとめが一昨日死んだ。そして、昨日はその阿爺が避病院へ送られた。今朝は岐阜屋の川股と云ふ沖仲仕が同じくペストで送られたと云ふ。おそろしい、おそろしい、然しその

ペストの中には狼、迷へる羊の爲めに。一人も仕し無くちやならぬやうに造られた、新見榮一は何と云ふ不幸な男であらう。……そうだ。私はペスト病に傳染して早く死なう。その方が、早く宇宙の苦悩を見なくてすむ。

『金が有つて、救濟に從事するのも善いが、金は一文も無いし、晝食を無くして、二人の同宿者と、

の中から、

『八釜敷いわい、奴等生、静かにせい！』と狼の様に吠える。

それには、植木はよう反抗しない。そしてただ、生田教会と、ぐるぐる廻つて、栄一に毒づくのである。そして、栄一を探して廻つて居る内、偶然にも植木虎太郎になり代つて栄一と思つて、裏の井戸へ這入つて、救ケ島が植木は金を借らうと、バリバリと歯で噛いて居る。そして、

『悪かつた！　悪かつた』とどなる。そして今夜一緒に寝させてくれとどなる。それで栄一は『よしや、足を洗つて来い』と、水道端へ行つて、水をかぶつて酔をさましてくるとどなつて出て行く。

やがてブル〳〵震へながら栄一の寝床へ這ひ込んでその冷え切つた身體を、栄一にすり添せてくる。

こんなにして居るかと思ふと、また金が無くなると短刀を持つて、栄一を追ひかける。それで栄一は他めて隠れたり、栄一が警察へ訴へぬとどなることを知つて居るものだから、一層猛烈に脅迫した。短刀で脅迫にこんなにしてやるからと繰返してどなつた。

姉妹達が二人來て、新兒の家を見て泣き乍ら歸つて行つた。然し新兒は泣いてくれる位なら、何故住み込んでくれないかと考へた。

楠木は金が欲しいとばつて脅迫をつゞけた。遂に敎へ給へ』と兩つのかけしかゞぬとふて怒り出した。『敵と云ふのは我邦のことだらう……而つて悪いてくれるやうな神樣なら、七輪の火を暗き散らしてやるから、火が燃え立た無いやうに而つて見ろ』と、座敷の眞中へ七輪を引繰返す。

『それ見ろ、やはり、神樣だつて、火はよう消さないじやないか』と罵る。

そうかと思ふと、而は、『敵を愛する心を開いて居る眞最中に榮一が、斬奮會を前へ……オイ、右向け右！』

『廻れ右前へ……オイ』

『善に立ち歸れ……オイ』

と、呼ぶ。さうすると、之も酒に醉拂つて街から歸つて。南京袋の中へ這入つて寢て居る吉田が、家

家を借りることにした。

そして、此處が一疊だけ廣いものだから、新兒と内山はそこへ移ることになつた。日曜學校も、晩の說敎も凡て六疊の家ですることゝなつた。それで榮一は、すぐそこの家に寢泊りして居る、三人の淫賣婦のおしかの家であつた。さうすると、新川の貧民窟の中にある淫賣婦のことも、大阪の飛田と長柄の淫賣婦のことも、すつかりわかつてしまつた。親しくなるに付けて、新兒は、その中の一人が、十二月の末に新聞に評判された兩性の生殖器を持つ淫賣婦のおちかであると云ふことが判明した。出齒の醜い顏をした女である

が、新兒は改心しないかと勸めた。

そうすると、おちかは食ふ道をつけにくれるなら、今日からでも改心すると云ふた。それで、榮一はすぐ神戸養老院の富島のぶえ女史の所へ行つて、理由を述べて、おちかを引取つて貰うことにした。そして榮一がおちかの風呂敷包みを持つてやつて、富島女史の所へ、おちかを届けた。

三十六

伊豆は毎日繩を拾ひに行つた。内山は毎日のらくらして居た。然し忠實に朝早くから起きて榮一の

然し榮一は植木に犯罪の機會を與へまいとこそ思ふて逃げもしたが、刀を恐ろしいとは思ふた。榮一には惡漢の系統とその心理が段々よくわかつて來た。それで少しも、怖ぢ無かつた。

こんな泥雜の中へ柴田忠吉と云ふ病人が宿錢が拂へないので木賃宿の阿波屋で此處へ行けと教へられたと云つて、やつて來た。彼は大阪で友染織工であつたさうで、今年取つて二十八歳だが原籍は神戸で、眞の父は亡くて今は義理の父が兵庫東出町で二番の消防の組頭をして居る。放蕩の結果こんなになつて、家には歸れないのだと告げた。

それで榮一はすぐ三年前の夏、苦しい櫛藏部屋の生活を送つたのが、柴田の義理の父の家で有つたと云ふことがわかつた。それで直にその男を世話することにした。然し家は實に狹い。それに醫者に見せると、腸結核だと云ふことが判明した。一週間、二週間として居る中に、柴田はもう立て無くなつた。そして肉がドロにおりるやうになつた。實に臭い。それを榮一と內山と二人が看護せねばならぬのであつた。一緒に寢て居る伊豆さんには餘り氣の毒なので、隣の室へ這入つてもらつて、二疊の室を病室にした。それで家があまり狹いので、もう一軒借らねばならぬことゝ思つて居た丁度その時——關西學院神學部の竹田君と、八尾君と、橋田君が親切にも。貧民窟の日曜學校を受持つことを申込れたので日曜學校の爲めにも家が餘り狹いものだから、一軒置いて西隣の——六疊の

つた。その金を持つて榮一は直ちに、裏の安さんの處へ出かけて行つた。裏口から這入ると、片眼の安さんは、障子も何にも無い家に晝の日中、戸を閉めて、着物が無いので、法寝を着たまゝ汚のギチギチに着いた貧蒲團に引くるまつて寝て居る。安の側に病身そうな子供が矢張り安と同じ蒲團の中へ足の方から這入つて寝て居る。

おかみさんは古下駄を竈の下にくべ乍ら、砂の這入つた、小米を焚いて居る。今、その飯の湧き立たうとする所であつた。

榮一は默つておかみさんの後に立つて、

『おかみさん、これは少しですけれども米代にして下さい』と五圓紙幣を差し出した。

『へえ、勿體ない。こんなにたんと！』

『安さん！』

榮一は、たゞ默つたまゝ、紙幣を裏の二疊の上り口に置いて出て來た。

そして、その足でまたおふぢの處へ廻つて、二圓を置いて來た。

その晩安は貰つた五圓で、酒を呑んで、ぐでぐでに醉ひ潰れてお禮にやつて來た。

『新兒さん、あなたは、ほんまに神樣や、私はほんまにあなたを拜みまつさ……然しほんまに新川と

て居つては、食はれしまへんがな……それに安さんと云ふたら私に許り罪を被せて私を殺すとか、撲るとか云ふのだつしやないか……』

そう云つておかみさんは涙をぽろぽろ桶の中に落して居る。

栄一もすぐ貰ひ泣をして、何にも返事をよう せずに、便所の處へ來て、ヒステリーにかかつた人の様に泣いた。

――『神さま、どうして貧乏人はこんなに苦しむのですか？？』と。

それで、栄一はその一瞬間に決心して、決して之等の貧しい人々が救はれるまで、一枚の着物の使徒にならうと考へた。で、早速内山に頼んで、筒袖の綿入一枚を殘して洋服も何にもかもすつくり――と云つても袷一枚に浴衣二枚と洋服一着と袴一つ――を質入することにした。然し内山は阿爺らしく栄一に忠告して、

『先生こんな洋服なんか質入したかつて、二足三文ですぞ、一圓か一圓五十錢にしか取らしません。それよりかあなたがまだ着て居た方がましですよ』と云つて質屋へ持つて行かない。

それで仕方がないから洋服を殘して後のものをすつくり質入してもらつたが、全部で七圓二十六錢にな

落付けて呉れ。』

『……』

内山は濡れ手を開いたまゝ、トラホームの眼をパチクリとさせ乍ら……。

『そら、兄キも、おはつのことで立腹して居ると云ふことは聞いて居る。然し、それも、先生にお頼みして、改心したいと云ふのやけん……そら先生が、兄キに断ら無かつたのも、アやつて、人助けに、新川へ来られたのやさかい、困つて居るものを皆助けて下さるのやから……おわるいかも知れたいが、先生としちや、おはつは兄キに案内して居ることと思つて居られたんやさかいな……』

大勢の人々が門口に集つて来た。

皆何が起るかと見て居る。

『おしか』の亭主——通名『大阪』はいきり立つて喋る。

榮一は迷惑相にしてくれ、そら先生だつて人助けに、新川に来たんやから。そらわしだつて、先生が新川に居るのが悪いと云ふのやないんやけれど……一體、生意氣やつて……新川には新川の流儀と云ふものが有つたもんじや……わしも、かうやつてな、淫賣の口錢取りをやつて居るから、新見のや

云ふ所はうるさい、いやよつて、また、あなたの身體の上にどんなことがあるやらわからん、その時には乾度私が一生をお助け致しますと』と廻らぬ舌を酒の興に借りて、一生懸命に辯じて居た。

三十七

おはつを養老院の方へ送つたことは、隣の感情を害した。それで四日目に、主が暴れ込んで來た、この男は、二尺五六寸もある刀を抜いたまゝ、

『新兒は居るか』と云つてやつて來た。丁度其時に榮一は飯を食つて居たが別に慌てもせずに

『何んですか？』と云ふと、

『何んですかつて、何んじや？』と云ふや否や刀の背で、飯臺代りの机の眞中を強く打つた。

すると、茶碗も皿もお菜も飯も四方に散亂した。

『まア、そんなに怒らなくとも善いやないか。兄弟、話をすればわかるんやさかい。もうちつと心を

式屋の安が出て来た。『安さんが来た、安さんが来た』と表で五六人のものが云ふ。安は通名喧嘩安と云ふあだ名がついて居る位で、日茶苦茶に、喧嘩をしたがるので、表の人々は大喧嘩にならぬことを心配して居るのである。榮一も安が来たので困つたことになつたと思つた。勿論安としてはこの間の世話になつた御禮の積りで助けに来たのである。

『こら、大阪！　何にを、ぐづ〳〵ぬかしてゐやがんや、こんな所で！』安は頭から『大阪』は全身に刺青をして、恐ろしい顔をして居るけれども、片目の安を見ると、急に默つて歸りかけた。

『まア兄キ、話はわかつて居るさかい。歸つて行つてくれ』と云ふと、『大阪』は默つて歸りかけた。内山に刀を渡した。内山はそれを善い機會にして、印絆纏ばかりを引掛け今迄話込んで居たとも見える安は、穢い顏をして寒いにパッテもはかずに、印絆纏ばかりを引掛けた。淫賣婦とおし、て庭につき立つたまゝ、榮一に理由を訊ねて居る。内山は無理に『大阪』を連れ出した。

かと大阪の聲が路次を西に行く様に、その聲がやがて消えた時に、大勢の人々も西へ動き『大阪』につ いて、西隣に集つた。

それから、安は、自分が喧嘩に強いことを繰返し、繰返しの述べて居た。すると庭の表からのぞく小娘が居る。それは『大阪』の宅に貰はれて来て居ろ『清ちやん』と云ふ今年十二になる、品の善い娘の子

うな書生ボに輕蔑せられるけれど、何にもわしだつてよその女に淫賣なんぞ、させたく無いけんど。食へんけん仕方が無い……こら、新兒……』と、また刀を振り上げて、膳の前で默つて祈つて居る。

それで內山は、腕に組みついて。

『こら、兄キ危い、知氣を起して、兄キが、監獄へでも行かゝなきやならんやうなことになつても困るさかい、その切れ物だけはわしが預ることにするさかい』と刀を取らうとするが仲々放さ無い、組みつかれたまゝおさだのお主は叫ぶ……

『こら、新兒、おはつをどこへ隱しやがつたんな、覺えて居れ……おまへはわしを食へんやうにする積りやな……わしもいつまでも、こんな新川に燻つて居つて。淫賣の立番なんかしたくは無いんじや、いつでも、新兒、おれを一個何と思つて居るんだ……百圓出せ——百圓——百圓出して貰はうかい……こら、新兒、おれを立つてやらア……』

『危いからな、その切れものを、わしが預ると云ふんだよ、兄キ』と內山は一生懸命である。おしかがやつて來た。默つて見て居る。路次には人山が築かれて居る。裏から崖

言葉が出ない。然し感謝して居ることは明かに見える。

榮一は病人に親切で行つた。隣の部屋に寢て居る伊豆も『先生の眞似は出來ぬ。』と感心して居た。

伊豆がそんなに賞めるのはをかしいと思つて居ると、『大阪』の事件があつて一週間程後に、『先生、豆腐屋の三公ない、……あの岐阜屋（木賃宿）に泊つて居て困つて居る……あの病身たれの三公が、どうにか、先生に賴んでくれんかと云ひますのですがない——どうかあいつを置いてやつて下さるわけには行きませんやろか、私の脇に寢さしてやりたうをますのやが。』

それで榮一は直に『よろしい』と承諾した。豆腐屋の三公（本名藤田三藏）は直にやつて來た。彼は幼い豆と違つて怠惰者である。然し三公は內に居ても沢して炊事の手傳を助けやうともしない。內山は仕事に出るのは嫌ひだか內の用事はよくする。靑く水腫れした顏をしてジットして居る。心臟が悪い。繩拾ひにも行か無くてのである。然し梅毒氣もあると自分手に云ふて居る。この男は伊豆と違つて、四人が食はねばならぬ榮一に食はして貰ふ考へで來たのであつた。

それで、榮一は給二十五圓で四人が、一升十四錢ではあつたが、とになつた。米は一升十四錢ではあつたが、四人が、お粥と梅干と味噌汁で送らうじや無いかと申し合せた。どう云ふわけを食はぬことにして、四人が食へば餘ることは無い。それで榮一は自分は遣飯かか內山は『結構です。結構です』とわかつたやうなことを云ふ。病人もそれで感謝して居る。三公だ

である。クリスマスに榮一が人形を與へてから、榮一が好きで毎日榮一の處へくるのであるが、今の先、雜理の父が梁れ込んで來たことなどは、忘れてしまつたかのやうに、時れ時れしい顏して、榮一を見て笑つて居る。それで、榮一が、

『お清ちやん！』と呼ぶと、顏を引込める。それで、榮一は『安』に困つて居るのである。

『お清ちやん、お父さんは怒つて居る？』と聞くと、

『うち知らん……先生、堪忍してやつてな』と幹く云ふ。榮一は、その優しい氣前に涙ぐんだ。

三十八

それから後、おしかと『大阪』と清ちやんは一二週間も顏を見せ無かつた。柴田の病氣は段々重くなる一方で有つた。榮一は海上保險會社へ毎日通勤しなくてはならないので、內山に書の看護を賴んでをいて、午後の四時過ぎに歸つて來ると、すぐ、柴田を見舞つた。毎日、柴田は妻へて行つた。頭の毛が、病氣の爲めに拔けて哀れに見える上に、顏が脹れて靑くむくんで居て、如何にも病人らしいが、榮一を見ると、偶像な拜むやうにして、拜むのであつた。然し結核が喉に來て居るのか、明瞭に

榮一は三公を不憫に思つた。それで榮一は内山に、『三公を可愛がつてくれ、あの男には誰れも味方が無いのだから』と云ふて、食はして遣いてやることにしたのである。

三十九

榮一は毎日忙しくペン先勞働に出て行つた。それは頗る平凡なものであつた。彼には保險會社の高等政策には何の關係も無かつた。彼は毎日帳簿へ數字を記入するのが役目で有つた。同僚は十四五人も居るが、彼はその同僚の中で最もつまらぬものゝ一人であつた。然しそんなことには彼は超然として居たものが、また復活したので職業に就いては何等不平を云はぬことに決心して居た。彼は資本主義を是認するのでは無いけれども、彼には耐え長や支配人を憎むことが出來なかつた。彼はいつも丁寧に社長や支配人にお辭儀をして、彼等の命令には決して背くことをしなかつた。それが、彼等の餘剩價値の發生を助けて居るとふことを知らぬわけでは無かつた。然し彼は今、職務に忠實であると云ふことの外に爲す可き道を知ら無かつた。他人が儲けるならば、それが他人の爲めであらうが、自分の爲めであらうが問ふ所では無かつた。他人が儲けるなら、資本主義に反旗を翻し得る時機を靜かに待たうとで結構である。已れは全く奉仕の生活に沒入し、

けは不平ばかり云ふのである。それで内山と三公は毎日衝突ばかりして居る。そしてをぼろ糞に叱り飛ばすのであるが叱られると三公は默つて居る。然しお鉢がまづいと云ふことは決して止め無い。それで三度三度必ず三公と内山は口論をする。

三公はまだ二十四の若い男ではあるが、一般の勞働者がいつも十歳位る老けて見える。石川五右衞門式に髪をのばしたまゝ手も入れず放つて居る。大の臆病なもので、夜中に一人で便所によう行か無いのである。幽靈が出ると云ふのである。それはからである。

彼は小さい時から孤兒で育つたのであるが、早くから豆腐屋に奉公して居た。四年程前に彼が中道筋の或豆腐屋の竈子をして居た時に、脇濱へ豆腐を賣りに行つたところが、醉拂ひの男が、彼に打衝かつて、彼の擔つて居る豆腐の荷をすつくり日茶苦茶にしてしまつたのである。その醉拂ひを擲つた處があたり所が悪くて、その男は卽死したのであつた。すぐ巡査が來たのであつたが、彼は一年間監獄へ行つて居たが、證據不充分で出てやつて來て、三公が警察へ引致した。それから、彼には、幽靈が出るやうになつたのである。それで、仕事にもよう出なくなつたのである。それは少し違つた仕事場に行くと、色々なものゝ形になつて出てくると云ふのである。

殺した男の顏が、

の善い男として愛せられた。

殊に丸二事件から知り合ひになつた、宮本と樽谷とは特別に、新見を尊敬した。そして社では榮一の非常の評判となつた。樽谷は貧乏な家庭に育つたことがあるとか云ふ理由によつて貧民窟の事業が特別に、榮一に同情して或日五十錢の銀貨を貧民に與へてくれと午後の四時に退ける時に、新見に渡した。榮一は、淋しかつた。何人から受けた同情金の初めてゞあつた。之を受けた時に榮一は、悲無いものであるかの様にも感じた。また侮辱せられて居るかのやうにも感じた。然し榮一はまた、神の名によつて、それを感謝して受けた。榮一はそれをも好意を以つて受けた。支配人の小林英作も樽谷から新見の話を聞いて十錢を寄附して受けた。神戸海上のものは、榮一をよく理解するやうになつた。そして社の下を乞食が通ると、

『おい、新見君、君の友人が來よるよ！』と冷やかすのが常であつたが、非常に尊敬してゐた。

四十

榮一はつゞけて發熱して居た。會社が退ける頃、ガツタリ疲れて、重い足を貧民窟の方へ運ぶ時に、自分の身體で無いやうな氣がした。それで貧民窟へ歸ると、すぐ洋服を着たまゝ、上り口に打倒

決心して居た。それで悦んで義務を盡した。彼はまた老へた。たとひ社會主義の時代が來ても、今日多くの人々が忠實に資本家に奉仕して居るやうに社會に奉仕するので無ければ、到底完全な社會は來ないと。それで彼は社會主義社會に對する奉仕の緒論として今日の社會に奉仕して居た。貧民窟の凡ての人を尊敬した。内山をも、伊豆をも、藤田をも、尊敬した。たとひ彼等が、一人生に於ける失敗者であるとは云へ、彼等の失敗には、各々尊い失敗の理由があることを發見して、榮一はそれを尊敬したのである。彼は、富田をも、林をも、植木をも尊敬した。彼等にも一面愛す可き點があることを發見して、榮一は、猶一層彼等を尊敬した。榮一はそれを尊敬したのである。彼は貧民窟の凡ての人を尊敬した。それが人間としての尊い實在を持つて居る以上、彼は、たとひ、その人々が誤れる方向を取つて居るとは云へ、また惨憺たる生活を送つて居る時期を與へられる可き人々として、尊敬を拂つたのである。彼は凡てを尊敬せねばならぬ爲めに、凡てを尊敬せねばならなかつたのである。それは、尊敬に値しないものは救ふ必要が無いからである。

この意味に於て、榮一は凡ての人を尊敬した。彼は資本主義を憎む、然し彼は人間を憎むことが出來なかつた。彼は淫賣婦、博徒を愛すると同じ意味で資本家を愛した。それで彼は神戸海上でも、人

彼は貧十箇の六畳敷の上り口の所に引繰返つて寝て居る時に色々そんなことを心配しが常であつた。そしてそんな時に限つて、阿波の田舎の襁母は今頃、どうして居るだらうとか、叔父の所へ行つて居る二人の兄弟のことや、遠く塩灣に行つて、近い中に歸つてくると云ふて來て居る笑子のことを思ひ出して、自分の一家の離散した悲慘な運命を將へ乍ら、泣くのが普通であつた。

『とうとう、已も貧民になつた』と自分に云ふてみることもあつた。そして『ア、、笑子でも居てくれればなア、病氣の時には世話をして貰ふのだがなア』とも云つてもみた。こんな時に限つて、その後一通の手紙を越さ無い田宮鶴子のことを思ひ出すのであつた。然し榮一は田宮鶴子にはもう望を託して居らなかつた。

然しこんなに、いうげ込んで居るかと思ふと、すぐに跳ね起きて、默つて、下の二疊敷長屋へ出かけて行つて、路次の隅々から子供を集めて、廣場へ連れて出て、わい、わい、騒いで居ることを見るのが普通であつた。

貧民の子供は一體に美しい。それで、美しい赤ン坊を抱きかゝめて、自分一人で『神は愛だ』と悦び乍ら考へるのだ。冬の夕暮を賑かに送ると、何時の間にか熱は忘めて居るのである。それで、榮一は發

れて、熱の下るのを待つのであつた。檢温器で計ると、三十八度近く出て居るのが普通であつた。それで、病氣がなほり切つて居らないのだとふことを、よく自覺して居た。そして、こんな時に一寸風邪をひいて、くしやみをすると。血粒が氣管支から出るので。自分にも氣味が悪かつた。學でその血粒を受けて。段々淋しく。臆病にたなる。死が目の前に見えて。自分の運命を考へると。自分は世界に何物をも殘して居ら無い。貧民猶改良問題は勿論のこと。著作も、思想も、信仰も、藝術も、何一つとして纏つたものを殘して居らぬ。然し毎日繰返して居るやうだ。自分に近い中に死ぬ

が濟んで歸ると、いふ段になると、日茶苦茶である。隣引張りどれが自分の下駄だか見當がつか無い。それで暗闇が起ると擲り合ひが始まる。日曜學校が何の爲めにあるのだか解から無い。寧ろ日曜學校が無い方が、彼等に靜かな紙分を呉はさすだけ、それだけ善いのではあるまいか、と思ふ程であつた。

それにこんなに、混雜して居るに、この附近で最も不良少年だと知られて居る、暗闇安の親戚に當る岩沼松藏とゝいふ十二になる餓鬼大將が、日曜學校のお祈の最中に障子の間から、石を投げ込んだり、犬を連れて來て吠えさしたり、五六人の子供を外に呼び出して、

『アーメン、ソーメン、冷素麺』

と、繰返し、繰返しゝはせてみたり、罪も無い子供の下駄を隱したりなどするので、榮一は遂に岩沼の後を追つ驅けて行つてみたが、矢張り駄目である。それで日曜學校をほんとにやつてこの附近の子供を貰から感化しやうと思へば、先づ岩沼を榮一の宅へ引取つて世話をするより外に道は無いと考へたので、暗闇安に話して、遂に松藏をも引取つて世話することにした。

やがて六人の家族となつた。

ウイリアムス博士は毎月十五圓づゝ補助してくれたり。それのみならず、米國より親光に來た紐育

熱してくると、下熱劑の代りにと云つて、二疊敷の子供の處へ遊びに行つた。

れん坊、けん、けん、子供の要求する遊びはなんでもした。そんなにして遊んで居ると、大勢集つて來て、暮の五時半頃には、百人位の子供が集ることは珍らしくなかつた。あまり大勢になると、今度は歌を唱はせて。西洋の學生がよくやる、グース、ステップの眞似をしたり、『猫が鼠取りや、いたちが追つかける』と云ふ文句を大勢で繰返し乍ら列を組んで『子盜り』の遊びもした。いつしか列の中には、北公、虎市、花枝、數さん、熊藏、そして、近頃親しくなつた、清ちやんなどまでが這入つて居ることなどもあつた。細飛び、鬼ごつこ、隱らをするものもあつた位である。

日曜學校は大勢で、關西學院から來る竹田さんも、八尾さんも、橋田さんも弱つてしまつてゐた。殊に下の二疊敷から來る子供等は下駄を穿かずにやつて來て、そのまゝ上にあがつて話を聞いて居る中に、自分が下駄を穿いて來たのか穿いて來なかつたか忘れて了つて、そこにある下駄を默つて穿いて歸るものもあると云ふ仕末には日曜學校の先生達も閉口して居た。彼等の多くは塵箱から拾つて來た古下駄——それも大抵は片ちんぼの下駄を穿いて來て、どれがどれやら、自分のものを知ら無いものだから、そこに百二三十の古下駄が並ぶ度毎に、下駄番に一人の先生が附き切りで有つても、授業

酒呑が誘れに来る。吉田がやつてくる。車挽の森がやつてくる。両隣の日山がやつてくる。酒呑を相手にして居る。居の眞似ばかりする。そして路傍説教を防害する。それは説教の眞中に出かけるのだから、聴衆がどつと笑ふのである。彼はいつでも酔ふて居る。そして十二時頃から福原遊廓附近へ車を挽きに出かけるのである。家は下の二畳敷に、蒲團も何もなく、車の毛布にくるまつているのである。

『帝國』は酔ふてはたゞわけのわからぬことを云つてやつてくるのである。人の善い男で決して怒らぬ、たゞ『頼むぞ』と繰返すのみである。

阿波は、酒に酔ふと、耶蘇の神様に祭つてくれと云つて、十銭銀貨を持つて来たり、二十銭銀貨を持つて来て、三十銭借してくれとか、五十銭かしてくれとかと云つて金を借りると歸つてしまふ。持つて来て、そのまゝ歸つてしまふ、さうかと思ふとまたやつて来て、三十銭借してくれとか、五十銭かしてくれとかと云つて金を借りると歸つてしまふ。向の日山は少し質が悪い。酔つ拂つて亂暴をしたがるのである。

隣の志田に到つては、もう問題に

市第五街の有名なプ
た。ピアソン夫人は
、榮一のして居る事業に非常
アムス博士に託して
つてくろからその時
に、悠然奮ふことにすると傳言
り歸宅した。そして
イスラエルが荒野でマナを
の貧民を充分二年間
位ゐは養ふことが出來るから
した。そして一食を
より主の中の祈にあ
『我等に日用の糧を
と、祈る意味が初めてわかるやうに思つた。
金が這入つたので夜具を買ふた。古蒲團を十枚
そして、伊豆も今迄
枚づゝ與へたが、そ
に寢なければならぬ
ことになつた。

ピアソン牧師夫人を貧民窟に連れて來て、新兒に紹介し
たり、榮一のして居る事業に非常に感心して、五百五十圓のチエキを
アムス博士に託して歸つて行つてしまつた。そして再び支那朝鮮の傳道狀態を視察した後に歸
つてくろからその時に、悠然奮ふことにすると傳言をして朝鮮へ渡つた。榮一はこの五百五十圓を心よ
り貧民を充分二年間位ゐは養ふことが出來るからイスラエルが荒野でマナを拾ふたやうに喜んだ。それはこの五百五十圓で五六人
したり、そして一食を廢して二食しか食はずに居た彼は再び三食に歸ることにした。その時に榮一は心

う？』と聞く。

『何にか着ておいで』と云ふと、

『それじや、着てくるわ』と云つて、素直に歸つたかと思ふと、着を着てやつて來て込む。來合せて居るものが皆笑ふ。出口も、伊藤も、石野も、植木も、そこに坐つて居る女連まで笑ふ。然し、吉川は平気である。十分間位は默つて、榮一の説教を聞き乍ら、居睡をして居る。榮一は反對するわけにも行かないのでもかまはないと云つた理論上、捨て置くと、癪に障めてくる、どんな着物をきて來てて居睡が少し止つて酔

『もう往んでくるわ』と歸つて行く。

然し新見の最も困つたのは、西洋乞食の古賀と漬井とであつた。古賀は神戸熊内の素封家の息子で學の四年の一族と出入するやうになつて、遂にドン底に轉ろげこんだのであつた。酒癖が悪くて、酔拂ふと亂暴をするのである。勞働としては沖仲仕の一群に加はつて居るのだが、中學を退學さゝれた後に、乾兒義理に通學して少し會話が出來る爲めに、西洋人の乞食——と云ふよりは外國の水夫が汽船に乘り遲れて乞食を覺えて神戸大阪を貰ひ廻り、貰つた金は凡て飲んで了ふのである——に

ならぬ。子供を泣かす、床板を焚く、そして『耶蘇の奴吉生めが八釜敷うて寝られんわい』と讃美歌には勿論、彼の怒るのも尤もであるから、彼れば何にも云ひは無いし、また丁寧なのである。吉田はまだ、自分を捨てゝ『今』おいたべらう』の家の前に行つて怒鳴つて居る。どうかすると頻りに『おいたべらう』の家賃は拂はないし、家を壊して焚くものだから、家主の水田のお婆さんが、そのとては一人も無い。殊に家賃は拂はないし、家を壊して焚くものだから、家主の水田のお婆さんが、そのお婆さんを床板で擲りつけると云ふ勢、そこを通り合せた水田の子分等が、それを見て黙つては居ない。富田に頼んで、生命だけ助けてやつてくれと挨拶して、漸くその場が納つたことが有つたが、それから吉田は四五日間は、飯もろくに食はずに寝て居たやうでおつた。然し決してそれで懲りるやうでは無い。まあ、新兒の處へやつてくる。そして、『水田が何だい、乾分が七百人あるツて云つたつて、わしが殺され込んで行つても、よう殺さんじや無いか！』と威張つて居る。

彼は禮拜の最中に、褌もせず眞裸體で『已れも、今日から耶蘇になるんや、……先生、おまい、どんな風をして來てもかまわんとこふたやろ、それでわしはこんな風をして來たのや……いゝだら

枚でブル〳〵震ふて居る。榮一に會ふなり。『Sir, Will you please give me a shirt, which you wear ?』（君の着て居るシャツをくれ！）と、やつて來た。それで、榮一は默つて、肌を脱き自分の着て居るシャツをとつて濱井に。

『どうぞ』と云つて差出した。そうすると、濱井は『Thank you ! 』と云つて、さつさと着て居る。そして更に、英語で宿賃が無いから、宿賃を五十錢貸してくれと云ふ。榮一がその金は無いと云ふと、僞善者だとか、慈善を騙つて居るのは貴樣だ』と、脅喝する。それでも榮一の胸を抱へて揺る、蹴る、榮一は程までに墮落するものか』と思つて涙を流し乍らも默して居ると、今度は、綺麗に分けて居る榮一の頭の毛を摑んで侮辱する。それでも榮一は默つて居ると、內山がさア大變なことが起つたと裏の安さんを呼びに行く。安がドス（懐刀）を持つて飛んでくる。さうすると、濱井は默つて歸つて行くの

親しくなり。乞食の生活が非常にローマンチックだと云ふので、その眞似がしたくなり人だと偽つて。西洋人の家のみ貰つて廻るのである。

新見が、明治四十二年のクリスマスに貧民窟に這入つた時に、貧民窟で最初に英語で會話を話しかけられたのは、この古賀であつた。彼はバイブルも少し讀んだことがあるので。

"I know Bible, You see."

（私はバイブルを知つて居りますよ）

と。喋つて居た。貧民窟へ這入つて四晩目であつたか五晩目であつたか、この古賀が、ぐでんぐでんに醉つて來て、柴一の沓に寢る、小便をする。そして一晩寢込んでしまつたことがあり、内山の云ふ所によると、古賀はお父さんの借家の雨戸を盜み出して來て、それを貧民窟で賣拂つて賭博をすると云ふ猛烈さである。古賀はよく『十錢かせ』とか『十五錢かせ』とか云ふので。風采は實に堂々たるものであつた。顏と云ひ、ばの長の日の。眉の濃い、カイゼル髭をいかめしく生やした身の丈と云へば、五尺五六寸もあらうかと思はれる立派な三十近い青年で有つた。然し顏の皮膚は酒に燒けて赤茶色をして居る。そして着物と云へば寒中袷一

うとう濱井は交番所へ連れて行かれた。

榮一は群衆の散つた後林に感謝し交番所へ濱井を貰ひに行つた。巡査は新見をよく知つて居て、

『いや、よくわかつて居ります。然し此奴は木賃宿を一軒一軒ユスつて廻るものですから、こちらの方にも、その現行を押へやうと待つて居た處ですから』と濱井を解放し無い。濱井はとう〳〵その晩は警察署に留置せられることになつた。

濱井が警察署に送られたと知つて、古賀も、新見の所へ飛んで來た。が、古賀は、

かしたと見えて、

『あいつはもう、三十二度拘留に處せられて居るのですよ、去年は東京で暴れて來たのですと……或る紳士の邸宅へゆすりに行つて。金が貰へ無いので怒り出して大玄關に立てゝある金の衝立を蹴破つたりなどしてそれは亂暴したのださうです。ほんとにあんな惡い奴はわしはまだ見たことが無い』と云ふて居た。

翌朝の新聞には、ちやんと新見榮一が擲られたことが小さく三面に出て居た。

である。

こんな時に限つて、濱井は強い酒を呑んで居るので、日が据つて、唇が紫色に變つて居る。榮一は濱井のやうな場合を云ふのだなと考へた。

然し濱井が榮一を毎日、二度や二度で無かつた。金が取れると知れば毎日、二度でも三度でも來る。そして金を取るのは榮一ばかりでは無いらしい。貧民窟の傍に立つて居るバプチスト傳道會の幼稚園へも毎日保姆をエスリに行くのである。それでとう〳〵幼稚園では巡査に渡して、濱井は二週間の拘留になつたが、出てくると同じことであるといふ。新見も幼稚園もその他木賃宿と云ふ木賃宿は皆、路傍説教を防害する。貧民窟の信者や關西學院の連中をまぜて八人の路傍説教隊が、小野柄橋を渡つた處で説教をして居ると、突然やつて來て、何にも云はず、八つの提灯を凡て擲き壊して、榮一に飛びかゝつて來た。榮一は頬ぺたを三つ四つ擲られた。榮一は默つて立つて居る。そこを通りかゝつた林は、人だかりをわけて輪の中に這入つて來た。榮一が大きな男にやられて居るのを見るや否や早速右足の下駄を手に取り上げて濱井を後ろから擲りつけた。榮一は『林君、ストライかん、そらいかん』と叫んだが、林はきか無い。ポカン〳〵やつて居る。そこへ巡査がやつて來た。巡査かやつて來てから濱井と林は組み打ちを初めた。然し誰れも濱井に同情するものが無いので、と

『にんとやな。なにも』大阪『のやうに暴れ込ま無くても、わけをゆや先生だつて、滿更捨てゝ置けへんわな。五十や百のお金はすぐ出しなはるわな。然しあんなに暴れ込む奴には、お金をやつたらいきまへんで……』とお秀が同情して居る。

それからお秀に自分が十三の時から淫賣して居ることから、淫賣をし出すことから、後悔せにやならぬことは知つて居ても、借金と頼母子講の懸け金とが無けりや、いつでも。淫賣なんかしめるんですけれどもな。病氣しよつしやうがな、借金が出來ると淫賣でもせな、その金が拂へしまへんがな』とゆふ。

いくら借金があるかと訊ねると、百五六十圓あるとゆふ。どうしてそんなに多くの借金が出來たかと訊ねると丈年腸チブスをやつたとゆふ。話をそれ位にして、榮一は改心するやうにゆふて歸つて來たが、四五日後の新聞を見ると、お秀が八木渠と謂ふ惡漢と共に謀して十四歳になる小娘を一人買ひ取つて、警察署へ引致せられたことが出て居た。あの美しい女が、まさかと思ふが、お秀はたや張り淫婦の部類に屬するものだと斷定した。然し榮一には、お秀の場合どうしても彼女が生れ付きの淫婦であるとは考へられ無かつた。そして境遇の罪、貧民窟の犯させる罪を深く考へた。

淫賣婦は半梁一と紀しくなつた。親しくなつたと云ふ範圍を通り越して。榮一を慕ふものも出來た。おひでとバふ二十三の小綺麗な淫賣婦は榮一によく色々な身の上話をした。此女は榮一の筋より一つ先の町の米田の若親分の妻君の兄と云ふものゝ妾のやうになつて居て、毎晩淫賣婦らしくない立派な處女のやうな風體で居て、時たま榮一が其の前を通りかゝると中から呼ぶ。そして頭から——

『新兒さん、わたしを、あなたの嫁さんにしてくれてやおまへんか、私は一晩でも寢でも厭ひません、あなたはにんとに、神樣やな。出來ん世話やな、また若うても感心やな』と云ふ。

路次に立つたまゝ、榮一は、

『そんなに冷やかすものじやありませんよ』とバふと、

『ほんとやがな』とそこに居合はせて居る。淫賣婦三人に賛成を求める。皆口々に榮一を賞める。一人は、榮一が揶揄られても平氣で居るのは豪いと云つて賞める。

それから、おはつの話が出て『大阪』が脹れ込んだ話が出る。

せんよ……たんだも、大臣は今度大臣の北く越るので、それからよ、新生先生と陸に居つても面白く無いものと、イエスさまとは、一生忘れぬと云ふ聞いて、はつとした。そして心愛は子供の心にはよくわかるのだ。何と美しいことだらう――私とイエスは一緒に、半日泣くだけの涙が欲しいと自分に云つてみたが、清ちやんだ、もしやまだ居りはしないかと、再度を覚いて見た。

それで、愛一は清ちやんは美しい顔をして、

それで東京に居つた。

「清ちやんは半日、先生とこの戸口で泣いて居つたッ……お父さんに連れられて行くともう日暮駅まで送つて泣きよつたワ……』と答へてるた。

「いつ頃、此處へ帰られるのが無いから、淋しいから。往らひ、向へ行くともう少し先に』とのみ答へた。

「愛一は清ちやんの魂とその行末を祈へ乍ら狭い路次を、あつちこつちと歩いたっ

淫賣婦の中で、岡山屋と云ふ貸衍に泊り込んで、そこに來る客に淫賣をして居るお春といふ低能の淫賣婦には、新見も弱つてしまつた。之は手紙狂で、榮一の後からついて來て、假名釘流に書いた、戀文のやうなものを自分手に榮一に渡すのである。貧民窟仲間でも、お春を『色情狂!』と呼んだが、そのおかげは、朝からやつて來て榮一の所を離れ無いのである。そして、『先生、うちを此處へ置いてくれるか! もう淫賣やめて改心するさかい』と云ふのである。そんな處を見ると全く癈狂して居るらしくも無い。榮一には少しも猥褻な態度を見せ無い。

夕刻になると榮一の西隣の『大阪』の家へは淫賣婦が張皮の男を入れ變り立ち變り連れ込んで、五分間も立つとすぐ出て來る。

然し、それは大阪が榮一の所へ暴れ込んで長くは續か無かつた。或三月の土曜の夕方、榮一が會社から歸つてくると、内山が、

『先生、豪いもんだな』と感心して居る。

『内山さん、何に?』と出くと、

『西隣の、大阪とこの娘のお清ちやんがね。もう先生に會へ無いからと云ひまして、今日ね、先生、

では大なまけものの手本とも考へられた男が自分の
て居るのを見て、榮一は感服してしまつた。
榮一は内山が柴田の爲めに繰返し、繰返し幣をあ
新見から聞いて、月を閉ぢて祈ることであつた。
内山の信仰イエスの福音を物語つた。そして柴
『柴田もほんたうに可哀相やが、からやつて天のお父
や、此處へ來たばかりに、イエス樣のお救ひを受け
榮一は内山の信仰に滿足したの然し榮一と内山の
十一日に永き眠に就いた。然しそれは勝利の死であ
とであらう。
その日の朝、榮一は、保險會社に出て居た。すると、十時過ぎに内山の使として植木が保險會社へ
やつてきた。そして、
『柴田が、お父さんのところへ歸るので、早く歸つて來て下さい』とだけ云つて歸つてしまつた。

貧民窟へ來てから、凡てのことが彼の豫想外のことに許りであろ。そして、貧民窟を出良すると、ふよりか、貧民窟に吸ひ込まれさうに考へられるのであつた。

柴田の病氣は段々重くなつて、肉と血が下るのであつた。鬼氣が二三日間も離れて匂ふてくる。その惡臭は交代で側に居る妻迄四丁目の大湯まで洗ひに行つた。そのお襁褓を洗ふ

を榮一と內山は每日交代で側に居る妻迄四丁目の大湯まで洗ひに行つた。そのお襁褓を洗ふ

度に榮一は色々と宗教的訓練のことに就いて考へた。

牧師の田澤先生がもう柴田は駄目だと見放したのは、二月の中旬であつたが、柴田はなか〳〵死なない許りか、每日一日と柴田の信仰が益して行つた。それは殆ど驚く可き程であつた。榮一はそれを見て內山も榮一にも亦はずにたゞなかつた。そして日曜學校の生徒が、柴田に傳道がましいことは云ふわけでは無かつた。榮一はその凡てを聞いてやつた。之を見て內山も榮一にへて居るので、益々信仰を强せるだけ强せば、自然に信仰は強いることとは大きな罪だと考へた。

默つて、母の樣な愛を持つて柴田を愛した。柴田も少し病が重いと知つて來たので何にもいはずにたゞ乳をくれとか、牛乳をくれとか無理を云ふ。榮一はその凡てを聞いてやつた。之を見て內山も榮一にそれで內山が心から柴田に同情を示して世話して居ることが眼に見えた。內山は信仰がメキ〳〵と深くなつて來た。榮一は內山を聖人のやうに考へるやうになつた。

つたのだ、理窟も何にも無い、内山と柴田には、死は父の家へ帰ることであるのだ。まい信仰と徹底であらう、あゝごうであつた、柴田が、私に先立つて天の父の懐に帰つて行つたやうに勝利の足踏みを以つて彼は帰つて行つた。

『アーメン、アーメン』と、彼は繰返した。

葬式は、午後の五時と定めたそして、市役所の用をすませて、東出町へは自分が行くことにして、市役所へは代外役に立つの。

木はこんな時には存分の家から出す始めてのお葬式でもあり、貧民窟で、イエスの名によつて死んだ最初の人の葬式でもあるから、純正キリスト教式の寝棺にしやうかとも思ふたが、さうすると五十円ですむまいと、葬礼屋の人足頭である『皆唯安』が云ふので、普通の棺で葬式を出すことにした。

午後五時の出棺であつたが三時頃から柴田は二番の消防組全部を引率してやつて来たので、四時に出すことにした。

葉一は内山と二人で郷重に湯灌をすませて、柴田の屍を棺に納めた。裏の安は人夫から、その他凡ての葬式のことを引受けた。葉一は出棺に臨んで、極く簡単な説教をした。柴田の義理の父を初め

榮一には、その意味が充分わから無かつた。お父さんの處へ歸る？　東出町の義理の父の處へ歸ると云ふのか知ら……あまり我等の手では充分世話が出來ないと云ふので……それであれば實に殘念なことである。然しもしあの身體で歩いて歸ると途中で倒れるにきまつて居る。可哀相に、僕等の親切がわからずに、彼は遂に死を犯してもあの權藏部屋ではとても誰れも顧みてくれるものはあるまい。

こんなに考へ乍ら榮一は、貧民窟へ歸つて見ると、内山が路次に立つて居る。

『先生、柴田はとう〳〵お父さんの處へ歸りました。』

榮一には、まだその意味がわから無かつた。

『エ、お父さんの處へ歸つた、東出町の……』

『いゝえ、天のお父様の處へです……柴田はほんとに安心して歸つて行きました。くれぐれも先生によろしくと申しまして最後に「内山さん、私は之から天のお父さんの處へ歸らして貰ひます」と云ふて眠るやうに歸つて行きました。』

それを聞いて榮一はら〳〵と涙を流した。榮一は深く考へた。『何故自分に内山と柴田だけの信仰が無いのだらうか。どうして居たが、今の今まで天の父の所へ歸るとは考へ無か

萬册の讀書よりも強く信仰と云ふことを心に刻みつけた。

彼はその簡單な說教にそのことをありの儘に述べて居るのである。消防組の連中にとやら誇張わからないが、少しも感動無かつたらしい。彼等は身動きもせずに聽いて居るが、少しも感動無い。然し內山も柿木も泣いて居つた。藤田の三公は口を開けてたゞボンヤリ見て居た。

四十三

柴田が死んで後に、榮一は何だか胸の底に空虛があるやうに考へた。それは自分が愛し得ないことと柴田のあんなに早く死んだのは自分の看護に手落ちが有つたゝめでは無からうかと考へるやうなことであつた。

榮一はまた著しく陰氣になつた。それに貧民窟のことがわかつてくれば、わかつてくる程、その暗黑なことと——貧乏と、殺人と、犯罪と、賭博と、淫賣と、親不孝と、そして、拾鉢が來た人を充分に眼が付いて來てイエスが十字架で死んだのは尤もであると考へるやうになつた。

世の醜を眞面目に見詰めたものは、どうしても死なねばならぬと考へたからである。まだ生に執着して居るのは、要するに世界の惡と徹底的に戰つて見る覺悟が缺乏して居るからだと自

消防手十五、六人は裏口と便所との間に少し、空地のある所に蹲まつた。そして榮一の說教を聞いて居た。說教者は初めから終まで泣いて居た。それは彼の如く信仰を持つて死に得るか否かを疑つたからである。唯物的な見方をする彼の眼は、或は神を呪ひ人を呪うて死んだであらうと思ふと、自分の下等な性質と、素直な柴田の性質を比較して見て、耻かしくなつたのである。

今日まで、彼は永生の問題に就ては全く無關心であつた。それで一層永生に就て冷靜になつたのであつた。彼は刹那の實在感を重じた。刻々の宗教演を讀んでから、一味と云ふことが、彼には何より大切なことであつた。それで彼にはいつ死と云ふ感風が襲ひ來るとも大丈夫であると將へて居た。彼は去年の九月に生死の間に彷徨した經驗を持つて居た。あの時から、彼は少しも死を恐れ無かつた。彼は死に對して平然たるものであつた。

然しそれは、たゞ死を恐れ無いとゞふに止つた。死の光榮を摑ふとゞふ境域に到達するとゞふことは出來なかつた。柴田の如く、死を勝利で迎へるとゞふことは出來なかつた。況は んや、柴田の如く、死の光榮を摑ふとゞふ境域に到達したる黑衣で、高く空中に舞ひ上つて、死の領域を易々と乘り越えて居る。榮一はその壯觀な、死の黑衣を見せられて、全く感服してしまつたのである。之は彼に取つては幾億萬遍の念佛よりも、遙

た道を祈へることもあつた。また或時は正午に摩耶山の向山の頂上から二組戸を我に與へ給へ、貧民窟を我に與へ給へ』と祈ることもあつた。

自然と睡眠と赤ン坊は彼を最もよく慰めた。

然しまたこの淋しい間を通じて何により彼を苦悩にして、日曜の晩の禮拜が益々盛んに行はれることとであつた。近頃は喧嘩安まで禮拜に出てくる。大抵十四五人つものが集る。路傍説教から校の生徒が二三出來たことゝ、出口が中心になつて、日曜學校の生徒は七八十は缺けたことが無いので、家が狹くなつた。

も二三人はいつもある。それに日曜學校へ來ると子供が澤れるので隨分近所に迷惑であらうと新見は心配しました。その中にも榮一は吉田に一番氣兼ねをした。彼は耶蘇教が大嫌ひな上に酒を呑むなと榮一がいふので、それに日曜學校へ來ると子供が澤れるので隨分近所に迷惑であらうと新見は心配しました。その中にも榮一は吉田に一番氣兼ねをした。彼は耶蘇教が大嫌ひな上に酒を呑むなと榮一がいふので、榮一が癪に觸るのである。それで集會の度毎に必ず妨害した。それで大親分の水田のお婆さんも榮一に同情して『吉田の様な、あんな惡漢な奴を改心さす工夫は無いものかな。あいつ、もうちの借家から追出してやりたいのや、あんたん(あなた)ところもほんとに妨害されて困りなはるやろな』と云つてくれる程であつた。それで、榮一は家も狹いし、吉田も八釜敷云ふから向ふの空家へ吉田を移して、隣を白分に貸してくれるなら、非常に都合が善いと頼んでみた。水田のお婆さんはすぐそれに贊成してくれ

らを責めた。

　紫一の淋しい魂は何人も慰めることが出来なかつた。彼は性慾も、野心も、名誉も、智識慾すらも打捨てゝ、全く神に仕へんとして居るのである。彼は性慾の昂進することを感じ無いでもない。然しそれは瞬間的のものであつた。鶴子と接近したり、小秀を思ふて居た時には、自慰することが一つの習慣のやうになつてゐたが、洗礼を受けて猛烈に路傍説教を始めてからは、殆どそれも忘れたやうになり、それが、貧民窟に這入つてから、救主のやうな白鬼に這入つてからは、全然習慣として無くなつてゐた。彼は淫売婦の淫猥な、開け放しな會話を聞いても、決して性慾を感じ無かつた。彼はいまになつては、トーマス、ムーアなどが性慾を制する爲めに、馬の毛で編んだシヤツを着て寝たといふことが寧ろ不思議だと自分にきめた。そしてもしもイエスの様に奇蹟が行へるならば、貧民窟の病人の用てに手を置いて彼等を癒してやらねばならぬと考へられた。

　彼は聖人になるのであるが聖い生活に入ることは必要なことであると自認した。

　彼は淋しかつた。

　うた、櫟林で馬太傳一章から二十八章まで三時間と四十分で全部を讀み通し、祈りつゝ、イエスの蹈ん

べき筈で何等血縁關係の無い榮一に面倒をかける筈では無いのだが、繼母お久と前後して死去したので、西の新宅ではお久を邪魔者扱ひにするのみならず、を持つて居るに就て——或人は二千圓だと云ひ、或人は三千圓だと云ふ——その妹の婿の亮助がお久を妹の變りに貰ひたいと云ふのであつた。處が現戸主とお久の妹の婿と云ふのは義理の中で、お久は嫁入して長男と次男を産んで、夫に死に別れたので名東から。現戸主の義理の父に當る彌助を婿に貰ふたのである。の間には四人の子が出來たので、一家は一層不和になつて居た。そしてお久の中の新宅の一人寡婦に手を出してすぐ子を孕ませて居乍ら、またお久に夫婦になれと云ひ寄つたのである。榮一は東馬詰へ歸つてこの話を聞いて、田舍も貧民窟と同樣に腐敗してゐることを見て仝く驚いてしまつたが、おお久は——

『こゝに、からやつて一人で居れば亮さんにやられるから、どんな所でも善いあなたの所へ連れて行つて下され』と哀願した。それで榮一もお久に同情して、もし貧民窟でも善ければ五月の末か六月の初めになればお引取り申しますと云ひ置いて神戸へ歸つて來た。

ところが、三日留守をして四月八日の朝早く貧民窟へ歸つて見ると、さア大變、富田が、熊の媼のお

て、吉田に向側へ移るやうに命じた。吉田はいやだと云ふかと思ふと『今迄の家賃の滞つて居るのをこらへてくれるならば、向側へ這入る』と答へた。そこで榮一は、吉田の爲めに一ケ月半の家賃を水田に支拂つて隣の家をも合併することにした。家の合併の濟んだのは四月の初旬であつた。榮一は二軒の家の間の庭の所に床を張つめて十七疊敷の大廣間を拵へた。そして貧民窟の調査に來て居た日曜學校の生徒が悦んだのを見て、榮一もまた悦んだ。家が廣くなつて、榮一は、之で充分だと考へた。

四十四

四月の五日に阿波の田舍から手紙が來て繼母が病氣だから、歸つて來てくれと云ふて來た。それで榮一は會社に缺勤届を出して、三日程板野郡の方へ歸つて行つた。繼母はリウマチで足腰さへ自由でない迄に惱んでゐたが、然し繼母のリウマチに同情するとよりも、あの大きな東組屋、西組屋、前納屋、既に二つの庫、大きな二階建の母屋が全部無くなつて、たゞ六疊二間の裏座敷へ繼母が一人で這入つて居るのを見ては、何よりも同情に堪えられず無かつた。繼母の血緣は寧ろ西の新宅とふ田宮の分家にあるので、そこの戸主はお久の妹の子で、眞の甥に當る。で、お久は西の新宅が世話す

内山の云ふ所によると、彼に會つた晩『おしづは八木の宅からも追ひ出されて、橋の下ででも寢やうかと云ふて居たので拾つてやりました。然し別に惡い考へは持つ　居りまへんでした。』と云ふ。

澤田と云ふのは、前科二犯の詐欺取財犯人である。なんでもおとくの亭主である熊公の友人だと云ふ。

榮一は暫くの留守の間に、こんなに、イエス團の空氣を亂されたことを悔いた。しかし之も自分の不明の致す所としてあきらめた。そして早速澤田に出て貰つて、おしづは兎に角内山と別に寢て貰ふことにした。

それで一家族は新しく女を加へてまた六人になつた。

富田は燒腹になつて、その晝うんと酔うて來て、榮一に喧嘩を賣らうと力めた。それで彼はそれを避けて、築港へ祈りに出た。その後で富田はピストルの試驗だと云つて、榮一の室の壁にピストルを亂射した。榮一が歸つて見ると小彈が澤山壁に埋つて居た。

四十五

四月の第三の木曜の午後で有つた。新見は神戸教會の婦人會が貧民窟の爲めに古着浦團や古下駄や、

とくを連れて来て六畳の方で一緒に寝て居る。そこへ、熊が刀を引き抜いて、暴れ込んでくる。それを見ておとくは一、「内山！　おとくはどつちへ、逃げた！」と抜いた裸體に色の褪めた赤ネルの腰巻一つで、今、裏口から逃げ出すと云ふ所であつた。

熊公は、富田にはよう反抗し無いのである。それは富田がピストルを持つて居るからである。

紫一が「つたより以上に早く、駈つて来たので、みな吃驚して居る。最も閉口したのは富田であつた。

一先生すみまへんと床のリから起き上つて頭を掻いて居る。紫一は泊り込んで居るのは富田とおとくと二人かと思ふて居ると、おしづと云ふ女が寝て居る。澤田と云ふ出獄人が寝て居る。

吃驚した。おしづをなぜ入れたかと尋ねると、

「何にも人助けですからな」と軽く、内山が答へて居る。

おしづは十七の小娘である。生れ付き色白ではあるが、貧血で青褪め、幽靈のやうに髪を亂して。

自堕落な女である。地廻り淫賣の周旋屋として評判の悪い八木仙藏の宅に四日前まで半身不隨で寝て居たっ彼女は一二ケ月前までは年増が三十も過ふ土方と木賃宿で一緒に世帶を持つて居たが、病氣になると共に男に捨てられて、八木の宅へ身をまかせたのである。

『あの問題ですか？　叔父が妙なことを云ひますからね、私今の處駄目です、私は積で居るのです。今度思ふことがあつて山の中へ這入る積なのです……』

『山の中へ？　何處の？』

『小學校の先生にでもなつて、何處かの山の中へ這入らうと思つて居るのです。』

『殆ど、二年目でしたね……』

『さうね、あなた、お年を取りましたね』

『さうですか、こんな風をして居るから猶ですはね……』

『私、あなたのことをウイリアムス博士の奥様から、先程、すつかり伺ひました、ほんとに出來ないことですね、私にはとても出來ませんわ……』

『それじや、鶴子さん、私はもう一度伺ひますが、あの問題は、もうあれで打切りですね？』

『あなたが、そう仰ると、私何だか苦しいわ、私は、あなたの様な聖い方の眞似は出來ないと思ひますわ……』

鶴子は、早や眼に涙を浮べて、唇を妙に噛みしめて居る。

『それでは、鶴子さん私はもう之で失禮します』と新見は荷車の梶棒を握ると、

炭俵など色々のものを集めてあるから取りに来てくれとの傳言があつたので、白ら荷車を曳いて山程あつた。それを曳き乍ら彼は坂を下つて北長狹通四丁目に出て来た。そして鐵道に沿ふた街上で、ひよつくり田宮鶴子に出會した。

その日、鶴子は手に洋傘を持ち日和下駄を穿いて、極く質素な日のつんだ縞の瓦斯織の衣物を着て居た。そして白分は一枚しか無い袷袖を尻まくりして、炭俵を山程積んだ荷車を辛うじて曳いて居た。もしこちらから鶴子に聲をかけ無ければ、多分彼女は新見を知らずに行き過ぎたであらう。

『まア、新見さん、何をして居らつしやるの?』

新見は車を鐵道側の柵の方へ、引きよせて數分間立話をした。

『貧民窟へ屑物を貰つて行く處です』と答へた。

その日は曇りで、鐵道側の灰色の空氣は特別に重苦しかつた。そして鶴子も何だか元氣が無さそうに見えた。その日鶴子は廣島から阿波へ歸る處であつた。

『ほんとに、出來ない眞似ね』と鶴子は輕く答へて居る。少しも油が乘らない。

そこで、榮一はすぐ突き込んだ。

『鶴子さん、あの問題どうして下さるの?』

『新見さん、どうか許して下さいね、どうぞね。』と一緒に歩いて来た。

それで榮一は、

『許してくれも何にもありませんよ、凡ては神様の御心のうちにあるのですから、あなたはあなたをも、私をも守つて下さいますよ。』

二人は默つて生田前まで一緒に歩いたが、そこを少し通り越すと、鶴子は、

『私は、何にも今云ふ勇氣がありません、私は穢れたつまらぬものですから……それでは、新見さん、さよなら……』と切れ切れに、

それで榮一は元氣よく、

『さよなら、鶴子さん、永久に……』

『それでは……』と鶴子は涙を含めた喉をあげて、榮一の眼を見た。

眼と眼とが會つた時に、榮一は神秘の極限に包まれて居る様な氣がした。鶴子の秀でゝ寂寥に充ちた美しい頰に何處となく憂ひが漂ふて居た。

二人は三四秒も互に凝視して居たが、鶴子はまた視線を街上の土の上に投げた。そして、默つたま

鶴子は慌たゞしく、

『一寸と待つて下さい、新見さん……』と云つて自分も片手で梶棒を握つた。

して涙を拭いて居る。

『許して下さいね、あなた、どうぞ、許して下さいね』

東海道の上り列車が大きな響をたてゝ通過する。

『……』

『私は、あなたの……私は云ひたいことが澤山あるんですけれども。云へません……それでは左様な

ら……』

榮一も貰ひ泣きを始めた。涙がポツリポツリ御上の埃の中に落ちる。

然し、こんなに若い二人のものが、泣いて居ては人目も惡いと思つたから。

『さよなら、鶴子さん。あなたも神樣に守られて、達者でいらつしやい』と榮一は勇氣を出して。

鶴子は人目もかまはず、ハンカチで顏を蔽ふて泣き咽んでしまつた。

さうすると鶴子は人目もかまはず、ハンカチで顏を蔽ふて泣き咽んでしまつた。

新見は猶も五歩六歩挽き續けて居ると、鶴子は後から早足で追かけて來て、

笑子は丸髷に結ふて居る。若いお嫁さんである、頬色を見るも可哀相な程焦げ居る人はみな之うであるが、内地の人々にみるやうな血の色は無くなつてしまつて、唯だ少し黒ずんで居た方であつた。然し十六七の時、即ち三、四年前は、頬に紅をさした様に血の気が有つて、時には小児なりに美しいとも見えたが、落魄は笑子の健康には合は無いらしい、全く焦げて居る。

それで妹思ひの栄一は、特別に笑が可哀相だと考へられて、涙を抑へ、ろことが出来なかつた。

やがて、栄一は笑を連れて、貧合の貧民窟へ歩つて来た。

道々、栄一は笑の嫁入して行つた先の事情を一々聞いてみた。また姫路へ居たとふが、どうして居たとふが、主人が自分より十三も年上であること、そして何故であること、そしてふ手紙が来たから看護に帰つたこと、

つて来てくれとふ手紙が来たかと尋ねると、『徳島のお母さんが、リウマチで身体が不自由で困つて居るから、帰つて来てくれと云ふ』と云ふ。

「それでは、何頃落着に帰る積か』と尋ねると、『もう帰ら無い』とふ。

四十六

を足を返して西の方へ歩いて行つた。榮一は後を振り向きもしないで、車を進めた。涙は頬を傳ふて流れた。

突然、笑子が臺灣から歸つて來た。

それは、日本晴に美しく晴れ渡つた。四月の十八日の朝であつた。鍛冶屋町の村井から會社の方へ電話がかゝつて、鍛冶屋町へ會ひに來ないかと云ふので行つた。

それで、榮一は安心して言葉が無かつた。

話が多過ぎて却つて言葉が無かつた。

『お父さんも居らつしやらない……』と笑は云ふて默つて泣いて居る。さうして二三分も經つと、又、

『祖父の叔父さんの處へ世話になつて居るさうですない……』と云つて泣く。そして、それに對して榮一は多くを云ふ勇氣は無かつた。また三四分間も默つて泣いた後に。

『東馬詰の、あの大きな家も、毀されてしまつたさうですな……』と云ふ。

笑子はたゞ默つて泣き續けて居る。それで榮一も默つに泣いた。

榮一は無理をして毎金曜日の朝四時頃から、神戸で最も浮浪勞働者の集まる辨天濱へ傳道に出かけた。それは一人でも榮一の熱心に感じてイエスの方へ生活を向けるものがあるかと思ふ傳道心からであつた。

彼はまだ日の出ない初夏の朝を、とぼ〳〵と十字架のついた提灯を持つて貧民窟から十五六町もある辨天濱へ出かけて行くのであつた。

朝毎に彼にはインスピレーションが新であつた。彼は惠の中に生長することを覺えた。南の空には天狼星が、彼の爲めに光つて居るやうに見え、また柄杓さんが彼の爲めに、朝の空に据えられてあるのかと考へる程、朝の空に感謝した。

彼は自らが迷へる魂を尋ねるものとして置かれた悲痛な自覺を感ぜざるを得無かつた。世界の今歩んで居る道は明かに誤つて居るのである。彼はそれを感じる。貧民窟を出る時にそれを感じる。貧民窟へ歸る時にそれを強く胸を抉ぐられたやうに——或時は泣き出したくなることに就て悲しく思ふ。そして彼が朝早くから辨天濱の沖仲仕に傳道に行かねばならぬと云ふ自覺を興へたものは矢張り同じ感じからであつた。社會主義を叫んでも世の中の人はたゞおい〳〵いて耳に入れ

「何故歸ら無いか」と尋ねると。その理由を云は無い。たゞ亭主のお母さんと云ふのが六ケ敷い人だとのみ答へる。

それで、榮一は、それ以上、笑の急に歸つて來た理由を尋ねる勇氣も無かつた。沈默勝ちで二人は貧民窟まで歩いてつたが、久し振りに歸つて來たのであるから、御馳走でもしてやりたいと思つたが、貧民窟ではどうとも出來ない。上つて坐れと云つても座蒲團もなし、兎に角廣い室所にして居る六疊敷の方へ這入つてもらつた。それも奥の三疊には、おまりが寢て居るので二人は極く簡單な食事を一緒にしたからと云ふので、笑子は何丁度十二時であるからと云ふ樣な氣がすると云ふて居る。さう云ふ言葉を聞いて、榮一も猶涙を流しながら、食事の濟んだ後で、笑は內山が洗ふと云ふものを取り上げて、他所行の衣服の上に襷をかけて、せつせと雜仕をしてゐた。榮一もそれを見て、矢張り兄弟と云ふものは善いものだと、心のうちで喜んだ。

を有難がつて聞くものも無いではないが、多くの笑ひたかつた。なぜ、こんなにまでして、イエス自分ながら自分を不憫に思ふた。

芥船が出て行く。沖へ行く解が人夫で一杯になつて出て行く。川崎の方では造船所の槌が暗すい。小さいランチが港の中を勢よく走り廻る。大きな外國船が這入つてくる。美しい白い波をたて、四五百噸級の汽船が港を出て行く。朝日がハツキリと港の凡ての上を照す。陰と陽が判然と區別がついて、幾千となく群つて居る和天滑の側に群つて居る和船の舷側の木目が黄金色に色彩られる。その日の射して来た光景と、榮一が今見て居る仲仕の賭博を打つて居る有様と自分の説いて居る千九百年前の物語の間に何の連絡も無いやうに見えて悲しい。

日が昇るに從つて、海の上が黒ずんで見える、何とはなしに悲しくなつてくる。それに近頃は不景氣である爲めに沖行の人夫が要るより以上に若い者が多く集るので、仕事にあぶれたものが、何にもせずに、ぼんやり防波堤の上に佇んで居るのもあれば、仕方が無いわい、賭博でもしやうかい！』と『一杯を起すものもあり、さうかと思ふと、『棧橋の方へ廻れ、むかふの方では買ふてくれるかも知れん』と云ふて立ち去るものもある。榮一には此失業者の聲が如何にも悲しく聞えた。大抵は木船まで

やうとはしない。それかと云つて彼等を捨てゝ置くわけにも行か無い。それで彼は最善の努力をし
て死ぬか生きるかの瀬戸際の福音を傳道せんとして居るのである。イエスの顔の光る程度まで、イエス
の衣が白くなる程明かるい。ニツケル冶工の小頭のやうな男がやつて来て、
『主が流れも来て居らんな……（榮一を一寸と見て）おや、新兒さん、えらい、御執心だんな』と云ふて
笑ひ乍ら、そこに立つて見て居ると、防波堤の内側には二百三百と糞尿汲取の荷車が多くの男女
榮一に注意を拂ふ暇なく、海にその寫めに尿色に濁つて居る。海はこれ等の勞働者を氣の毒に思ふ。肥汲人夫は非常におとなし
く一言も聲を出さないで蟻のやうに大勢のものが細い『あぶみ』をあつちこつちと行き来して居
る。それが實に午後三時高に感ぜられる。

悪い臭ひがする。榮一はこれ等の勞働者を氣の毒に思ふ。肥汲人夫は非常におとなし
く一言も聲を出さないで蟻のやうに大勢のものが細い『あぶみ』をあつちこつちと行き来して居
る。それが實に午後三時高に感ぜられる。

それに比較して仲仕の方は集つてくるとすぐそこで賭博が始まる。幾千圓かの銀貨が胴取の前に置
かれる。六十人七十人のものがその胴を中心にして『丁半』をやつて居る。

その間に榮一はトラクトを凡ての人に分け大きな聲で讃美歌を唱つて、說教を始めるのである。新
川の貧民窟から出て来た人も幾人かあるから、或人々の間にはよく榮一のことが知れて居るので、話

榮一は戸の上に寢たが、南京虫はまた戸についてしまつた。机の上に寢た。また机について居る。それで彼は發狂する程悲しかつた。然し南京虫に弱つて居るのは、榮一だけでは無かつた。内山も南京虫に噛れた所と疥癬の腫物とが一緒になつて、目も當てられぬやうな皮膚をして居る。三公は最も苦しんだのが笑子であつた。最も南京虫に惱された一人であつた。夜中に泣いて居ることが屢々である——』南京虫が噛み付いて寢られ無い！』と云ふて——。不良少年の松藏と伊豆は平氣であつた。おしづは默つて居た。一つはおしづは身體が不自由であるからあまり小言を云ふと世話をしてくれないと云ふことを心配して居たのである。

榮一は幾日も寢られなかつた。眠むられない程悲しいことは無かつた。それで榮一は神經衰弱のやうに身體の衰へて行くことを感じた。

そこへダンテの研究者として友人間に知られて居る時田文雄と云ふ白金時代の同窓で東京下谷明星教會の牧師をして居る友人が尋ねて來てくれた。今度大阪で結婚するので下つて來たと云ふて居た。榮一も淋しい時でもあるしするから、白金を去つて後の話をいろ〳〵と物語つた。兎に角、結婚式までに三日もあるからその間共に語らうと云ふことになつたが、さて夜寢ることになると時田は煩悶して居

仲仕について行つて傳道するのであるけれども、そんな日に限つて、彼はすぐ貧民窟へ引き返して居る病人と一緒に、敎ケ島の炊いてくれた朝のお粥を啜つて、また疲れた身體を休める暇もなく保險會社へ足を運ぶのであつた。

凡ての傳道は無効では無かつた。沖から榮一を賴つてくるものも二三あつた。それで榮一は一層傳道心を增して、月曜日の晩には必ず中山手八丁目のニツケル商會の沖人夫合宿舍に傳道に行き、金曜日の朝は必ず沖に傳道に行つた。

夏の夕に喧嘩は頗る多くあつた。裏の筋では毎晩のやうに悲鳴が聞えた。父親が妻の連れ子と關係をつけたと云ふて、大喧嘩を始める。酒を飮んで喧嘩する、賭博の爲めに兄弟喧嘩する、その喧嘩に仲裁に這入つてまた喧嘩を大きくする。晝の中は皆のものが仕事に出て居るので靜かであるが、夕刻になると貧民窟ではとても寢られ無かつた。太陽が日中屋根を照らした、ほとぼりが夜になつて低い天井を通じて放射されるのでとても堪ら無いに燈火が消えると、南京虫が、ぞろ〳〵這ひ出てくるのである。で、またランプに火をつけて南京虫を取ると、每晩四十匹五十匹と取るのであつた。それで

有志から寄附を募つた。そして丁度八月十六日に八十人ばかりの子供を連れて明石まで遊びに行つた。その日は榮一に取つては悦びの日であつた。松藏は得意になつて、多くの子供を世話して居た。甚公も、虎市も、花枝も、數さんも皆うれしそうに明石の海岸で轉げ廻つた。一人一つ困つたのは女の兒が裸體のまゝ平氣で水浴することであつた。それを恥しいとも何とも考へないのであるから、榮一も弱つてゐたのであつた。コレラが同じ町内にある木賃宿の阪本屋にあつて、昨日は三十六人ばかりの傳染病もいやであつた。コレラが同じ町内にある木賃宿の阪本屋にあつて、昨日は三十六人ばかりの傳染病もいやであつた。コレラが同じ町内にある木賃宿の阪本屋にあつて、昨日は三十六人ばかりの傳染病もいやであつた。

八月の傳染病もいやであつた。コレラが同じ町内にある木賃宿の阪本屋にあつて、昨日は三十六人ばかりの傳染病もいやであつた。

和田の叔に隔離せられたとか、今日はチブスで、裏の筋の散髪店のおかみさんが東山傳染病院に送られたとか、そんな話を毎日聞いた。然し新見はそれを少しも恐れなかつた。岩沼松藏の盲目の母がコレラで避病院に送られたのを見舞に行つた。二疊敷を廻つてコレラの注意をした。榮一は死線を越えたものには、傳染病はよう傳染しないと云ふ自信を持つて居る。それで毎日午後四時過ぎからと日曜日には勉めてそんな病家を訪問した。

盆が過ぎてすぐ内山白身か一つの葬式を出してやつてくれと榮一に依頼した。それは榮一の居ろす筋の乞食のおつたの亭主が長の患ひで死んだのだが、金が無いからと云ふので行つた。それで榮一はそれを心持ちよく引受けて棺桶から何からすつくり買ふて來て自分も手傳つて棺に收めて野邊送

るのである。

あちらの戸板を、こちらに運んだり。こちらの戸板には南京虫が多いからと云ふて、あちらのものと換へたり。夜中に眞暗の中を戸板をがた〳〵させ乍ら『寢られない、寢られない』と煩悶して居る。

然し時日は三日間惑に角辛抱した。そして三日の晩に彼は眞面目臭つた顏をして、貧民窟からフロックコートを着て、結婚式の式場である。大阪中の島二丁目北教會へ出て行つた。榮一は一寸と用事が有つたので、少し遲れて貧民窟を出たが、式場で。南京虫に噛れて煩悶して居た昨夜の時日が眞晝間こんな中へ籠母お久を迎へる積りだと云ふてやつたがその望みは絶えた。それで、秋の小口に神戸に來て下さいと書いて泣つた。

八月に這入つて、おしづは全快して一人で步けるやうになつた。それで木賃宿へ行くことになつた。それで三十も年上の伸仕と一緒になつた。

八月は榮一に取つては隨分怨しかつた。彼は貧民窟の子供を須磨か明石に連れて行きたいと思つて

へる。

それで榮一は凡てを了解した。貧民窟にもう九ケ月も住んでゐても、なか〳〵貧民窟のことはわから無いと榮一は今更乍ら吃驚した。それで榮一はまたその貰ひ兒のお葬式を出してやつた。

春日野の墓地から歸つてくると、おつたがやつて来て、是非耶蘇に入れてくれと申込んで来た。榮一はその意味が充分わからないので、内山を呼んで聞いてみると、

『先生な、誠に濟みませんがな、おつたを御内の下女代りに置いてやつて下さいませんか、もうあんなに一人ぼつちになりましたので、行く處がありまへんのでな』と云ふ。

榮一はその圖々しいのに吃驚したので、

『うちは女の人を入れることは出來ないよ——おしづの時でも君は無理矢理に引張り込んでしまつたのだから、僕は困つてしまつたが、おつたは眞平ら御免だね。』と答へたがよく聞いて居ると、内山と榮一はその圖々しいのに吃驚したので、

『うちは女の人を入れることは出來ないよ——おしづの時でも君は無理矢理に引張り込んでしまつたのだから、僕は困つてしまつたが、おつたは眞平ら御免だね。』と答へたがよく聞いて居ると、内山と同棲を申出でゝ居るのである。それで同棲を申出でゝ居るのであると云ふことが知れた。それを知つて、鈍い内山に何時そんな機敏なことが出來たかと思ふと、不思議に涕へられるが、よく考へると、榮一が海上保險に出て居る留守の中に一緒になつたとしか考へられ無い。

りをしたのであつた。

おつたはそれから内山を非常に尊敬して毎日やつて来た。内山に云はすと、おつたをしない前は新川での美人であつたと云ふ。然し今は日茶々々のそれは醜い女で、毎日身體の前後に赤ン坊二人をくゝりつけて乞食に出るのが本業であつた。それで見るからに心持の悪い女で、年の頃も四十か五十かのやうに見える位で有つたが、内山は二十四であると云ふて居る。何にしてもお葬式のことからおつたと内山の親密になり加減はたゞ事ではなかつた。その中にまたおつたの赤ン坊が死んだのであるゝないにかゝはらず、榮一にも一つ式から二週間もたつ。それで榮一はよく三ノ宮筋で乞食して居るおつたが二人の赤ン坊を身體の前後に運んで居るを見て居るので『どちらの子だね』と尋ねると、『一人しか無いんです』と内山は辯解して居る。

『それでもいつでも、二人の子を背負ふて居るじやないかね』

『先生、ありや乞食するに都合が善いやうに近處で借りて行くのです』

『それじや、おつたには兒は一人しか無いのかね』

『實云へば、その一人の兒と云ふのも貰ひ兒です——亭主の藥代に困つて貰つた兒です』と内山が答

聞いたのはその後間も無いことであつた。

その捕へられた様子を、富田が内山の處へ遊びに来る度毎に、繰返し繰返し詳しく物語つて歸へるのであつた。水田の大親分の親子が摑つて後、富田の威張り方は一様では無かつた。こゝも飲ま無かつたものが、毫酒をして榮一の處へやつてくる。久しく来無かつた林もやつてくる。そして訴へたりしたりしてゐるのであつた。留守をして居る人々の物語を聞いて吃驚して、會社から榮一の歸つてくるのを待つて一々その話を繰返した。

話によると、北本町六丁目の大通で木賃宿と高利貸をして居る通名和歌山事佐藤清熊と。富田とが水田の後見役に就て暗躍して居るらしいのである。そして近い中に　和歌山の兒分と水田の兒分とが一大衝突をするらしく見えた。和歌山は十數年前に水田の親分をたよつて来て今の身分になつたものであると云ふ。それで、もしも和歌山が少しでも恩義を思ふ人間であれば差し入れの一つでもしこもよいのであるが、自分は今堅氣になつて居ると云ふ口實で、水田家の此度の不幸に就ては少しも顧みも無いからけしからぬと云ふのが富田の云ひ分である。

果して八月三十一日の晩であつた。和歌山の經營して居る、和歌山屋と云ふ木賃宿にピストルの音

それで榮一は仕方が無いから、內山を出して了ふは內山は手引きのやうなもので、この後內山のやうな男が居ら無くなると、どんなにゆすられるかも知れぬと思ふと、少し位ねのことは許してやりたくなつたのと、家を一軒持たすとなると金の四五十圓も呉れと云ふであらうが、榮一にはその餘分の金が無いし、一先づおしづの這入つて居た家を二人の爲めに貸してやることにした。それで一家の人々は徐々增加して、七人となつた。そして內山とつたが臺所に使つて居る隣の室に、臺所には笑子が寢ることになり、花枝さんの家を一軒置いて隣の二軒の家を打貫いたには榮一、松藏、伊豆、三公の四人が寢ることになつた。

賭博は毎日北本町六丁目の貧民窟の眞中で行はれた。それには毎日幾十人かが群がつて居た。八月の末の或日のことであつた。水田の家の周圍に私服巡査が二三十名ウロ〳〵して居るよと見ると、水田の若主人を初め七人の博徒が現行犯を押へられて警察署へ送られた。それから貧民窟內部の賭博は幾日かは全く中止されて居たが、もの〳〵四日も經つかと思ふと早やそろ〳〵と賭博がまた見張をつけて置內の小さい空地で行はれた。然し大親分が西の宮の賭博場で之も現行犯で捕へられたと

き殺してやるんであつたんやけんど』と繰返して居た。

家の會計は笑子が來たけれどもまだ內山がして居た。然し何だか變なのは米價にも下があるにかゝはらず、月末の支拂を見るといつでも、一斗の價格がいつ見ても同一になつて居ることとであつた。それがこの四月以來全く同一であるので、榮一は初めて訊ねて見た。そうすると、內山は妙な答をして居る。

『それは……米屋がちやんと勘定して、米が安くなつた時には美い米を、高くなつた時には惡い米をよこして、先方で甘いこと鹽梅して居つてくれるんです』と云ふのであつた。

それで榮一自身米屋に行つて聞いて見ると、米屋も內山と同じことを云ふて居た。然し榮一はその答を、は、その口の米一升の代價より通帳の米の代價の方が、少し高い事であつた。それで重ねてその理由を尋ねると、それは通帳には一ケ月分の金利を加へて居りますと答へて居た。然し榮一はその答を聞いて非常に不愉快であつた。之が八月の末日であつたが　恰度植木がやつて來て、榮一に內山とつたの關係のことから、米屋でコンミツ、ヨンを取つて居ることから、すつくり榮一に打開けてしま

がするよとみえると、水田の兒分七八人が刀を引き抜いて雪れ込んだ。

『そら、喧嘩だ！』と谷民窟から幾百の人間が一瞬間に集つて來た。水田の一味徒黨を指揮して居る。榮一は報告を聞いて驅け附けたが、富田は全くぐでんぐでんに醉拂つて居た。そして手にはピストルを持つて、

『和歌山が、何だいな！　少しの端た金を誤め上つたと思つて生意氣なことを云ふな』と繰返して居る。外のものは靜かにせ、靜かにせ』となだめて居る。少し靜まつた樣であるから、榮一も富田を呼び出し、

『まア靜かにせ、靜かにせ』となだめて居る。外のものは全く前後不覺である程醉ふて居る。それで來合せた內山と二人で富山の宅まで送つて歸る道々、加何にも得意であるやうに。

『和歌山一人がどんなに威張つた處で、それがなんぞいな。あいつが今夜家に居れば擲

その中に刑らしい男が這入つて來て、

『んぬな』

と云はず、襖と云はず、障子と云はず、鉈刀で、滅太切りに切り散らして居る。群

やつた。その

『なんぞいな

『いや、そんなことありませんわ』とのみ雲つた。聲で答へたが、外に何とも答へ無かつた。

上、詰ねることは榮一としては堪えられ無かつた。榮一は全く妹に同情してしまつた。

がその罪人自身であるかの様に脅えた。そして一人思ひ込んで、臺所の庭に腰をかけて泣いた。笑子

も泣いた。

榮一は煩悶して居る笑子に何かの變動が有つてはならぬと、色々心配して居た。

人は繁々と笑子に會ひに來た。そして笑子は遂に、榮一に向つて、

『私は惡い人間ですから、兄様に御厄介になることが出來ませぬから　何處かへ行きます』と云ひ出した。

この言葉には父に別れるより悲しかつた。

そして九月も、もう三日で終ると云ふ秋風が吹き初めた日に、笑子は榮一の引止めるのも聞かずに家を出て行つてしまつた。何處へ行くとも、例の男と一緒になるとも云はず、たゞ、

『色々と御心配をかけましてすみません、もう兄様に會はせる顏がありませんから——何處かへ行きます』と云ふだけで行つた。

それで、榮一はそれを引留めることが、出來なかつた。もしも自殺でもすると云ふのであれば心配

それで榮一も合點して、内山と別れることにした。

それで笑子が凡ての會計をやることになつた。笑子は頼んで榮一の爲めに十圓の金を與へて――コンミツシヨンに貰ひたいと云ふのは何の爲めであるかを知つてゐたから――別に家を持たすことにした。

つた或晩のこと、それを訊ねた。し笑子は何にも答へ無かつたが、突然臺灣の僧侶だと云ふ人が尋ねて來た。そして笑子と慣れなれしく話をもて居た。それが不審でたまらなかつた。それで榮一はその人が何人であるかを訊ねた。

その不思議な僧侶は、それから二三日にあげずやつて來た。その度毎に笑子は出て行つた。榮一はそれが不思議でたまら無かつた。笑子の子供らしい所のあるに比較して、その僧侶は三十五六の老獪な顏をしたり乍で一癖ありそうな人であつた。それで榮一は可哀相だと思つたが、その人物と笑子との關係に就て問ひ詰めた。すると、笑子は遂に白狀した。そして、彼女と僧侶との間に關係があることと、笑子の夫と云ふのは侮僂である爲めに、子供は出來ないのだが、あの人と一緒になつた爲めに子を孕んだのだが、その子をこの春流産したのだと云ふて居る。

『墮胎させたの？』と訊ねると、

妻君のお政をつかまへて稲荷降ろしの『おじゆう』の最中だから歸つて後におしんを訪問して居た。おしんの家は榮一の裏筋の路次に有つて暗嘩安の向側になつて居る。

まだ秋の日は貧民窟の路次に日足を留めて、軒先には夕方の黄ろい光が殘つて居た。お政は茶の中に生れた等は皆路次に出て騒いで居る。

に包んで持つて居るのである。

新兒が、おいくんの家に腰を下ろして居るのを見て挨拶をしたが、竈の下を見て居たおしんが無理に呼びとめて、四方山の話から宗教の話になり、同じ筋の散髪屋の妻君で、稲荷降ろしをして居るおしんが知つて居るだけのことを榮一に聞かそうと思つて、問接にお政に話して居るのである。

お政は入口の柱に倚りかゝつたまゝ、向側の井戸端を見詰めながら……

『そうじや、そうな……餘程風變りの人じやわいな……』と相槌を打つ。

おしんは竈の下から燠を『十能』に入れて、表の筵のマツテの屑と、煙草の吸殻で一杯になつて居る

もするのであるが、たゞ行くと云ふのである爲めに笑子は貧民窟を立つたのは朝飯の後で、色々詳しいことも聞きたいと思つて居たが、ふのであつた。仁玄袋をさげて笑子は貧民窟の路次をくものをとも思ふたが、既に大きくなつ　魂は繋いでおくわけには行かなかつた。

「笑子よ、達者こ居てくれよ。神様に守られてね』

一はたゞ泣いた。

『お前知とつるかい、あの人は幽靈を見た人やぞえ

ら、お政さんを見て云ふたっ

おしんは市役所の衛生人夫の奥山廉三の妻で、もう年も四十二三とも見える。瘡瘡でめかんち（片月）の上に髪の毛の濃い醜い女であるが。このあたりの切れもので、毎日身體の具合の善い時には瘡瘡の上にお白ろいを塗つて。頭に飴を入れた盥のようなものを載せ、手には小太鼓を持つて、子供の居りそうな四辻に立つて『花はよい、よい……』の歌をうたつて飴を賣る當年屋であるが、以前は亭主が火葬場の隠亡をして居たと云ふだけあつて何となしにきつい所がある。よく喋る女で、喧嘩安の

の女の子と云ふのは、此處へよく來る女の子が居るだらうな……今何處かの仲居か、酌婦かをして居ると云ふ、あれがあの妹娘やがな……』

おしんが上腕の處に刺青をして居るのが、榮一の眼に寫る。お政は話に無宙になつて居る……

お政『そうじや、そうじや……あの脊の高い丸顏の一寸と小綺麗な？』

おしん『あれが初めて嫁入した時の子じやそうな。姉はないでも、横濱で、汝郎か、何かして居るんやさうな……その家も旦那が外に女を拵へ……とか、なんとかしたとかで出されるか、どうかして、後妻になつて、あの幽靈を見た家に緣づいたんじやないかいな――』

榮一は話が面白いのでついつり込まれて、

『あの幽靈を見たと云ふのは』

『おしんさん、あの稻荷降しのおばさんはほんとに幽靈を見たのですか？』と尋ねた。

外から十二三になる子守をして居る男の兒が、泣く兒を連れて乳を飲ましに歸つて來た。おしんさんは、その乳呑兒を取り上げて、乳を呑ませ乍ら大きな聲で興がつて話をつゞける、飯が炊けたか釜から湯氣が吹く音が聞こえる。それでもおしんさんは知らぬ顏をして語りつゞける。

『なんでも、先妻が死ぬ時に、旦那を呼んで、わたしが死ぬとすぐ、嫁さんを貰らはぬやうにと遺言

『まア然しあんな若い氣でよく居れるわんやな。あれで繁藏さんとは十一も十二も年が上じやな』

榮一はおじゆうさんの事をよく知つて居る。『毎晩』南無妙法蓮華經』の太鼓を八釜敷叩いて居るのである。

おしんは呼び寄せた長煙管を取上げて吸ひ出したっお政もそろ〳〵火鉢の脇までやつて来て、榮一の側に尻を下ろす。

『ほんとの處、あの人は少し氣が若過ぎるわ……あれで……あの毎晩夫婦喧嘩して居られんな……繁さんを何處へ行くんでも連れて行かなければ氣がすまないと見える態と云へば見ん、毎晩の喧嘩の氣の話やないか！』

おしんは、煙を鼻から吹き出し乍ら、

『ウム……あの氣で、今迄に、五人の男を替へたと云ふから豪らいやないか！』

榮一は壁に貼つた赤色と黄色の燐寸のレッテルを見詰め乍ら、二人の物語を默つて聞いて居た。

『オ　そうかい？　あの人は五人も替へたのかい？　お前知らんのかい、お前もあんなに、おじゆうさんと懇意にして居つて？　あの人はお前十六の時に大阪の南で或旦那の子を産んでな……一度嫁入して、二人の女の子を産んで……それから、

おしん』そして、お寺さんのお妾さんも長うは續かんで、三年半前に、今の散髪屋さんと一緒になつたんやないか！』

榮一はこの二人の面白い會話にサマリアの女の話を聞くやうな氣がしたが、貧民窟ではこんな話を聞くことは決して珍しくは無かつた。然し榮一がこの話に興味を持つたのは、外にもう一つ理由があつた。それはおじゆうの今の夫の散髪屋の元木繁藏が――二人の仲に出來て居る子供の入籍のことに就て法律上の手續を訊ねに來た青年であるが痘瘡でずつと年より更けて見えるし――彼はまだ二十二、三大好きであると云ふて、求道の心を起して居るのだが、妻がどうも稻荷さんとか序に、彼が耶蘇教は不動さんとかの凝りで、その他に吾妻通六丁目のあたりから來る、五六人の女兄弟仲間と共に右腕の耳に殘つて居たからでもあつた。おしんとおじゆうとは新川へ落ちて來てから血を啜り合つて女兄弟の緣を結んで居るものであつた。

同じ所に、同じ樣な形の刺靑をして、折々容つて酒を呑んだり、賭博をしたりして居る。

おしんの右腕に注意した『力』と云ふ刺靑の文字はそれである。

榮一はそれから、おしんに近所の『夜逃げ』の話を聞かされた。おしんは此邊の女俠客で通つて居るので一寸と威張つて居るし、近處の家庭の事情をよく知つて居る。お政が――

をして死んだんだそうな、それに旦那が云ふことを聞かずにおじいうさんを入れたんじやそうな。そうすると婚禮がすんで七日目から、毎晩、毎晩夢に先妻の幽靈が出たのじやそうな――』

あまり湯氣の吹きやうが悪しいので、子供を抱いたまゝ、竈の前へ行つて、火を引きながら獨話をつゞける……

『なんでもよ、それから、あの人は、氣狂ひのやうになつて、晝の日中『ア、、幽靈、幽靈！』と大聲をあげて徇を驅け廻つたのじやそうな。それで家内の人も、それは唯事では無いと、先妻の成佛する『南無阿彌陀佛』を一萬遍お唱へすることにして、親類や近處のものが皆寄つて來て、佛壇の前で御通夜をして、恰度、眞夜中頃、おゝゆうさんが忽に『ウン』と云つたなり氣絶してふたのじやて、それから大騷ぎになつて、醫者を呼ぶやらして、介抱するやうになつて、晝の日中『ア、、幽靈、幽靈！』と大聲をあげて徇を驅け廻つたのじやそうな。それで家内の人も、それは唯事では無いと、先妻の成佛する『南無阿彌陀佛』を一萬遍お唱へすることにして、親類や近處のものが皆寄つて來て、佛壇の前で御通夜をして、恰度、眞夜中頃、おゝゆうさんが忽に『ウン』と云つたなり氣絶してふたのじやて、それから大騷ぎになつて、醫者を呼ぶやらして、介抱するやうになつて聞いて見ると、やう〳〵口がきけるやうになつて來て、自分を蹴飛ばして何處かへ行つて了ふた――』と云ふたそうな。然しそんなことがあつたのじやとさ』

お政『フム、そしてお寺さんのお妾になつたのは、それからかい？』

繁ちやんのおかみさんになつたのは、すぐ歸つて來て――それ、おじゆうさんがよく云ふ、

そして媒介者であるおしんもそれを感謝する意味で『妾も耶蘇に入れてもらひまつさ、私には何にもわからんけんど、善い教へじや、第一、人に親切じやと云つて教會へ出てくることになつた。

おしんは散髪屋の元木繁藏をも引張つて來た。それで小さい教會は忽に賑かになつて來た、散髪屋は自由に平假名が讀めた、それで新約聖書を一生懸命に讀んで感心して居る。

そして榮一に感心したことを一々話して居る——

『第一、感心するのは、マリアが亭主が無いのに、天の神さんのお力で、子を孕んだと云ふことじやい、あらたかな神さんにはそんなことはきつとある。……あゝ、うちのじゆう公も、そんなことを吐しよつた、精神を籠めよつたら、男なしに兒は産めるつて、あいつの三番目の息子は——四つの時に死んだそうですがな——おじゆうの一番信心に凝つた時に産んだ兒やそうですが、あれに云はすと、男と一緒にならないのに生れたと云つて居ります。私はなんだか嘘のやうに思つて居りましたが、マタイ傳を見ると全く男なしにでも子は出來るもんだすな。おじゆうの云ふ處を聞くとマリアさんの場合も何だかほんとだと思はれまんな。

それから、感心なのは、エスさんがお手をおさわりになると、死人が生き返つたり病人が治つたりすることだす……私の妻もよく御祈禱をあげて、何人も病人を治しました……そらある、そんなこと

『うちもう往んで、夕飯の仕度をしやう——長いことこんな處で話しよつた』と、立ち去つた後にも、長々と近處の家庭の歴史を話してくれた。そして、廻つて。

『あんたんとこのやうに、行り傍るやうな金があるなら、ちつと恵んでおくなはれ』と云ふ結論に到ろまで、貧民窟の物語の材料になるやうな話を澤山聞いた。

これから後、おしんの所へ聞きに行つた。

四十八

親しくなると共におしんは勝りであるだけ色々と役に立つことが多くあつた。その綾りおしんは無理も云つて来ても、連れて歸るのは、おしんの役になつた。またおしんの知つて居る年寄夫婦を世話してやつてくれとも申込んだ。そしてもあまり面白くないから、その老人が持つて居た『羅宇』——市の衛生人夫の仕事を全部買ひたいから金を四五圓貸してくれとも申込んだ。新見はその凡ての願を聞いてやつた。

それで、おしんの連れて来た、岸本のおぢいさん夫婦は、イエス團にいつでも居ることになつた。

その眼は閉ぢ両眼の間に立皺をよせ、色は青ざめ穢れた袷に細帯のまゝで紺絣の前垂をして居るが、そのおじゆうの姿と変態心理状態が、栄一にはたゞごとでは無いと映つた。

患者は後から後から進んで出てお狐さんになでゝもらつた。五六人も撫でゝもらつたかと思ふと、また患者と狐との對話が始まつた。高利貸のおたねさんの娘が尋ねて居る。

『わたしの子供はもう、極楽へ届きましたかなし――』

狐『いや、まだ極楽にはつかぬ、六道の辻でうろ〳〵して居る』

それを聞いておたねさんの娘は、そこに蹲をあげて泣き倒れた。

『泣きなはんな、もう仕方が無いことやさかい、な』『お八重はん（おたねの娘の名）――』とおしんが慰めて居る。

乞食のお浅は、亭主の病態を尋ねて居る。

『お狐さん、うちンところの病人は治りまつしやろかな』――お浅の亭主は、矢張乞食で腹膜炎で臥て居る。

狐『いや、本復の見込は無い』

『そうだつしやろかな』――とお浅は溜息をつく。

お燈明が静かに揺いで居る。

せられて、吹き出しそうになつたが、戸の陰に立つて見て居た。夕日はもう隠れて、路次も物静かであるが、六尺に三尺の小さい煤けた押込を棚にして、そこに太い蠟燭でお燈明を二つ灯してあるのがかなり荘厳に見える。

紫一が立つて居るので、路次を通るものが五六人立ち止つた、そして皆熱心に見て居る。

おじゆうが、能勢の狐だと白状すると、隣の盲目の男按摩とおしんと繁蔵の口から期せずして――

『今日は、能勢のお狐さんが来やはつたのやな……』

『今日はよく、あたるでえ――』と乞食のお浅さんが云ふた。

盲目の按摩さんが尋ねた。

『能勢のお狐さん、一寸とお尋ね致します。あなたは、何歳におなりになりますか?』

紫一は思問だと思ふたが、おじゆうの狐は眞面目である。

『わしか? わしは九百七十五歳じや』

男按摩『そうで御座りますか? 一寸とお尋ね申しますが、わたくしはリウマチで困つて居ります。お治し下さいましやろか?』

『狐よし、来い、わしがさはればすぐ治る』そう云ふて、男按摩の肩から腰の方へなで下ろしてゐる。

『おじゆうにんさん、あんなにしとつたら、しんどいやろ？』と實曝露のやうな質問をやる。

『なに、なんにも知らんでえ』

『そんなもんやろかな』とお淺が感心して居る。

子供等は『狐が往んだ、向ふへ行かう、向ふへ行かう』と騒ぎ乍ら、路次を西へ歩んで行つた。そしておしんの家の西に飛んで行く。

榮一も靜かに考へ込み乍ら、路次を西へ歩んで行つた。そしておしんの家の西に飛んで行く。

麗な車を路次に引き入れて居るのに出會つた。

四十九

お稻荷さんは傳染して行く。今迄拍子木の音もお題目の聲も聞か無かつた。榮一の臺所の裏に當る高利貸のおたねさんの家にも、太鼓を叩くやうになる。二三日前に初めて　お稻荷さんが降るやうになつたと云ふので、おたねさんが心配して居る。

十七疊敷く榮一の廣い方の家の向側の花莚の亭主が心配して居る。その爲めに一度は美しい稻荷車曳のおかみさんにもお稻荷さんのお堂も買ふて來て　入口の正面に祭り二三日の小さいお提灯も吊り下げて居たが、あまり毎朝お下りがあつて、赤ン坊の世話もせずに妙なこと

それで一先づ質問も済んだやうである。みなのものは默つて居る。その沈默が二三分續くと、おんが、

『お狐さん、御苦勞で御座りました』と云ふ、

『御苦勞で御座りました』と云ふ、

そうすると、おじゆうの狐は、ぶる〳〵と身ぶるひをして、そこに屈まつて前に打倒れる。そうして五六分默つて居る。その中に路次の向ふで騷いで居た子供の群が兒物にやつて來た。

『やい、熊じや、狐じや、狐じやの。』と大勢のものが騷ぐ。その中には、甚公も、虎市も、熊藏も、喧嘩安の子供が三人まで居る。

『ヤア、狐じやの！　八釜敷！』靜かにしとらんかいと、おしんが奥から叫ぶ。おじゆうの狐は默つて居る。頃て、おじゆうは坐り直つて、ほつれ髮を撫で乍ら……

『皆樣、よくお參詣になりました』と云ふ。それに答へて一同は。

『御苦勞樣で御座りました』と云ふ。

おしんだけは子供を抱き上げ乍ら、

顔にほくろの澤山ある三十近い女であつた。

『耶蘇にほんとによろしうおますな、ケンケンさんが來んだけよろしうおますな』と言ふ主は榮一に云ふて居る。

お稲荷さんの流行は日本町の貧民窟だけでは無かつた。五丁目通にも、日暮通にも太鼓がなつて、稲荷降しが妙なことをやつて居る。

新聞を見ると神戸警察署も『稲荷降し』の檢擧をして、五十數名のものを科料に處したと書いて居る。

筒井部落へ行くと、大通の長屋の前に大きなお稲荷さんの赤鳥居が立つて居た。榮一はお稲荷さんの信仰復興に少なからず驚いて居た。

五十

貧民窟に居ても榮一は存外呑氣であるから、惰氣ものに會つては、なまけものの研究をし、下駄屋の門先に立てば古下駄の折目を研究して居た。また二疊敷長屋に廻つて行けばデイオゲネスの大偏

榮一が一年足らず貧民窟に居る中に、すつかり貧民窟の人々の理解を得たので、彼はその手助に男

を口走ると云ふので、亭主は怒つて、買ふて來てまだ十日にもならぬ、お稲荷さんのお堂を擲き壊して路次で焼き捨てゝ居る。

榮一はそれまで、岡へのおかみさんにお稲荷さんが降りると云ふことを知ら無かつた。あまり静かに家の内だけでして居るし、太皷も拍子木も叩か無いから解らなかつたのである。然し事情を聞いて見ると誠に同情に値するやうなことを亭主は云ふて大騒動を致しましたんで、すぐお稲荷さんのお堂を『四五年前にも、お稲荷さんが降りるとか云ふて家内は非道いヒステリーだつさかいな……それでこの焼捨てゝ引越しましたんです……うちんとこのお稲荷さんも下りまへんのでしたがな……この頃、近處であんなに太皷を叩きますやろな、それでついに狐とか狸とかが遣つて來て居るのを見たと云ふて、その日からあんなに妙なことをするんだつせ——うちんとこの狐は筒井の狐だすそうな……狐につかれると、もうお稲荷さんのお堂はもう燃えてしまつた。そこへ、おかみさんが平氣な顏をしてそこへ、おかみさんが平氣な顏をしてこら。もうお堂は焼いて了ふたぞ、狐を早やう往なさないかんぞ！』

おかみさんは默つて笑ふて居る。このおかみさんは貧民窟に珍らしい溫順な妻君で、身の丈の高い

貧民窟は淋しいと感じる眼は少しも無かつた。後から後から問題が起つて来て、凡てを忘れねばならぬ程であつた。況んや、周囲の事情があまり悲慘である爲めに、考へ込んだだけの餘裕を與へられないのである。然し笑ふ機會があれば必ず皆と一緒になつて笑つた。貧民は想しくて泣かなくてはやり切れない時にも勉めて笑ふことがある。それで一番よく笑ふのは乞食のお爺である。其のブリキやの姿をして居るが（乞食しながら）よく肥つて、少しも乞食臭いところが無くて、よく笑ふ。

『ナ、先生、泣いたつて、仕方が無いわな。先生もいつもニコ〳〵しとつてやが、笑つて送るのも一生なら、泣いて送るのも一生であつたら、笑つて送らな損やな！』笑ふ門には福來るやな、ナ、先生』と笑ふのである、

健康な者には貧民窟に住んで居ても充分笑ふことが出來る。そして貧民窟には物質を離れ纏縈を離れて赤裸々の最も人間的な、最も肉體的な笑が出來るのである。榮一は貧民がそんなものに限つて親しみ易い。中流階級は泥面もの、が多いに反して、貧民窟には存外よく笑ふものであるといふことを見て驚いた。

女へ口して八十人ばかりのなまけものゝ、妻を作つた。二、櫻井から始つて、その下には怠惰の程度を記入し、家庭の種類、怠惰の原因、年齢、健康等を記きつらねて居た。

そのなまけものゝ研究の手帳の奥にはまた『高下駄』と題してこんなことを書いて居る。

『――男の下駄は八寸であるが、女の下駄は七寸五分。丸太でくる時は七寸。高下駄は七寸。丸太をほるっそれに五分の厚さが横から見える。幅は廣い程淺いが、山三寸二分から三寸八分である。高下駄の高さは女で二寸七八分から四寸二分半である。日本人はこの二分のはまの上に立つて居る。日和下駄は高さ一寸二分しても地上より三寸しか超越出來ないのだ――』

また榮一は二疊敷生活の諸美者である。獨身ものであれば人間は二疊以上の家はいらぬと考へて居る。それで下の二疊敷の猫のお婆さんの處へ遊びに行くのが何より好きであつた。それで五疊敷三間に七人も八人も寢なくてはならなくても決して不服は無かつた。貧民生活は非常に面白かつた。たゞ夕方元町から歸つて貧民窟へ這入ると、いつも一寸と吐き氣が起るのが、苦しいと思つただけであつた。然し榮一は貧民生活を一つの道樂として居るので、之も道樂の一種ぞと考へると別にいやな氣も

居るのである。もとは大和郡山の藩士の妻君であつたとかいふ、立派な顔立をして居る。千九になる勝之助といふ弟もこの土田と二番娘の關係を大に反對するのである。それと二番娘とが衝突し續けるのである。

榮一は花枝さんが脊負ふて居る「秀」を見る時に、地獄に出會ふた樣な心持になるのである。それが一晩や二晩であれば善いが、此子は晝は睡つて、夜中に滑稽を奏して一晩中騷ぐ癖がある。それが一ケ月二ケ月と續くのであるから、これで一家族のものは『寢られぬ、寢られぬ』とこぼして居る。

『そんな子を早く殺して了つた方が善いのに、姉さえ……殺してやろか、こら、「秀」！』と勝之助が子供を嚇るこゑが眞夜中に聞くことは珍らしくなかつた。

さうすると姉さんも。

『ほんとにな、勝つあん、うちもう何度殺して了ひたいか知れへんのやけんどなア、これも前世の因業やさかい、拗忍してておくれ』と答へて居るのであつた。

然しこの姉さんといふ人が誠に感心な人で、結婚して十年に近い年月の間、夫は八九年も肺病で寢て居る中を、自分の細い腕でそれを介抱して、その上に不具な子供を今日まで養ふて來て居るのである。いつも默つて居る人で、榮一はその人を見る度毎に、自然何ものかに威壓せられるやうに壯嚴な

榮一は多くの友達を貧民窟に作つたが、どうしても近づくことの出來なかつたのは家に挟まれて居る花枝さんの家族であつた。

この家族が自分丈悲慘な家庭であるとふことは、あまり之まで知らなかつたが、近頃よく兄弟喧嘩が絶えないにも悪魔が住んで居るのだと知つた。

花枝さんには兄さんが二人と姉さんが二人ある。一番上は俳優になつて大阪に行つて居る。上の姉さんは今年十九歳で、マツチ會社に通ふて居る。その次の兄さんは令嬢の家に縁付て居るのだが、その人は肺病で、木賃宿の息子に縁付て居るのだが、その人は肺病で、木賃宿の息子に縁付て居るのだが、その人は肺病で、木賃宿の息子に縁付て居るのだが、その人は肺病で、木賃宿の息子に縁付て居るのだが、その人は肺病で、木賃宿の息子に縁付て居るのだが、その人は肺病で、木賃宿の息子に縁付て居るのだが、その人は肺病で、木賃宿の息子に縁付て居るのだが、その人は肺病で、木賃宿の息子に縁付て居る。それで自分はマツチ會社に通ふて居る。その上の姉さんは三十一歳で、マツチ會社に通ふて居る。その次の兄さんは令年十九

それから病人の容態は日に日に重くなる一方で、醫者も『駄目だ』と宣告した。それを別に何とも感じて居らぬらしくみえた。少なくも勝之助は、

『助かります。死んでくれるんだつたら。早う死んでくれたらいゝんだつさ、病人の爲めに、親子六人がずつかり飢死にしなけりやなりませんさかいな！』と云ふて居た。

これは勝之助ばかりと思へば、母親も、花枝さんも、みなそう云ふて居る。それはろくにして居るかと云へば、必しもそうでは無い。それは手厚くして居るのであるけれども、生活難に苦しんで居る六人家族の口から、ついそんな自棄な言辭が出るのである。

榮一はつとその一家族を慰めた。三圓五圓と母親に金を渡して病人を大事に世話するやうにと云ふて慰めた。それを病人が知つて涙を流して居た。然し病人は榮一には一言も言葉を出さ無かつた。

肺病と云ふから榮一は、それを特別に同情したのであるが、憐の病人が死ぬまでには餘り長い患ひでは無かつた。七日目頃から肉が腸から下つたが、十四日目の朝四時頃永遠に此世を去つた。勿論葬式料が無いので、榮一はまた八圓だけ補助した。

然し子供はまだ比較的壽命が長かつた。毎日花枝さんは死體のやうになつて居る倒傻の病身な子供

紙に打たれるのであつた。

然しその一家族はどう云ふわけか、耶蘇教に無頓着であつた。花枝さんが毎日のやうにやつて来ても、お母さんに当る人は一度だつて、榮一のその家に這入り込むで、その家の事情を聞くこともあつた。

ところが十月の初めにとうとう上娘のその肺病の夫が亡くなつた。そしてその葬式が済んで間も無く、上娘も、その不具な子供も一緒に床に就いて了つた。醫者に診断させると二人共肺結核であるといふことになつたのである。それと同時に、木賃宿からは離縁の話があり、肺病の親子は花枝さんの家で寝る人が床に就て五日間経つてからであつた。その使に来たのは勝之助であつた。

勝之助は何か女人にでも云ふやうな調子に、無雑作に、そして早口に。

『先生、すんまへんけんどな、うちの姉えな、肺で惡うおまつさかい、薬やつておくんなはれ、たのみますさ』と云ふた。

榮一はそれを心安く引受けた。そして八雲通の前田さん(醫者)を迎へるやうにと云ふた。

じて居りし。殊に近頃の青年には、耶蘇のやうな精神がいると將へるので、會ふ人毎に、勧めて居るが、どうも。自分の子にはより勧め無いから、是非基督教のバイブルを青年連に教へてくれと心なて依頼した。

そして葉一には、保険會社から歸つて暇がある度毎に。貧民窟から五六町離れた日蔭通四丁目の青年會が開かれて、小さい小さい工場に行つて、キリスト教の話をして、笑ふばかりで。キリスト教のことなどを聞かうとはしないのであつた。

そこには、竹田とその女人の山本と云ふ青年が中心で。淺井。元山。久保。鎗井。榎本。井上と竹田の弟と合計九人のものが勞働して居た。青年の多くは十九歳で。榎本と井上だけは十四五歳であつた。土曜に從事して居たが。葉一が行くとみな貝の粉を團粉を混つたやうに。顔につけて。たゞゲラ〳〵笑ふばかりで。キリスト教のことなどを聞かうとはしないのであつた。

然し。二三回行つて居る中に。讃美歌だけは一つ二つ唄ふやうになつた。然し。秋の立つ頃。竹田が先づ第一に來た。頭を丸坊主に刈つて。まる〳〵と肥えた竹田は丈の短い法被を着たまゝ説教を聞きに來るやうになつた。彼は小さい時に日曜學校へ行つたとかで、よく基

五十一

この頃から多くの青年が紫一の處に集るやうになつた。最初に來た青年は竹田といふ善良な青年であつた、この青年の導かれたのは五月雨の降つて居る時分であつた。夜遅く立派な口髭をはやした五十恰好の人で子供等にキリスト教を教へてくれと依頼しに來た一人の易者があつた。

その易者は非常な變人で、神戸湊川新開地で易者をしてゐるのだが、精神的に煩悶した人を見付けると、

『あなたのその心の病はこの下の辻を西へ曲つて五六軒向ふに、キリスト教の傳道館があるが、その方へ行か無ければ直らない。』

と、思告するのが當であるとかで……妹が信者で門分も。イエス、キリストに就いて深く研究して伝

日までに株をやつたことの經驗があるので、株屋の心理狀態を甘いこと話しするのであつた。

いつでも、豆腐屋を中心として雜談に耽けるのであつた。

靑年が貧民窟に集るやうになつて新兒に新しい問題が一つ殖えた。それは靑年たちを中心にした勞働問題であつた。榮一の所へ寄りつく靑年の凡ては、附近にある工場の樣子をよく知つて居た。勝之助はマツチ會社の職工であつた。竹田と一緒に來る元山は今は貝ボタンの製造に從事して居るが、つい二三ケ月前までは、日本一のパシフキツク。ゴム會社に三年以上も通勤して居たので、その事情に明るい。

また淺田はプリミヤの電轉車會社に通勤して居たので、その中でもパシフキツクの前に毎燐寸會社とゴム會社の話が最も非道いやうである。然しそれでも。

朝立つて居て雇ふて貰うことを待つて居る人は五十人や六十人では無く、一人しか入れ無い時でも百人近くも門に立つて待つて居る。

そして、そんなに苦しんで入れて貰つてもする仕事と云ふのは二日と辛抱ノ出來ない所で、大抵のものは一週間と辛抱出來ずに逃出すのであるが、め這入る時に、一週間でやめるなら給料は貰はないと云ふて居る。

ストけう教を理解しかいて居た。

竹田たけたが來出しても、他のせいねん青年はなか〳〵來なかつた。然し、花枝さんのすぐの兄さんの『勝』も教會に行くことを聞いて、三四人のものが教會に出るやうになつた。それで小さい長屋にある說教所は今迄のやうに老人や聖書の讀め無し屑拾ひの人々ばかりの集會と違つて、何となしに活氣が出てきた。菜一にはそれが無上にうれしかつた。

そこへ十月の十八日の晩、豪酒と不身持で、人も信用してくれ無いと云ふので自殺に出かけた豆腐屋さんが新見の辻說教を聞いて改心してイエス團へ繩けてくることになつたので、教會は俄かに賑かになつた。

この豆腐屋さんは名を町田與三五郎と云ふて、人を切ること八回、人に切られること十三回、最後には眼を抉られて片眼になつた。妻君を七回換へ、職業は幾十種換へたか知ら無いと云ふので、人生の酸いか辛いかはよく知り拔いて居るのである。辯舌のさわやかな人で、改心した次の日から辻に立つたが、話が面白いので、聽衆の中から……

『豆腐屋もう少しやれ！』と注文することが度々あつた。中年の豆腐屋と靑年等の間も面白く行つた。

靑年は豆腐屋さんが好きで、よく豆腐屋さんの述懷談や、社會攻擊に耳を傾けた。特に豆腐屋は今

が之も仕事が無くて旅金に困つて居るからと云ふてやつて来た。そしてまた一週間するとその梁瀬と云ふ女郎屋の若旦那を頼寄つて、毎晩で巡査をして居た田がイニス国を三公。うかれ節の市公。巡査二人となつた。

岸本のおぢいさんは潔癖で毎日四時に起きて飯を焚いて、また五時頃に一度床に這入つて、みんなが起きる頃にまたゴドく、するのが癖であつた。おぢいさんの潔癖は入口の敷居を拭くことに現れて居た。家の内を整理することは勿論だが、土にまみれた敷居が白くむける程一日に三度も四度も拭くので近所の物語の種になつた程であつた。

松藏は小學校へ通ふて居たつ組でも大きい方であるが、また折々交番所へ引張られるので、その度毎に榮一は大きな腕ぢ大将であるので、折々先生に居殘りを命ぜられて居た。

榮一が大きな聲を出すのは訟教する時と松藏を叱る時とだけだと、岸本のおばあさんが云ふて居つた。松藏は小さい聲で叱られても、叱られた氣にならないので、（貧民窟では凡て聲が大きいの叱るのはこわいことである。

松藏も『先生の叱るのはこわいけんど大きな聲でも絞り出して大きな聲で叱るのでもあつた。榮一と岸本の老人夫婦、松藏、伊ぢ、新見に云つたこともある。

紫一はこれでは自分が危いくらゐ救済してやるも。そんな亂暴な處を根本的にやつ付けなければ駄目だとその方向に進んで行くために、色々と苦心してみた。それで新兒は青年に勞働組合の必要を力說した。

然し、容易ならぬ勞働組合を作る機會も與へられずして、月日は經つて行つた。その間に貧民で紫一に賴るものは五人や十人では無かつた。その中には僧侶の眞似をして町におひげの男も居た。この男は內山とよく知つて居た。「ヒゲ」で通つて居た。貧民窟にはこの男で有つたが。もとは建築手傳であつたのだが、道樂から植木屋をやつたり、夏は高山植物を山に取りに行つてそれを三ノ宮神社の夜市にかけるのであつた。

「ヒゲ」はその女人の植木屋の戶口を敎會に連れて來た。この毎日竹の『耳かき』を賣り歩く立派な布施を貰ひ步く男で。イエス團に入會して。

十月も經つになると不景氣の爲めに救濟してくれと申込んで來るものが澤山あつた。その中には一『浮れ節』といふのが居た。之は內緣の妻を枕で撲き殺したと云ふ男で。丸々と肥つて居るのだが顏色は土色をして居た。梅毒から來たリウマチで身體の動きがとれぬから助けてくれと云ふて來たので紫一は置いてやることにした。

十月の末で有つたが、長崎の安賴の若旦那で警察で擊劍の敎師や巡查をして居たといふ男

うな氣になるのである。

何事をしても悠長にかまへて居て。話をするのでも一二時間坐り込んで。ゆつくり同じことを繰返して聞いてやらなければ云ふた様な氣のしない新川の人々は。榮一が要領だけ聞いて『わかりました』と云ひ切るのが氣に入らなかつた。『先生は氣のせわしい人や』と惡口を云ふものもあつた。

榮一もそれをやめやうとも考へたが。それでは自己を養ふ可き糧——讀書を廢さなければならないので。彼は奇蹟的に出て居るのであつた。

榮一は性慾——自慰を一年近くも忘れたやうであつた。一つは美しい女に接近する機會の無いのと精力の出るのは自分にも不思議であつた。菜食主義でよくもまアこんな根氣の出るものだなアと自分に感心した。

それで自分が屢々高慢な態度に出るものであると云ふことの外は殆ど無生物が枯木のやうなもので。自分は絹を吐くやうに透明であると考へた。それで自分手に貧民窟へ降りた仙人であると考へた。まかり間違

巡査二人はプリミヤのリムのバフ（磨き）に毎日通ふて居た。

榮一は貧民窟に慣れた。それで貧民窟を何とも思はなくなつた。そして氣がだん〳〵荒くなつたやうに考へられた。それで、松藏さんと呼ぶ所を『松』と呼び捨てたり、うかれ節の市公を叱る時にも『市つあん』と呼ば無くて『市』と呼び捨てにすることが平氣になつた。

榮一は之を恐れた——自分が貧民窟で最も豪いものであり、金のあるものであり、一人前の人間であるとふことの爲めに威張ると云ふ自分の心事を自分に輕蔑した。然し貧民窟に長く居れば居る程、休暇を取ることは出來ないので彼も弱つて了つた。

それにあまり仕事が多いので氣がせわしいと云ふこともその一つの原因であると知つて居た。貧民窟では時間を勵行することは出來なかつた。それをやらうと思へば氣短かにやるのである。それで自分は全く用事の無い人間にならねばならぬのであつた。

貧民窟の人々もイエス團の青年も出來るだけ新見と長く談をして居りたいと云ふ風であるが、新見は彼等の云ふ通りして居れば讀書の時間も無いし、考へる暇も無いのである。それでつい『僕は失敬する』と云はれるので、何だか貧民や青年と驅け離れて居るやふと『先生は西洋人みたやうな』と云はれるのである。

と、云ふから、榮一は、

『僕が使つたら、金が生きてくるから、二百圓でも三百圓でも使つてあげるよ』と簡單に答へた。

室は廣い十疊の間で、神戸を見下した善い景色のある所であつた。御膳走が色々出た。

『新見君、小秀を呼ぼか？』と出しぬけに篠田が尋ねた。

『許してくれ、君、それだけは』と云ふたが、一つ小秀を呼んで　君を困らしてやろ』と云つて、新見の困るのを面白がつて、

『こいつは面白い。』はち切れそうな肥つた身體を、どし〳〵と廊下を向ふへ運んで篠田は消えた。

電話口の方へ飛んで行つた。

神戸の市は靜かに、夕闇の中に消えて行く。秋の夕べは何となしに空氣も澄んで、街に灯る電燈も澄んだやうに光る。眼の下には詰合新川の貧民窟も見えるし、工事中の築港から　川崎の大きなクレン、それからづうと向ふの兵庫の方には、三菱造船所、鐘紡の煙筒が見える。和田の岬を廻ると眺取須磨が見える。

篠田はまた廊下を、歸つて來た。

『來るぜ、秀公が——君が來て居ると云ふとそらお珍らしいと云ふて居たぜ』

へば忍術の力で日日に昇天でも出來はしないかとも考へる程澄み切つた心を持つて居た。然し日日の昇天をしたいとも考へ無かつた。死は勿論榮一には恐ろしいものでは無かつた。榮一は何か知ら無いが刀が自分の體には立た無いものであると信じた程である。それで喧嘩だと云へばすぐ飛び込んで仲裁した。そして榮一が現れると、どれ位の大喧嘩でも、凡てのものが彼の顏をたてゝ喧嘩をやめるのであつた。

この頃であつた。篠田が突然尋ねて來た。そして大の成金振を發揮して神戸一流の料理屋詰訪山の東常盤で御馳走するからと云つて榮一を誘ひ出したのは、榮一は多少變化を求めて居る時であつたから篠田について行つた。

篠田は榮一に『色々過去に厄介かけたが、朝鮮で農園に成功したから御禮として聊か君の事業に寄附するから』と云ふので、いつか借りた百圓を併せて三百圓を榮一に渡した。榮一は、たゞ『ありがたう』と、云つてそれを受取つた。

篠田はあまり榮一が簡單にそれを受取るので『君は簡單だね』

「ふゝゝ、いやかつと食ひたくも無いのだが、貧乏人の子供と遊んで居れば、白いのだ」

それから篠田はさも〳〵と栄一のひやかしを云ふたが分は蕎麦湯を飲みだした。

「嫌ぢやね、涙をつむと思ふかね」と、篠田は新見にはサイダーを飲ませておいて、自分に蕎麦湯を飲ませるのだねと云ふてのむ。

栄一はそれに応じて云ふ。

「君は、小秀を美しいと思ふかね」

「美しいと思ふかね」と、篠田は笑ひつゝ答へた。

「それじや君も柘木でも無いのだね」

「柘木じや無いさ……」

「柘木小秀がして居たよ」

「君のお惚の話をして居たよ」

「ニ？　小秀？　僕の？」

「その笑ひ顔に含まれたと云ふて居たよ」

給仕女『旦那はん達はこんな處へ行しにきやはたぶつか？　一寸と賑やかにしておくれやす』

篠田『いや、心配しなくても善い。今に、美しいのが來るから。そうすると、此旦那は少しは笑ひ出すよ』

榮一は無雜作に笑つた。

その中に小秀の聲が廊下にした。案内の女中と何か話して居るのである。

『そら來た　新兒君、君をまち憧れて居る女が來たぜ！』

給仕女は障子の處へ走りよつて、障子を開いて。

『お越しやす』と挨拶する。

小秀は敷居の所で手をついて、

『遲くなりました』と挨拶して、

二人の所へ近づいて、またうや〳〵しく挨拶をした。水ぎわ立つた島田髷に、はで派手な裾模様の絹物をきて、美しい眼もとぱつちりした小秀は今日は一層美しく見えた。

榮一はこれでは男の墮落するのはあたりまへだと感じた。小秀は二人の間に坐るや否や篠田のコップに葡萄酒をついで、

『もう冷やかさないでおいてくれ給へ……僕は。今日は昔の僕と違ふのだ、耶蘇宗の修行者なんだ——僕は、今の處は戀も、性慾も忘れて居るのだ』

『それじや君は小秀が君の妻にしてくれと申込むと拒絶するかね、……いや君にそれを拒絶する權利を持つて居るかね』

『心配してくれ給ふな、僕は愛せられざる權利があるよ』そう云つて榮一は默つてしまつた。それで篠田も默つた。その沈默は暫くの間續いた。

榮一の顏は曇つて來た。室は實に靜かである。彼はその靜かさが好きでならない。朝から晩まで貧民窟と保險會社の騷しい中に住んで居るので、こんな靜かなところで默つて居らしてくれるならば、どんなうれしいことであらうと屢々考へたことがある。それが今友人の好意で暫くの間でも靜かにして居られるので、彼は出來るだけ長く默つて居たいと思つて居た。

二分、三分、五分と沈默が續いた。篠田が怒り出しはしないかと思ふ程、新見は默つて居た。そしてたゞ白紙のやうな心になつて何にも考へずに、また何を見るともなしに、たゞ靜かに呼吸した。靜かにして居ることは善いことである。榮一は何にも食ふともせず、何にも飮うともせず、たゞ靜かにして居た。お給仕の女も先きから默つて居たが。まり二人が默つて居るので、

だね――』

小秀『まア、新見さんはお酒もお魚も召上らないんですか？　まア近頃は變つて居るんだ！』

篠田『耶蘇教になつて居らつしやるのね』

小秀『そのことは聞きました。なんでも元町で辻說法をして居らつしやつたとか云ふことも聞いたことがあります。……然し隨分の變りやうね』

榮一『いや別に變りはしないのだがね……』

小秀『あの方はどうなさいました？』

榮一『あの方つて誰れ？』

小秀『そら、あの方ですが！　新見さん、馬鹿の眞似をしちやいやですよ！』

榮一『あの、廣島の？』

小秀『エ……あの方、どうなさいました』

榮一『駄目だつた』

小秀『あの女の方は、矢張り廣島で？』

そう云つた時に、小秀は耻かしそうに、パツと顏に朱を濺いだ。

『新見さん、久しぶりだんな、何年目だつしやろか？』

『さアね、左様忘れてしまつた』

『あなた近頃変れていらつしやいますな、どうして居らつしやるんだす』

篠田は貧民窟へ這入つて居るんだ、貧民窟へ、俺は今日、新見君を、貧民窟へ訪問して

そりや、實に非道い所だ、君も一度訪問して來給へ、學問になるよ、……そして新見君は、貧民と一緒に同居して、世話して居るのだから、出來ない事だと僕は全く感心して居る處なんだよ』

『つひ、そのお噂は新聞社のお方から折々噂に承はつて居りますが。それではつて居りますがね、行つてもかまいませんか、新見さん、私のやうなものでも、』

『然しその風じや、君は行け無ないね』

『そら、こんな風では行きはしませんよ。平常衣のまゝで行きますよ、私、見たいわ』

篠田『君が行くと、穢れるとよ』

小秀『篠田さん、およしなさいよ、ね、かまわないでしやう、新見さん』

新見『エ、お出でなさい！』

篠田『おゝ？　新見君は、酒も魚も肉も食は無いで居る癖に、女だけは善いのだね——之は妙な行者

が苦い、いつもと違つてはき〳〵して居る。平氣な態度で篠田の酌をしながら。――

小秀『新見さん、私をあなたのお嫁さんにして下さいますか？』

篠田『そうだ！　そうだ！　君はえらい、そう切り込まなくてはならないのだ！』

榮一『それは、ほんとかね！』

小秀『ほんとですとも』と小秀は急に眞面目になつた。そして、大きな眼で榮一を見守つて居る。

然し榮一も貧民窟で、性慾のどん底から、どん底のことまで聞いて居るので、別に何とも感へない。

榮一『まア、考へて置くよ』と輕く答へる。

小秀『片戀になつちや、つまらないですからね』

榮一『僕に戀することはよし給へ？　枯木にならなくちや、僕に戀は出來ないよ！』榮一は物靜かに云ふ。

小秀『それじや、どうすればあなたの奥さんになれますか？』

榮一『まア、貧民窟へ住まなくちや駄目だね』

小秀『そら、なんでもありません、私も、もとは貧乏人ですから、貧乏人になる位のことはなんでも

ありません、私は戀の爲めなら乞食とでも一緒に寢ますよ。』

榮一『いや、徳島の田舎へ這入つて、小學校の先生になつて居るんでせう——少しも便りがないから、少しもわからない』

篠田『小秀さん、そこでさ、小秀さんが、新見君の處へ行きたいと云ふて居ると、話して居た所なのさ』

小秀『ホヽ、そう？　それは御親切にね』

篠田『君は眞面目だつたね、此間、そう云つたのは？』

小秀『エ、オホホヽヽヽ』

篠田『今日は直接申込んで見給へ』

小秀『まさか？』

篠田『じや、此間は嘘を云つたのだね』

小秀『だつて、新見さんが、私のやうなものを、お嫁さんにして下さる理は無いじやありませんか、……ねえ。』

篠田『そんなことは無い、假に申込んで見給へ』

その云ひ様が面白いので小秀も、新見もお給仕の女も皆笑ふ。小秀は、今日はどう云ふわけか元氣

の鼻から吹き出す煙の跡を靜かに見詰めて居る。紫の煙が舞ひ乍ら、天井の方へ消える。外は全く眞暗になつて新開地と三ノ宮の空だけが、パアと明るい。室には廣い室に似合はず電燈の光が鈍く、煙草の煙が室の中を卷いて、何となしに胸苦しい。

榮一は急に何を思つたか、ツウと立ち上つて、

『篠田君、僕はもう失敬する。御馳走さんでした。小秀さん、失敬、僕は之で失敬します。』と立ち去らうとする。

篠田『まア、いゝじや無いか！　もう少しゆつくり話をしやうや、之で君が歸りや、話が途中で切れるじや無いか！　君と小秀さんの會話は、なか〳〵僕には面白い。もう少し二人で話をしてくれんか！』

榮一『いや、僕は、一寸と用事がある。もう八時かね？』

篠田『今、七時半だ、まだ早いじや無いか！』

小秀『新見さん、あなたまだ歸つちやいかんわ、私はまだすつくり話をして居らないんですよ。』

然し榮一は拗ねたやうに歸ると云ひ張る。給仕女までがとめる。篠田と小秀もそれには弱つて了つて、遂に、榮一を歸らすことにした。

榮一『えらい勢だね』

小秀『ね、篠田さん、私は眞劍ですはね……新見さん……あなたは私が藝者だから、よう貰つて下さらないのでせう、そうでせう？　そうでせう？！　あなたは品行が方正だから私が怖いのでせう？』

榮一『えらい眞面目だね――』

小秀『失敬な、新見さん、私眞面目なんですよ』小秀は一生懸命になつて居る。篠田は面白そうに葉巻を燻らしながら聞いて居る。

小秀さん　僕はね、勞働をしない人間は嫌ひなんだよ――きつと勞働します。裸體になつてはたらきますよ。それあなたの處へ行けば、小秀さんと勞働をしない人間は嫌ひなんだよ――

榮一『僕は正直な處、小秀さん　僕はね、勞働をしない人間は嫌ひなんだよ――きつと勞働します。裸體になつてはたらきますよ。それ小秀』だから、私は、あなたの處へ行けば、葛葉位ゐの勇氣はありますわ』

此間、東京新橋の藝者の葛葉が、井上とか云ふ大學生に惚れて結婚したでせう。私だつて

この言葉で、榮一は少し、小秀の心が讀めた。榮一は小秀の云ふことは全く篠田が仕組んだ芝居のやうに見えてならないのである。彼は後の方によつて障子に倚りかゝつた。小秀は篠田から卷煙草を貰つて喫ひはじめた。榮一は、あんなことを云ふ女が、煙を鼻から吹かすのが面白いと考へて、小秀

性慾を忘れた戀愛抜きの日を續けて居た。

小秀と會つてから、三日目に小秀から長い手紙が舞ひ込んで來た。小秀は存外頁面日である。前の晩小秀が云つたやうなことを繰返して書いてあつた。それで榮一は何にもかゝずに詩を一節書いて送つた。

何人も　我を愛す可らず　何人も
我は神の子　自山の子
『愛の鎖』につながれず。

何人も　この垣越ゆるな　我胸の
神に立てたる祭壇の
『自山』のまがき打越えて。

我を愛す可らず乙等よ
自由なき愛
なんすれぞ

榮一は東常盤から歸つて、まだ時間が早いので、直に中道筋へ一人で路傍説教に出かけた。そして。

篠田から貰つた三百圓のことも、小秀から申込まれた縁物語も、全く忘れたやうになつて一生懸命に、

イエスの福音を宣傳して居た。

五十二

翌日の晝頃、篠田は神戸海上へやつて來た。そして、小秀があんなにむきになつて榮一に話した理由を物語つた。それは、小秀の身代金も生活費も篠田が保證すると、前に話してあつたからだと告げた。それで榮一は、突然に起つた問題の黒幕を充分理解した。篠田は榮一に世話になつた御禮に何かしたいと思ふて、榮一の妻を周旋する積りで、小秀をそゝのかしたのだと云ふことがわかつた。

それで榮一は篠田の親切を心から感謝した、篠田も榮一の行動を激賞して、出來るだけ之から榮一の運動を助けると云つた。またそれに加へて、彼は今は堅氣になつて居るし、妻子も健全だから安心してくれと懺悔話をして歸つて行つた。

榮一は小秀のことを餘り氣に止め無かつた。相も變らず不良少年松藏と一つの床に這入つて、全く

實であつた。榮一は篠田が小秀を再び彼に括りつけて、何となしにまた聖からざる誘惑の世界に彼を送り込もうとして居ることを感じた。それは彼の聖い何者をも侵入し無かつた一年有半の世界を全く掻き亂して了つたやうにも考へられた。

神樣が遠く逃げて行つて了つたと云ふ感じでは無いが、自分が抱くべき筈の愛を抱き得ないと云ふ矛盾した不安な世界に拾てられることの不安が榮一に出來た。

美しく生きたい。小秀に接觸して行きたいと云ふ一方には、自分が常に醜惡の友であり、一枚の衣の使徒であり、美しからざるもの追ふ人道の志士であると云ふことの矛盾がある。美しくなりたい、また美人と一緒になりたいと思へば　今の生活狀態を變更せねばならぬ。それは癩病人の側にでもすぐ寢轉ぶと云ふ簡易な生活から、少なくも美人が住むに適する——そして美しい人間が、美しく見え る境遇の世界に引越しせねばならぬと考へると、彼は美と善との間に挾まれて苦しんで居ることを考へるのであつた。

この不安の中に捨てられつゝ、今日返事がくるか、明日返事が來るか。もし小秀が狂烈の程度に從つてその方に傾かうと決心した。

るならば、その狂烈な戀をも見せ無かつた。二週間ほどは少しも小秀から通信もなにもなかつた。

然し小秀は別に狂烈な戀をも見せ無かつた。

悲しき戀をなにかせん。

我にたてたる誓あり
白山の日
愛の鎖に
つながれず。

ならんまで

この詩を送らうと思つて、白らポストの方へ貧民窟の路次を出た時に、榮一は何だか惜しいやうな氣がした。矢張り女に愛してもらひたいとも考へた。いや、それよりか濃厚な程度で、あの眼のパツチリとあいた美しい、薄紅色の皮膚を持つた、島田髷の小秀か兩手を開いて待つて居てくれるものをするやうな氣がして、そう思ふ瞬間にも小秀のつけて居た香水や麝香の匂ひがしてくるやうに思へてならなかつた。彼は今男であると云ふ樣な氣もした。美しい女に惚れられるうれしさを感じないでもなかつた。然しまた榮一は小秀が何だか不安で仕方がないのと、自分が肺病患者で、行先がどんなに變化するか知れないと云ふことを考へて、戀愛は拒否するのだと云ふやうな矛盾したことも考へた。

手紙をポストに入れた時に、自分が意志の强いのに驚いた。

然しあんな詩を出しておいても、榮一はどんな反應があるかと思つて待つて居たことは爭へない事

を警察に貰ひに行く。松公が監房から出てくる。不良少年の松藏が電信柱の針金を盗んで古物商に賣つて居る所を、刑事に發見せられて交番所へ引致せられて居るのを巡査に拵辨してもらつて連れて歸る。

プリミヤの自轉車工場に通ふて居る元の巡査二人、梁瀬と飛田は初めの拵定日の晩から女郎買に行くを始めて會社を止めた時の如きはなしくして居たと思ふたが二錢の支拂ひをさすと云ふ始末であるに、五圓七十二錢の青瓢箪の女を連れ込んで行つたものを、八木の家に賴寄つてゐるらしい。朝の二時頃でなければ歸つて來ない。十一月十七日、榮一が

その間に榮一は急がしく色々なことを片付けた。それは愈々彼は專心貧民窟の救濟事業に沒頭する爲めに、神戸海上を辭職すると云ふ決心をつけたことである。その最大の理由としては、篠田が三百圓を寄越したことも一つであるが、ウイリアムス博士が貧民窟へ案內して來た、米國ジヨウヂア州の煉瓦製造會社の重役で、熱心な平信徒が東洋傳道を視察に來て、新見のして居る仕事に非常に感心して、之から向ふ二年間毎月五十弗だけを新見の爲めに保證すると云ふて歸つたからであつた。

新見は專門になつたから出來るだけ多くの貧民を助けたいと決心した。彼はまた貧民窟の子供に讀ます爲めに、先づ畫入の聖書物語を出版したいと考へた。それで、十一月の十七日の日で有つた。彼は愈々神戸海上に精勤した調子で彼は聖書物語を何冊も著述したいと思つて。先づ『ダビテとヨナタン』のことを書いて見ようと思つた。

今まで毎日神戸海上を辭した。そして初めて三十錢で古手屋から買ふて來た三十錢の机の前に、机より高い椅子に腰をかけた時に、何となしに落ちつか無いやうな氣がした。値の五十錢のばかり書いて居るより遙かにうれしいと思つた。

朝から晩まで、貧民窟に居つて見ると色々な事件が起る。『うかれ節の松公』が浦團を縞み出して質に入れたものを、新見が知らずに居ると、警察の刑事がそれを發見してくれて云ふて來てくれる。それ

たっそしてそこには一室についで一人――そこは二室あるから二人の病人――を収容することにした、最初そこに這入つたのは脚氣腫の患者で淺川の市の行路病院から逃げ出して來た、宇野と云ふ四國邊の男乞食であつた。五十恰好の男で物靜なそして品な男で有つた。そしてきまた奥の一室には『おいだべらう』――の元の妻君で有つたと云ふ鬼のお梅が子供の政市を連れて這入ることになつた。恐ろしい窶れた顏に犬齒が著しくのびて、ほんとに般若のやうな顏をしてゐるのでその名に恥もらつたのであつた。病氣（梅毒の三期）の爲めに乞食をして居たが動けず無くなつて、呉服通六丁目の『めしや』の店先で寢て居たのを榮一が負つて來て、そこに收容したのであつた。

世話を依頼に來るものは、それだけでは止さ無かつた。植木屋の戸田は子供が四人もあるにかゝわらず、それを捨てゝ置いて、外に女を拵らへ　逃げて了つたのである。それで榮一はその一家全部を引受け無くてはならぬことになつたのである。さあ賑かなことである。まだ年の若い戸田のおかみさんが、嬰兒を膝の上に入れて麻糸つなぎをするので、家の中は忽に氣ぜわしくなつた。

そんなことをして居る中に、小秀に詩を送つて二週間經つたが、突然、小秀が車でやつて來たっ品の善い黒縮緬の羽織にハイカラ髷を結つて、何處の奥様かと云つた様な態をして、路次に這入つて

てくれるものがあつた。勿論そんなに多くのものを收容出來るわけでも無いし、市役所は警察署に云ふてくれと云ふ。警察署は市役所に云ふてくれと云ふ。辻で死んで了ふことがある。死んで了へば市役所はすぐ取つてくれるのである。それで市役所と云ふものが無くて、一日六十錢の割で神戸護國協會と云ふ慈善團に病人を委託して居るのである。

その市役所が偶に世話してくれるものがあつて、すぐ逃げ出してくる。それで新兒がある。貧民救護もやるものであるが、どんなに見積つても一日六十錢で一人の病人を世話の出來る法は無いのである。それで、見に行くと、湊川の土手の下に小さい學校の古い建築物を市役所から貰つて來て、六畳敷位の一室に六七人の病人を詰め込んで居るのである。そんな部屋が五つ六つも有つた。而も榮一は雜食時に訪問したので有つたが。實にその食物と云へば癪に障の食ふものではないのである。榮一は吃驚して飛び出して來て、資本家のやつて居る慈善事業と云ふものはこんなものかと罵りつゝ、貧民窟へ歸り早速、自分の筋の向側の一番西の端の家が明いて居たので　そこを借りて病人を收容することにし

んの子ですよ』

『私はまた、あなたのお子さんかと思つた、あんまり可愛い顔をして居たから……ホヽヽ』と笑つて居た。

『じやあなたは吃驚したでしようね。初め』

『エ、ほんとに、私は吃驚しましたよ、あなたにはおよくいらつしやいましたね』

『兎に角、今日はよく新見は注文した。戸田のおかみさんも奥さんも無い筈だにと思ひましたね』

つて来てくれる。お本を出すやうに注文した。戸田のおかみさんが氣をきかしてお茶を持

小秀を見る爲めに、路次から子供が室内を覗く。

『別嬪や！　別嬪や！』と遠慮の無い蛸坊が叫ぶ。

『別嬪！　別嬪！』と云ふ。

これを聞いて小秀は笑つて居る。

『私恥しいわ、あんなに見られちや！』

『だつて仕方が無いじやありませんか、』

そうするとその眞似をして小さい子供までが

來た。

その時に榮一は路次に出て戸田の赤ン坊を高い高いして天の方に差上げて居た。空のよく晴れた日の午後の二時頃のお日様が路次の隅々をよく照らして心地のよい時であつた。

小秀を見付けて榮一は、

『ネア、よくいらつしやいましたね』と小秀を見るなり、榮一は心持ちよく、彼女を歓迎した。

『まさか、よういらつしやらないと思つて居たら、あなたもなか〳〵元気がありますよ』

『妾だつて、それ位の元氣はありますよ』

後へつゞく事夫が何か包みを持つて來たが、小秀はそれを受取つて、車夫に、

『待つて居て下さいね』と云ふと、車夫は額の汗を拭き乍ら路次から消える。

榮一は戸田のおかみさんを呼んで、子供を取つてもらつて、十七疊敷の廣い方の部屋に小秀を通した。

小秀は半分壞れかゝつた椅子に腰をかけて。

『あの赤ン坊はあなたの？』

『いや、あれは戸田と云つて親子五人を私に打ちやつて置いて、他の女と逃げてしまつた、植木屋さ

小秀はそのあまりの大人數に屹驚して居る。榮一は、ビスケツトを凡て與へ盡して、

『まア、もう無いわ』と云つて愁嘆して居る。そして榮一を顧て、

『あなた、お金を換へて來て下さいな、子供等に二錢づゝやりましよう！』

榮一はそれを止めた。

『お金だけはやら無いで下さい。子供の性質が惡くなりますから……』

小秀は女王になつたやうな積りで、無性に悦んで居る。

『貧民窟と云ふのは、廣いんですか、此處が貧民窟なんですか、こんな處でも辛くは無いわ——』

『あなた、貧民窟に住む勇氣がありますか、南京虫が居りますよ』

『南京虫？　南京虫はいやですね、然し妾はね、まだ南京虫を見たことがありません、一晩に五十匹も六十匹どんな形をして居るんです？』

『そうですね、もう少し早いと、いくらでも居るんですがね、夏の夜なぞは

『お内には、戸締が無いのね、戸締はなさらないのですか？』

『イヽエ、戸締はなさらないんかしたことはありませんよ、泥棒は這入りたければ、這入りませんか？』

『泥棒は這入りたければ、這入りませんか？』

『盗られ無いことも無いですが、別にそれを監察にゐふやうなことは致しませんよ、泥棒に這入りたければ、這入りませんか？』

『ほんとに、あなたのやうに聖人になれば、そうなるんでしょう。』

『然し、金でもあれば、盗られる恐れがありますが、着物と云へば、着のみ着のまゝですし、何にも取られるものはありませんから。何にも心配はありませんよ』

それから小秀は硝子越しに覗く十二三の子供の顔を見て。

『私、御近所の子供にたべやうと思つてお菓子を持つて来ました』と云つて。

の大きな菓子箱から、星の形の砂糖がついてゐるビスケットを取り出して。硝子障子をあけて、一人に與へる。

一人に與へる。

そうすると貰つた子供等が家の方へ飛んで歸つたかと思ふと。

十四十と群がつて来た。

『先生、菓子おくれ！』

『先生、煎餅おくれ！』

新見『いゝや、僕には、まだ妻はないよ』

お春『先生、この別嬪さんを、嫁さんにもらひなはれ』

小秀は素知らぬ顔をして、お春の脊負つて居る子供の顎に指をあてゝ、

『オンゴ！』をやつて居る。そこは黒人筋だけあつて大膽なものである。榮一もそれには感心して了つた。

貧民窟を廻つてくると、小秀は吃驚したといふて居る。そして榮一から、芦合新川だけに一萬一千人の貧民が居ると聞かされて猶吃驚して居る。

住め無いと云ふ。

そして小秀は疲れたか顏色を變へて、歸ると云ふて居たが、急に裏筋の路次が賑しくなつて、バタ〳〵と人々の走る足音がした。忽ち新兒の臺川の炊事場の上に芦いてある亞鉛屋根の上を走る音がする。

子供等はその方へ皆走つて行く。榮一の所へ飛び込んで來たものがある。それは林であつた。小秀を見て驚いたやうであつたが、

『先生、今、網が降りてん、少し隱しておくれよ』

と、云ふ。榮一は默つて居た。すると、林は片本のおぢいさんが丁髷に積み重ねた蒲團を取り出して

『まア、それは困りますね……それだけは御免です。』

それな問答の有つた後に新兒は小秀に貧民窟を案内して廻つた。美しい小秀が通るので、路次の戸口から、女の人も年寄も皆顏をつき出して珍らしそうに、小秀の顏をぢろ〳〵と見る。三四十人の子供が小秀の前後に群がつて、手を引いて貰ふものもあれば榮一の袂を捉つて居るものもある。それでも足らなくて小秀の黑縮緬の袂を穢い手で握らうとする。小秀はそれには閉口して居る。

小秀は妙な顏をして榮一を見る。それで榮一は、子供に、

『おばちやんの袂を摑まないやうになさいね、あなたのおて〳〵が穢いから……』と教へた。そうすると、その子供は榮一の袴を摑まうとする。それで榮一は帶の端を與へた。

新兒と小秀と子供四五十人からなる行列が貧民窟を廻ると、新兒を知つて居る人々は一々お辭儀をする。

下の二疊敷に行くと、丸々肥えた男の子を脊負つた女乞食のお脊が。

『先生、今日はハイカラの別嬪を連れて、結構だんな。先生、この人、あんたの奥さんだつか?』と

むきつけに遠慮も會釋もなく尋ねる。

逃走冒険談を物語つて居る。

小秀は――

『私、もう歸ります、私、こわい！』と云つて路次に出る。隣の花枝さんの家の前に立つて居る十四五人の大人は皆視線を小秀にむける。

小秀は打萎れた姿で路次から消え亡せた。

小秀が貧民窟を訪れた二日後であつた。夕方。紀州の新宮で傳道して居る音無信次君が、突然ぶらりと來て居る時であつた。

丁度向の呑太の吉田がぐづ〳〵云つて來て居た。

榮一は話對手が無くて困つて居る時であるから、音無に面白い話を少ししてくれと無理に引留めた。

吉田は路次に居るのは、吉田許りでは無い、洋服を着たキチンとした紳士が二人居る。榮一は音無の友人だと思つたものだから、

『お這入り下さい、むさくろしい處ですけれども』と聲をかけると、音無は、

『善いよ、新兒君、あいつらはスパイだよ、何處までも僕の行く後へついてくるのだよ、……新兒君、早速だがね、今日は少し賴みがあつて來たのだがね、君、人を一人世話してくれんか？』

『いゝよ、君のことなら。』

（へんさう）編輯（けいし）の刑事（にん）が二三人新兒（にひみ）の家（うち）を覗（のぞ）き込（こ）んで。

『此處（ここ）へ、一人（ひとり）は逃（に）げて來（き）たと思（おも）ふがな』

『此處は、耶蘇（ヤソ）やな』と云（い）つて、すぐ行（い）つて了（しま）ふ。

小秀（こひで）は小（ちひ）さい聲（こゑ）で、

『妾（わし）、あれなんです新兒（にひみ）さんの隱（かく）れて居（ゐ）る色々（いろ〳〵）の會話（くわいわ）を聞（き）いて居（ゐ）た。それは實（じつ）に面白（おもしろ）そうな賭博（とばく）の組（くみ）で、亞鉛屋根（トタンやね）に這（は）ひ上（あが）つたのは誰（だれ）だとか、誰（だれ）がどんなに逃（に）げたとか、誰（だれ）はこちらの屋根（やね）から、むかふの屋根（やね）まで飛（と）んだのは豪（がう）傑（けつ）だと云（い）ふのであつた。その話（はなし）を總合（そうがふ）して見（み）ると、網（あみ）は降（おり）たのですよ』

二人は少し間沈默（あひだちんもく）のまゝ裏（うら）と表（おもて）で話（はな）さ

『妾、誰（だれ）がどんなに逃（に）げたとか、誰（だれ）はこちらの屋根（やね）に這（は）ひ上（あが）つたのは誰（だれ）だとか、亞鉛屋根（トタンやね）に這（は）ひ上（あが）つたのは誰（だれ）だとか、誰（だれ）がどんなに逃（に）げたとかふの屋根（やね）まで飛（と）んだのは豪（がう）傑（けつ）だと云（い）ふのであつた。その話（はなし）を總合（そうがふ）して見（み）ると、網（あみ）は降（おり）たのですよ』

二人は少し間沈默（あひだちんもく）のまゝ裏（うら）と表（おもて）で話（はな）さ

『賭博（とばく）の組（くみ）で、亞鉛屋根（トタンやね）に這（は）ひ上（あが）つたのは誰（だれ）だとか、誰（だれ）がどんなに逃（に）げたとかふの屋根（やね）まで飛（と）んだのは豪（がう）傑（けつ）だと云（い）ふのであつた。その話（はなし）を總合（そうがふ）して見（み）ると、網（あみ）は降（おり）たのですよ』

二人は少し間沈默（あひだちんもく）のまゝ裏（うら）と表（おもて）で話（はな）さ

『妾（わし）、あれなんです新兒（にひみ）さんの隱（かく）れて居（ゐ）る色々（いろ〳〵）の會話（くわいわ）を聞（き）いて居（ゐ）た。それは實（じつ）に面白（おもしろ）そうな賭博（とばく）の組（くみ）で、亞鉛屋根（トタンやね）に這（は）ひ上（あが）つたのは誰（だれ）だとか、誰（だれ）がどんなに逃（に）げたとかふの屋根（やね）まで飛（と）んだのは豪（がう）傑（けつ）だと云（い）ふのであつた。その話（はなし）を總合（そうがふ）して見（み）ると、網（あみ）は降（おり）たのですよ』

二人は少し間沈默（あひだちんもく）のまゝ裏（うら）と表（おもて）で話（はな）さ

『妾（わし）、あれなんです新兒（にひみ）さんの隱（かく）れて居（ゐ）る色々（いろ〳〵）の會話（くわいわ）を聞（き）いて居（ゐ）た。それは實（じつ）に面白（おもしろ）そうな賭博（とばく）の組（くみ）で、亞鉛屋根（トタンやね）に這（は）ひ上（あが）つたのは誰（だれ）だとか、誰（だれ）がどんなに逃（に）げたとかふの屋根（やね）まで飛（と）んだのは豪（がう）傑（けつ）だと云（い）ふのであつた。その話（はなし）を總合（そうがふ）して見（み）ると、網（あみ）は降（おり）たのですよ』

二人は少し間沈默（あひだちんもく）のまゝ裏（うら）と表（おもて）で話（はな）さらしい。

『あゝ、こわかつたが。』

林（はやし）もそれを捕（とら）へられたものは誰（だれ）も無（な）いであつた……先生（せんせい）、助（たす）かりました。逃（に）げ遲（おく）れてゐしが一番（ばん）後（あと）まで賭博場（ばくちば）の組（くみ）の中（なか）から聞（き）いて居（ゐ）たらしい。

『あゝ、こわかつた

『少しもつきやしないよ』

『そら變だね』

『君は何をしに出て來たの……たゞそれだけの用かね』

『いや、Oの妻君のことで一寸と外にも用が有つたのだが、受けてくれたので安心した。その男を何處へ連れて行かうかと心配して居たのだ。まアうれしい、うれしい』と音無は喜んで居る。

音無と新兒とは、明治學院時代の知己である。然し年齢は音無が十二三も上だし、院長、新聞社の社長、小學校の校長と云つた經歴を持つた後に、神學部の別科に這入つて來たので、榮一には叔父さんの樣に思へたから深い親しみが出來なかつたが、よく一緒に散歩をしたり、議論もしたりした。新兒が德島へ歸り、音無が新宮へ傳道に行つた後にも、互に通信して居た。殊に音無がOと一緒に發行して居た新聞の小雜誌には二三度、新兒が短篇を送つたこともあつた。

二人は三十分間程話をしたが、音無は何か急いで居るやうで、すぐ歸つて行つてしまつた。そして二人の刑事も、柔順に音無の後について路次から出て行つた。

『そうか、それは有難たい。』

音無は英國の基督教會の牧師さんが若るやうな、カラーを頸環の様にして、チヨキで頸の處まで隱し、咽の處だけを一寸と白く見せて居る。元氣で、顏は丸々と太つて、赤味を帶びて居る。それがどうも調和して居ない。

うに髮を心持長く延ばしてそれを頸の所で揃へて居る。それがどうも調和して居ない。

音無はつゞけた。

『いやね、君、困つて居る男があるのだよ、例の○の事件からね、……』

初めは、音無の○の事件と云ふ意味が解らなかつた。然しそれは近頃新聞で八釜敷い△△事件に關係して居た新宮の○だと云ふことがすぐわかつた。

『高見と云つてね、○の親戚だと云ふ理由で、小學校では辭職を要求せられ、地方で食へ無くて困つて居るものがあるんだよ、神學校へでも入れようかと思ふて居るのだがね……その男は僕のところの信者でね、……近い中に出てくると云ふから、君一つ世話してくれないか』

『こんなうるさい所でも構はなければ』

『結構だよ、却つて教育になつて善いよ。……然し、君、君はこんな所へ這入つて居て、スパイはつけへんか？』

て居た。二人の關係については少しも書いて居らなかつた。

十一月も後少しになつたので、榮一はもうクリスマスの準備をせねばならなくなつたので、布引教會の信者で新見榮一物語の原稿も出來上つたのみならず、會社が經營して居る書店から出版する事も持つて行つて、クリスマスまでに出してくれないかと依頼した。吉野又平さんの所にも居る、神戸印刷會社の支配人吉野又平さんはそれをすぐ承諾してくれることにするとまで云ふてくれた。

五十三

十一月の末の冷い雨の降る日であつた。榮一は昔合新川を出て、阿波の竜野に迎へに赴つて見ると高見友彌といふ三十二三の青年で、年よりは餘程老けて見える人の善さそうな男が音無の紹介で來て居た。

新見は竜野に更に一事——家賃一ケ月二十錢——の家を借りてそこに這入つて貰ふことになつた。高見は任地に就職口を求めて、神戸市内を走り歩いたが、或晩こんなことを新見に報告して居た。

音無の訪問を受けた翌日、すぐに三宮警察署の高等特務だと云ふ男がやつて來た。そして、音無との會話の内容、彼との關係、△△△△との關係、○氏との關係、社會主義に關する新兒の意見を尋ねて居た。

それで榮一は、明瞭に、

『自分は、基督教社會主義者である。然し、それと同時に、無抵抗主義者である。貧民窟へ來たのは、貧民の救濟と感化に來たものである。然し心配してくれるな、勞働者をも尊敬し、貧民をも救濟せんとする私が、人を殺すなど云ふ事は決して企てはしないから安心をしてくれ。私は凡ての人を尊敬する。それで、凡ての人を尊敬する。勞働者をも尊敬する。それで、私は基督教社會主義者と云ふよりか寧ろイエス主義者と云つた方が善いのです』

さう云ふと、刑事は猶もうるさく、あなたの説は西洋ではどんな人が主張して居るか、日本では誰れが唱へて居るかとか、ひつこく聞いて居た。それで榮一はそれに對して一々明瞭に答を與へた。然し、之で榮一は完全に神戸警察署の要視察人名簿に載ることになつた。刑事は三日目に一度位一寸と硝子障子の外から、内を覗き込むことになつた。

小秀は貧民窟から歸つて翌日美しい手紙を送つて來た。そして榮一の眞似は出來ぬと書い

けてくれ無いことも無い。然し皆忽がしい。それで誰れにも依頼することが出来ない。

たゞ最近一ケ月程教會の集會に缺かさず顔を出す二十五六の婦人がある。いつも髪を蝶々に結つて妹をつれて貧民窟の教會に出てくるが、まだ教會の仕事を助けてくれと云ふ程親しくはなつて居らないのである。

その婦人は一寸と見れば、どこかの淑君のやうであるが、實は神戸印刷會社の折本部の女工頭をしてゐるので。もうその印刷會社には七年も居ると云ふて居た。

初めての晩は路傍説教からついて來て、路次の奥のイエス團の障子越しに説教を聞いて歸つたが、その後は必ず十七八になる品の善い妹を連れて教會にやつてくるのであつた。新見はたゞ考へたが、込み入つた話は少しも聞かなかつた。

えつゝあるのだとは考へたが、込み入つた話は少しも聞かなかつた。

十二月二十一日に新見の初めての書物とも云ふ可き小冊子「父情」が出來た。新見はその挿畫全部を自分手に書いたので出來上つた自分の畫が餘りに拙いので苦笑したが、兎に角自分の書物と云ふ物ができたので、少なからず喜んだ。

二十二日の日から新見は天幕を張る色々の準備に走り廻つた。こんな時には、富田や、林や、植木のやうな俠客仲間のものは非常に力を貸してくれるので。うれしかつた。それで二十四日の夕方近に

『郵船會社に二人の書記が入ると云ふので二週間程前に募集廣告が出たところが、五千七百通の履歴書が出たと云つて。通信社が吃驚したと云ふてを居りました。世の中は餘程不景氣だと見えますね』

全く世の中は不景氣である。その爲めに、新兒は毎日數人の救濟依賴者を色々と世話した。然し戸田の一家族は榮一には一種の悦びであつた。赤ン坊のすきな榮一は何より勝つて、その赤ン坊を愛した。そして榮一には、赤ン坊は神の作つた藝術品の中でも最も美しいものだ』と口癖のやうに繰返した。高兒はそれを聞いて淋しそうに笑つて居た。

クリスマスが來た。そして榮一は去年に勝つた催しの準備をした。殊に今年は高兒が手傳つてくれるので、面白いものが出來るとよろこんだ。

彼は十二月の二十五日クリスマスに乞食招待會をもくろんだ。吾妻通六丁目の席場に天幕を張つて、そこに八百人の貧兒を招待して子供のクリスマスを盛にやり、晝はそこに百人の乞食を御馳走しやうと云ふのであつた。その爲めには彼の手だけではウイリアム博士にもそれを話し、教會の婦人連の手を借りやうと思ふた。そして教會の婦人連は悦んでそれを引受けてくれた。

イエス團に女子は無いでも無い。助けてくれと云へば、おしんさんを始め稻荷降しのおじゆうも助

『先生、あきまへんな、山手の人は駄目や、樋口さんの方が餘程仕事が早い。』

また實際樋口は一生懸命に盡して居る山手の教會の人々のやうに美しい聲でお喋りはしないが、沈默のまゝに仕事を運んで居ることの早いこと、新兒はそれを見て少なからず感心したのである。その態度が上品で、人に對して丁寧な處は女學院の高等部を出たといふ娘も來て居た。純田家のお嬢さんらしいものゝ一人來て居た。その中には女學院の高等部を出たといふ娘も來て居た。然し新兒の眼にはそれがハツキリと寫らなかつた。たゞ樋口の行動が少なからず印象せられたわけである。

十二時一寸と過ぎて、百枚の招待券に百二十人の乞食が集つた。仕方が無いので、新兒はそれにお給仕することになつた。御馳走は簡單なものであつた。赤飯、肉のにしめ、鰤の一片、吸物と蒟蒻のあへものであつた。それにお煎餅一袋とお番茶一個がついて居た。

御馳走は一時間以上も食ふにかゝつた。それは自分は食は無くて、先づ半分を家に持つて歸つてくるよふなものもあり、娘にもお召作させてくれと云ふて立つものもあり、非道いものになると、二日

天幕はちやんと出来上つた。

富田が番人をつけ無ければ駄目だと、新兒にふたのであつたが、朝早く行つてみると、死にそうになつて居る女乞食が、天幕の中に這入つて寢こ居たそしてどんなにふても返事をしなかつた。それで仕方なしに新兒の北木町六丁目の病室に舁ぎ入れた。それは矢張り地廻り淫賣婦の成れの果であつた。

神戸の八九時頃から神戸教會の婦人會の人々が七八人見えた。榮一は百人分の食器を生田神社筋の瀬戸物屋に買ひに行つた。そして十時頃には天幕の側に造らへた竈のにには大きな一斗五升も入るやうな釜に一杯めしが炊けて居た。大きなお祭心地がした。招待券は前の晩に配布したのだが、もうやつて來て、天幕の中で待つて居るものがある。

貧民窟の青年の信者は大抵助けに來てくれた。竹田も、淺井も、元山も、花枝さんの兄さんの勝之助も助けに來てくれた。そして依頼もしなかつたのに　樋口さんが印刷會社を休んで助けに來てくれた。今日は妹を連れずに一人手でやつてきて、せつせと水を汲んで居る。

この教會の人々は着物の上にエプロンをかけて忽しそうに仕事をして居るのだが、あまり上品振るので少しもハカが行か無い。事毎に青年の助手が入るので、元山は榮一の所にやつて來て、

慾張り乞食――それはあざの大きなものが顔の右側にある四十恰好の男乞食であつた――の方に視線を注いだ。そして笑つて居た。凡ての人が笑つて居てもその乞食は平氣なものであつた。

『おかみさん、うんと袂に這入るだけつかはれ、この袂にはまだ這入りまつさ……』と大きな聲で云ふて居る。

この光景を見て居た、俠客の富田が新見の所へ廻つて來て、

『乞食とは云ふものは強慾なもんだな、わしは十年近くもこの新川に住んで居るけんど、今日のやうに乞食が強慾なものであるとは始めて知つた……然しあのお給仕して居やはる御婦人はどなただす……』

『あの人は感心な人だんな、山手の人にもあんな人があるかいな？』と新見に尋ねて居た。

乞食のお客さんにも樋口の親切がわかると見えて、特別に樋口を呼び付けて、

『姉さん、もう少し』とか、

『おかみさん……お吸物はもうおまへんか』とか注文して居る。

樋口さんが天幕の方へ出てくるのを待つて、竹田は、

『あなたもおかいさんになりましたな』と云ふて居た。年よりも更けて見える樋口は實際何處かの妻

分を食ひ貯めると云つて、十七杯もかへるものがあり、中には家から持つて来るものもあり、最も野蛮なものになると前垂や袂の中にそのまゝ赤飯を五杯も六杯もうつして貯へて歸るものもあつた。その露骨な乞食的造り方には、お給仕をして居る婦人連が全く吃驚したのであつた。天幕から出て来ては、お給仕の人々はゲラ〳〵笑ふて、貪り食ふ眞似をするもあり、新見は乞食招待會が全くの乞食侮辱會に終りをうつす眞似をするものもあり、然しその間にもたゞ默つて、教養ある婦人にも立ち勝つて、笑ひも同情あり、乞食の心理を理解して居たのは樋口さんであつた。樋口さんは平氣の平左で赤飯を乞食の袂にうつした新見はボロリと涙を流した。それは乞食の淺間敷い態度と、樋口さんの神々しい態度がこの上なく優れた一幅の繪畫になつたからであつた。

凡ての視線は樋口さんと飯を貰つて居る乞食の所に集つた。天幕の外側に居る山手の婦人連はみな

『まア、あれ御覽なさい！』

と、云つて笑つて居た。竹田は眞面目になつて眺めて居た。外の乞食等も——その中には跛乞食も、頻病乞食も（二人まで）四國遍路も、盲乞食も、いざりも、老人も居たが、盲目でないものゝ凡ては、

のが無いでもないが。たゞ榮一は貨幣の手傳のする戀が出來ないと考へたのであつた。

小秀は賢い女であるからそのことをよく知つて居る筈なのである。そして榮一も小秀にすれば決して至純な心で榮一を愛し待ぬことを榮一はよく知つて居る。然し小秀の心に何か榮一の方に引くものがあるし、そんなにしてまでも戀を購入しなくても善いと思ふて居るから。小秀が至純な心を持つて自分の心に飛び込んで來れば特別であるが、平常は忘れて居て篠田に評判を聞かされた時だけ彼を訪づれるやうでは、どれだけ美貌の持主であらうとも餘程遠い仲だと考へざるを得ないのである。

然し例の貧民窟十七番の間に壞れかゝつた椅子に腰をかけて二人で坐ると何とも云へぬ不可思議な運命の手が二人を結びつけつゝあるとも考へないわけには行かなかつた。

四つの瞳は合つた。小秀の瞳はまた特別に美しいものであつた。黒目勝ちの瞳であるがパツチリとそれが開いて居る爲めに角膜の白いところが少しばかり水色に見えて、それが廻轉する度毎に絹のやうな眼瞼の中に柔かく動いて、溫い曲率の附いた配合よく植ゑられた長い睫毛が瞬きをすると、そ

君であるかのやうに見えた。そしてその親切な態度は結婚したことの無いものには氣のつかぬやうなことに氣がついたのであつた。

その晩の八百人の子供招待會も盛んなものであつた。之は主として關西學院の神學部の生徒諸君が中心となつてやつてくれたので新見はさう骨も折れなかつたが、それは實に賑やかなものであつた。晩には樋口は今度は妹を連れて集會に出て居た。

五十四

十二月二十六日の新聞は『賑かなる貧民窟のクリスマス』と題して二段抜きに詳しく新見の仕事を報告して居たり、新見が貧民窟へ這入つて恰度一年になるが、漸く新聞紙が注意するやうになつた。その頃、また突然小秀がやつてきたり、それは今日の新聞を見て美しくなつたから來たとゝふのであつた。

新見は別にいつも見ても美しい顏をして居た。小秀はいつ見ても美しい顏もしなかつた。小秀はいつ見ても美しい顏をして居た。

えるのでその顏を貧民窟に見せに來てくれるだけでも御禮を云はねばならないと思つたからである。

さうかと云ふて、小秀の態度は頗る潑溂切らぬものであつた。勿論榮一の態度に一層煮え切らぬも

肺病であり、彼が貧乏であることが凡て彼に美の所有權の拋棄をすゝめる。そして彼は今や宛ら意思を持つて居る。女を戀しないかと思へば迫に心の瓣を全く閉ざして、中性になることが出來る。

然しそこに小秀に屢々會ふ機會が出來ても、彼が一年以上抑壓して少しも苦痛だとは思はない性慾の瓣は少しも搖がない。

彼が小秀に對しても至純な心で接近するよろこびを持つのである。之が小秀の美しさを正面から鑑賞する能力を彼は缺いで居るかも知れ無い。然し彼は少しも考へずに殆ど中性の心を持つて、小秀に對し得るのである。

いや、榮一は折々自分は女に生れた方が美しい心で居れたものをと考へた程で、彼は小秀に對しても、同性に對する理解を以つて近づくのであつた。

理窟はつけるが、矢張り小秀はどう考へても美しいのであつた。たゞ小秀が手を延ばしてくれんのが癪に觸るのであつた。それで貧民窟の色々な話をしてくれるよりか、出來るだけ自分の話ばかりだけをしてもらひたかつた。彼は性慾を抑へる瓣は開くまい。然し美だけは神の許しを得て飽くまで追求したいとも考へた。

こに何ともえへぬ表情が出て来る。榮一はトラホームを持つて居るので美しい眼を持つて居らぬ。それで、小秀の美しい瞳を見ると自分の醜い眼を隠したいやうな氣がするので、すぐ伏目勝ちになる。

「戀と云ふものはそれでは、かうして二人で坐る時にのみ戀は成功して居ろ、それでは、かうして二人で坐る時にのみ戀は成功し美の追求を云ふものであるが、戀は美と分離せねばならぬ。美は永遠に安住してくれない、実と絶は暫くからうして坐る時にのみ興へられる。戀は之れ以上に要求す可きものでは無い』と新見は心の中で囁いた。

二人が坐つても、別に話題は無かつた。さうかと云ふて、『あなたは私を愛してくれますか』と云ふのもをかしいし、榮一は默つて居た。さうすると小秀も默つて手をいぢつて居た。それで榮一には小秀を所有したいと云ふ慾望が起らぬでもよく配合されて居た。サフイヤーの這入つた金の指環をさして居るが、それが白い細い手に如何に可愛いものであつたか。一緒に住むことと戀が別の事であるやうにも考へられる。然し榮一はどうしても貧民窟から出ることが出來ぬ。小秀が貧民窟へ來ればその美は忽ちにして枯れて了ふ。美に營養を與へることが出來ないからである。そしてその美に對して營養を保給し得ない彼がそれを所有する權利があるかないかを疑ふ時に、彼はその所有權を拋棄したい氣がする。然しそこに彼の煩悶が無いでも無い。彼に讓母があり、彼が

榮一は小秀も欲しい、樋口さんも欲しい。秀は二分三分と重ねたまゝ『友情』を片手でめくつて見て居た。それは必ずしも甘いものが欲しいのでは無いものでもなかつた。

正月は忽がしいからえう來ぬと歸つて行つた小秀の後ろ姿を見送つて。榮一は寧ろ物思ひに沈んだ。護母のお久は、

『あの別嬪さんは誰れで？　美しい人やな？』と尋ねて居た。それに對して榮一は明確に彼女が藝妓であることを答へた。

五十五

樋口喜恵さんはノリスマスの濟んだ翌日から毎日晝飯時の三十分を利用して、女工三四人を連れて榮一の所に遊びに來た。神戸印刷からは僅か二町半しか無いので、食事をますと直ぐ飛んで來ても十五分や二十分は遊ぶ暇はあるのである。

恰度十二時十分過ぎになると、樋口さんは紺の筒袖の上張りをつけたまゝ十三歳の彌生ちやん、十五六の梶さん、梶さんより一つ上だと云ふ富海さんを連れて、いつも子供が首を出す硝子障子の處に

このピアトリスは榮一には矢張り一つの指導であり光明であると考へられた。

新見は義母が來て居ること、友人がO事件に關係して、O氏の親戚に當る高見君を預けに來たことを話した。小秀はその事件を新聞で見てよく知つて居るので、興味を持つて聞いて居た。

そして、溜息をついて、

『ほんとに、新見さんは感心や……私はほんとにあなたに會ふ度毎に感心されるばかりだす……。』

と、大きく眼を見張つて云ふた。

榮一はそれから新しく出來た小冊子『友情』のことを小秀に告げた。小秀はそれを取り出して二人で並んでその畫を見て居た。それを見て居る中に小秀は榮一の片手の上に自分の手を重ねて、

『ほんとに、あなたの眞似は、私にはとても出來ません、感心ですね……。』

と、繰返した。

小秀の美しい白い手を榮一はデツと見た。そして、その重ねられた意味が何を意味するかと深く考へた。それを見詰めて居る時に、彼は昨日の樋口さんの神々しい姿を幻のやうに畫いてみた。小秀か？　聖か？　美か？

疊の部屋の掃除の行届いて居らぬ所を一々丁寧に掃除したりしてくれた。それを殊勝な事だと云つて居た。

正月は何朝五時から連朝の禮拜式が有つた。それに新見は聖書の講義をした。そのもの全部十七人、義母、岸本夫婦、梁瀬、飛田の元巡査二人、戸田の一家族五人、「髭」さん、伊豆、三公、病人三人と、自分一と、貧乏で餅の揚げなかつた隣の勝と花枝さんの一家族を招いてお雜煮を喰べるのであつた。その連朝の禮拜に根氣よく出席したのは樋口さん、樋口さんは六七町もある脇の濱からお雜煮の仕度を手傳つてもおいて、自分は食はないで。妹を連れて歸つて行くのであつた。榮一はそれを出來ぬことだと心で賞めて居た。

正月は去年よりも喧嘩が多くあつた。うかれ節の松公が、裏の筋のおしんさんの隣の紙屑買ひの所に元日のお雜煮に招かれて行つて、酒が廻り過ぎて喧嘩を初めた。それに喧嘩安が仲裁に這入つて喧嘩が更に大きくなつた。仲裁に仲裁が這入つて、喧嘩が五つに分かれ、松公が新見の寄所で火箸を燒いて居る。何をするのかと云へば之で敵を火傷さしてやる積りだと云ふて居る。勿論新見はそれを押

顔を出すのであつた。その顔は丸顔で色の白いことは西洋人の肌そつくりで、小秀よりか遥かに白いものである。髪は波形に縮れて居るが漆のやうに眞黒で、皮膚の色によく配合して居る美人と云ふのでは無いかと思はれる程である。

「おかみさんと云ふ位だけあつて、更けて見えるのである。

遊びに来ても、別に何にも話することは無いので、紫一はそれが一種の戀の近道へかける橋渡しだとすぐ感付いた。家のことを話したり、小さい時に樋口さんが横濱の日曜學校へ行つた話、聖書の話、それから最近出来た新兒の『人工哺育』の折本は此處に来て居る四人のもの等が、主として折つたことの話を繰返した。

樋口さんから聞いた關東の女であることは、話をすればすぐわかる。發音の明晰な、言葉使ひの上手な、句切のはつきりした　美しい關東語に何とはなしに意志の堅固な賢こい女と新兒は發見した。然し何を云ふにも樋口は高等教育を受けた男であるし　樋口は女學校の一年も行つて居らぬ職工であるから、別の美人でゝもあれば　戀愛は成立せぬとも限らぬが、たゞ普通に賢い人であるとは云ふものゝ　戀愛は成立せぬといつもの非性主義で新兒は、心持よく女工等をあしらつて居る。

然し樋口さんはいつも親切であつた。小さい事にまで氣が付いて、破れ袴の綻びを縫ふたり、上七

なかつた。その晩高見君がやつて來て夜遲くまで話したつ　近頃頓と訪問を受けた。

　その男は『K事件に關する御感想はどうですか？』など尋ねて居た。

　有つた翌日三ノ宮署の高等特務の丁寧な訪問を受けた。

不景氣の爲めに、三百四百のものが仕事にあぶれることがある。それで桴濱に大連、遠いものでは香港あたりまでも荷物の中にもぐつて生活の道を尋ねて行くものがある。ブラジル移民の人々も正月早々神戸の移民宿に一杯になつて居た。一月六日に六百近くを積んで第一回のものが出發したが、一月の末に出發するものには又百合新川の貧民窟の近くにある移民消毒所には百二百の團體が出入して居た。

一月二十七日の朝、突然、新見の金曜日の濱の傳道を受けて改心した添田と云ふ十九の靑年が尋ねて來た。その添田は日本に居ても面白くないから、一月三十日に出帆する加茂丸の移民の一行に加はつてブラジルに渡航するのだと云ふて居る。ブラジル移民は仲々條件が面倒で、夫婦ものでなければ行け無いのだが、彼は人の養子となり僞名して行くのだと云ふて居た。改心して僞行するとは云ふものも

止めたが、四十四年の元日だけにも、午前九時までに十九の喧嘩が、北本町の八つの長屋だけにあつた。

そしてまた去年のやうに正月早々榮一はお葬式の世話をせねばならなかつた。

元日に一つ、二日に二つ、五日に一つのお葬式の世話をした。

正月にお葬式を出す度毎に新兒は一休和尚を思ひ出した。『元日や冥途の旅の一里塚、目出度もあり目出度もなし』榮一はその小さい悲しい貧民の死にたゞ何ともいへぬ苦痛を感じた。然しこの多くの死を飛び越えて、延びて行かねばならぬと思ふと、生命が如何に不思議なものであるかを考へざるを得なかつた。

正月になつて、竹の『耳かき』を創つて居た、髭さんは別に一軒の家を借りて出て行つた。高見は新しく出來た大阪朝報の神戸支局に通勤することとなつた。そして北海迫の監獄部屋へ行つて居た戸田も新兒の一族は忽に六人を減じた。それで一家族を引取つた。

君も一軒別に家を持つて一家族を紀州の新宮から迎へた。

一月二十日の新聞號外はK氏を初め、O氏の一味徒黨二十四人の處刑されたことを報じた。その中十二人は死刑に處せられて居る。榮一はその號外を受取つて、『時の兆』だと感じたが外別に何とも感じ

た。それで新しく書き出した『豫言者エレミヤ』の原稿の筆をとめて勝之助が路次で日向ぼつこして居るのを呼び入れて聞いてみた。勝之助はそれに答へて、

『近頃、會社は休んで居りまんね』と云ふ。

『どうして？』と尋ねると、

『ストライキして居りまんね！』と云ふ。

それでその次第を聞くとかうである。

『初め吾妻通六丁目の酒井と云ふ十一になる娘が火傷しましてん。足から股から殆ど身體半分焼きまして、先生、會社は一文も出さないと云ふのだしやないか、その口實がかうだんね。あれは自分の過失で火傷したのだから、會社としては出す金は無いと云ふのだす。そら過失に違ひおまへんね、何分小さい、私と秋山と云ふ私の上の掛りのものが二人で毎夜藥代を貰ひに行つてやりましてん。そうした處があの娘のお父さんは賭博で今監獄へ行つとりまんね。それで餘り可哀相だつさかい、乾燥室から運び出す時についりんを塗つた箱を落したんだすよつてに過失と云へばものだすよつてに、乾燥室から運び出す時についりんを塗つた箱を落したんだすよつてに過失と云へば過失だんね。然し危險な仕事に十か十一になる子供を使用すると云ふのが大體會社が間違ふて居りまんね。それで私はうんと云ふてやりましてん、然しその『おとめ』と云ふ娘は醫者にもかけずに未だに

可笑いと思つたがその青年はどうしても不景氣な日本には居りたくない、廣い世界の空氣を吸ふてくると強く主張するので前途を祝福してやつた。

不景氣になると貧民窟の人はみな毎日仕事をみつけに廻るのであるが、男のもの丈けでマツチ箱貼りするものを見るのも珍らしくもなかつた。然しマツチ箱貼が始まつた。

の内職を助けて一千個八錢五厘のものが五厘下つて八錢になつたので一千個八錢のものまでがおかみさんくなつたので、あちらでもこちらでもマツチ箱貼が出來ないので、あちらでもこちらでもマツチ箱貼が始まつた。

事業界が不振で、勞働者の賃銀は下る一方であつた。新聞紙は毎日生活難の爲めに自殺するものを報じた。それを見る度毎に新見は日本もこの儘で捨てられて置くことの出來ない時代が來たと強く心の中で感じた。

然し凡ての人は默つて居た。社會主義の社の字も發音することは許されなかつた。勞働者も知識階級も凡て啞であつた。たゞシベリアから吹いてくる北西の風だけが、冬の空に吠えて居た。

五十六

二月に這入つて榮一は、隣の花枝さんや。光さんや勝之助が、ぷらん〳〵して居ることに氣がつい

話だんな……その通り云ふてやりましてん。そうすると、女の子までが、
『歸ろ！　歸ろ！』と出て了ひましてん。そして二百四五十居る子供が、女から大きな男まで、すつくり歸つて了ひましてん。それが一昨日だつしやろ、それから毎晩男のものだけが小野柄通の秋山の家で寄つとりまんね。そして今日愈々秋山と私が代表者となつて、詰から會社へ行くことになつとりまんね』

勝之助は得意になつて物語つた。勝之助は尋常四年生を半途でひいて、その後はずつと云ふものは『神戸煉寸株式會社』に姉二人と共に毎日通勤して居るのである。學問は無いけれども、男前の善い、わかりの早い男で、まだ年も十九かそこらであるけれども職工仲間では非常に信用があるので、勝之助の云ふことを他のものがよくきくのである。又勝之助は最近新兒に近づくことが多くなる程、勞働問題に對して理解が出來て來たので、直にストライキを實行する氣になつたのである。

新兒は勝之助に色々會社の重役の名や、支配人の名を聞いた。そしてその實權を握つて居る、逢坂とか、森岡とか云ふ高利貸だと云ふことを知つた。

それで榮一は、勝之助に云ふた。

『勝サン、こいつはしつかりやりなさい。こんな時にあいつ等をやつ付けなければやる時は無いのだ

抛つてあるのだす。あまり會社の仕打が不人情だつしやろ、うちの姉が死んだ時だつて一文の香奠も越さないんだつしやろ。醫者の見立によるとうちの姉の齒の拔けたのは「マツチ會社で毒のある燐をいぢつて居た爲めに、その毒の爲で拔けたと云つて居ましたやろ。齒が拔けるまで濫してやつたのに、死んで香奠の十錢も越さんと云ふ無慈悲な會社はやつつけてやりたいと思つて居りましてん。……それに近頃は不景氣だつしやろ、それで受取りの賃を下げて來ましてん。この夏などは一日に一圓近く儲かつたものが、二度下げて、此の頃では高々七十五六錢にしかなりまへんね。それで皆怒つて居る所だつしやろ、私が事務所から出て來て、

「仕事、止め！」

「止め！』と行つて廻りますとみんな、『何や何や』と寄つて來ましてん、それで私と私の上の掛りのものと二人で事情を話しましたが、『ストライキ！　ストライキ！』と云つて機械を止めて了ひましてん、それで女工までが『何や何や』と出て來ましたから、私が演說してやりましてん、賃銀は下るし、火傷はしても藥代はくれまへんから、こんな會社に居つても駄目じやから、みんなストライキするより仕方が無いつて……先生によく聞きまつしたやろ、西洋の勞働組合の

その日の午後一時過ぎ新見は勝之助と秋山と三人で二瀬戸燐寸」に出掛けて行つた。工場には全く人氣が無かつたそして支配人も重役も誰れも居ら無かつた。たゞ縞の羽織に前掛をつけた事務員が三四人帳簿をいぢつて居るだけであつた。

事務員に來意を通じると、

「一寸とお待ち下さい」と事務所の前に待たしておいて頻りに電話をかけて居る。

こちらへ來て下さい」と云つて、三人を應接室に通じた。何となしに、つんけんして居る。

十分二十分と待つた。應接室とは云つても何の飾も無い。机の上には灰が一面にして居る粗末なもので會社の職工虐待振りと重役の藝者や娼妓に發展する有

様を色々新見に物語つた。秋山は榮一にこんなことをぶふた。

「此處の乾燥室は三ケ月に一度位は必ず火が出るのです。そして毎度二三人の火傷するものが出る

から……』

『先生も助けてくれますか？』

『後見役位であれば……』

『それは旨い……それじや先生も今日うち等と一緒に行つてくれますか？』

『行つたらよう喋れまへんね……』

『そう何でもないことですよ、あなたが今ここだけの事なら、私は行つてあげます。』

『それは旨い……それじやわし、秋山の内へ飛んで行つて来ますわ。先生が一緒に行つてくれるから……』

それを榮一は一寸と引き止めて、

『勝サン、會社への要求はもう決議でも出來てゐるのかね？』と訊ねた。

『いや。まだそんなものは出來て居りまへんねたど、昨夜きまつたのは、賃銀を此上引下げ無いと云ふことと、怪我や火傷の行つた場合に相當の見舞金を出すことと、職工が死んだ場合に少しでも香奠料を出して貰ふ事がきまりましてん……』

『それでいゝですよ……それじや行つていらつしやい』と新見は庭に降りかけた勝之助に云ふた。

『へえ、一寸と御願がありまして』

森岡『この人は誰じゃつて、新川の耶蘇の先生です』

秋山『これは新見さんと森岡』耶蘇の先生に何の用事が有つて、こんな處へ出張つて来たんな――（勝之助に向つて）こら。お前ら、十年近くも會社で世話してやつてあるのに、一體不意気じやないか、お前じやそうなストライキの運動をしたのは――』

勝『そうです。わたしです――』

勝之助は大きな眼をギヨロつかせ、唇を尖らして答へる。

森岡『秋山はん、一體何にもわからないのに、あなたは、不晩々々、年增へこみなはれ、私は何にもわかりまへんで、然しあなたこそ一體不意気やおまへんかいな、職工は朝日、わしに暗嘩買ひに來たのか、暗嘩ならいくらでもするぞ、』

『こら！　おまへ今に火をつけて、新川の逢坂は卷煙草に火をつけて、』

『逢坂』ぢア森岡君、そんなに激昂したら話は出來へん、職工の方にどんな要求があるか、それを聞か

のですが、こんな時でも、會社の通り口の非道いのには驚くのです。去年の春なども、或おかみさんが乾燥室の火事で焼け死んだのですが……その時はそれでも二十圓だけの見舞金が出たのですが……タツタ二十圓で追拂はれたのですよ……その癖に森岡と云ふ支配人は職工あがりだそうですが、毎晩のやうに年增の美人を引張り込んで酒ひ潰れて居るのですから仕方がありませんなアー――』

秋山は俠客肌の大きな男で、石川五右衛門のやうに髪を上へ一ずと見るとく出だ懼い男であるが、話してみると仲々面白い男である。

とう〳〵一時間以上も待つたと思ふ頃、支配人と森と社長の進坂ともう一人の男がやつて来た。

して豪ら相な風をして應接室に這入つて来た。

社長の逢坂は背の高い五十過ぎの痩せぎすの男で、額の處が禿げ上つた眉毛の薄い細眼の男である。森岡は頭だけは佛蘭西刈にした眼玉の大きな、口唇の薄ぺらな金歯を多く入れた中背の男で有る。

森岡は先づ口を開いた――

『秋山君、君・何の用事や』

秋山「然し一昨日も申上げたあの火傷をした酒井とめか？あンな非道い火傷をしたのにさへ一文の金を下さらぬやうな無慈悲な會社では、我々は安心して働くことは出來ません……』

『酒井とめ？　あれに何にもせん？　こちらではするだけのことはしてある積りじやニ

『勝「いつですか』

森岡「一昨日すぐ持つて行つておいた！』

『勝』そんなこと聞きまへんでえ、あなたはよつほど嘘吐やな』

云ひよれしまへんでえ、一昨日も昨日も酒井の内へ行きましたけんど、

森岡は赤い顏をして默る。榮一は兩者の會話を見て、資本家側の高慢につくづくといやになつた。

勝の知らない會社側と見える男が榮一の面を穴のあく程見て居る。

逢坂は沈着いた何調で、秋山に向いて、

『どうも一々職工の云ふことを聞いて居ると會社も立行きまへんよつてになア……貨銀をこの上下げるなと要求せられた處でこつちは商賣だすよつて、向ふから下げて來るものはこつちも貨銀の拂ひ方をして居つては、會社が立ち行きまへん、前々のやうな貨銀金利も支拂へんやう

して貰ふじゃないか――（秋山に向いて）どんな要求が會社に對してあるんですか。それを聞かせ下さりたいのです。』

それで秋山は懐中から一枚の紙に書いたものを取り出し、机の上に置いた。

森岡はそれを取り上げた。それは新見に注意せられた要求事項を書き連ねてあつたのである。下手な字體で次のやうに書いてあつた。

神戸燐寸會社職工一同が會社に要求する事は左の通りに候。

一、ことの後賃銀の値下げを行はざること。

二、工場内の衛生設備をもう少し重じ、負傷者には手當を出すこと。

三、職工死亡の際には相當の手當をだすこと。

森岡はそれを逢坂に廻した。逢坂はそれをまたもう一人の知らぬ男に廻した。その間兩側は沈默を守つて居た。

森岡は秋山に向いて。

『これ位のことで何にもストライキまでのことは無いじやないか！』

代表者　秋山龜松
山内勝之助

森岡『勿論そうだ。一々職工の要求を聞きよつたらこちらは食はんと居らなけだぞ！』

勝『然し、うちらは無條作ではとてもよう歸りまへん、この三ケ條は聞いて貰面を合せることが出來まへん』

森岡『そらおまへは、煽動の張本人やさかい顏を合せることが出來ないか知れんけど、こんな要求を聽いてくれてやおまへんがな、會社が潰れるがな、勝！おまひ知つとるか、ストライキしたら日本の國では罪人になるんやさかい仕方がおまへんがな？』

勝『罪人になつて仕方がおまへんがな、犧牲になるんやさかい仕方がおまへん……森岡はん、それでは三ケ條とも聽いてくれてやおまへんのやな？』

森岡『ウム聽けん。こんなこと聽きよつたら職工が增長して仕方が無い。』

勝『職工が燐の病氣にかゝつて下顎がみな腐つて、うちの姉のやうに齒がみなぬけても、あんたンところの會社は知らん顏をするつもりだんな』

森岡『勝、おまへは一體生意氣だよ。まだ北藏にもならぬ小僧の癖にお前に何が分かるか、うちの會社は法律の上でまもらねばならぬことは凡て守つて居る。おまへらに衝き込まれてゐる守らねばならぬことは凡て守つて居る。おまへらに衝き込まれるやうなことは少しもこゝて居らぬ積りじや』

なことになりますでな』

『秋山』『然しこのさげられては、我々はお米の一升も買へなくなりまんがな……あなたがたから見れば職工が五十銭のお金を八釜敷云ふのをお笑ひになるかも知れまへんが、我々にしたら大金だすよつてにな。わたしのうちなど、一家族八人でとても日給九十銭や一円では来やしまへん』

『森岡』『秋山、おまへんとこ、家内は誰れ誰れや、子供は誰れ誰れや』

秋山『おふくろに今年産れました乳呑児まぜて夫婦に、十二の女の子を頭に五人の子供とで合計八人だす』

森『よく、産んだもんやなア、もう少し、控へて産んだらいゝんや』

秋山『嬶と一緒に寝ると出来るんだすよつてに、仕方がおまへん——嬶を殺して了うやう……』

『森岡』『秋山はん、どうしてくれてだンの？』

『勝』『森岡はん、どうしてくれてだンの？』

『森岡』『みな、ストライキを止めて、明日から會社へ出んかいな。そしたら旨いことしてやるがな』

『勝』『無條件でだ、出んかいな？』

秋山『わたしそんなこと知りまへん』

森岡『勝・おまへ知つて居るか？』

勝『し知つとります……然し、そんなこと云ふて、旅したつて、職工はこの上賃銀下げられたらかなはんがな……監獄の一ケ月位ね、いつても務めて来まんがな』

勝之助はさすが貧民窟育ちだけあつて監獄位ね何とも思つて居らない。

秋山『それじや、森岡はん、もう我等の云ふことは聞いてくれてやおまへんのやな……そして何だつか、私と勝は首だつか？』

森岡『そうや、聞くことは出来ぬ。そしておまへと勝とには會社を出てもらう。ストライキを煽動するやうなものに居つてもらうたら此會社が潰れる』

その答を聞いて、秋山は椅子から立ち上つた。そして森岡を睨みつけて

秋山『こら森岡、貴様、わしを何と思ふて居やがるんや？　一寸の虫にも五分の魂ぢと云ふことのあるを知らんのか！　俺だつて此會社には十七年から濫して、職工の代表者になつて来たと云ふて、首にしやがるんなら、かるんな』

勝「貧乏人がみな飢え死にしても、あんたらは知らぬ顔を爲とつてのだつか？』

森岡「おまへは社會主義か、おまへは年間も世話してやつた此會社の恩を忘れたのか。會社の恩など受けとれへん、うちを會社の恩やぶつてやけど、うちはいくらでもおるがな。會社に儲けさせてやりこそすれ。恩になつたことは少しも無いやうに云ふ。

勝「會社や、勝は獨言のやうに云ふ。

森岡「もうなんぼふて聞かしてやつてもわからんのやな、勝。おまへもう會社をやめ！』

秋山「森岡はん、そらあんまり非道いやおまへんか勝はなにが悪いんだす、勝はたゞ職工二百四十餘の職工が怒り出して此處へ來ただけであります。それをこゝで首を切るんでしたら他の職工が怒り出しまつせ！』

森岡「秋山、おまへも今日から暇を出す、うちではこんな要求を聞くことは出來ん。

勝「秋山、おまへもう會社をやめ！』

森岡「もうなんぼふて聞かしてやつてもわからんのやな、勝。おまへもう會社をやめ！』

秋山「森岡はん、そらあんまり非道いやおまへんか勝はなにが悪いんだす、勝はたゞ職工二百四十餘の職工が怒り出して此處へ來ただけであります。それをこゝで首を切るんでしたら他の職工が怒り出しまつせ！』

森岡「秋山、おまへも今日から暇を出す、うちではこんな要求を聞くことは出來ん。

そしたら相談に來つてやる。うちは一人々々雇ふてくれる所も三日も機械の運轉をとめたりしたつて、こつちはそんな要求を聽くことは出來ぬ。

勝「秋山おまへはそれを知つて居るやないか、治安警察法の第十七條にはストライキをしたりして二日上六ケ月以下の重禁錮に處するとあるやないか？』

刑事『わしは神戸署の刑事じや。君等二人すぐ署まで同行してくれんか？』

秋山『何にも神戸署へ引致せられる理由がありません――』

刑事『いや、兎に角來てくれ――』

森岡『それみい。秋山、貴樣等、職工がなんぼ威張つたてあかんのや――』

刑事は二人を連れて應接室を出た。そして蔭れ安い冬の夕方の黄い道を、へ、小野柄通を眞直に西に歩んで居る影を榮一は見た。それを見送つて榮一は涙をハラ〳〵と燐寸會社の前の砂埃の上に落した。然し一刻も早く秋山と勝とが神戸署に引致せられたことを報告せねばならぬと急ぎ足で貧民窟へ飛んで歸つた。

新見は勝の家に報告しておいて。すぐ一町上の吾妻通六丁目の酒井とめの家を訪問した。家は二間の家であつた。奥の間に十一歳になる丸刈の眼の窪んだ西洋人のやうに色の白い（貧民窟にはよくこんな皮膚を持つて居るものが居る）女の子が、身體中にメリケン粉のやうなものを塗つて、寢て居た。

女親と云ふのは片眼の醜い女で子供は六人あるとかふて居た。男親は三十六錢の酒樽一挺を盜んだ

と。秋山が激昂したと思ふと、机を回つて、秋山の向側に坐つて居る森岡の方へ進んで行つた。それを見て勝は引き止めたが、秋山は聞かない。

『首になつた以上は、おしはもう、この會社のもんやないんじや。どうせストライキをして、監獄へ行くんなら、こいつの頭を三つ四つ擲つておいて這入らなきや損じや。こんな强慾非道の餓鬼は一つ懲らしめてやる必要がある』

とつぶやき、森岡の胸倉を引掴んで、右の拳で、森岡の頬ぺたを四つ五つ擲りつけた。それで森岡も立ち上つて秋山を殴つた。秋山は默つて怪しい男と睨み合つて居た新見は立ち上つて秋山を宥めた。秋山も、森岡の胸倉を放そうとはしないので、勝も秋山をすかした。それでもどうしても云ふことを聞かない。勝も秋山をすかした。それでもどうしても云ふことを聞かない。勝も秋山をすかした。それでもどうしても云ふことを聞かない。

その上どうせよとも云はずに歸つて行つて了つた。

新兒もそれには弱つて、また川を西に越えて、八丁も走つて、前田先生を呼びに行つた。おとめさんの病は實に深切に、新兒から容子を聞いて、繃帶を多く準備し」用意してくれた。そしてメリケン粉のやうなものをとらして藥を塗つて、繃帶で卷いた。火傷の後の皮膚がずるく〳〵になつて居るので、榮一はその悲慘なのに驚いた。

繃帶卷きが了んで、榮一はおかみさんの上話を聞いて居ると「秋山の宅に多くのものが寄つて相談して居るからすぐ來てくれ」と、花枝さんが知らせて來た。それで、新兒は急いで小野柄通の秋山の家に行つた。平家建ての四間に六疊の狹い部屋に三十人近くもつめ込んで身動きもならぬ程來て居た。その中には榮一が毎晩招いて寢て世話をして居る不良少年の岩沼松藏の兄も居るし、「勝」の姉に絡はつて居る不良少年の秋、隣で一騷動を起した、土田も來て居た。然し最も口をきくのは堀江と云ふ賢こ相な中年の男であつた。

榮一は今日の會社との交涉の顚末から、酒井とめにはは、今日會社から三圓の金を送つて來たこと。また秋山と「勝」が拘引されて居る以上どうしても徹底的に戰ふより外に道の無いことを語つ」衆議は勿論ストライキを繼續することであつた。

と云ふので監獄へ行つて居ると女親が云ふて居たと云ふ。（勝之助が賭博で監獄へ行つて居るであると知れた）

それで榮一は、

『神戸燐寸の方から何か云ふて來ましたか』と尋ねた。すると母親は

『さいぜん來やはりました、紙にな……三圓だけ包んで……』

『三圓？』と榮一は聞き直したが、女親は三圓だと云ふて居る。それで榮一は會社へ三人で交渉に行つて。遂に、秋山と勝之助の二人が神戸署へ引致せられたことを告げた。

新見は、おとめさんの容態を心配して色々聞いたが、まだ醫者にもかけて居らないと云ふので、すぐ近所の田澤さんの所へ飛んで行つて來て貰つた。田澤さんはその容態を見て、『之はむづかしい。』と云ふて何にも云はなかつた。それで新見は『どうすれば善いか』と尋ねると、『もう手遲れで一寸と駄目だ』と云ふ。

『死にますか？』と尋ねると、

『之に丹毒でも這入るとね。』と答へる。

女親は別に何とも感じて居らぬ様だけれども新見はそれを聞いてがつかりした。そして田澤さんは

して何の答へもしなかつた。兎に角一大家族を持つて居るから一先づ家に歸らして葬式をも濟ませてそれから監房へ這入るからと主任警部に云つて歸つて來た。

五十八

歸り途に花萬によつて棺と人夫とを註文して直に酒井の宅へ行つた。おとめさんは、蒲團が無いので、死體の側に赤ン坊を寢させて居たが、可哀相に思ふたの窪んだ眼を閉ぢて居たことであつた。

榮一はお葬式を取り急いだ。そうしなければいつ警察署から巡査が廻れにくるかわからぬと思つたからであつた。棺が來たので榮一は自分の一枚しか無い浴衣を持つて來ておとめさんに着せて、繃帶のまゝ死體を棺に納めた。

丁度それは正午であつたので、印刷會社の歸ふことを聞いて、仕事衣のまゝ驅け付けて來て手傳つたのであつたが、新見がお葬式をして居ると云つてくれた。それで榮一もほつとしたが、榮一は樋口さんと二人手で極く簡單なお祈と聖書の朗讀だけのお葬式をすまして、野邊送りをしようと門に立つて居ると今度は、平野と違つた高等課の主任の

土田は、勝之助に非常に同情があつて、

『そらな。先生、あの會社のわからんことを云つたらな、いきまへんわ……』と云ふて居た。

堀江は秋山の身の上のことを心配して居た。それで新見は治安警察法第十七條と云ふものがどんなものであるかをよく説明した。

ストライキはもう一日續いた。然し早や職工側の足並は揃は無くなつたと報告するものがあつた。それで職工の委員は今朝から會社の入口に立番を出すことになつた。そのことを報告に土田が北本町六丁目の新見の長屋へ這入つて來たが、その後をつけて　酒井とめが今の先死んだと近處のものが報告に來た。それと立ち違つて、いつもよく來る神戸署の高等特務の平野と云ふよく肥えた四角な顔をした男が這入つて來て、

『新見さん、司法課の主任警部が、あなたに一寸と今朝出てもらひたいと云ふて居りますが、すぐ出ていただくわけにはいきませんでしようか』と丁寧に通知に來た。

それで、新見は愈々駄目だと考へた。警察署に行くと司法部主任は昨夜の會合の容子をすつくり知つて居た。そして榮一はストライキの煽動者として告發すると云つて聞かない。然し新見はそれに對

刑事は榮一を廊下に置きざりにして歸つて行つたが、榮一は狹い固いベンチの上で、コンクリートの敷石と睨みつこをして檢事の取調べを待つて居た。生憎葬式場から引致されたので、一冊の書物も持つて來て居らない。それで榮一は、祈禱と、冥想のみしか考へ付かれ無かつたが。榮一の眼の前にあり〳〵と見えてならなかつた。榮一は狹い固いベンチの上で、コンクルンの奴隷解放宣言前夜の祈禱と冥想とに沈んで行つた。榮一はまだ、酒を非とめの屍が眠つて居た。然し。自身には何の罪をも感じなかつた。世界は凡てこのやうにして運ばれて行くとも云ふことをよく知つて居た。然し自分の魂は何人も縛ることが出來ない。俺は監獄で五六ケ月祈つてくるのだと考へ續けた。

四十分、五十分と檢事を待つた。西日が窓からさす檢事局は午前中に用事を濟ませて午後は誰れをも呼び出して居らぬらしい。檢事を待つて居るは榮一だけである。

猶、五分、十分と時間がたつ。榮一は靜かに祈りつゞけて居る。廊下のコンクリートの敷石が美しく輝く。

（完）

有田といふ五尺八寸もある大男で色の浅黒い眼鏡をかけた男が、吾妻通六丁目の酒井の入口までやつて来て、

「新見さん、神戸區裁判所の檢事局からあなたに午後二時までに裁判所へ出頭するやうにと云ふて来ましたから……出来るならば私と一緒に同行を願ひたいのですが……』と云つて彼に呼出し狀の這入つた大きな檢事局の印の捺はつた鼠色の狀袋を渡した。

その日は宗の中の二月ではあつたが、太陽が眩ゆい程照りつけて、貧民窟の路次が隅々まで乾いた心持の宜い日であつた。それで榮一はその呼出狀を受け取つて、その正午の太陽を見て默禱した。

そして、極く簡單に事情を樋口さんに說明して『之から檢事局へ行つて、多分五、六ヶ月は歸れ無いと思ふから、後はウイリアムス博士と相談して、傳道の方をよろしく賴む』と依賴し、また今出しかけた酒井のお葬式も春日野の火葬場まで送つて下さいと樋口さんに依賴して、榮一は路次を刑事と二人で出た。それを見送つて樋口さんは泣いて居た。

有田刑事は、新見を神戸區裁判所の檢事局まで送つてくれたが、そこに着いたのは一時過ぎであつた。

榮一は檢事に呼び出されるまで、一時間以上もコンクリートの大きな幅の廣い廊下で待たされた。

大正九年十月一日　印刷
大正九年十月三日　發行
大正十四年二月十日　二八七版
大正十四年三月一日　二八八版

死線を越えて

定價金參圓

版權所有

著者　賀川豐彥
發行者　山本美
印刷者　福山福太郎
東京市牛込區西五軒町五十二番地
印刷所　行政學會印刷所

發行所　東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
改造社
振替　東京　八四〇二番
電話　高輪　四九九三番

吉田絃二郎著	ダビテと子たち	戯曲	四六判上製	定価金一圓八十錢	送料十錢							
吉田絃二郎著	芭蕉		四六判上製	定価金一圓六十錢	送料十錢							
正宗白鳥著	戯曲ある心の影		四六判上製	定価金一圓六十錢	送料十錢							
ジョルジュ、サンド著田沼利男譯	鬼火の踊り		四六判上製	定価金一圓八十錢	送料十錢							
野上彌生著	海神丸		四六判上製	定価金一圓三十錢	送料十錢							
柳原燁子著	則天武后		四六判上製	定価金一圓六十錢	送料十錢							
細田民樹著	或兵卒の記錄		四六判上製	定価金一圓五十錢	送料十錢							
イバニエス原作鈴木厚譯	血と砂		四六判上製	定価金一圓二十錢	送料十錢							
佐藤春夫著	ピノチオ		四六判上製	定価金一圓一十錢	送料十錢							
近松秋江著	二人の獨り者		四六判上製	定価金一圓一十錢	送料十錢							
犬養健著	一つの時代		四六判上製	定価金一圓二十錢	送料十錢							
北村壽夫著	幻の部屋		四六判上製	定価金一圓一十錢	送料十錢							
文壇三十一名家著	ゆかり		四六判上製菊判特製六百三頁五十錢	定価金一圓十二錢	送料十錢							

著　氏　彦豊　川　賀

死線を越えて（中卷）

太陽を射るもの

死線を越えて（下卷）

壁の聲きく時

星より星への通路

生存競爭の哲學

二百八十六版	百七十九版	四十九版	十一版
四六判上製	四六判上製	四六判上製	四六判上製
定價二圓三十一錢	定價二圓八十九錢	定價二圓八十一錢	定價二圓十七錢
送料十一錢	送料十一錢	送料十一錢	送料十一錢

新刊

著名三郎一潤崎谷

新刊

新選

谷崎潤一郎集

四六判上製　定價五圓五十錢　送料二十七錢

谷崎氏の傑作悉本書に集る

内容

神童・羹・惡魔・續惡魔・あくび・The Affair of Two Watches・前科者・異端者の悲しみ・人面疽・二人の稚兒・玄笑三藏・ハッサン、カンの沃術・柳湯の事件・富美子の足・ちひさな王國・獨探・呪はれた戯曲・或る少年の怯れ・母を戀ふる記・兄弟・恐怖

廿四版

愛なき人々

四六判上製　定價二圓　送料十七錢

内容

本牧夜話。お國と五平。白狐の湯。愛なき人々

百一版

愛すればこそ

四六判上製　定價一圓六十錢　送料十五錢

内容

愛すればこそ。永遠の遇像。彼女の夫。或る調書の一節